

平成28年度 教育研究発表会

平成27～30年度 文部科学省研究開発学校指定 第2年次

未来社会を創造する 主体としての子供の育成 II

未来創造型の資質・能力を育成する新領域の学習展開

平成29年2月17日 金・18日 土

福岡教育大学附属福岡小学校

平成28年度 教育研究発表会

平成27～30年度 文部科学省研究開発学校指定 第2年次

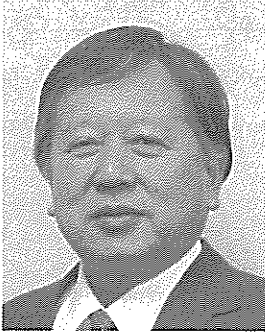
未来社会を創造する 主体としての子供の育成 II

未来創造型の資質・能力を育成する新領域の学習展開

平成29年2月17日 金・18日 土

福岡教育大学附属福岡小学校

ご あ い さ つ



学 長 櫻 井 孝 俊

福岡教育大学附属福岡小学校の平成28年度教育研究発表会の開催にあたり、ひとことごあいさつを申し上げます。

附属学校は、地元教育委員会と大学の一体的な連携のもと、地域の教育課題を解決し、新しい教育を推進するモデル校であり且つ先導的・実験的な取り組みを行う「国の拠点校」として、位置付けております。そこで、附属学校園と連携を強化して教育研究の開発を行い、その成果を地域の諸学校に還元し、地域教育界の発展に大きく貢献することをめざしています。

平成32年度全面実施予定の次期学習指導要領では、これまでの内容重視の教育から資質・能力重視の教育へと大きく舵を切ろうとしています。本校では、昨年度より4年間の文部科学省研究開発学校指定を受け、20年後、30年後の子供たちに必要となる資質・能力の育成をめざし、新たな教育課程の編成の在り方を研究してまいりました。本年度教育研究発表会は、主題を「未来社会を創造する主体としての子供の育成Ⅱ ～未来創造型の資質・能力を育成する新領域の学習展開～」と設定し、研究2年次の成果について発表するものであります。

今回の教育研究発表会が地域の学校のみならず、我が国における初等教育実践の進展に少しでも寄与できれば、これに優る喜びはありません。ご参会された皆様のご指導・ご助言を切にお願いいたします。

最後になりましたが、ご多用の中、ご講演等を快くお引き受けくださいました文部科学省初等中等教育局 視学官 田村 学先生、国立教育政策研究所 総括研究官 福本 徹先生、京都大学大学院 教育学研究科 准教授 石井 英真 先生に深く感謝申し上げます。また、領域別学習指導協議会におきまして、指導助言者としてご協力くださいました諸先生方にも、心より御礼申し上げます。

今後とも、附属学校園の教育研究活動を介して、各地域の公立学校及び教育関係機関との連携を深めてまいりたいと考えています。関係する皆様方に一層のご指導・ご助言をお願い申し上げます。ごあいさつといたします。

は じ め に



校 長 豊 篤 啓 司

昨年のダボス会議（世界経済フォーラム）では、「第四次産業革命」とも呼ばれる昨今の目まぐるしい技術革新について、この先10～30年ほどの間に移動、健康、住まい、教育、食、金融、働き方等、我々の暮らしや生き方にいかなる変化を来すのか楽観と悲観が交錯しています。そのような今日とは大きく様相が異なる30年先、次代の牽引者である子供たちにとって、「これまで（こうだった）」の内容・方法に依存した学びに固執するだけでは、今後、豊かな社会生活を切り拓いていくことは困難でしょう。そこでは、未だ結果が不確実な挑戦に成果を創造できるよう、「これから（いかに向かっていくか）」の目標・内容・方法・評価を学習者自らが主体的にマネジメントする「学習者主体の学び」への大きな転換が必要です。このような我々の眼前に迫るこの予測が困難な未来社会において、能動的かつ主体的に生き抜く人間を育成することを目指し、本校は昨年度より文部科学省研究開発学校指定を受けております。「何ができるか」「いかに問題を解決できるか」といった資質・能力を本校では「未来創造型の資質・能力」として研究を進めています。これは、つい先日パブリックコメント版が公表された新学習指導要領のさらに次世代を見据え、教育課程の枠組みを発展的に「脱構築」するものでもあります。既存の教科等の枠を外し、新たな6領域（言語文化／自然探究／社会共創／表現／健康／生き方）と1時間（マイタイム）の学習展開、カリキュラムについて、実際に子供たちが学ぶ姿を論拠に研究2年目の成果を提案いたします。

今回の教育研究発表会を開催するにあたり、多くの方々のご指導・ご支援を賜りましたことに深く感謝申し上げます。今後とも各方面からのご助言やお力添えを賜りますようよろしくお願いいたします。

目 次

ごあいさつ	1
はじめに	2
目 次	3
本校研究のあゆみ	4

第1日公開授業・トークセッションⅠ

日 程	6
授業案内図	7
学習指導案	8
トークセッションⅠ	26

第2日公開授業・トークセッションⅡ・未来創造講演会

日 程	28
授業案内図	29
学習指導案	30
トークセッションⅡ	48
学習指導案	50
未来創造講演会	66

研究紀要

研究紀要目次	67
研究全体構想	68
各領域部構想・指導事例	78
特別支援教育部研究構想・指導事例	154

おわりに	172
平成28年度研究同人	173

本校研究のあゆみ (昭和23年度～63年度)

年度	研究主題等	年度	研究主題等
昭和		51	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 操作を通した学習の構造化
23	○学習効果判定の理論と実際 学習効果判定の理論と実際 (永田書店から出版)	52	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 操作を通した学習指導法の展開 「できるまで育てる」 (秀巧社から出版)
24	○カリキュラムの構成と実際	53	○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営 交流でよりよい操作を身につける学習指導 「自由活動の時間」 (秀巧社から出版)
25	(発表会なし)	54	○現代化をめざす指導内容と指導法の実証的究明 教材の価値にせまらせる操作学習の評価
26	○学習深化の指導	55	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 見直し活動を生かした操作学習の深化
27	○学習深化の指導	56	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 自己を見直し、考えを深める指導のしくみ
28	○学習深化をめざす指導	57	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 自ら見直し活動に取り組み、自己を深める指導のしくみ 「学ぶ喜びを生み出す授業」 (北大路書房から出版)
29	○学習指導における諸問題の再検討	文部省研究開発学校指定 I (昭和58年度～61年度)	
30	○学習指導における新課題の再検討		
31	○学習指導深化をめざす新課題の究明	58	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 個が生きる課題づくり
32	○組織化をめざす学習指導法の究明	59	○自己実現の喜びを生み出す学習内容の検討 学習実態の多様性に即応する学習指導
33	○組織化をめざす学習指導法の究明	60	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 子どもの個性が生きる指導
34	○学習指導の系統化	61	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 「学習の個性化をめざす指導法の開発」 (明治図書から出版)
35	○改訂指導要領による学習指導の諸問題	62	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 学習の個別化をめざす学習過程
36	○考える子どもを育てる指導法の究明	63	○自己実現の喜びを生み出す学習指導法 「学習の個性化」をめざす授業の改造 「感動体験を中核とした生活科の授業づくり」 (明治図書から出版)
37	○考える力をのばす学習指導法の考察		
38	○考える力をのばす学習指導法の考察		
39	○考える力をのばす学習指導法の考察		
40	○考える力をのばす学習指導法の考察		
41	○考える力をのばす学習指導法の考察 「授業における思考訓練」 (明治図書から出版)		
42	○教科の本質に立脚した学習指導法の考察 「思考をのばす学習過程の評価」 (明治図書から出版)		
43	(発表会なし)		
44	○現代化をめざす指導法の究明 教材の現代的価値と児童の実態と反応に基づく指導内容の検討		
45	○現代化をめざす指導法の究明 基本的内容にせまらせる学習の開発		
46	○現代化をめざす指導法の究明 ひとりひとりを生かす合理的な学習指導のしくみ		
47	○現代化をめざす指導法の究明 学習の連帯化をはかる指導のしくみ		
48	○現代化をめざす指導法の究明 連帯性を育てる学習指導のしくみ		
49	○現代化をめざす指導法の究明 連帯の力で学びとる姿勢の形成をはかる学習指導のしくみ 「学習を連帯化する指導法」 (明治図書から出版)		
50	○現代化をめざす指導法の究明 学びとる力の育成をはかる学習指導のしくみ		

本校研究のあゆみ (平成元年度～28年度)

年度	研究主題等	年度	研究主題等
平成 元年	○個が生きる授業の創造 自己理解の学習過程	21	○豊かな学びを育む学習の創造 知のネットワーク化を図る活用・探究の授業づくり
2	○個が生きる授業の創造 考えを確かにする活動構成	22	○未来を豊かに生きる学力を育む学習指導の創造 活用の質を高める学び方を活かした指導法の開発
3	○個が生きる授業の創造 考えを深める自己吟味活動を通して 「個が生きる授業づくり」(北大路書房から出版)	23	○未来を豊かに生きる学力を育む学習指導の創造 学び方の連続・発展を重視した授業づくり
4	○生きる喜びを生み出す授業の創造 思い・願いをもって問いつづける活動づくり	24	○「開かれた個」を育てる学習指導の創造 チームを活かした学習過程の工夫
5	○生きる喜びを生み出す学習の創造 思いをあらわしていくよさを実感する活動の展開	25	○「開かれた個」を育てる学習指導の創造 チームの活動が活性化する学習の工夫
文部省研究開発学校指定Ⅱ(平成6年度～8年度)		26	○「開かれた個」を育てる学習指導の創造 チームの活動を活かす重点単元の設定と評価の工夫
6	○生きる喜びを生み出す学習の創造 自分のよさを実感する表現活動の展開	文部科学省研究開発学校指定Ⅲ(平成27年度～30年度)	
7	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 新しい教育課程における教科領域の学習の具体化	27	○未来社会を創造する主体としての子供の育成Ⅰ 未来創造型の資質・能力に基づく新領域構想
8	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 子供主体の活動からみる教育課程の編成 「新時代の授業を創る」(明治図書から出版)	28	○未来社会を創造する主体としての子供の育成Ⅱ 未来創造型の資質・能力を育成する新領域の学習展開
9	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 子供主体の活動からみる教育課程の編成		
10	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 活動や体験を基盤にした学習の総合化 「学習創造」(算数・人間・障害児教育)出版		
11	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 子供と創る教科・総合的学習の展開 「学習創造」(理科・図画工作・音楽)出版		
12	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 知恵と心情をはぐくむ教科・総合の調和的展開 「学習創造」(国語・体育)出版		
13	○豊かな人間の育成をめざす教育過程の創造 調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化 「新世紀の学力づくり」(明治図書から出版)		
14	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 教科・総合の学びを連動する〈ふくおかプラン〉の展開		
15	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 「自己追究」の学びを拓く〈ふくおかプラン〉の展開 「評価で変えるカリキュラムづくり」(明治図書から出版)		
16	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 「生活・文化・人間の学び」を位置付けた〈ふくおかプラン〉の構想		
17	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合する〈ふくおかプラン〉の展開		
18	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 協働を中核とした学習の展開		
19	○学びを強め確かにする学習の創造 学びの体験を活かす3つの統合による授業づくり		
20	○豊かな学びを育む学習の創造 子どもの「問い」を深化・拡充させる授業づくり		

2月17日



受付12:30～13:00

●公開授業1 13:00～13:45

領 域	学年学級	題材・単元・主題	授業者
言語文化	2年1組	心にひびくことばでつくろう「三びきのくま」	菊竹 一平
表 現	3年2組	音楽からつくりだそう	岡崎 教昭
自然探究	4年1・3組	ふしぎだね 自然の中の水	古賀 誠
言語文化	4年2組	昔話でLet's talk! ～We are good friends.～	田中 菜穂子・杉本 克如
自然探究	5年1組	使ってみよう 電磁石の仕組み	永田 裕二
健 康	5年2・3組	つくろう わたしの健康生活	中村 剛・平井 源樹
言語文化	6年1組	共に考える ～言葉って何だろう～	山田 深雪
生き方	6年2組	12歳のわたしにできること	齋藤 淳
特別支援算数	5・6年梅組	ただしく かぞえて はこに つめよう! 梅組こうじょう	中島 卓哉

●全体会 14:00～15:15

挨拶	学 長	櫻井 孝俊
全体研究発表	研究部長	二串 英一
領域研究発表	健 康 部	鞭馬 あゆみ 中村 剛
	特別支援教育部	中島 卓哉 大櫃 玲子

児童発表 Our Hope & Pride with the Movement
「希望と誇り」 5・6年生児童



トークセッションI 15:30～16:30

未来創造型の資質・能力を育成する授業のポイント

講演者	文部科学省 初等中等教育局	視学官	田村 学 氏
	国立教育政策研究所	総括研究官	福本 徹 氏
	京都大学大学院教育学研究科	准教授	石井 英真 氏
司 会	本校	教頭	三浦 研一

第2学年1組 言語文化学習指導案

指導者 菊 竹 一 平

題材 心にひびくことばでつくろう「三びきのくま」(C 創生)

指導観

- 本題材では、イギリスの民話「三びきのくま」の続き話を書き、想像を広げて物語を読んだり書いたりする楽しさを味わうことをねらっている。具体的には、①「三びきのくま」が世界で再話されていることを知ること②英語で書かれたガルドン作(クラリオンブックス)、日本語で書かれた、たちもとみちこ作(ブロンズ新社)、トルストイ作(福音館書店)、森山京作(小学館)の再話本を比べて、お話の内容や表現の違いをとらえること③結末が違う再話の続き話を創作することなどである。再話本は、昔からの物語や民話などを子供向きに書き直した本である。特に「三びきのくま」は、多くの再話本が作られ、世界中で親しまれている。つまり、本題材において、再話本を比べて読み、続き話を書くことは、想像を広げて読む世界共通の絵本の楽しさを味わうことができるという価値がある。
- 本学級の子供たちは、1学期題材『大きな場面をシナリオにしよう「スイミー」』の学習において、教科書には無い絵本の挿絵と教材文の叙述とをつないで場面の様子を想像してシナリオを作る経験をしている。また、2学期題材「日本語とえい語で絵本をたのしもう」では、イギリスの絵本「Rosie's Walk」の英語と日本語訳の言葉を比べて、訳者の表現の工夫や日本語の多様さに気付いたり、場面の様子を想像したりして、自分の言葉で訳本を作る楽しさを感じてきている。しかし、同じ物語で作者が違う再話本を比べて追究する経験はまだない。そこで、本題材では、結末が違う再話本を比べ、想像できる人物像などを伝え合い、これまでの展開に合う続き話を書く活動を通して、想像を広げて絵本を読む楽しさを実感させたい。
- 本題材の指導にあたっては、再話本の特徴を生かして、続き話を書き、想像を広げて物語を読む楽しさを味わうことをねらっている。そのために、まず、同じ「三びきのくま」の物語なのに、作者が違う再話が世界に複数あることに気付かせ、お話の内容や表現を比べる学習課題を設定する。次に、複数の再話本を比べて読み、結末や人物像の違いをとらえ、作者の言葉の選び方の工夫や同じ場面を表す日本語が多様にあることのおもしろさなどに気付くようにする。最後に、結末が違うロシアと日本の2冊の再話本から同じ本を選んだ友達と続き話を書いたり、同じ本や違う本を選んだ友達と感想を伝え合ったりすることで、想像を広げて物語を読む楽しさを実感できるようにする。

題材で育成する資質・能力

- ◎ 結末が違う2冊の「三びきのくま」から想像を広げ、続き話を作ることができる。(創造性)
- 場面の様子について想像したことを、意欲的に伝え合うことができる。(協働性)
- 作者によって表現が異なる再話本の楽しさを知り、複数の再話本を読んだり、続き話を書いたりして読書を楽しもうとしている。(向上性)

題材の計画(全12時間)

学 習 活 動 と 内 容	
1	読み聞かせから学習課題について話し合う。① ○ 同じ物語で言葉を変えた再話本が世界で多く作られていることをとらえること ※ ALTによる読み聞かせの場の設定
	同じもの話なのに、ちがう作しゃがべつの絵本を作っているのはなぜだろう。
2	作者が違う「三びきのくま」を比べて読み、共通点や差異点を話し合う。 (1) 作者が違う「三びきのくま」を比べて読み、共通点や差異点を話し合う。② ○ 作者が違う「三びきのくま」の登場人物や話の結末の共通点や差異点をとらえること ※ 登場人物、結末という比べる観点の提示 (2) 「三びきのくま」の作者による言葉の選び方や終わりの違いについて話し合う。② ○ 同じ場面の言葉で作者の言葉の選び方を比べ、日本語の多様さや表現の工夫をとらえること ※ 同じ場面を使っている言葉が違ったり結末が異なったりしている再話本の提示
3	トルストイと森山京の再話本から1冊を選び、続き話を書いて、感想を伝え合う。 (1) 結末が違う2冊から1冊を選び、同じ本を選んだ友達と続き話を書く。⑥ 本時2/6 ○ 選んだ本の結末や人物像から想像を広げ、これまでのお話に合った続き話を作ること ※ 想像を広げるための表情カードの提示や作者の表現を活用した続き話にするための条件の設定 (2) 作った続き話を読み、感想を伝え合う。① ○ 作ったお話のよさをとらえ、認め合うこと ※ 互いの選んだ言葉のよさを認め合うことができる感想カードによる相互評価の場の設定

本時に最も重視する資質・能力

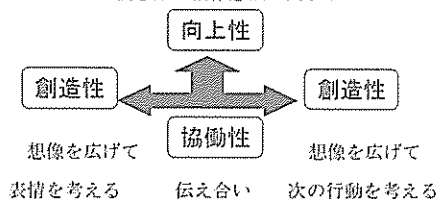
☆創造性

結末が違う2冊の最後の一文から、次の行動やそのときの表情を想像を広げながら発言している姿

- ・ トルストイの本では、女の子がしたことにごく怒っていて、追いつけなかったからきっとあきらめずに探し続けると思うよ。

子供が発揮する資質・能力の関係

続き話の創作意欲の高まり



本時の展開 (7/12時)

学 習 活 動 と 内 容

1 2つの再話本の違いを伝え合い、学習課題について話し合う。

- 同じ「三びきのくま」でも、想像できる登場人物の人物像や続きが異なることをとらえ、それに合った続き話を作りたいという思いをもつこと

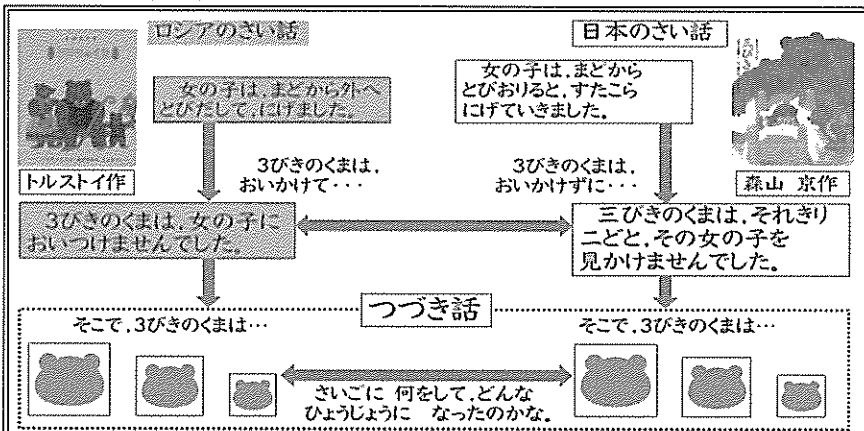
めあて

自分がえらんだ「三びきのくま」のお話に合ったつづき話を作ろう。

2 選んだ「三びきのくま」に合う続き話について話し合う。

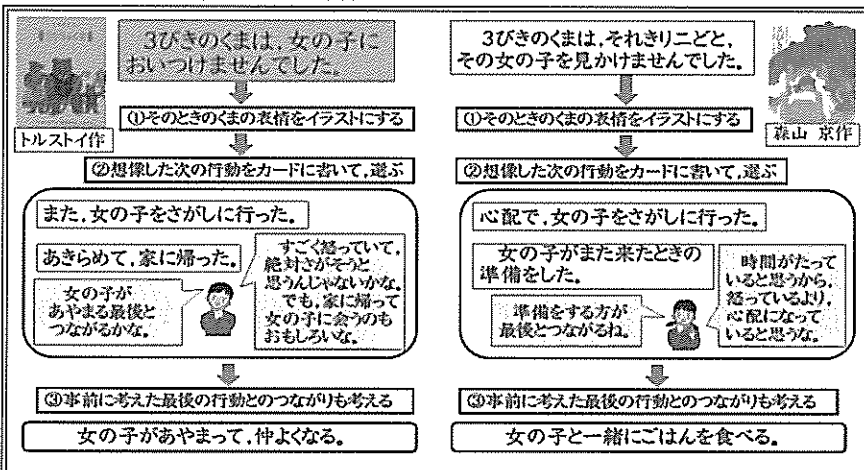
(1) 最後の一文のときの人物の表情について話し合う。

- 選んだ「三びきのくま」の人物の行動を中心に想像を広げながら、それぞれの人物に合った気持ちをとらえること



(2) 次の行動とそのときの表情について、同じ作者を選んだ友達と話し合う。

- 最後に至るまでの人物の言動から想像を広げ、最後の一文の後の行動やそのときの表情について想像を広げること



3 選んだ作者と表現形式が異なる続き話のモデル文を読み、次時の課題について話し合う。

- 続き話では、選んだ作者の表現形式もとらえて、自分の表現に活用していくことが必要であることに気付くこと

創造主体を生み出す手だて

※ 2つの再話の違いを明らかにするために、これまでの学習でとらえた結末や人物像を比較して、板書で整理する。

※ 続きの行動を想像しやすくするために、最後の一文のときの3びきのくまの表情について想像したことを図に描いて、学習プリントに想像した理由を事前に書かせておく。

※ 想像したことを可視化できるようにするために、表情と行動で色を変えたカードとボードを使って話し合わせるようにする。

※ 表現の違いに目を向けさせるために、トルストイの続き話の表現として、森山京の表現を使ったモデル文を提示する。

第3学年2組 表現学習指導案

指導者 岡崎 教 昭

題材 音楽からつくりだそう（C複合）

指導観

- 本題材では、楽曲を聴いて感じたイメージをもとにして立体作品をつくる活動を通して、様々な表し方でイメージを表すことのよさを感じ取ることをねらいとしている。具体的には、①音色や強弱の変化がわかりやすい「きらきら星変奏曲」を聴いて感じたイメージを造形要素と関連付けて話したり、想像した星空の様子について伝え合ったりすること、②場や材料の特徴を活かして楽曲のイメージを立体作品に表すこと、③互いの立体作品と楽曲の特徴とのつながりを見だし、表し方のよさや面白さを感じ取ることなどである。つまり、本題材において、楽曲の鑑賞から造形表現へと発展させる活動を扱うことは、自己の内面に生じた思いや考えを様々な表し方で表すことのよさを実感することができるという価値がある。
- 本学級の子供たちは、表現の学習において、様々な素材に関わりながら発想を広げ、新たな表し方を見だしながら、活動を連続・発展させ、自己の内面を伸び伸びと表現することができた。「A造形」の学習では、様々な色の毛糸を部屋中に張り巡らせ、色の重なりや形から想像を広げ、思い浮かんだメロディを口ずさみながら歩き回っていた。「B音楽」の学習では、楽曲「ピーターとおおかみ」の鑑賞を通して、楽器の音色や旋律、反復や変化という表現の工夫から物語の世界を想像し、簡単な情景図をかくことができた。このように、造形と音楽の要素を効果的に活かしながら思いを表すことができるこの時期の子供たちに、楽曲を鑑賞し、想像を広げながら、空間を広げた立体表現を行わせることで、素材や要素の組合せが多様になり、さらなる創造性の発揮が期待できると考える。
- 本題材の指導にあたっては、子供が聴いた楽曲から感じたイメージをもとに立体作品をつくり、よさや面白さを感じ取ることができるようにする。そのために、まず、導入段階では、きらきら星変奏曲を聴いて感じたことについて話し合う活動を設定するとともに、音楽を源としたカンディンスキーやパウル・クレーの作品から、音楽と造形のつながりに気付かせる。次に、展開段階では、感じた変奏のイメージをもとにグループをつくり、立体に表す活動を設定し、材料を効果的に使い、光や風、音の要素も取り入れられる場の工夫を行う。最後に、終末段階では、作品のもととなった変奏を聴きながら互いの作品を鑑賞する活動を設定し、よさや面白さを感じ取ることができるようにする。

題材で育成する資質・能力

- ◎ 自分が選んだ変奏の特徴から想像を広げて、感じたイメージをもとにした星空の様子を立体作品に表すことができる。（創造性）
- 互いが考えた表し方のよさや面白さについて伝え合い、それらを組み合わせるなどしてよりよい表し方を見いだすことができる。（協働性）
- 自分が感じたイメージをもとに想像した星空の様子に合う表し方について、選んだ理由を明確にしながら表そうとしている。（向上性）

題材の計画（全10時間）

学 習 活 動 と 内 容	
1	きらきら星変奏曲を鑑賞し、感じたイメージから思い浮かべた星空の様子について話し合う。② ○ 楽曲の構成要素から想像を広げて感じたことを表すことに関心をもつこと ※ 音楽を源とした造形作品と変奏ごとに感じるイメージを視覚化できる鑑賞カードの提示
思いうかんだ星空の様子を、ざいりょうの使い方をくふうして表し、つたえ合おう。	
2	表したい変奏を選び、感じたイメージから想像した星空の様子について話し合いながら、材料の使い方や配置などを工夫して表す。 (1) 変奏を選び、気に入っている理由や感じたこと、表し方をカードにまとめ、伝え合う。① ○ 互いのイメージや表し方に関する考えを共有し、協働してつくることへの興味をもつこと ※ 思いや考えを具体的な表し方につなぐための変奏イメージカードの提示と交流の場の設定 (2) グループで表し方について話し合いながら立体作品をつくる。⑥ 本時5/6 ○ 材料や場の特徴を活かしながら、変奏の特徴から感じたことに合う表し方を見いだすこと ※ 材料の使い方についてのヒント資料や表し方を比較するためのハープによる変奏曲の提示
3	もととなった変奏を聴きながら互いの作品を鑑賞し、感じたことを伝え合う。① ○ 変奏の特徴から感じたイメージと作品を構成する要素のつながりを自分なりにとらえること ※ 楽曲と作品のつながりについて、色や形などの要素をもとにして伝える作品紹介カードの提示

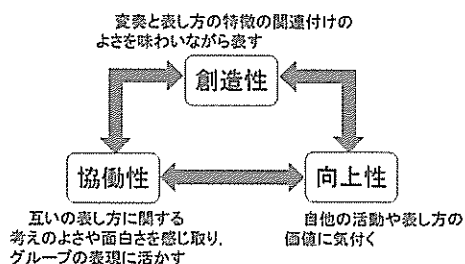
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性

自分が選んだ変奏の特徴と表し方のつながりを明確にして、材料の特徴を活かしながら、表したい星空の様子を表すことができる。

- ・ 第8変奏の流れるようなメロディや力強い感じから、流れ星が流れている様子を思い浮かべたよ。流れ星が流れる様子はモールをねじって表し、輝く星はアクリルロックで表したよ。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（8／10時）

学 習 活 動 と 内 容	創造主体を生み出す手だて
1 想像した星空になるようにするために工夫したいことについて、グループで話し合う。 ○ 自分たちが表したい星空の様子を表し方を共有し、一人一人がすることを確かめること めあて そうぞうした星空の様子がつたわる作品をつくろう。 2 想像した星空を表すことができるか考えながら、様々な表し方を試し、選んだ表し方で作品をつくる。 (1) 想像した星空の中にあるものをつくる材料を選び、吊し方や組み合わせ方を試す。 ○ 選んだ変奏の特徴から発想した星空を構成するものについて、材料や組み合わせの特徴から表し方を見いだすこと (2) 試した表し方でつくったものをどこに吊すか考え、星空のイメージが伝わるか友達と話し合いながら、作品をつくる。 ○ 変奏の特徴から想像した星空の様子を表す作品となっているか確かめ、自分たちの表現のよさや面白さを見いだすこと 【表し方の組合せの例】 リズムの表し方 モールを螺旋状にねじった形をつくる 曲の流れるような感じから、流れ星がシューッと流れている様子を思い浮かべて表したよ。 リズム→形 強弱の表し方 アクリルロックの色の違いと透明感を生かして、星の輝きを表す 曲の中の強弱から、星がきれいに輝いている様子を思い浮かべて表したよ。 強弱→色・光 材料やヒント資料の提示 グループの友達との交流 合わせてみると面白そうだね。 リズムと強弱の表し方 表し方を組み合わせる きらきら輝く流れ星が銀河の中を流れているよ。星空の上の方から流れるよ。 立体表現の場の設定と組合せに関するヒント資料の提示 3 自分のグループの作品を見て、想像した星空の様子を表す作品をつくりあげる際に取り組みたいことについて話し合う。 ○ 作品の価値付けを通してよさや面白さを見いだし、表現をさらに高めることへの意欲と見通しをもつこと	※ 変奏の特徴と作品の特徴や作品づくりに使っている材料などの特徴を関連付けてとらえられるようにするために、リズムや強弱などの音楽要素と色や形、光などの造形要素に関する視点を明確にした上で、アイデアボードを活用した話し合い活動を設定する。 ※ 表現の幅を広げ、変奏から想像した表したい星空のイメージを表すことができるようにするために、材料の使い方や組み合わせ方など、表し方についてのヒント資料を提示する。 ※ 想像した星空の表し方のよさや面白さを見いだすことができるようにするために、作品の背面にブラックボードを置いたり、投光器の光で作品を照らしたりすることができるような場の設定を行う。 ※ 作品のよさや面白さ、さらなる工夫点を見いだすことができるようにするために、グループで話し合う活動を設定する。

第4学年1・3組 自然探究学習指導案

指導者 古 賀 誠

題材 ふしぎだな 自然の中の水（A自然）

指導観

- 本題材では、自然界の水の変化が起こる様子について調べ、水は水面や地面などから蒸発し水蒸気になって空気中に含まれ、結露して再び水になって表れることを理解し、自然の水の現象についてとらえることをねらいとしている。具体的には、①自然界では水面や地面などから水が蒸発していること、②空気中には蒸発した水が水蒸気として存在していることに気付くこと、③冷やすと結露として再び水になって現れ、自然界の水の循環を考えることである。つまり、本題材において、自然の水の変化を扱うことは子供の知的好奇心を喚起し、身の回りにある自然事象を粘り強く探究しながら、考えを創り出すという価値がある。
- 本学級の子供たちは、課題に対して、興味・関心をもって追究し、解決しようとしている。また、水たまりの蒸発や洗濯物の乾燥などの現象は感覚的に理解している。しかし、それが水の状態変化がもたらしたものであったり、温度の変化が関係したりすることには気付いていない。つまり、変化とそれに関わる要因とを関係付けることができていないことがいえる。そこで、観察、実験を通して、水の自然蒸発や結露、循環を調べ、自然の水の変化を考え、自然事象における基本的な見方や考え方を身に付けていくことが必要である。ここで学んだ事物・現象の差異点や共通点に気付く、根拠のある仮説を発想する見方や考え方は、C数理科学の題材「広げよう ぼく・わたしの創造の世界」で発揮することができる。と考える。
- 本題材の指導にあたっては、自然界の水の変化を調べ、水の自然蒸発や結露などの現象を理解できるようにする。そのために、まず、導入段階では、自然の水についての疑問などを話し合い、身近な水について実験し、そのことをもとにしながら、学習課題をもたせる。次に、展開段階では、自然界の水について、共通の課題や実験内容でグループをつくり、自然界の水の変化について、調べる追究計画を話し合う。そして、自然界の水の変化である水の自然蒸発、結露、循環について、仮説を検討し、観察・実験を通して、水と水蒸気とを関係付けて、結論を導き出すようにする。最後に、終末段階では、グループで結論付けた自然の水の変化について、日常生活の中で、そのような水の変化が利用されていないかなどを調べる。自分たちが調べたことを話し合い、自然の水の現象の不思議さや価値を実感させるようにする。

題材で育成する資質・能力

- ◎ 自然蒸発や結露などの現象から、水と水蒸気とを関係付け、自然の水は循環していることを考えることができる。（創造性）
- 自然の水の変化を調べる中で、グループで仮説の検討をしたり、課題に対する考えを伝え合ったりすることができる。（協働性）
- 自分の自然の水についての見方や考え方の変容に気付く、身の回りの水の存在価値を見い出すことができる。（向上性）

題材の計画（全9時間）

学 習 活 動 と 内 容
1 煎餅が乾燥する様子などを観察したり、身近な水の変化を整理したりして、自然の水の不思議さについての学習課題を話し合う。 ③ ○ 身の回りの水の変化についての観察・実験を通して、水の三態変化をとらえたり、疑問をもとにした学習課題をつかんだりすること ※ 水の不思議さにつながる実験や、身近な自然の水の様子につながる交流の設定
水は、どこへいき、どのように変化しているのだろうか。
2 身近な水のようにすについて、仮説実験を行い、水の現象などについて話し合う。 (1) 身近な水について追究する。 ②本時2/2 ○ 水の変化は、温度によって、自然蒸発や結露などの現象が起こることを理解すること ※ 課題に対する実験内容の選定とこれまでの結果を振り返る活動の設定 (2) 自然の水の循環を調べる。 ② ○ とらえた水の性質をもとに、海、山、川などの循環の仕組みをとらえること ※ 自然の水の循環における資料や、自然の水の循環に関する映像の提示
3 自分たちが考えた自然の水の変化が日常生活において使われていないか調べ、自然の水についての考えを深め合う。 ② ○ 水の蒸発などが日常生活で利用され、様々な場所で生活を支えていることをとらえること ※ 日常生活で使われている水の現象についての資料提示や交流活動の設定

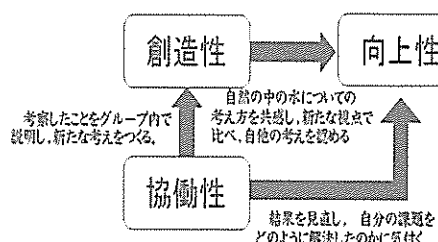
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性

自然の中の水について、自然蒸発や結露などの新たな視点で水の現象についての考えを見い出すことができる。

- ・ 水の自然蒸発は、水面や地面から起こっていて、それが水蒸気になり、雲となって雨を降らしている。
- ・ 自然の中の水は仮説で思った通り、水が蒸発したり、水蒸気から水に戻ったりすることが繰り返し起こり、水がめぐっている。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開 (5/9時)

学 習 活 動 と 内 容	創造主体を生み出す手だて
1 身近な水のようにすについての学習課題を想起し、仮説を確認し合う。 ○ 身近な水の変化はどのようになっているのかという課題をもとに仮説や解決の見通しをとらえること めあて 身近な水のようにすについて調べ、水に対する考えを確かにしよう。 2 仮説をもとに、グループで考えた実験を行い、自然界の水の変化についての結果や結論を話し合う。 (1) グループで仮説に沿って、水の自然蒸発や結露などの実験を行い絵図で結果をまとめる。 ○ 仮説をもとに検証実験の内容をとらえ、自然の水の変化がわかるような結果のまとめ方を判断すること (2) 仮説に沿った検証の結果から、グループで考えをまとめ、身近な自然の水のようすについての考えを話し合う。 ○ 水は水面などから蒸発し水蒸気になって空気中に含まれ、結露して再び水になって表れることを理解し、自然の水の現象についてとらえること 3 自然の水のようすについての結論を交流し、水の循環についての調べる見通しを話し合う。 ○ 自然の水は蒸発したり、結露したりして変化し、自然の中に存在していることを理解し、どのように自然の水が循環しているのかについての見通しをもつこと	※ 身近な自然の中の水についての課題に対する仮説を振り返るために、それぞれの仮説がどのようなものかを考え直し、見通しをもたせる場を設定する。 ※ 各グループの実験結果を検証でき、自然の水のようすにつなげる結果を導き出すために、グループで仮説に沿って実験ができる場を設定する。 ※ 自然の水のようすについての考えを見い出すために、仮説を振り返り、グループで根拠をもとに考えをまとめ、グループでの説明活動を設定する。 ※ 自然の中の水について、今後の解決の見通しや方法などを考えるために、自然の水の変化や循環について見通しがもてるモデルや挿絵を提示する。

第4学年2組 言語文化学習指導案

指導者 杉本 克如・田中 菜穂子

題材 昔話でLet's talk! ～We are good friends.～ (C創生)

指導観

- 本題材では、昔話の登場人物をもとにつくったオリジナル昔話を英語で表現する活動を通して、日本語や英語のおもしろさに気付いたり、言葉を意識して話す意欲を高めたりすることをねらいとしている。具体的には、①携帯会社のCMを見て、追究課題を話し合うこと、②昔話を読み、とらえた場面や人物像をもとに話の内容を話し合ったり、意図に合う英語表現を考えたりすること、③オリジナル昔話を発表し合い、言語面における気付きや変容を交流することである。その際、日本語の台詞を英語で表現する活動を位置付け、日本語の意味を考え、英語で表現することの大切さを実感することができるようにする。つまり、本題材において、オリジナル昔話をつくり、英語で表現させることは、言葉の意識化を促す上で価値がある。
- 本学級の子供たちは、これまでに友達やALTと英語によるコミュニケーション活動に意欲的に取り組んできた。1学期題材「My favorite」では、相手にわかりやすく伝えるために英語や非言語の使い方を学び、自分のお気に入りのものについて説明してきた。また、2学期題材「みんなでつくるSUKIYAKIソング」では、日本語の歌詞を解釈し、意味合いに合う英語表現を考え、英語で曲名や歌詞の一部をつくっている。その際、日本語をそのまま英語にすることが難しいこと、日本語の意味合いを理解し、英語で表現することの大切さなどに気付くことができた。これは、子供たちが日本語と英語がもつそれぞれの特性に気付き、言葉を意識して、考えたり選んだりしながら話すことの大切さに気付き始めている姿だといえる。
- 本題材の指導にあたっては、日本語で考えた台詞を英語で表現する活動を通して、言葉を意識することができるようにする。そのために、まず、導入段階では、携帯会社のCMを視聴させ、オリジナル昔話をつくる意欲を高める。次に、日本や世界の昔話を読み、とらえた場面や人物像をもとに、話を起承転結で考える。その際、場面や人物像、構成を意識させるようにする。そして、Hi, friends!2 Lesson7のデジタル教材を提示し、日本語で考えた台詞を英語で表現する意欲を高める。辞書やシンキングボードを活用し、日本語や英語の表現を考える活動を通して、言葉への気付きを深めることができるようにする。最後に、つくったオリジナル昔話をスキットで発表し、言語面における気付きや変容について交流することができるようにする。

題材で育成する資質・能力

- ◎ 日本語で考えた話の内容や意図に合う英語表現を考えたり選んだりして、聞き手によりわかるオリジナル昔話をつくることができる。(創造性)
- グループの友達と辞書やシンキングボードを使い、日本語や英語で登場人物の台詞を考え、英語や非言語で表現することができる。(協働性)
- 日本語や英語で台詞を考えることを通して、言葉や表現のおもしろさに気付き、言葉を考え、選びながら話す意欲を高めている。(向上性)

題材の計画(全10時間)

学 習 活 動 と 内 容	
1	携帯会社のCMを視聴して、本題材で追究したいことを話し合う。① ○ CMの内容をとらえ、昔話の登場人物をもとにオリジナル昔話をつくる意欲を高めること ※ CMのおもしろさから学習課題をつかむ話し合い
日本や世界の昔話の登場人物をもとに、オリジナルストーリーをつくって演じ合おう。	
2	昔話をもとに登場人物を設定し、話の内容や台詞を日本語で考え、意図に合う英語表現を調べたりスキットを使って英語で表現したりする。 (1) 日本や世界の昔話を読み、とらえた場面や人物像をもとに、場面や登場人物を設定し、日本語で話の内容や台詞をつくる。② ○ 昔話の場面設定や登場人物の人物像をとらえ読み取ったことをもとに話の内容を考えること ※ 言語文化(日本語)における昔話の読み取り活動とHi, friends!2 Lesson7のデジタル教材の提示 (2) 日本語で考えた内容や台詞の意味合いが伝わるように英語表現を考え、非言語も活用しながら、スキットで表現する。⑤ 本時3/5 ○ 日本語の意味合いに合う英語表現を考えたり日本語の台詞や表現を再考したりすること ※ 日本語と英語をつなぐシンキングボードの活用
3	グループでつくったオリジナル昔話の発表会を行い、本題材を通した言語面における気付きや自己の変容について交流する。② ○ 日本語や英語の意味を考え、言葉を選んで話す大切さや表現のおもしろさに気付くこと ※ 振り返りの視点の提示と交流する場の設定

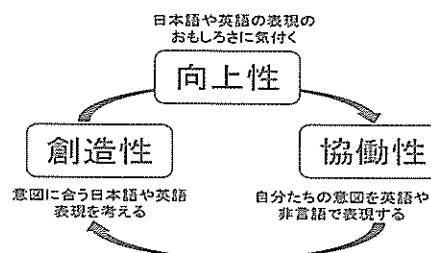
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性

日本語で考えた台詞の意味合いを伝えられる英語表現を考えたり、知っている英語で表現するために日本語表現を変えたりしている姿

- 「馬車で行く」を「馬車に乗る」にすれば、3年生で習った「一輪車に乗る」が使える。「帰らなければ」は、表現集にある I have to go. に「帰る」の go home を合わせればいいね。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（6／10時）

学 習 活 動 と 内 容

- 起承転結で構成されたオリジナル昔話のうち、前時に英語で考えた「起」の場面を振り返り、「承」「転」「結」の場面の活動の見通しを話し合う。
 - 本時学習の見通しをもつとともに、言語面について、自分が意識的に取り組みたいことについて考えること

めあて

オリジナルストーリーの内容やせりふを伝えられる英語を考えよう。

- 「承」「転」「結」の台詞について、日本語の意味合いを伝えられる英語表現を調べ、考えた表現についてペアグループでアドバイスし合う。
 - (1) 前時に日本語で考えた台詞について、その意味合いを伝えられる英語表現を調べたり、日本語や英語の表現について話し合ったりする。
 - 日本語表現を見直したり、使える英語で言い換えたり、英語を組み合わせたりして、日本語の意味合いがより伝わる英語表現を考えること

★ 日本語で考えた台詞の意味合いを伝えられる英語表現を考える姿

日本語 → 英語
日本語から使える英語に
直接できる場合

- ① 使える英語や辞書を使う
「みんなで一緒に月に行きましょう。」

Let's go to the moon.
で伝えられそうだね。

「いっしょに」は
辞書に
together と
あるよ。

日本語 → 日本語
日本語で使える英語で表現
できる日本語表現に変える場合

- ① 意味合いを変えずに、使える
英語で表現できる日本語にする
「よく来たね。」

どんな日本語に変えられるかな。

「いらっしやい。」
中に入って。
来てくれてありがとう。

② 知っている英語を使う

「いらっしやい。」は
Welcome.

- ② 知っている英語で言い換える

「中に入って。」は
inside や enter かな。

② 知っている英語を組み合わせる
「来てくれて…」は
Thank you. Come.

- (2) オリジナル昔話の内容を日本語と英語で発表し、ペアグループで内容や台詞とそれらを表す日本語や英語の表現についてアドバイスし合う。
 - オリジナル昔話の内容を日本語と英語とで発表し合うことを通して、より意味合いが伝わる日本語や英語の表現について考えたり、日本語や英語がもつ言葉や表現のおもしろさを自分なりにとらえたりすること

★ 自分たちが考えた英語でオリジナルストーリーを表現する姿

【起】一緒にすること

Let's go to the moon.
Kaguyahime's house.

Good idea!

おやゆび姫 シンデレラ

【承】月への行き方

I can ride
a Pumpkin carriage.

シンデレラ

【転】そこですること

I can dance well.
Let's dance together.

Nice idea!
Let's go!

シンデレラ

【結】別れ方(オチ)

Oh, it's twelve o'clock.
I have to go home!

かがや姫

シンデレラ

- 言語面における気付きや成果と課題について言語ブックに記入する。
 - 日本語や英語について気付いたこと、できるようになったことや次時頑張りたいことなどの視点をもとに、自分が使った日本語や英語について考え、次時の学習に向けて言葉を意識して話す意欲を高めること

創造主体を生み出す手だて

※ 言語面について、自分が頑張りたいことを明確にさせるために、言語ブックの前時の振り返りと本時のめあてをグループと全体で交流する場を設定する。

※ 日本語の意味合いに合う英語表現を考えさせるために、以下のように、シンキングボードの活用を図る。

- ① 中央に元になる日本語表現を書く。
- ② 辞書に載っている日本語や英語に変換可能な日本語表現に変える。
- ③ 和英辞書で調べたり、知っている英語を使って表現したりする。

※ 考えた話の内容、日本語や英語表現がわかりやすいものになっているかと考えさせるために、以下のポイントでアドバイスし合う活動を位置付ける。

- ① 話の内容
- ② 台詞の日本語表現
- ③ 台詞の英語表現

※ 言語面に関する気付きを共有させるために、視点に沿った振り返りを交流する活動を位置付ける。

第5学年1組 自然探究学習指導案

指導者 永田裕二

題材 使ってみよう 電磁石の性質（A自然）

指導観

- 本題材では、導線に電流を流し、電磁石の変化について興味・関心をもって追究する活動を通して、電流の働きについて条件を制御して調べる能力を育てる。そして、ものづくりを通して電流の働きについての見方や考え方、電磁石の性質の有用性を実感することをねらいとしている。具体的に電磁石の性質としては、①電流の向きが変わると電磁石の極が変わること、②電磁石の強さは、電流の強さや巻き数によって変わることである。また、電磁石の性質を活かしたものづくりとしては、①極性変化を利用したモーター、②電流を流している間だけ磁力をもつ性質を利用したベルなどである。本題材で扱う電流の働きは「エネルギーの変換と保存」に関わり、第6学年「Cロボットの仕組み」の学習につながる点で価値がある。
- 本学級の子供たちは、A自然において第4学年「電気の仕事」において、回路を流れる電流の大きさと豆電球の明るさやモーターの回り方を関係付けてとらえることができている。C数理科学においては、1学期「エコロン池構想プロジェクト」、2学期「飛ぶ仕組みを発見しよう」の学習を通して、条件を制御して実験を行う問題解決の能力や、複数の数量について割合の見方を用いながら、帰納的に考える能力を培ってきた。特に「飛ぶ仕組みを発見しよう」の学習においては、翼の形と風の関係をもとに、左右の翼の形、おもりの重さを観点として、より遠くに飛ぶゴム動力飛行機をつくる過程で創造性を発揮することができるようになってきた。さらに、本題材において、条件制御する力、電流と電磁石の関係性、仮説と結果から考察する力を培うことで、3学期題材「C飛行プラン」で創造性を発揮する姿につなげるようにする。
- 本題材の指導にあたっては、自然探究の見方や考え方である、仮説検証の過程で、電磁石の磁力を強くする方法や電流の向きによる極性変化をとらえることができるようにする。そのために、導入段階では、1本の導線に電流を流し、微力な磁力が発生する事象提示を通して、電磁石の考えの基礎をとらえ、電磁石の性質を調べたいという課題意識をもつようにする。次に、展開段階では、電磁石を強くするための仮説を話し合い、解決の見通しと方法をたて検証していく。最後に終末段階では、電磁石の性質を活かしたものづくりについて追究計画を話し合い、試行錯誤して、極性変化を利用したモーターや電磁石カーづくりに挑戦する。

題材で育成する資質・能力

- ◎ 電磁石の強さを電流の強さや導線の巻数と関係付け、電磁石の極を電流の向きと関係付けて仮説を設定し、得られた結果から仮説を見直して、考察することができる。（創造性）
- 電磁石の強さや極性の変化に関わる要因を、グループで追究し、結果を交流してきまりを発見することができる。（協働性）
- 追究を通して培った電流の働きについての見方や考え方を、電磁石の性質を活かしたものづくりを通して実感することができる。（向上性）

題材の計画（全12時間）

学 習 活 動 と 内 容	
1	1本の導線に電流が流れると磁石の性質をもつという現象と強力電磁石の映像から、電流と磁石の関係について追究していく課題を話し合う。② ○ 導線に電流が流れているときだけでも磁石の性質と、電流の向きを変えると極が変わる性質を、電磁石の特徴としてとらえること ※ 1本の導線に電流を流すことで電磁石になる事象提示と強力電磁石の提示 電磁石を強くするにはどうしたらよいだろうか。
2	電磁石の性質を、電磁石の強さの変化や極性の変化から調べる。 (1) 電磁石の強さや極性の変化について、電流量や、電流の向きから調べる。④ 本時4/4 ○ 仮説をもとに条件を制御しながら検証することで、電磁石の強さや極の変化をとらえること ※ 電池、巻数、導線など変える条件と変えない条件を明確にできる条件制御表の提示 (2) 電磁石の力を強くするための、条件の組み合わせを調べる。② ○ 組み合わせによって、電磁石の力は変わること理解すること ※ 仮説を図面に表した回路図の活用や、グループで仮説を設定して行うグループ実験の設定
3	電磁石の性質を活かしたものづくりの計画をたて作成する。④ ○ 電磁石の強さや極性の変化などの電磁石の性質をものづくりに活かすこと ※ 極性変化を活かした手作りモーターや、電磁石カーの提示

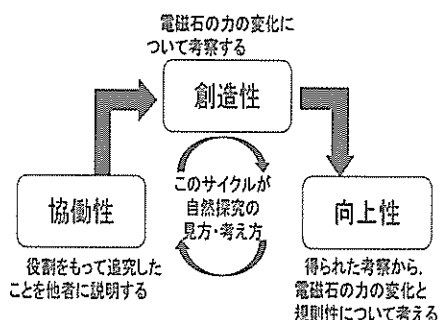
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性

仮説に沿って、電磁石の強さの変化を定量的に調べ、得られた結果から仮説を見直し、考察している。

- ・ 電池の数を増やして調べた結果から、電磁石の強さは、やっぱり電流の大きさに比例して変わる。
- ・ 電池の数や巻数、導線の太さで電磁石の強さが変わった。もっと強くするには、巻き数と電池の数、導線の太さを組み合わせれば、今日わかった比例の関係で強くなるはずだ。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（6/12時）

学 習 活 動 と 内 容

- 1 巻き数や電流の大きさ、導線の太さと電磁石の強さの関係について仮説と実験方法を話し合う。

- 電磁石の強さを変える実験の見通しをもつこと

めあて

電磁石を強くする方法とその規則性を調べよう。

- 2 仮説に沿って、電磁石の強さの変化を検証する。

- (1) 電磁石を強くする方法について実験で調べる。

- 仮説に沿って実験し、実験から電磁石の強さと電流、巻き数、導線の太さが関係していることをとらえること

仮説
(例)

電池の数を増やすことで、電流量が増え発熱する。磁力も、電流量が増えればその数に比例して強くなるはずだ。だから、電流量を簡易検流計で2倍、3倍になるように測りながら、持ち上げられる重さで調べていけばわかるはずだ。

自己追究
自分の仮説に沿って、定量的に検証する。

導線の太さ
巻き数100回
導線0.2、0.4、0.6mm
電池1個

電流の大きさ
巻き数100回
導線0.4mm
電池1～3個直列

追究交流
グループ内で結果を交流し、考察する。

巻き数
巻き数100～300回
導線0.4mm
電池1個

- (2) 電流の大きさ、巻き数や導線の太さについて調べた結果を報告し合い、結果から考察する。

- 自分が調べた実験結果、考察を説明し、電磁石の強さとその規則性を適切にとらえること

電磁石の強さの関係

	電池	巻数	導線	強さ
基本	1個	100回	0.4mm	4g
電池	2個 3個	100回	0.4mm	8g 12g
巻数	1個	200回 300回	0.4mm	8g 12g
導線	1個	100回	0.2mm 0.6mm	3g 6g

【考察(例)】

電池の数を2個、3個に増やすことで、持ち上げられる重さも約2倍、3倍に増えたことから、電磁石の強さは、電流の大きさに比例して変わる。これは、仮説にも上げていた電流計の数値や導線が発熱していく様子からいえる。

- 3 実験結果から得られた考察を交流し、電磁石の強さと電流、磁力の大きさの組み合わせについて話し合う。

- 電流の大きさや磁力を強くすることで、電磁石の力は強くなり、条件を組み合わせることで、さらに強くなることをとらえること

創造主体を生み出す手だて

※ 電磁石が強くなったかを持ち上げる重さだけから判断しないようにするために、仮説の交流を行い、全員の仮説が電流量と磁力の関係にまで深まるようにする。

※ 電磁石の強さとその規則性までとらえさせるために、グループ内での役割のもと実験グループに分かれ、数値を変えながら定量的に調べる場を設定する。

※ 得られた結果から仮説を見直し、考察するために、個人の役割のもと調べた結果を交流し、必要に応じて再実験を行うことで、考察するようにする。

※ 電磁石の力をより強くする方法をとらえさせるために、個人が追究してきた考察を交流し、規則性や条件の組み合わせ方を考えるようにする。

第5学年2・3組 健康学習指導案

指導者 中 村 剛・平 井 源 樹

題材 つくろう わたしの健康生活（A心，B運動生活）

指導観

- 本題材では、より自分らしく生活ができるようにするために、運動を自分のねらいに合うようにつくり変えて、生活へ取り入れることをねらいとしている。具体的には、①心，体，社会的な関係が良好であれば自分らしく前向きに生活できることをとらえること，②自分に合った運動の行い方を知り，運動をつくり変えること，③運動やスポーツをすることの価値をとらえることなどである。つまり，本題材において，自分の生活や目的に合うように運動をつくり変えたり，行う時間やともに行う相手を決めたりすることは，健康な生活と運動の関係をとらえ直すことにつながり，今後主体的に運動を生活の中に取り入れて，生活の質（QOL）を高めていく上で価値がある。
- 本学級の子供たちは，ほぼすべての子供が運動することが好きで，運動する習慣を身に付けることはよりよい成長発達に必要であることを理解している。また，2学期の「元気いっぱいプロジェクト」の学習において休み時間の運動の取り組み方について考え，学校での運動時間は増えてきた。これは，運動をすることは自分の心に多様な楽しさをもたらすことに気付き，実感することができているためであるといえる。しかし，自分の生活に運動をする習慣を取り入れることで，心の状態を整えたり，人間関係を良好に保ったりするという運動の価値に気付き，その価値を求めて生活に取り入れようとするまでには至っていない。そこで，運動の価値について論理的に思考することができるようになるこの期に本題材を設定する。
- 本題材の指導にあたっては，自分自身の健康観をつくり，その健康観に向かって生活の中に運動を取り入れることができるようにする。そのために，まず，健康の価値についてとらえさせる。その際，健康な状態をとらえさせるために，場面カードを活用し，健康な状態とは，心が前向きや体の状態がよいなどであることをとらえられるようにする。次に，自分の生活や目指す姿に合うように運動の行い方を工夫していく。その際，目指す運動の行い方が同課題の友達と行い方を工夫し，自分に合った健康な生活ができるように運動を生活の中に取り入れていく。最後に，実践を通してとらえた健康な生活と運動することとの関係について話し合う。運動することが生活の質（QOL）を向上させることにどのように関連しているのか，実践から得たことを価値付ける。

題材で育成する資質・能力

- ◎ 運動することが明るく前向きな生活をつくることにつながることをとらえ，自分の生活に合うように運動を工夫することができる。（創造性）
- 同課題の友達と運動の行い方について意見を出し合って運動をつくり変えたり，課題を解決するために友達と解決方法について意見を交流したりすることができる。（協働性）
- 自分が求める運動にするために，運動をする時間や場所，一緒に運動をする人を生活に合わせて決めることができる。（向上性）

題材の計画（全9時間）

学 習 活 動 と 内 容	
1 健康な生活について話し合う。 ②	
○ 健康な状態についてとらえ，それに向かうために運動を通して理想の生活を思い描くこと	
※ 健康な状態をとらえるための場面カードの分類と歩数計による自分の運動生活の実態把握	
毎日をもっと健康にすごすために，自分に合った生活をつくろう。	
2 自分の生活に合った運動の行い方をつくる。	
(1) なりたい自分になるための運動の課題を交流し，自己課題を設定する。 ①	
○ 目指す運動の関わり方，行う時間，行う方法 行う相手などの課題をとらえること	
※ 生活をつくるための生活スケジュール表の活用と課題追究のための交流の場の設定	
(2) 自分の課題が解決するように運動の行い方や工夫などをつくり変える。 ⑤ 本時5/5	
○ 同課題の友達と自分の生活に合うように運動の行い方を工夫したり，運動を異なる課題の友達に紹介したりして，多様な運動の関わり方や運動の価値をとらえること	
※ 基本となる運動の提示と目指す姿になるために運動の行い方を理解するためのG Tとの出会い	
3 実践を通してとらえた成果を話し合う。 ①	
○ 実践を通して見い出した健康な生活と，運動することの価値についてとらえ直すこと	
※ 健康との関連を見い出すため，QOLアンケートの結果を分析するとともに，共に運動を工夫してきたG Tとの交流の設定	

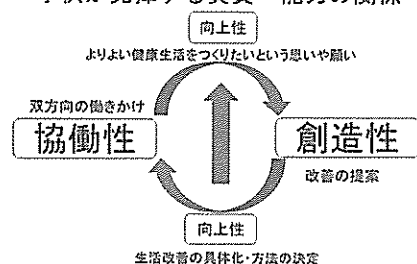
本時に最も重視する資質・能力

☆協働性

異なる課題の友達に、自分が目指す運動について紹介したり、友達の考えを聞いたりすることができる。

- ・ わたしは、一人では運動が続かない友達に「家族と一緒に運動をすると楽しめるから続けられるよ」とアドバイスをしました。紹介してもらった運動や工夫も取り入れたいです。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（8／9時）

学 習 活 動 と 内 容

1 これまでの学習でつくってきた運動と自分が取り組んできたことを振り返り、本時学習の方向性を話し合う。

- 自分の目指す健康生活によって運動の行い方が変わることや運動を継続して感じた効果などをとらえると共に、他グループに運動を紹介したいという意欲を高めること

めあて

自分たちがつくった運動を紹介し合い、もっと自分の健康生活につながるように運動を取り入れたり、つくりかえたりしよう。

2 自分の目指す健康生活になるために考えた運動を紹介する。

(1) 同じ課題の友達と考えた運動の行い方などを紹介する。

- 目指す姿に応じた運動の行い方や実践している際に生じた課題について明確にすること

(2) 異なる課題の友達から、紹介した運動の行い方や生じた課題について質問を受けたり、課題解決のためのアドバイスをもらったりする。

- 異なる課題の友達の発表を見たり聞いたりして、自分たちの考えた運動との違いを明確にしたり、よさをとらえたりすること

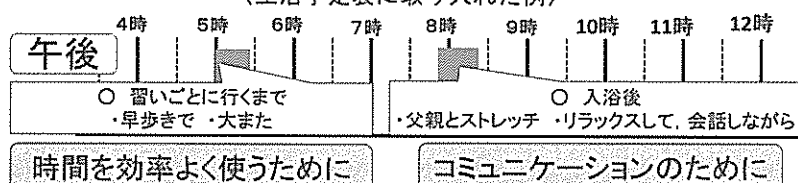
〈予想される目的と取り上げる運動例〉

運動をする時間が十分に取れない。 だけど、体力は落ちたくない。だから、習いごと歩いて行くことにしたよ。1日1万歩が目標だよ。	時間はあるけれど何もしていない。 運動をして気分転換したいな。だから、周りの景色を見ながらのんびり散歩を楽しむよ。誰かと歩くのも楽しいね。
運動の時間をたくさんとれない。 体力はつけないな。だから、テレビを見ながら腕立てをするよ。最高の回数にチャレンジするといひよ。	家族と会話が少ない。 一緒にしたいな。だから、する時間を決めているよ。対戦表をつけると盛り上がるよ。
テレビばかりで会話が少ない。 ストレッチでコミュニケーションをとりたい。だから、役割を交代して、声をかけ合っているよ。	体が固い。 ストレッチで柔軟性を高めたい。だから、毎日継続して、風呂上がりに行っているよ。息を吐きながらするといひよ。

3 本時学習を振り返り、自分の生活に活かしていきたいことを話し合う。

- 友達の考えを聞いて自分の実践に活かすことができそうなことを自己決定すること

〈生活予定表に取り入れた例〉



創造主体を生み出す手だて

※ 友達の取り組みを見たり聞いたりして、自分の取り組みに活かしたいという向上性を発揮させるために、困っていることを交流する場面を設定する。

※ 目指す姿や生活上の課題に応じて、運動の取り組み方に違いがあることに気付かせ、自分の生活に取り入れたいという創造性を発揮させるために、運動の行い方や工夫を体験できる場を設定する。

※ 異なる課題の友達と課題を解決したいという協働性を発揮させるために、ポスターセッションの中で、実践する上で困っていることを出し合い、それに対する回答を全体で交流することができる場を設定する。

※ 自分が明るく前向きに生活するために運動習慣を身に付けていこうとすることができるよう、題材導入の課題と現状を比較できる学習プリントを用意する。

第6学年1組 言語文化学習指導案

指導者 山 田 深 雪

題材 共に考える～言葉って何だろう～（C創生）

指導観

- 本題材では、言語の価値に迫る問いについて話し合うことを通して、考えを深め、よりよい言語生活を創り出そうとする態度を培うことをねらいとしている。具体的には、①言葉の起源・歴史・機能について述べた複数の文章を通して、言語の価値に迫る問いを定めること、②問いに対する考えをグループや学級全体で話し合い、話し合いの内容及び話し合いに向かう態度を振り返り吟味すること、③問いに対する最終的な自分の考えをまとめ、自己の成長を振り返ることなどである。つまり、本題材において、言語の価値に迫る話し合いを積み重ね、自分の言語への見方・考え方を広げたり深めたりすることは、自分の言葉で日常生活をよりよいものにしようとする意識を高める上で価値がある。
- 本学級の子供たちは、2学期題材「この思いを届けよう！感動CM制作所」においては、言葉を受け取る相手の解釈を想定しながら、よりよい言葉と必要な映像を吟味して「今、自分たちが伝えたい『思い』」を訴えるCMを制作してきた。これらを通して子供たちは、言葉一つ一つには意味があるが、その意味が個々のとらえ方によって異なることを実感している。しかし、そのような特徴をもつ言葉と自分自身の関わりについて深く考えたり他者の考えを聞いたりするまでには至っていない。そこで本題材では、言語の価値に迫る問いについてグループや学級全体で話し合うことを通して、言語のよさや弱点を理解した上で言語を駆使してよりよい言語生活を築こうとする意識を高めたい。
- 本題材の指導にあたっては、言語の価値に迫る問いについて話し合うことを通して考えを深め、よりよい言語生活を創り出そうとすることができるようにする。そのために、まず、言語の価値に迫る問いを設定させる。その際、子供が出した多様な問いを板書で整理・分類することで、調べれば済む問いか、人に深く考えさせる問いかを判断し、みんなで探求するに値する問いを定めることができるようにする。次に、設定した問いについて話し合う。その際、1回目の話し合いで自分たちの話し合いの進め方を振り返り、考えを深めるために有効な発言や方途を吟味させることで、次の話し合いを主体的に進めたり深めたりすることができるようにする。最後に、自分の考え及び自分の成長についてまとめる。その際、これまでの話し合いの映像や自己評価を綴ったポートフォリオを用いることで、自分や他者の変容を見いだすことができるようにする。

題材で育成する資質・能力

- ◎ 曖昧または多義的な言葉の意味を明確にしたり考えに至った理由を聞いたり、主張の根拠を求めたりしながら、言語の価値に迫る問いについて思考することができる。（創造性）
- 他者が話すことを認め、他者の話に耳を傾け、他者の発言の意図に気づき、それに対する自分の考えについて、根拠や理由、意図がわかるように伝え合おうとすることができる。（協働性）
- 自分たちの話し合いを振り返り、話し合いの成果と課題を見いだそうとするとともに、これまでの学習経験をもとに言語の価値を実感し、言語を尊重しようとするすることができる。（向上性）

題材の計画（全14時間）

学 習 活 動 と 内 容
1 言葉の起源・歴史・機能について述べた文章を読み、疑問や感想を出し合い、言葉についてみんなで考えたこと（問い）について話し合う。 ⑤ ○ 言語の価値に迫る問いを3つ程に絞り込み、課題解決への見通しをもつこと ※ 子供が出した多様な問いを整理・分類する板書
自分たちの生活をよりよくするために、言葉とどのように付き合っていけばよいのだろうか。
2 言語の価値に迫る問いについて話し合う。 (1) 1つ目の問いについて全体で話し合い、自分たちの話し合いの内容及び進め方を振り返る。 ③ ○ 話し合いの成果を吟味し、問いについて考えを深めるために有効な方途を見いだすこと ※ 話し合いの参加者と観察者によるメタ・ダイアログ (2) 2つ目と3つ目の問いについてグループ・学級で話し合う。 ④ 本時3/4 ○ 意味を明確にするための質問を考えたり、違いや一致点を見いだしたりしながら考えを深め自分たちの話し合いの成果を吟味すること ※ 質問や発言の分析を促す思考ツール
3 言語の価値に迫る問いに対する自分の考え及びこの学習で自分が得たことについて書く。 ② ○ 言語の価値に迫る問いについて自分の考えをまとめるとともに、自己の成長を見いだすこと ※ 話し合いを深めた質問や意見についての相互評価及びこれまでの学習過程を綴ったポートフォリオ

第6学年2組 生き方学習指導案

指導者 齋 藤 淳

題材 12歳のわたしにできること（Bみらい）

指導観

- 本題材では、人の幸福や自己実現のために、他者に奉仕したり貢献したりする利他的な生き方の価値を見出すことをねらいとしている。具体的には、①熊本地震についての様々な人々の支援について学び、オープン・ジャパンの方々と交流することを通して、なぜ人のために生きることを大切にするのか課題設定すること、②福岡市長を中心とした市役所の人々も他県の災害になぜ熱心に取り組むのかその意味について考えること、③子供でもできることは何か考えるために、世界一を目指す若葉高校ダンス部が被災地を勇気づけていることから、考え実践することなどである。このように、本題材において、他者のために生きる様々な立場の他者の生き方を扱うことは崇高な理念をもった自己を育むという意味で価値がある。
- 本学級の子供たちは、これまでに1学期には「Cくらし」の学習で世界遺産の魅力を調べる中で、歴史的な文化遺産を創造し、守ってきた人の生き方を考えることができた。また、2学期には、「Aいのち」でLGBTQと呼ばれるセクシャル・マイノリティへの差別や偏見と闘う人や「Bみらい」でサグラダ・ファミリア教会の主任彫刻家である先輩の外尾悦郎氏について学んできた。その中で、自分らしい生き方をつくりたいと願いをもつようになっている。また、「何のために生きるか」「どう生きていきたいか」という問いをもち、「人の役に立ちたい」という思いも生まれつつある。そこで、小学校最後のこの時期に熊本地震に関わる様々な人の生き方の中で、どう生きていきたいのか考えさせるようにする。
- 本題材の指導にあたっては、他者の生き方をもとに自分の生き方を強化したり見直したりすることができるようにする。そのために、まず、熊本地震という事象の中で、暑い日も寒い日も支援を続けているオープン・ジャパンの方々の活動について追究させる。その際、「なぜ活動を続けているのか」「なぜそれが幸せなのか」課題を設定する。次に、福岡市にもそのような取組があったことを知らせ、市役所の職員の方々がどのような思いで活動をされていたのか知らせるとともに、自分たちが市民としてできる活動について考えさせる。最後に、世界一という目標をもって自己実現を続ける若葉高校ダンス部が熊本地震の被災地で踊り、被災者を勇気づけようとする姿から、自分にできることを実践したいという願いをもたせる。

題材で育成する資質・能力

- ◎ 自分らしさを生かして、自分にしかできない熊本地震で被災された人々のためにできることを考え、実践しようとすることができる。（創造性）
- 困っている人の気持ちに共感し、仲間とともに互いの考えを尊重し合って被災された人々の気持ちを汲んで話し合うことができる。（協働性）
- これからの社会を生きる自分たちにとって、より望ましい生き方とは何か考え、自己決定することができる。（向上性）

題材の計画（全22時間）

学 習 活 動 と 内 容
1 昨年4月に起こった熊本地震での支援の多さや人の温かさについて話し合う。④ ○ なぜ様々な人々が人の幸せのために喜んで力を尽くそうとするのか課題意識をもつこと ※ サグラダ・ファミリアを創る外尾悦郎氏の「教会は人々の幸せを願って創る」という言葉の想起
困っている人のために12歳の自分にもどのようなことができるのだろう。
2 熊本地震を支援するために関わった人々がしていることから自分ができる活動を見つける。 (1) オープン・ジャパンの活動について知る。② ○ 人のために支援することに喜びを感じている生き方の価値を見出すこと ※ オープンジャパンの方々と交流する場の設定 (2) 福岡市役所の方々や若葉高校ダンス部の支援について調べ、自分にできることについてのプランをつくる。⑩ ○ 人のために自分たちのできることを最大限に生かすことの意味についてとらえること ※ 福岡市役所の方々や若葉高校ダンス部の活動を具体的に調査する活動の設定
3 自分にできることを実践し、人のために貢献することの意味や価値を話し合う。⑥ 本時4/6 ○ 自分たちが行った実践をもとに、熊本地震で被災された方々のために活動されている方々から学んだ生き方を自己の生き方に生かすこと ※ オープン・ジャパンの方々、福岡市役所、若葉高校ダンス部に共通する思いや願いについて語り合う場の設定

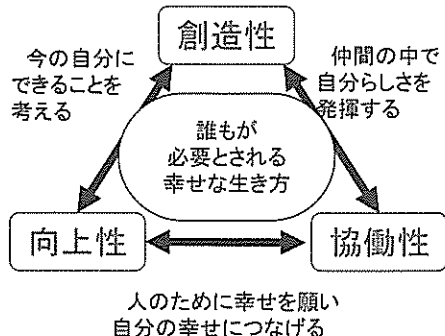
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性

熊本地震の復興のために支援されている異なる立場の人々の生き方の共通する思いや願いをもとに自分がどのようなありたい姿を見出したのか考え、これからの自己の生き方について語る姿

- ・ オープン・ジャパンの方々のように生活そのものを支援することに捧げることは難しくても人のために生きる喜びを感じたい。
- ・ どんな立場であっても自分にしかできない、できることがあるはずだから、できることを実践できる自分でいたい。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開 (20/22時)

学 習 活 動 と 内 容

- 1 自分たちがオープン・ジャパン、福岡市役所、若葉高校ダンス部の方々とともに学び、熊本地震を復興支援のために行った活動についてのVTRを見て感想を話し合う。

- 自分たちの行った活動に対する充実感や達成感を味わうとともに、今まで明らかにできなかった人のために尽くすことの意味や価値についての気持ちから課題を設定すること

めあて

熊本地震の復興支援の活動を振り返り、この学習を通して自分がどのように変わってきたのか考えよう。

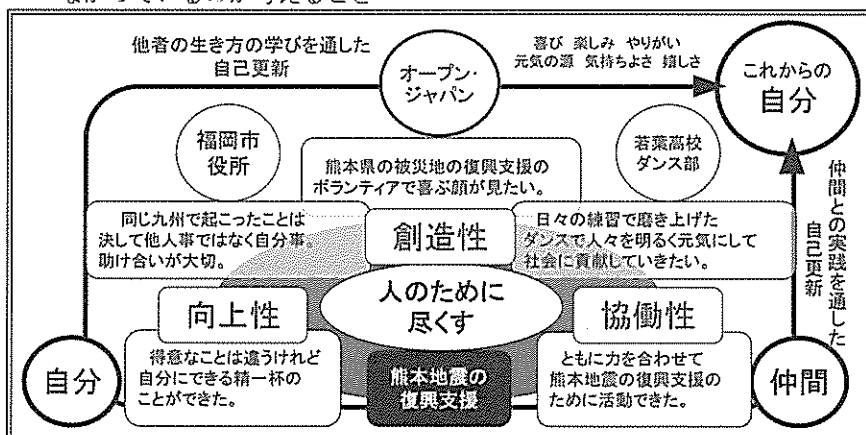
- 2 オープン・ジャパン、福岡市役所、若葉高校ダンス部の方々とともに学んだ、熊本地震の復興支援の活動で感じたことについて話し合う。

- (1) オープン・ジャパン、福岡市役所、若葉高校ダンス部の方々の考えを思い出し、自分たちの感じたことや思ったことと似ていることを見つける。

- 自分の生活そのものを支援に捧げている方、仕事の延長で支援を自主的にされている方、自分たちのもっている力を人のために生かそうと考えている方という3つの立場から自分の考えの立場を明らかにすること

- (2) 自分たちが行った経験をもとに、人のために生きることを意味や価値について、自分の考えを話し合う。

- 今までの実践や今日の語り合いを通して、人のために奉仕したり貢献したりする利他的な行動が、なぜ自分にとっての温かな気持ちや幸福感につながっているのか考えること



- 3 「12歳のわたしにできること」の学習を通して、これからの自分の生き方につながる「これからのわたし」を書く。

- 人のために生きていくことの価値を実感するとともに、自分の幸せと他者の幸せのつながりを感じて生きていこうとする、これからの生き方への展望をもつこと

創造主体を生み出す手だて

※ 自分ができていることを生かした、熊本地震の復興支援のための活動を振り返らせるために、学級全体で行った活動の様子と被災された方々のコメントを撮影したVTRを準備する。

※ 熊本地震の復興支援に関わっている人々について、自分の考えに近い立場の考えをとらえるために、オープンスペースで自分の立場を明らかにして語り合うことができる場を設ける。

※ 熊本地震の復興のために支援されている異なる立場の人々の生き方の共通する思いや願いをもとに、人のために尽くす意味や価値の多様さをとらえさせるために、論点を提示して交流する活動を設定する。

※ 学習を通じた様々な人々との出会いの中で「12歳のわたしにできること」を実践したことを価値付け、発展させるために、今後を見通した「これからのわたし」を提示する。

第5・6学年梅組 算数科学習指導案

指導者 中 島 卓 哉

題材 ただしく かぞえて はこに つめよう！梅組こうじょう

指導観

- 本学級は、知的障害のある子供5名で編制されている。5名とも、自分に任された仕事に対してやりがいを感じ、責任をもって取り組もうとすることができる。また、難しいことがあると友達に助けを求めたり、友達と一緒に協力して活動しようしたりすることができる。算数科の内容に関する実態差は大きいですが、それぞれがこれまでに長短や大きさを比べる学習、一桁の数の合成・分解や5のまとまりを作って数を読む学習などに取り組んできている。しかし、そのような学びを具体的な場面に応用することはまだ難しい段階である。働くことに強く関心を示している今の時期に、5名が役割をもって働く梅組工場を教材化して、数を数える学習に取り組ませることは、子供の興味・関心に根ざした活動が設定できる上で意義がある。
- 本題材では、お世話になった人に贈るプレゼントを箱詰めするために、形や量を正しく認識したり、数を正しく数えることができるようになることをねらいとしている。具体的には、①プレゼントを箱詰めする梅組工場の活動に最後まで丁寧にに取り組むこと、②正しく箱に詰めるために贈る相手に合わせてプレゼントの種類や数を正しくとらえること、③箱詰めできたことに満足感を味わうことなどである。5・6学年梅組は、3学期の生活単元学習と図画工作科で、お世話になった人にプレゼントを贈る学習に取り組んでいる。プレゼントを相手に応じて箱詰めする作業を本題材で扱う。このように他教科等と関連づけて扱う本題材は、子供に算数科学習への必要感をもたせる上で価値がある。
- 本題材の指導にあたっては、プレゼントを正しく箱詰めするために、形や大きさを正しく認識したり、数を正しく数えたりすることができるようにさせる。そのために、まず、生活単元学習や図画工作科で作ったプレゼントを渡す相手の集団に応じて分けたり箱に詰めたりする必要があることに気付かせることで、形や数をとらえることへの必要感をもたせる。次に、個々の実態に応じた内容を設定して箱に詰めさせるようにする。具体的には、①相手に応じて正しいプレゼントの箱を選んで対応させる、②2種類のプレゼントを2個と3個セットにして5のまとまりを作る、③5のまとまりを集めて、35個や40個でひとまとまりにする、などの内容を設定する。最終的には、箱詰めしたものを事後の生活単元学習でプレゼントすることで、複数の教科等を横断して達成性の高まりへとつなぐ。

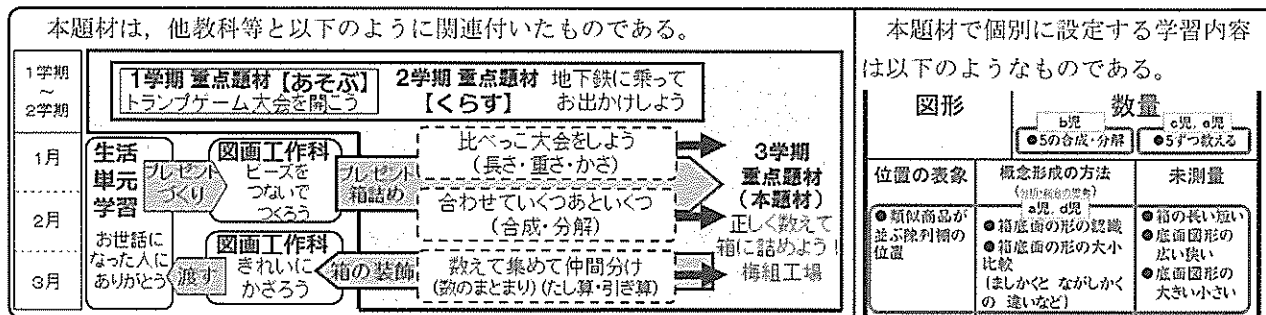
題材の目標

- 正しい数を箱に詰める作業に、最後まで丁寧に取り組むことができる。 (主体性)
- 正しい種類・数で箱詰めするために、形や数を正しくとらえることができる。 (自己発揮性)
- (AG) 正しい形や長さをとらえて選ぶことができる。
- (BG) 2つの集合を合成して5をつくることができる。
- (CG) 5飛びの数え方で40まで数えることができる。
- 数えたり組み合わせたりして箱詰めできたことに満足感を味わうことができる。 (達成性)

題材の計画 (全9時間)

学 習 活 動 と 内 容	
【事前】	
・お世話になった人に感謝の気持ちを伝えるために計画・準備・練習などを行う。生活単元学習⑩	
・プレゼントを作成する。図画工作科②	
1	図画工作科で作成したプレゼントを箱詰めする必要があることを知り、プレゼントを渡す相手の人数を数えたり試しの活動を行ったりする。①
○ 相手に喜んでもらえるよう箱詰めすることに目的意識をもって、本題材の見通しをもつこと	
※ プレゼントを箱詰めする試しの活動の設定	
2	相手に合わせて正しい種類・数で箱詰めする。
(1) ふじ・さくら組やその保護者、中学校4組の友達に渡すプレゼントを箱詰めする。④	
AG	色や長さなどの違いに着目してプレゼントを種類毎に分類すること
BG	4, 5人の相手に合わせて2種類のプレゼントを正しい数で組み合わせること
CG	5のまとまりで数えて15人のプレゼントを箱詰めすること
※ プレゼントを一対一対応させる顔写真の提示	
※ 類別させるための色分けしたプレゼントの準備	
※ まとまりで数えさせるためのプレゼントの提示	
(2) 交流学級の友達に渡すプレゼントをクラス毎に箱詰めする。④ 本時3/4	
AG	色や形・大きさの違いに着目しプレゼントを種類毎に分類すること
BG	5, 6人グループの男女比に応じてプレゼントを正しい数で組み合わせること
CG	5のまとまりで数えて35, 40人のプレゼントを箱詰めすること
※ 同じものの大小や長短を比較させるための支援具	
※ 人数を数字でとらえさせるための人数表の提示	
※ 5飛びの数え方を促すための数え箱の提示	
【事後】	
・正しい種類・数でプレゼントを詰めた箱に、ペンや色画用紙で装飾する。図画工作科②	
・完成したプレゼントを手渡す。生活単元学習②	

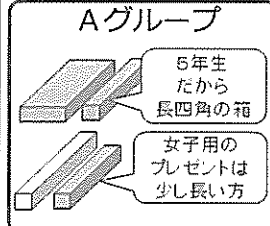
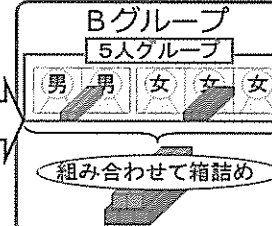
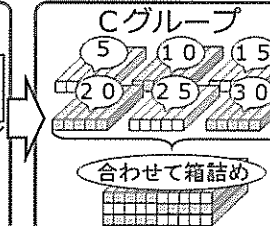
本題材の考え方



本時の目標

- 交流学級の友達へのプレゼントを箱に詰める作業に、最後まで丁寧に取り組むことができる。 (主体性)
- 正しい種類・数で箱に詰めるために、形や数を正しくとらえることができる。 (自己発揮性)
- (Aグループ) 大きさや形の異なるプレゼントを比べる方法について理解することができる。
- (Bグループ) 2と3や3と2, 1と4や4と1を組み合わせて5をつくる方法を理解することができる。
- (Cグループ) 具体物を操作しながら5とびの数え方で数える方法を理解することができる。
- 箱に詰めるために正しく数えたり選んだりできたことに満足感を味わうことができる。 (達成性)

本時の展開 (8/9時)

学 習 活 動 と 内 容			手だて
1 交流学級の友達に渡すプレゼントを箱に詰めるために、試しの箱詰め作業を行い、選んだり数えたりする時に気を付けたいことを発表する。			1 活動への見通しをもたせるための支援
○ 正しく箱詰めするためには、自分がどのような数え方や選び方をする必要があるのかについて確認し意欲をもつこと			※意欲をもたせるための相手写真や人数表などの提示
めあて ただしい ものを えらんだり かぞえたりして 5年生と 6年生のプレゼントを はこに つめよう。			※本時で全てのプレゼントがそろろうことを実感させるための完成した箱の提示
2 5, 6年生の交流学級の友達にプレゼントするために、相手やその人数に合わせて正しいものを正しい数で箱詰めをする。			2 自力で正しい種類・数を箱詰めさせるための支援
(1) 個別に取り組んで5年1, 2組の友達にプレゼントを箱詰めする。			※題材の活動の進行状況を把握させる進捗状況表の提示
Aグループ	Bグループ	Cグループ	※活動2(1)において、個別の学習に取り組ませる場の構造化 ※活動2(2)において、5名全員でレーン作業させる場の設定 ※相手や人数を把握させるために、個別に設定した種類・数を示した表の提示 ※個に応じた支援 (Aグループ) ・大小や形の違いなどを比較させるための支援具 (Bグループ) ・2つの集合を把握させるための色分けした箱の提示 (Cグループ) ・5飛びの数え方を促すための陳列棚や数え箱の提示
○学級やグループに応じたプレゼントを詰めるために箱の大きさや形を比べる方法をつかむこと	○顔写真をもとに2と3, 1と4の数のプレゼントを組み合わせて対応させる方法をつかむこと	○5こずつに積まれたプレゼントのまとまりを5とびの数え方で正しく数える方法をつかむこと	
(2) 全員で一緒に6年1, 2組の友達にプレゼントを箱詰めする。			3 箱詰めが完了したことに満足感を味わわせるための支援
Aグループ	Bグループ	Cグループ	※箱詰めできたプレゼントとともに感想を発表する場の設定
○学級やグループに応じたプレゼントを詰めるために、異なる種類の箱の色・形・大きさを比べる方法をつかむこと	○表に書いてある数字をもとに、2と3や1と4などの数のプレゼントを組み合わせて対応させる方法をつかむこと	○プレゼントを5個ずつのまとまりで積み上げながら5とびの数え方で数えて、正しい数でそろえる方法をつかむこと	
Aグループ 	Bグループ 	Cグループ 	
3 プレゼントを詰めた箱を友達の前で紹介しながら、本時できるようになったことやそのために頑張ったことなどを発表する。			
○ できるようになった選び方や数え方、そのことによってプレゼントを手渡す準備ができたことなどに満足感を味わうこと			

トークセッション I

未来創造型の資質・能力を育成する 授業のポイント

○ 講演者

文部科学省 初等中等教育局 視学官 た 田 むら 村 まなぶ 学 先生

国立教育政策研究所 総括研究官 ふく 福 もと 本 とおる 徹 先生

京都大学大学院教育学研究科 准教授 いし 石 い 井 てる 英 まさ 真 先生

○ 司会

本校 教頭 み 三 うら 浦 けん 研 いち 一

This image shows a full page of white paper with horizontal dashed lines, typical of primary-ruled notebook paper. The lines are evenly spaced and run across the width of the page. There are no margins, text, or other markings on the paper.

2月18日



受付8:30～9:00

●公開授業2 9:00～9:45

領 域	学年学級	題材・単元・主題	授業者
生き方	1年1組	小学校は たのしいよ	鐘江 貴子
	2年1組	ふくらまそう みんなの中のゆめふうせん	野口 順也
社会共創	3年1組	受けつぐ博多の伝とうと未来	藤岡 太郎
表 現	3年2組	音楽からつくりだそう	岡崎 教昭
自然探究	4年1・3組	広げよう ぼく・わたしの創造の世界	古賀 誠・二串 英一
健 康	5年2・3組	つくろう わたしの健康生活	中村 剛
言語文化	6年1組	共に考える ～言葉って何だろう?～	山田 深雪・河野 智文(本学教授)
特別支援生単	1・2年ふじ組	だいすきな 6ねんせいを ばあていいに しょうたいしよう	大櫃 玲子
特別支援体育	5・6年梅組	いろいろあるき いろいろはしりで もりたんけん	藤 康宏

●全体会 10:00～11:00

トークセッションⅡ 11:15～12:00

挨拶	校 長	豊 満 啓司
全体研究発表	研究副部長	平井 源樹 藤岡 太郎
領域研究発表	言語文化部 自然探究部	杉本 克如 古賀 誠
児童発表	Far Away「彼方の光」	5・6年生児童

未来創造型の資質・能力を育成する授業のポイント

講演者	国立教育政策研究所	総括研究官	福本 徹 氏
	本学	教授	大坪 靖直 氏
	本学	准教授	樋口 裕介 氏
司 会	本校	研究部長	二串 英一

昼食 12:00～12:45 児童自由研究発表 体育館にて

●公開授業3 13:00～13:45

領 域	学年学級	題材・単元・主題	授業者
自然探究	1年2組	かぞえて できたよ	曾根崎 達雄
健 康	2年2組	さむさにまけない 元気な毎日大作せん	鞭馬 あゆみ
生き方	3年1組	めざせ 地いきねこサポーター	伊澤 直美
言語文化	4年2組	伝え合おう 言葉のみ力	田中 菜穂子
自然探究	5年1組	実現しよう 飛行プラン	永田 裕二・坂本 憲明(本学教授)
マイタイム	6年2組	10年後の自分と語ろう ～夢～	齋藤 淳
言語文化	帰国子女学級	HAIKUで広がる 言葉の世界	菊竹 一平・杉本 克如
特別支援国語	3・4年さくら組	しん1ねんせいに しょうかいしよう 「ふくおかしょうがつこう」	辻本 拓

●領域別学習指導協議会等 14:00～15:00

領域等	共同研究者	研究協力者	司会者
言語文化	国語教育講座 教授 河野 智文 英語教育講座 教授 中島 亨	福津市立上西郷小学校 校長 光延 正次郎 福岡教育事務所 指導主事 元村 美保	古賀市立青柳小学校 主幹教諭 竹本 学
自然探究	数学教育講座 准教授 今井 一仁 理科教育講座 教授 坂本 憲明	春日市立白水小学校 校長 小森 晃 福岡市立和白東小学校 校長 野口 信介	南筑後教育事務所 指導主事 永尾 健
社会共創	社会科教育講座 教授 小田 泰司	糸島市立南風小学校 校長 高野 誠一	須恵町立須恵第一小学校 主幹教諭 永江 英俊
表 現	美術教育講座 准教授 笹原 浩仁 音楽教育講座 准教授 山中 和佳子	新宮町立新宮東小学校 主幹教諭 刀坂 順子 久山町教育委員会 指導主事 高武 龍彦	福岡市立舞松原小学校 主幹教諭 北田 尚雄
健 康	保健体育講座 准教授 樋口 善之 家政教育講座 教授 貴志 倫子	須恵町立須恵第一小学校 校長 福津 一徳 福岡市立若宮小学校 校長 脇本 孝枝	福岡県教育センター 指導主事 緒方 勝彦
生き方	学校教育講座 准教授 樋口 裕介	朝倉市立立石小学校 校長 山下 浩徳	那珂川町立安徳北小学校 主幹教諭 谷岡 良寛
マイタイム	教育心理学講座 准教授 生田 淳一	糸島市立前原小学校 教頭 高瀬 雄大	
特別支援教育	教職大学院 教授 納富 恵子	福岡教育事務所 指導主事 弘松 英樹	福岡県教育センター 指導主事 堀 亮輔

未来創造講演会

15:15～16:30

次期学習指導要領にみる未来創造型の資質・能力を育成する授業の価値

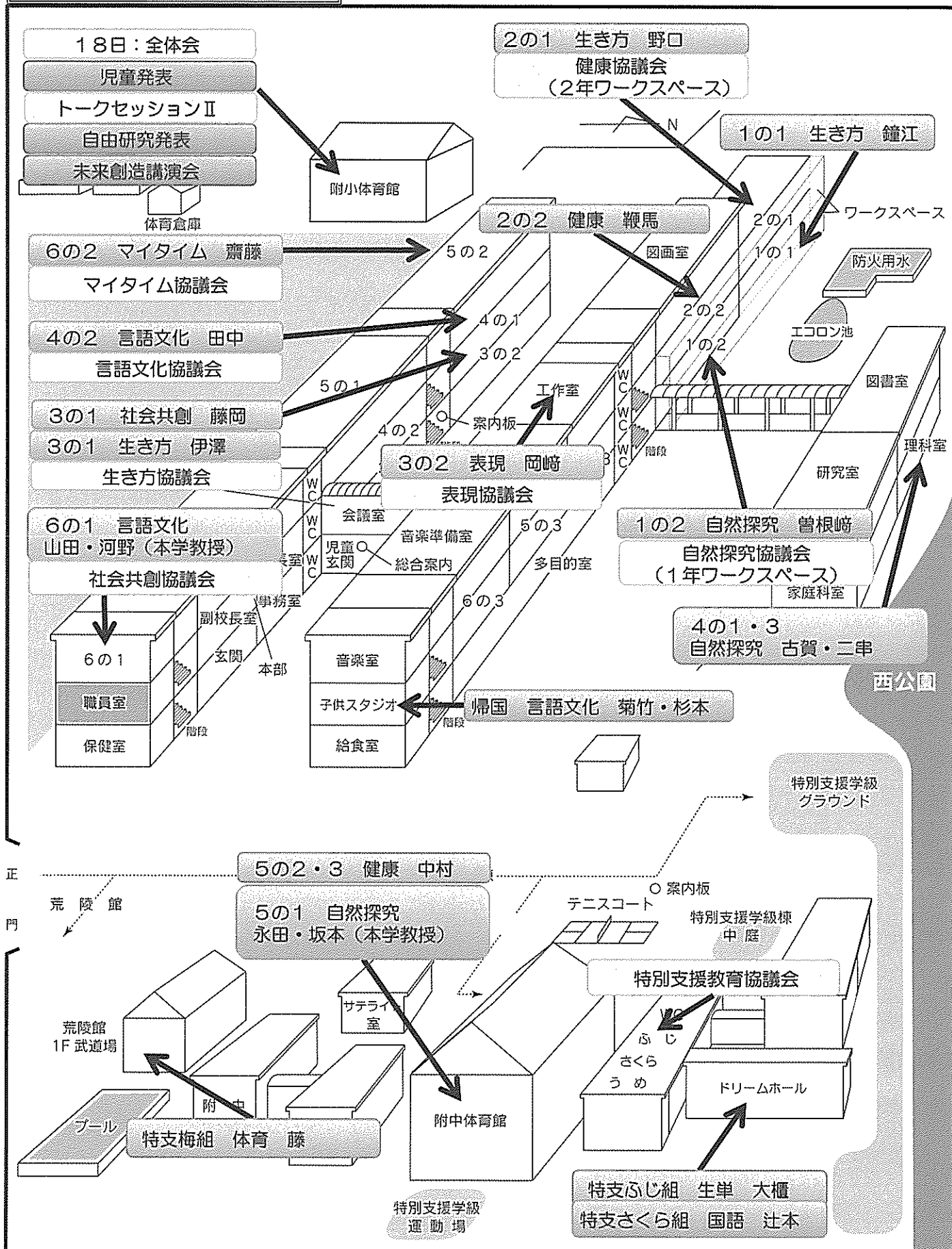
講 師

文部科学省 初等中等教育局 視学官 田村 学 氏

2月18日（土）

授業案内図

第2月



第1学年1組 生き方学習指導案

指導者 鐘 江 貴 子

題材 小学校は たのしいよ（Cくらし）

○ 本題材では、幼稚園児と遊んだり、新1年生に向けて小学校生活の楽しさを伝えたりすることに関心を持ち、友達と協力して実践する。そして、自分自身の成長に気付いたり、支えてくれる人への感謝の気持ちをもったりして、伸ばしたい自分のよさを考えることをねらいとしている。具体的には、①頑張ったことやできるようになったこと、今も努力していることなどについて考えること、②友達の気持ちや考えを聴きながら自分の気持ちも伝えて活動を進めていくこと、③自分の成長に気付く、友達や家族への感謝の気持ちを持ち、なりたい自分の姿を考えることなどである。つまり、本題材において、具体的な活動を通して、自分のよさや支えてくれる人への感謝の気持ちを考えることは、なりたい姿に向かって行動していこうと自分への見方・考え方を広げる上で価値がある。

○ 本学級の子供たちは、毎日の学校生活にも慣れ、当番活動、係活動に積極的に取り組んでいる。また、学校行事「あらつフェスタ」では、園児に対して優しく遊びを教えたり、自分の役割を果たしたりすることができた。一方、周りの様子を見ながら自信なさそうに挙手をする子供や、同級生より、いつも笑顔で応じてくれる6年生との遊びを楽しむ子供もいる。そこで、小学校生活にも慣れ、学級の友達との人間関係もできてきたこの期に本題材を設定する。そして、年長児との遊びや、新1年生に向けて小学校生活の楽しさを伝える活動を通して、自分のよさに気付く、今後の行動について自己への見方・考え方を高めていきたい。

○ 本題材の指導にあたっては、年長児との遊びや新1年生に向けた具体的な活動に関心を持ち、友達と協力して準備をする。そして、自分自身の成長に気付いたり、伸ばしたい自分のよさについて考えをもったりすることができるようにする。そのために、まず、あらつフェスタを想起させ、もう一度、年下の子と楽しく遊びたいという願いをもたせ、年長児との交流会を計画、実践させる。次に、交流会をもとに、新1年生に対して自分にできることや伝えたいことを考え、いくつかの項目から選択して活動できるようにする。また、友達と協力して準備することで、友達の気持ちや考えを聴いて、自分の気持ちを伝えることができるようにする。最後に、来年度入学する新1年生に、楽しかった学校生活を発表することで、自分自身の成長に気付く、どのような2年生になりたいか、伸ばしたい自分のよさを考えることができるようにする。

題材で育成する資質・能力

- 年長児との遊びや新1年生に伝える活動に意欲的に取り組むことで、2年生に向けて自分のよさを伸ばそうとすることができる。（創造性）
- 年長児を楽しませたい、新1年生に楽しみにしてもらいたいという思いや願いの実現に向けて、友達と協力することができる。（協働性）
- ◎ 年長児や新1年生との関わりを通して、自分自身のよさや成長への喜びや、身近な人への感謝の気持ちをもつことができる。（向上性）

題材の計画（全22時間）

学 習 活 動 と 内 容
1 自分より小さい年齢の子供に関心を持ち、いっしょに楽しく遊ぶ計画を立て実践する。 あらつフェスタの時みたい、幼稚園の友達と遊びたいな。 (1) 関わりたい相手やしたいことを話し合い、年長児と2回の交流会を計画し、実践する。 ⑧ ○ 年長児を楽しませたい喜ばせたいという思いや願いをもつこと ※ 思いや願いに沿った自己追究活動と実践の設定 (2) 年長児に対する自分の思いを伝え合う。① ○ できることをしたいという思いをもつこと ※ 交流会をもとにした思いや願いを共有する場 年長さんと仲良くなれて嬉しかったな。 附属小の新1年生にも喜んで欲しいな。
2 新1年生に向けて、何を、どのように伝えるか話し合い、準備をする。 (1) 入学式からこれまでに想起して、一番好きな場所や楽しみな日など表現内容を話し合う。① ○ 自分が楽しかったことや伝えたいことを新1年生に伝えたいという思いをもつこと ※ 思いや願いに沿った試しの活動の場 (2) グループやグループ内のペアで、表現内容や方法を話し合いながら準備する。 ⑨ 本時6/9 ○ 自分の成長や身近な人への思いをもつこと ※ 表現活動を繰り返し位置付けた自己追究活動 新1年生を楽しませたいな、喜ばせたいな。
3 新1年生に向けた発表を行い、自分のよさや2年生に向けた自分の行動について話し合う。 ③ ○ なりたい自分の姿について思いをもつこと ※ 年長児や新1年生との関わりをもとに、自分の姿について振り返り表現する場

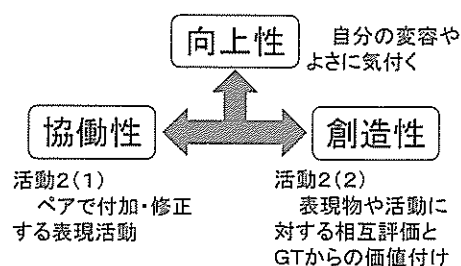
本時に最も重視する資質・能力

☆向上性

「一番楽しい（好き）」と感じた理由や「より楽しいと感じることができた（もっと好きになった）理由」「より楽しむ方法」などについて付加・修正することを通して、友達や自分のよさに気付く姿

- ・ 初めは虫をさわれなかったけれど、友達に教えてもらってさわれたことが嬉しかった。そのことが伝わるようにしよう。
- ・ どのようにしたらバッタを捕まえられるか、実際に捕まえる様子をやって見せたらわかりやすいと思うよ。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（16／22時）

学 習 活 動 と 内 容

- 1 これまで準備してきたことをもとに、新1年生に対する思いが伝わるようになるにはどのようにすればよいか考え、本時活動について話し合う。
- 新1年生が、入学することが楽しくなるようにもっと工夫したいという思いをもつこと

めあて

しん1年生が よろこぶ ように じゅんぴを しよう。

- 2 ペアやグループで話し合いながら、表現物や表現方法を付加・修正し、活動の成果を伝え合う。

(1) ペアやグループで付加・修正する内容や方法について、互いに話し合ったり、幼稚園教諭に相談したりしながら決め、表現活動を行う。

- 新1年生が小学校生活を楽しみに思う気持ちが強くなるには、何を付け加えるとよいか、どのように伝えとよいかを考えて活動すること

発表例：絵地図グループ「好きな場所を紹介しよう」

ぼくが好きな場所は、クローバー畑です。春にはたくさんのクローバーが生えてきます。みんなで、四つ葉のクローバーを探したり、バッタやダンゴムシを探したりして遊びました。とても楽しかったです。ぜひ遊んでください。

(付加)
わたしは、初めは、虫が苦手でした。全くさわることができませんでした。でも、〇〇君に、どうやってつかまえるとよいか教えてもらったら、さわれるようになりました。初めて自分でバッタをつかまえた時は、とても嬉しかったです。一度、チャレンジしてみてくださいね。

- (2) 付加・修正した表現物や動作をペア同士、グループ内で見せ合い、「楽しそうだな、おもしろそうだな、自分も早くやってみたいな」という気持ちになるか、新1年生のことを考えて相互評価する。

- ペアやグループ内で互いの表現物を相互評価して、付加・修正した変化のよさやペア活動のよさ、表現物から気付いた友達のよさについて伝え合うこと

- 3 ペア同士やグループ内での相互評価をもとに、本時学習における自分の活動について自己評価して、自分のよさや次の時間への思いを伝え合う。

- 自分が楽しかったことや伝えなかったことが伝わる表現物や動作になったか自己評価したり、次時への思いや願いをもったりすること

発表内容の例

項目	好きな遊び	好きな給食
内容	おにごっこ ドッジボール	好きなメニュー 服装 当番の仕事
方法	ペープサート 写真 動作化	エプロン 写真 動作化

創造主体を生み出す手だて

※ 本時の活動に向けた思いをもたせるために、幼稚園教諭の思いを聞かせる。

※ 活動内容や方法を選択決定できるようにするために、付加・修正する観点を話し合わせたり提示したりする。

※ 表現物の変容やペア活動のよさ、表現物から友達のよさに気付かせるために、GTの幼稚園教諭から活動中の様子や表現物について称賛や励ましの評価をしてもらう。

※ 次時への思いや願いをもたせるために、自分の活動やペア活動について評価できる自己評価シートを提示する。

第2学年1組 生き方学習指導案

指導者 野 口 順 也

題材 ふくらまそう みんなの中のゆめふうせん（Bみらい）

指導観

- 本題材では、誕生したときから今までの自分の成長に気づき、それを支えてくれている身近な人への感謝の気持ちを表すとともに、なりたい自分に向かって自分のよさを伸ばそうとする態度を養うことをねらいとしている。具体的には、①生まれてから今までに大きく成長していることに気付くこと、②成長の裏には、それを支えてくれたり、励ましてくれたりしている身近な人の存在があることに気づき、感謝の気持ちをもつこと、③3年生でなりたい自分の姿を考え、自分のよさを伸ばしていきたいとの思いや願いをもつことである。2年生の時期は、過去と現在の自分を具体をもとに比較することで成長を実感し、今後の自分について考えることのできる時期である。つまり、本題材において、生まれたときからの自己の成長を扱うことは、今の自分を見つめ、これからどのような自分でありたいか、自分のよさや可能性に気づき、伸ばそうとする自己形成を図る上で価値がある。
- 本学級の子供たちは、1学期には、友達とお互いによいところを見つけ、伝え合う活動を通して、友達とよさを見つけ合う心地よさを実感している。また、2学期には、みんなで力を合わせて、西公園の自然を生かした楽しい遊びを考えて遊ぶ中で、自分の成長をとらえることができた。その一方で、自分のよさについては具体的に友達に伝えたり、とらえたりすることができない姿が見られた。そこで本題材では、自分の成長について家族への取材活動や、取材で初めて知った自分のことを友達に伝える活動を通して、自分の成長とその裏にある身近な人の存在に気づき、感謝の気持ちをもつとともに、自分の可能性やよさをとらえ、伸ばそうとする態度を養っていききたい。
- 本題材の指導にあたっては、今までの自分の成長に気づき、支えてくれている人への感謝の気持ちを表すとともに、なりたい自分に向かって自分のよさを伸ばそうとする態度を養うことができるようにする。そのために、まず、等身大の自分をつくり、入学から2年間の学校の中での成長について調べ、書き込ませる。次に、家族や地域の人への取材活動と家族からの手紙を読む活動を通して、自分たちの成長を支えてくれた人がいることに気付かせる。さらに、支えてくれた人に自分たちの気持ちを伝える方法を考えさせ、実践させる。最後に、今後の自分について考え、どのような3年生になりたいか、伝え合うようにする。

題材で育成する資質・能力

- ◎ 自分も友達も今まで、自分のよさを伸ばして成長してきたことをとらえ、3年生に向けてそのよさを伸ばそうとすることができる。（創造性）
- 友達の気持ちや考えを大事にしながら、自分の考えを伝えることができる。（協働性）
- 家族や友達との関わりを通して、自分自身の成長やよさに気づき、その成長を支える身近な人への感謝の気持ちをもつことができる。（向上性）

題材の計画（全25時間）

学 習 活 動 と 内 容
1 今の自分像をつくり、入学から2年間の自分の成長を調べ、書き込む。 ⑦ ○ 学校の中での成長についてとらえ、学校以外での成長も調べたいという思いをもつこと ※ 等身大の自分を書き写し、その中に入学から2年間の成長を書き込む活動の設定 学校ではないところでは、どのようにかわっているのか調べてみたい。
2 家庭や地域での成長を調べて、今の自分像に書き込み、見つけたぼくのわたしののびのび応援団紹介を行い、どのように成長してきたのか話し合う。 (1) 家庭や地域での自分の成長を調べ、なぜ自分ができたのか話し合う。 ⑥ ○ 自分の成長を伝えたいとの思いをもつこと ※ 家族や地域の方への取材活動の設定 (2) 見つけたぼくのわたしののびのび応援団紹介を行い、自分たちの成長を話し合う。⑤ 本時5/5 ○ 自分たちが考えていた以上に、様々な人たちの支えや励ましがあることに気付くこと ※ 家族と家族以外で関わりある人からの手紙を読んだり、旧担任の言葉を聞いたりする活動の設定 支えてくれていた人に、思いを伝えたい。 (3) 支えてくれている身近な人に感謝の気持ちを伝える方法について話し合い、実践する。 ④ ○ 身近な人に感謝の気持ちを表すこと ※ お世話になった人への手紙を書く活動の設定 これから、もっとできることが多くなるようにがんばっていききたい。
3 成長した自分を振り返り、自分のよさや3年生に向けた自分の姿について話し合う。 ⑧ ○ これから自分がなりたい姿を考えること ※ 題材の振り返りと今後の目標を発表する場の設定

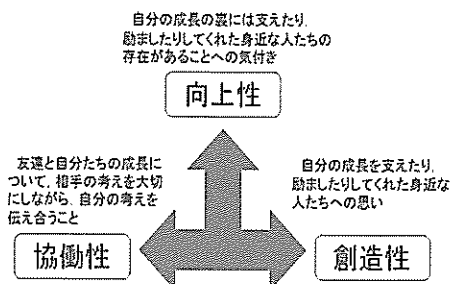
本時に最も重視する資質・能力

☆向上性

自分たちの成長の裏には、自分たちが考えていた以上に身近な人たちの支えや励ましがあり、その成長を喜んでいることに気付くこと

- ・ お父さんやお母さんが、わたしが知らないところでも、いつも大切にしてくれているから、成長することができたんだ。
- ・ いつも声をかけてくれる隣のおじちゃんも、ぼくが大きくなっていることを喜んでくれていたなんて知らなかったよ。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開 (17/25時)

学 習 活 動 と 内 容	創造主体を生み出す手だて
1 代表児童の「見つけたぼくのわたしののびのび応援団紹介」を聞き、自分たちがどのように成長してきているのか考え、本時活動について話し合う。 ○ それぞれの成長には、応援をしてくれている人がいることを振り返り、自分たちが成長してきた「もと」について考えたいという思いをもつことめあて 自分たちのせい長の「もと」とは何なのか、話し合おう。 2 家族からの手紙を読んだり、家族以外の身近な自分たちの成長を見守ってくれている人たちからの言葉を聞いたりして、自分たちが成長することができた「もと」は何なのかについて話し合う。 (1) 家族からの手紙を読み、どうして自分たちが成長することができたのか自分たちの成長の「もと」について話し合う。 ○ 生まれてから今までの自分の成長の裏には、必ず家族の存在があり、支えや励ましがあることに気付くこと (2) 家族以外にも自分たちの成長を支えたり、励ましたりしてくれている人たちがいるのかについて話し合う。 ○ 生まれてから今までの自分の成長の裏には、家族以外の身近な人たちの支えや励ましもあることに気付くこと	※ 課題をつかませるために、代表児童の「見つけたぼくのわたしののびのび応援団紹介」の発表を聞かせた後、書いてもらっている家族からの手紙の一部を紹介する。 ※ 自分たちの成長の裏には、自分たちが考えていた以上に家族の支えや励ましがあったことに気付かせるために、成長への喜びや楽しみとその成長を心配しながらも、見守っていたことについて、家族に書いてもらった手紙を読み、その感想を4人で交流する場を設定する。
自分の成長を支え、励ます身近な人たちの存在への気付き 学校や地域の人々 家族の人々 成長を支え、励ます身近な人たち	※ 家族以外の身近な人たちの支えや励ましもあることに気付かせるために、家族以外に関係の深い人からの手紙を読んだり、前学年の担任からの言葉を聞かせたりして、その人とのつながりについて全体で交流する場を設定する。 ※ 成長の裏にある身近な人たちの支えや励ましへの気付きを確かなものにするために、手紙を読んで感じたことや変わったことを発言させ、その後に学習プリントに書く活動を設定する。
3 成長することができた理由を学習する前と学習した後で、思ったことと考えたことについて話し合う。 ○ 自分がこの学習で思ったことと考えたことについて振り返り、自分たちが、たくさんの人たちに支えられていることに、気付くことができた喜びという、成長の裏にある身近な人々の存在を実感すること	

第3学年1組 社会共創学習指導案

指導者 藤岡太郎

題材 受けつぐ博多の伝とうと未来（C自分と文化）

指導観

- 本題材は、775年の歴史をもち、ユネスコ無形文化遺産にも登録された博多祇園山笠（以下、山笠）に加え、アジアンパーティ等の市政の柱として新たに創造された祭りに関心をもち、地域の文化を保護・創造する意思と態度をもつことをねらいとしている。具体的には、①山笠のいわれや内容、保護・創造する人々の努力や願いをとらえること、②その他、市に残る祭りのいわれや内容と新しく興ったアジアンパーティ等を創造する人々の思いや願いを追究し、福岡市の祭りの特色をとらえること、③「市のまつり図鑑」をつくり、広げる活動を通して、地域の祭りに対する誇りをもち、多文化共生社会の実現への意識を高めることである。本題材は、伝統を重んじる山笠とともに、グローバル化に対応する新しい文化に触れることができるため、地域に対する誇りや愛情、多文化共生社会を創る一員としての自覚を育む上で価値がある。
- 本学級の子供たちは、2学期題材「つくろう！住みやすいまち」の学習において、福岡市に暮らす外国の人々の悩みに共感し、かかわりづくりを通して、住みよいまちづくりには双方向の主体的なかかわりが大切であることの理解を深め、「人権」の視点から、多様な価値観を尊重する意思と態度を身に付けつつある。そこで、グローバル化する地域社会に気付きはじめ、多様な価値観を尊重して、地域の人々と協働して社会を創っていくことが大切であると感じつつあるこの期に本題材を設定する。そして、地域の「祭り」を視点に、それらを保護・創造する人々の努力や願いに共感するかかわりづくりの活動を通して、未来社会を創造する一員としての自覚を養いたい。
- 本題材の指導にあたっては、地域に対する誇りや愛情を土台に、多文化共生社会を創る主体としての意思と態度をもつことができるようにする。まず、導入段階では、山笠の内容やいわれ、保護・創造する人々の努力や願いを追究させる。次に、展開段階では、受け継がれる伝統的な祭りに加え、アジアンパーティ等の新しい催しの内容とともに、それらを創造する人々の努力や願い追究させる。そして、山笠とアジアンパーティの比較から、市の祭りの価値や特色に気付かせる。最後に、終末段階では、市の観光課の求めに応じて、「市のまつり図鑑」をつくり、広げる活動を通して、地域の祭りに対する誇りと愛情をもち、多様な文化と他者と共に生きる社会への参画意識を高めさせる。

題材で育成する資質・能力

- ◎ 地域の祭りの保護・創造に尽くす人々の努力や願いをとらえ、地域の伝統的な祭りや新しい催しの意味や価値を考えることができる。（創造性）
- ◎ 地域の祭りに対する誇りと愛情をもち、地域の発展を願って、地域の多様な人々と共創する必要性に気付くことができる。（協働性）
- 地域の祭りの保護・創造に関する問いを見だし、地域の祭りを保護・創造していくための自分の関わり方を考えることができる。（向上性）

題材の計画（全12時間＋課外）

学 習 活 動 と 内 容	
1	地域の伝統的な祭りや催しりを調べ、学習課題について話し合う。 (1) 世界に認められた山笠の内容やいわれ、それを保護・創造する人々の働きを調べる。 ④ ○ 山笠が博多の発展、人々の連帯などの願いであることや振興会の人々の努力をとらえること ※ 博多祇園山笠振興会への直接取材の場の設定 (2) 福岡市の伝統的な祭りや新しい催しの特色を調べる学習課題について話し合う。 ① ○ 山笠以外にも、年間を通して開催されている地域の祭りのいわれや内容に関心をもつこと ※ 市の催しの年間スケジュールや来場者数の提示
2	地域の伝統的な祭りや催しを調べ、地域の祭りや催しの意味や価値について話し合う。 (1) 地域の伝統的な祭りやアジアンパーティなどの催しのいわれや内容について調べる。 ④ ○ 地域の祭りや催しには、地域の発展や人々のまとまりへの願いがあることをとらえること ※ 興味・関心に応じた課題別追究の場の設定 (2) 山笠とアジアンパーティを比べ、市の祭りや催しの意味や価値について話し合う。 ① 本時 ○ 地域の祭りや催しの価値を伝統文化や多様な価値観の尊重などの価値的側面と観光資源としての経済的側面からとらえること ※ 当事者から、祭りの保護・創造に向けた願いを聞き取る活動の設定
3	「市のまつり図鑑」をつくり、これからの自分と社会との関わりについて話し合う。 ②＋課外 ○ 地域の祭りへの誇りと愛情、多文化共生社会への参画意識をもつこと ※ 観光課の方と市の祭りを発信する場の設定

本時に最も重視する資質・能力

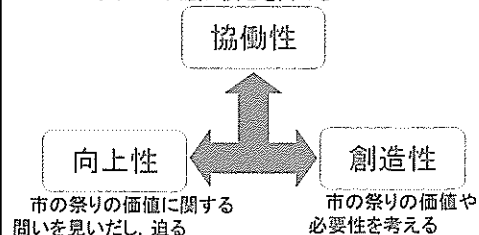
☆創造性

山笠とアジアンパーティを比較し、相違点からそれぞれの祭りの特色を見いだすとともに、それらを保護・創造する人々の共通する思いや願いから、地域の祭りや催しの意味や価値を考える姿

- 山笠のように伝統を守る祭りも、アジアンパーティのように若い人を中心に、様々な国の人と交流する祭りも、市の発展や人とのつながりを願い、これからの福岡をつくる祭りなんだ。

子供が発揮する資質・能力の関係

市の祭りに対する誇りや愛情をもち、祭りへの共創に関心を高める



本時の展開 (10/12時+課外)

学 習 活 動 と 内 容	創造主体を生み出す手だて
1 福岡市の祭りや催しを想起するとともに、最も伝統的な博多祇園山笠と最も新しいアジアンパーティを比べ、それぞれの祭りの意味や価値に迫る本時の追究課題について話し合う。 ○ 博多祇園山笠やアジアンパーティの共通点に迫る問いをもつこと	※ それぞれの祭りの内容を想起させるとともに、博多祇園山笠振興会の豊田会長や市の松尾さんの祭りに対する思いや願いを聞く場を設定することで、それぞれの祭りの共通点や相違点に着眼できるようにする。
めあて 博多祇園山笠とアジアンパーティには、共通していることがあるのかをくらべて考え、話し合おう。 2 山笠とアジアンパーティの特色を出し合い、それらを比較して、市の祭りや催しの意味や価値について話し合う。 (1) 山笠とアジアンパーティのいわれや内容を出し合い、それぞれの祭りに見られる特色について話し合う。 ○ 「いわれや内容」「参加する人」「思いや願い」の視点から比較して、それぞれの祭りに見られる特色をとらえること	※ 両者の特色を「内容」「参加者」「願い」の視点から比較させることで、それぞれの祭りに見られる特色を見いだすことができるようにする。
博多祇園山笠  博多祇園山笠の歴史 7月1日～15日、7つの流れ、追い山 小学生男子:子供組(子供山笠) 中学生男子以上(若者、中年、年寄り) 無病息災、地域の発展 地域の人々のまとまり アジアンパーティ  福岡国際映画祭、福岡アジア文化賞等 9月～10月、福岡・アジアの文化交流 老若男女問わず 福岡、アジアのアーティストなど 国境を越えた人々のつながり 若い人材が活躍する活気のあるまち 伝統 交流 きまり 創造 まとまり つながり 内容 参加者 願い	※ 福岡市の将来的な人口に関する資料や福岡へのアジアからの入国者数に関する資料を提示して読み取らせ、それらの影響を考えさせることで、それぞれの祭りを守ったり、新しく創造したりする意味や価値に気付くことができるようにする。
(2) 山笠とアジアンパーティの特色を比べ、地域の祭りを保護・創造する人々の思いや願いから、共通する意味や価値について話し合う。 ○ 地域の祭りや催しの意味や価値を伝統文化の尊重、国際交流の進展による多様な価値観の尊重や人々のつながりや連帯などの価値的側面と観光資源としての経済的側面からとらえること	※ 山笠の伝統を継承する豊田会長、福岡の未来を拓こうとしている松尾さんから次世代を担う子供たちに対する期待を話していただくことで、地域の一員としての自覚や地域の人々との共創の意識を高めることができるようにする。
博多祇園山笠  地域に人を集める 伝統を守り、つくる 福岡の未来 まとまりやつながり アジアンパーティ  3 豊田会長や松尾さんから、これからの福岡の祭りやまちづくりに対する期待を聞き、市の祭りと自分との関わりについて話し合う。 ○ 地域の祭りに対する誇りや愛情をもち、自分たちが地域の人々とのつながりをつくり、地域の祭りを継承・発展していく関心を高めること	

第3学年2組 表現学習指導案

指導者 岡 崎 教 昭

題材 音楽からつくりだそう（C複合）

指導観

- 本題材では、楽曲を聴いて感じたイメージをもとにして立体作品をつくる活動を通して、様々な表し方でイメージを表すことのよさを感じ取ることをねらいとしている。具体的には、①音色や強弱の変化がわかりやすい「きらきら星変奏曲」を聴いて感じたイメージを造形要素と関連付けて話したり、想像した星空の様子について伝え合ったりすること、②場や材料の特徴を活かして楽曲のイメージを立体作品に表すこと、③互いの立体作品と楽曲の特徴とのつながりを見だし、表し方のよさや面白さを感じ取ることなどである。つまり、本題材において、楽曲の鑑賞から造形表現へと発展させる活動を扱うことは、自己の内面に生じた思いや考えを様々な表し方で表すことのよさを実感することができるという価値がある。
- 本学級の子供たちは、表現の学習において、様々な素材に関わりながら発想を広げ、新たな表し方を見だしながら、活動を連続・発展させ、自己の内面を伸び伸びと表現することができた。「A造形」の学習では、様々な色の毛糸を部屋中に張り巡らせ、色の重なりや形から想像を広げ、思い浮かんだメロディを口ずさみながら歩き回っていた。「B音楽」の学習では、楽曲「ピーターとおおかみ」の鑑賞を通して、楽器の音色や旋律、反復や変化という表現の工夫から物語の世界を想像し、簡単な情景図をかくことができた。このように、造形と音楽の要素を効果的に活かしながら思いを表すことができるこの時期の子供たちに、楽曲を鑑賞し、想像を広げながら、空間を広げた立体表現を行わせることで、素材や要素の組合せが多様になり、さらなる創造性の発揮が期待できると考える。
- 本題材の指導にあたっては、子供が聴いた楽曲から感じたイメージをもとに立体作品をつくり、よさや面白さを感じ取ることができるようにする。そのために、まず、導入段階では、きらきら星変奏曲を聴いて感じたことについて話し合う活動を設定するとともに、音楽を源としたカンディンスキーやパウル・クレーの作品から、音楽と造形のつながりに気付かせる。次に、展開段階では、感じた変奏のイメージをもとにグループをつくり、立体に表す活動を設定し、材料を効果的に使い、光や風、音の要素も取り入れられる場の工夫を行う。最後に、終末段階では、作品のもととなった変奏を聴きながら互いの作品を鑑賞する活動を設定し、よさや面白さを感じ取ることができるようにする。

題材で育成する資質・能力

- ◎ 自分が選んだ変奏の特徴から想像を広げて、感じたイメージをもとにした星空の様子を立体作品に表すことができる。（創造性）
- 互いが考えた表し方のよさや面白さについて伝え合い、それらを組み合わせるなどしてよりよい表し方を見いだすことができる。（協働性）
- 自分が感じたイメージをもとに想像した星空の様子に合う表し方について、選んだ理由を明確にもちながら表そうとしている。（向上性）

題材の計画（全10時間）

学 習 活 動 と 内 容
1 きらきら星変奏曲を鑑賞し、感じたイメージから思い浮かべた星空の様子について話し合う。② ○ 楽曲の構成要素から想像を広げて感じたことを表すことに関心をもつこと ※ 音楽を源とした造形作品と変奏ごとに感じるイメージを視覚化できる鑑賞カードの提示 思いうかんだ星空の様子を、ざいりょうの使い方をくふうして表し、つたえ合おう。
2 表したい変奏を選び、感じたイメージから想像した星空の様子について話し合いながら、材料の使い方や配置などを工夫して表す。 (1) 変奏を選び、気に入っている理由や感じたこと、表し方をカードにまとめ、伝え合う。① ○ 互いのイメージや表し方に関する考えを共有し、協働してつくることへの興味をもつこと ※ 思いや考えを具体的な表し方につなぐための変奏イメージカードの提示と交流の場の設定 (2) グループで表し方について話し合いながら立体作品をつくる。⑥ 本時6/6 ○ 材料や場の特徴を活かしながら、変奏の特徴から感じたことに合う表し方を見いだすこと ※ 材料の使い方についてのヒント資料や表し方を比較するためのハープによる変奏曲の提示
3 もととなった変奏を聴きながら互いの作品を鑑賞し、感じたことを伝え合う。① ○ 変奏の特徴から感じたイメージと作品を構成する要素のつながりを自分なりにとらえること ※ 楽曲と作品のつながりについて、色や形などの要素をもとにして伝える作品紹介カードの提示

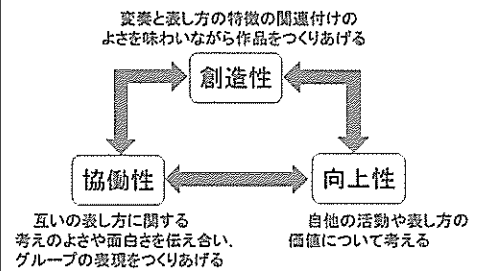
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性

互いのグループが選んだ変奏の特徴と表し方のつながりについて考えながら、よさや面白さを感じ取り、伝え合ったことを活かして、自分のグループの作品をつくることができる。

- ・ 友達のグループの作品は、第8変奏の流れるようなメロディや力強い感じから、流れ星が流れている様子を表していたよ。ぼくたちのグループも、流れ星の表し方を思い付いたよ。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（9／10時）

学 習 活 動 と 内 容	創造主体を生み出す手だて
1 ペアグループ同士で作品を鑑賞し合い、見つけたよさや面白さについて付箋紙に書いて、相手のグループと交換しながら伝え合う。 ○ 自分たちがつくってきた作品の全体や部分を強化したり、もっと工夫ができそうなことに気付いたりすること めあて ペアグループ同士でつたえ合ったことを活かしながら、そうぞうした星空の様子がつたわる作品をつくりあげよう。 2 表し方についてグループで話し合い、作品をつくりあげる。 (1) ペアグループからもらった意見をもとに、どうしたらもっと作品がよくなるか、話し合う。 ○ 自分たちが表したい星空の様子を完成させるために、取り組みたいことを共有し、一人一人がすることを明確にすること	※ 自分たちのグループの表し方について、楽曲から感じたことをもとに付加修正ができるようにするために、「きらきら星変奏曲」のダイジェスト版を聴きながら鑑賞できるようにする。 ※ 自分たちが想像した星空の様子を表すために、楽曲と作品のつながりについて、色や形、光などの要素をもとにして表し方のよさや面白さについて考えさせるアイディアボードを提示する。
ペアグループの作品 強弱の表し方 リズムを見つける 自分たちの作品も、そうぞうした星空の様子がもっと伝わるようにしたいな。	※ よりよい表し方の工夫を見いだしていくことができるようにするために、材料の使い方や組み合わせ方についてのヒント資料を提示する。
(2) グループの作品の全体を見ながら、想像した星空になっているか友達と話し合い、作品をつくりあげる。 ○ 変奏の特徴から想像した星空の様子を表す作品となっているか確かめ、自分たちの表現の価値を高めること 3 星空鑑賞会でみんなに伝えたい自分たちの作品のアピールポイントを伝え合う。 ○ 星空鑑賞会への期待感、つくった作品への肯定感、互いの作品を見合う際の視点をもつこと	※ アピールポイントを具体的に伝えられるようにするために、選んだ変奏の特徴と想像した星空の様子、表し方の工夫について発表させる。

第4学年1・3組 自然探究学習指導案

指導者 古賀 誠・二串 英一

題材 広げよう ぼく・わたしの創造の世界（C数理科学）

指導観

- 本題材では、フローチャートを使って、目的としている動作や場面を考え、プログラムを通して、手続き、繰り返し、場合分けを組み合わせていくことにより、空想の世界を創造することをねらいとしている。具体的には、①自分が考えた動作や場面をつくることができるようにプログラムを組み合わせること、②目的に合ったプログラムを作成する過程で仮説を立てながら実行すること、③試行錯誤しながら、手続き、場合分け、繰り返しなどのプログラミング的思考を向上させることである。つまり、本題材において、プログラムの仕組みを扱うことは、子供の知的好奇心を喚起し、試行錯誤しながら、自分の創造する動作や場面を広げ、考えを創り出すことができるという価値がある。
- 本学級の子供たちは、これまで自然事象における変化とそれに関わる要因とを関係付けることができた。また、未知のものへの探究心を高め、継続的に観察、実験を行うことができた。しかし、仮説をもとに観察や実験をする意味や重要性については理解できていないところがある。つまり、自分の仮説から考察し、結論に導き出すという過程を大切にできていないのである。そこで、プログラミング的思考のように、仮説をもとに、何度も繰り返し観察、実験を行い、課題を解決できるようにする必要がある。ここでは、第4学年「ふしぎだな 自然の中の水（A自然）」での科学の見方や「調べ方と整理の仕方（B数理）」での情報処理などを活用していくことができると考える。
- 本題材の指導にあたっては、目的としている動作や場面を考え、手続き、繰り返し、場合分けを組み合わせしていくことにより、プログラムのつくり方を理解し、創造することができるようにする。TT指導に関しては、アナログやデジタルを行き来することの大切さを役割演技したり、グループに応じた指導に当たったりする。そのために、まず、導入段階では、「プログラムを知りたい」という子供の求めから、九州大学大学院システム情報科学研究所の峯恒憲准教授にプログラムの説明をもらい、プログラムの仕組みについての学習課題をもたせる。次に、展開段階では、グループでどのような動作や場面をつくりたいか考え、試行錯誤しながらプログラムをつくるようにする。最後に、終末段階では、新たな機能を考えたり、九州大学の峯准教授に価値付けをもらったりして、プログラムを考えることのよさに気付かせるようにする。

題材で育成する資質・能力

- ◎ 目的としている動作や場面を考え、逐次処理や順次処理である手続き、繰り返しを組み合わせることで、いくことにより、目的に合ったプログラムをつくることができる。（創造性）
- プログラムを何度も実行したり、フローチャートを利用したりして、そこから考えたことを、グループ内で説明し合ったり、友達の考えに付加修正したりすることができる。（協働性）
- 目的に合ったプログラムの仕組みを調べる中でプログラムの有効性や、追究方法を振り返り、自分の課題がどのように解決できたのかに気付くことができる。（向上性）

題材の計画（全15時間）

学 習 活 動 と 内 容	
1 パズル操作をして、プログラムの基礎について考えたり、九州大学の峯准教授の話の聞いたりして、学習の見通しを話し合う。④	○ パズル操作を通したプログラムの基礎やプログラムの仕方の講話を通して、プログラムの仕組みについての学習の見通しをとらえること
※ パズル操作を通したプログラムの基礎についての学び方や、プログラム内容の講話の設定	
どのようにすれば、思い通りになるプログラムをつくることができるのだろうか。	
2 プログラムの仕組みについて、試行錯誤しながら、作品を創り出す。	(1) 作品の例を見て、作成の手順を話し合う。③
○ 作品製作の立案の仕方を理解すること	
※ 基本的なプログラム例の提示や資料の活用	
(2) プログラムの仕組みを追究する。⑥ 本時4/6	○ プログラムの手続きや繰り返しを理解し、思うように動かす仕組みをとらえること
※ プログラムの手続きや繰り返しの内容提示、九州大学峯准教授の助言の設定	
3 プログラムの新たな機能について追究し、自分たちが考えたプログラムのよさを話し合う。②	○ 新たな機能の場合分けによって、プログラムのさらなる可能性やよさをとらえること
※ 峯先生からの話や自分たちが考えたプログラムのよさを伝え合う交流活動の設定	

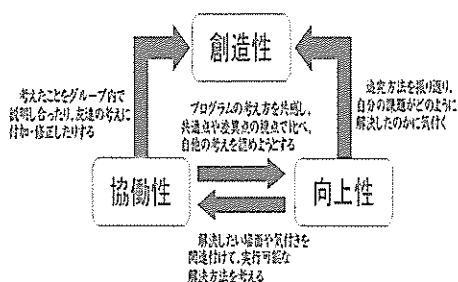
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性

立案した完成予想をもとに、プログラムを組み立て、何度も試行錯誤しながら追究する動きを求め、新たな方策を考えている。

- ・ この制御で繰り返しがなかったから、10回繰り返すにした
ら、ボールを持って、木の周りを回っているようになる。
- ・ 猫がリンゴを取るようにしたいから、動きをさらに変えるよ
うにしたいな。制御の「0.3秒待つ」を入れてみよう。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開 (11/15時)

学 習 活 動 と 内 容

1 目的に近づくために、プログラムの課題解決の見通しを話し合う。

- 今まで検証してきた結果やアドバイスを振り返り、目的としている動きにするための解決の見通しをもつこと

めあて

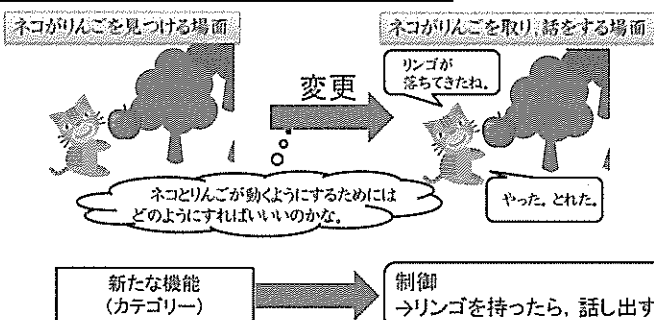
目的としている動きにするために、どのような動きの工夫ができるのか考え、プログラムを組みかえよう。

2 プログラムの内容を確認し、どのようにプログラムを組めば、目的としている動きになるのか話し合い、作品を創作する。

- (1) プログラムの動作確認をしながら、どのように作品が変わるのか試行しその結果を生かして、作品の創作をする。

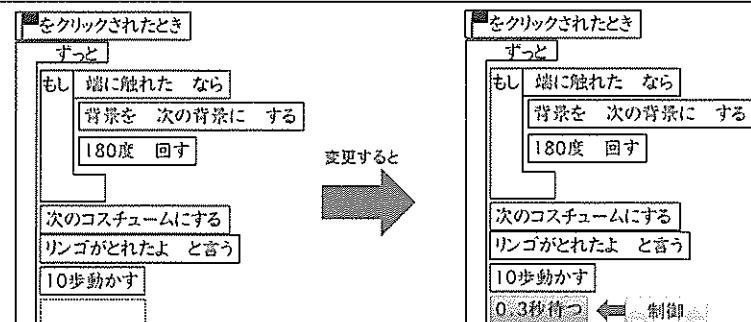
- プログラムの動作確認の仕方を把握し、新たな機能を理解すること

ネコが旅をする物語→ネコがリンゴを見つけ、〇〇する物語



- (2) うまくいったプログラムの組み合わせについて、グループや全体で交流し、うまくいったポイントを話し合う。

- プログラムを組み替えて、うまくいったポイントをとらえること



3 組み替えたプログラムによって、できあがった創作作品を交流し合い、九州大学の峯准教授からアドバイスをもらい、うまくいった作品のよさや今後の見通しを話し合う。

- 組み替えたプログラムによって、動きが変わり、目的としているものへ近づいた達成感や工夫したことよさを実感すること

創造主体を生み出す手だて

※ 課題解決の見通しや、目的としている動きにするための工夫点を考えさせるために、これまで積み重ねてきた動作結果やアドバイスの交流を設定する。

※ 制御の新たな機能を見い出させるために、制御の内容について、TTで役割演技を行い、新たな機能を理解する場を設定する。

※ 目的に近づく作品を創り出させるために、新たな機能を動作と制御の2つに絞り、プログラムを組み替えて、何度も動作確認して、試行できるようにする。

※ うまくいったプログラムのよさや今後の見通しをもたせるために、九州大学の峯准教授から、子供たちのプログラムのよさや価値について助言してもらう場を設定する。

第5学年2・3組 健康学習指導案

指導者 中 村 剛

題材 つくろう わたしの健康生活（A心、B運動生活）

指導観

- 本題材では、より自分らしく生活ができるようにするために、運動を自分のねらいに合うようにつくり変えて、生活へ取り入れることをねらいとしている。具体的には、①心、体、社会的な関係が良好であれば自分らしく前向きに生活できることをとらえること、②自分に合った運動の行い方を知り、運動をつくり変えること、③運動やスポーツをすることの価値をとらえることなどである。つまり、本題材において、自分の生活や目的に合うように運動をつくり変えたり、行う時間やともに行う相手を決めたりすることは、健康な生活と運動の関係をとらえ直すことにつながり、今後主体的に運動を生活の中に取り入れて、生活の質（QOL）を高めていく上で価値がある。
- 本学級の子供たちは、ほぼすべての子供が運動することが好きで、運動する習慣を身に付けることはよりよい成長発達に必要であることを理解している。また、2学期の「元気いっぱいプロジェクト」の学習において休み時間の運動の取り組み方について考え、学校での運動時間は増えてきた。これは、運動をすることは自分の心に多様な楽しさをもたらすことに気づき、実感することができているためであるといえる。しかし、自分の生活に運動をする習慣を取り入れることで、心の状態を整えたり、人間関係を良好に保ったりするという運動の価値に気づき、その価値を求めて生活に取り入れようとするまでには至っていない。そこで、運動の価値について論理的に思考することができるようになるこの期に本題材を設定する。
- 本題材の指導にあたっては、自分自身の健康観をつくり、その健康観に向かって生活の中に運動を取り入れることができるようにする。そのために、まず、健康の価値についてとらえさせる。その際、健康な状態をとらえるさせるために、場面カードを活用し、健康な状態とは、心が前向きや体の状態がよいなどであることをとらえられるようにする。次に、自分の生活や目指す姿に合うように運動の行い方を工夫していく。その際、目指す運動の行い方が同課題の友達と行い方を工夫し、自分に合った健康な生活ができるように運動を生活の中に取り入れていく。最後に、実践を通してとらえた健康な生活と運動することとの関係について話し合う。運動することが生活の質（QOL）を向上させることにどのように関連しているのか、実践から得たことを価値付ける。

題材で育成する資質・能力

- ◎ 運動することが明るく前向きな生活をつくることにつながることをとらえ、自分の生活に合うように運動を工夫することができる。（創造性）
- 同課題の友達と運動の行い方について意見を出し合って運動をつくり変えたり、課題を解決するために友達と解決方法について意見を交流したりすることができる。（協働性）
- 自分が求める運動にするために、運動をする時間や場所、一緒に運動をする人を適切に決めることができる。（向上性）

題材の計画（全9時間）

学 習 活 動 と 内 容	
1 健康な生活について話し合う。 ②	
○ 健康な状態についてとらえ、それに向かうために運動を通して理想の生活を思い描くこと	
※ 健康な状態をとらえるための場面カードの分類と歩数計による自分の運動生活の実態把握	
毎日をもっと健康にすごすために、自分に合った生活をつくろう。	
2 自分の生活に合った運動の行い方をつくる。	
(1) なりたい自分になるための運動の課題を交流し、自己課題を設定する。 ①	
○ 目指す運動の関わり方、行う時間、行う方法 行う相手などの課題をとらえること	
※ 生活をつくるための生活スケジュール表の活用と課題追究のための交流の場の設定	
(2) 自分の課題が解決するように運動の行い方や工夫などをつくり変える。 ⑤	
○ 同じ課題の友達と自分の生活に合うように運動の行い方を工夫したり、運動を異なる課題の友達に紹介したりして、多様な運動の関わり方や運動の価値をとらえること	
※ 基本となる運動の提示と目指す姿になるために運動の行い方を理解するためのG Tとの出会い	
3 実践を通してとらえた成果を話し合う。①本時	
○ 実践を通して見い出した健康な生活と、運動することの価値についてとらえ直すこと	
※ 健康との関連を見い出すため、QOLアンケートの結果を分析するとともに、共に運動を工夫してきたG Tとの交流の設定	

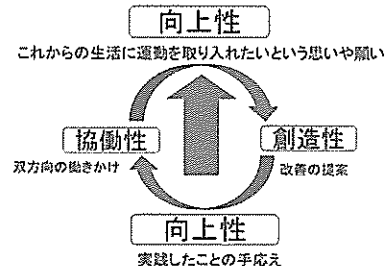
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性

実践を通して感じた運動の価値について交流することで、運動の多様な価値や関わり方(QOL)について考えをつくることができる。

- ・ わたしは、自分に合った運動をつくったり、運動の仕方を工夫したりすることで、家族との会話が増えました。家族との会話が増えて、毎日を元気に過ごすことができるようになりました。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開 (9/9時)

学 習 活 動 と 内 容

創造主体を生み出す手だて

1 これまでの家庭での取り組みを振り返り、運動することによって感じた効果について話し合う。

○ 課題に応じて運動の行い方や行う時間の工夫など、自分が前向きに元気に過ごすことができるために行った運動の効果を意識すること

めあて

健康生活に取り組んで感じたことをもとに、運動の効果について話し合いこれからの健康生活を考えよう。

2 運動の効果について話し合う。

(1) 実践中の毎日の状態を分析し、課題別グループで運動の効果について話し合う。

○ 自分の課題をもとに、自分にとっての心と体と人間関係のつながりをとらえること

(2) 運動の効果について、GTと考えを交流する。

○ 自分が考えた運動の価値についてGTと交流することで、運動の効果への認識を強化したり、ひろげたりしてとらえること

〈予想される子供がとらえる運動の効果〉

＜題材導入時の課題＞
「家族とずっと話をして元気な毎日を送ろう」
【現状】
・ 家族との会話が少ない。
・ 運動をする時間が十分とれない。
・ あまり運動が好きではない。
【もとにした運動】
・ ストレッチ・ウォーキング

＜題材を通した手ごたえ＞
「家族と会話が増え、気分がよい日が増えた」
【効果】
・ 家族との会話が増え、心がすっきりする日が増えた。
・ 毎日ストレッチをすると、疲れもとれる。
・ 健康な生活には、ストレッチが合っている。

【手だて】
・ QOL調査の結果表分析
・ 運動振り返りファイル
・ 保護者の感想 など

【GTからの話】
○ 運動を継続していることは、とてもよいことです。
○ すぐに運動の効果は出ていなくても、手応えを感じながら続けたことがすばらしいです。
○ みなさんが感じた効果は、運動をすることの効果ですね。

3 本題材を通した学びを振り返り、今後の自分の生活と運動との関わり方を話し合う。

○ 自分にとっての運動の効果を価値付けし、明るく前向きに毎日を過ごすために、本題材の学習後や長期的な視野で生活の中に運動を取り入れていきたいという意欲をもつこと

運動で体を鍛えたい子の今後の関わり方例

中学校や高校など
体を鍛えて、スポーツを
どんどんしていきたい。
友達と一緒に活動できる
スポーツをしたい。

社会に出てから
できるだけ階段を
使ったり、歩いたりする。
そうすることで体力が
維持していきたい。

運動で人間関係を築きたい子の今後の関わり方例

中学校や高校など
たくさんの友達と楽しく
運動やスポーツを
続けたい。

社会に出てから
自分の生活に合わせて
運動を続けたい。
家族や友達と一緒に
ウォーキングでも良いので
続けたい。

※ 題材を通した変容に気付く向上性を発揮させるために、QOLの結果をグラフ化したものを提示したり、効果が表れた感想を紹介したりする。

※ 自分にとっての運動の効果をとらえるための向上性を発揮させるために、運動の効果と心と体と人間関係のつながりを操作することができるボードを用意する。

※ 運動の効果についての考えを広げる向上性を発揮させるために、自分が感じた運動の効果が確かなものであるのかどうかをGTと交流する場の設定をする。

※ 自分にとっての運動の価値を強化したり、広げたりする向上性を発揮させるために、学生、社会人などの大きなライフステージでどのように運動と関わっていかたいか記述できる学習プリントを用意する。

第6学年1組 言語文化学習指導案

指導者 山田 深雪・河野 智文（本学教授）

題材 共に考える～言葉って何だろう～（C創生）

指導観

- 本題材では、言語の価値に迫る問いについて話し合うことを通して、考えを深め、よりよい言語生活を創り出そうとする態度を培うことをねらいとしている。具体的には、①言葉の起源・歴史・機能について述べた複数の文章を通して、言語の価値に迫る問いを定めること、②問いに対する考えをグループや学級全体で話し合い、話し合いの内容及び話し合いに向かう態度を振り返り吟味すること、③問いに対する最終的な自分の考えをまとめ、自己の成長を振り返ることなどである。つまり、本題材において、言語の価値に迫る話し合いを積み重ね、自分の言語への見方・考え方を広げたり深めたりすることは、自分の言葉で日常生活をよりよいものにしようとする意識を高める上で価値がある。
- 本学級の子供たちは、2学期題材「この思いを届けよう！感動CM制作所」においては、言葉を受け取る相手の解釈を想定しながら、よりよい言葉と必要な映像を吟味して「今、自分たちが伝えたい『思い』」を訴えるCMを制作してきた。これらを通して子供たちは、言葉一つ一つには意味があるが、その意味が個々のとらえ方によって異なることを実感している。しかし、そのような特徴をもつ言葉と自分自身の関わりについて深く考えたり他者の考えを聞いたりするまでには至っていない。そこで本題材では、言語の価値に迫る問いについてグループや学級全体で話し合うことを通して、言語のよさや弱点を理解した上で言語を駆使してよりよい言語生活を築こうとする意識を高めたい。
- 本題材の指導にあたっては、言語の価値に迫る問いについて話し合うことを通して考えを深め、よりよい言語生活を創り出そうとすることができるようにする。そのために、まず、言語の価値に迫る問いを設定させる。その際、子供が出した多様な問いを板書で整理・分類することで、調べれば済む問いか、人に深く考えさせる問いかを判断し、みんなで探求するに値する問いを定めることができるようにする。次に、設定した問いについて話し合う。その際、1回目の話し合いで自分たちの話し合いの進め方を振り返り、考えを深めるために有効な発言や方途を吟味させることで、次の話し合いを主体的に進めたり深めたりすることができるようにする。最後に、自分の考え及び自分の成長についてまとめる。その際、これまでの話し合いの映像や自己評価を綴ったポートフォリオを用いることで、自分や他者の変容を見いだすことができるようにする。

題材で育成する資質・能力

- ◎ 曖昧または多義的な言葉の意味を明確にしたり考えに至った理由を聞いたり、主張の根拠を求めたりしながら、言語の価値に迫る問いについて思考することができる。（創造性）
- 他者が話すことを認め、他者の話に耳を傾け、他者の発言の意図に気付く、それに対する自分の考えについて、根拠や理由、意図がわかるように伝え合おうとすることができる。（協働性）
- 自分たちの話し合いを振り返り、話し合いの成果と課題を見いだそうとするとともに、これまでの学習経験をもとに言語の価値を実感し、言語を尊重しようとすることができる。（向上性）

題材の計画（全14時間）

学 習 活 動 と 内 容	
1 言葉の起源・歴史・機能について述べた文章を読み、疑問や感想を出し合い、言葉についてみんなで考えたこと（問い）について話し合う。 ⑤	
○ 言語の価値に迫る問いを3つ程に絞り込み、課題解決への見通しをもつこと	
※ 子供が出した多様な問いを整理・分類する板書	
自分たちの生活をよりよくするために、言葉とどのように付き合っていけばよいのだろうか。	
2 言語の価値に迫る問いについて話し合う。	
(1) 1つ目の問いについて全体で話し合い、自分たちの話し合いの内容及進め方を振り返る。 ③	
○ 話し合いの成果を吟味し、問いについて考えを深めるために有効な方途を見いだすこと	
※ 話し合いの参加者と観察者によるメタ・ダイアログ	
(2) 2つ目と3つ目の問いについてグループ・学級で話し合う。 ④ 本時4/4	
○ 意味を明確にするための質問を考えたり、違いや一致点を見いだしたりしながら考えを深め自分たちの話し合いの成果を吟味すること	
※ 質問や発言の分析を促す思考ツール	
3 言語の価値に迫る問いに対する自分の考え及びこの学習で自分が得たことについて書く。 ②	
○ 言語の価値に迫る問いについて自分の考えをまとめるとともに、自己の成長を見いだすこと	
※ 話し合いを深めた質問や意見についての相互評価及びこれまでの学習過程を綴ったポートフォリオ	

本時に最も重視する資質・能力

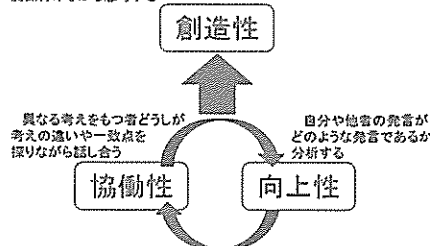
☆創造性

他者が用いた言葉の意味を明確にするための質問を考えたり、違いや一致点を見いだしたりしながら、問いについて考えを深めていく姿

- 言葉は、通じ合わせる役割をもつからこそ、悪い部分も相手に通じて傷つけてしまう。程に、プラスはマイナスにもなり得る「言葉は口に苦し」だ。情報が発信する世の中に生きている自分の耳には、善い言葉も悪い言葉も届く。そのとき、テキストの一文「一番大切なことは、(中略)『果たしてそうだろうか』、『非行少年とは一体何だろうか』という気持ちをもって、この少年に對すること。』がヒントになったと思った。ばくは、言葉とは「事実と意味を照らし合わせて、考えて使うもの」だと思う。

子供が発揮する資質・能力の関係

言語の価値に迫る問いの解決のために、言語の起源・歴史・機能について書かれたテキストと自分の生活・言語文化での学びを関係付けながら思考する



本時の展開 (12/14時)

学 習 活 動 と 内 容

1 各グループの考えを振り返り、本時のめあてについて話し合う。

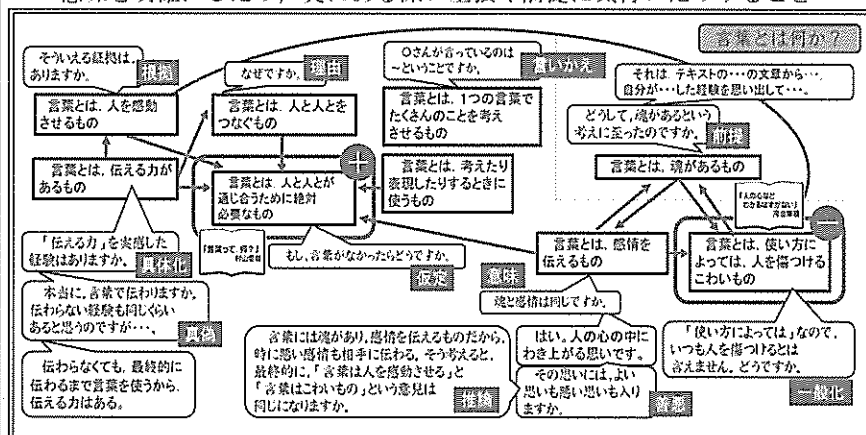
- 前時に各グループから出された考えをもとに見いだした議論の中心について、考えを深めていくことを求めること

めあて

「言葉とは何か」 質問や意見で考えを深めよう。

2 「言葉とは何か」について全体で話し合う。

- (1) 各グループから出された考えに質問したり、質問に答えたりする。
- 考えを支える理由を問うたり、曖昧だったり多義的だったりする部分の意味を明確にしたり、奥にある深い主張や前提に気付いたりすること



(2) 「言葉とは何か」について、互いの意見を関連付けながら話し合う。

- 考えの違いや一致点を見いだしながら、問いを掘り下げていくこと

T: 「言葉は通じ合うために必要」と「言葉は使い方によっては人を傷つける」をプラスとマイナスでとらえている人が多いですね。しかし、同じことを表と裏の両面から言っているわけではありませんか?

C1: この二つが同じこと...表と裏...

C2: テキストP23「言葉って、何?」には「人間の言葉は、いろいろな使い道がある」と書いてあります。「言葉とは、使い方によっては人を傷つける」という考えは、そのいろいろな使い道の一つだと思えます。でも、一方で、テキストに書いてある使い道に「友達と仲良くなる」というものもある。結局、傷つけた友達を直すのもまた、言葉であると考えたらどうかな。

C3: それは、プラスだと思うものの裏にはマイナスがあって、そのマイナスをプラスが補うということですか。

C2: はい。まるで人間の心みたいな...

C4: それが、村山さんの「言葉は『人間そのもの』という考えじゃないかな。

C5: 人間も誰かの短所を誰かが補っている。誰かができないことを誰かがしている。

C6: つまり、人間も言葉も完全ではないところが似ていると思えます。

C7: 話を元に思っています。C3さんの意見についてですが、テキストP23「言葉って、何?」には言葉のプラスの側面しか書かれていない。言葉がマイナスをいつも補うとは限りませんよね。

テキストの「人の心など...」のように、実際に会って初めてレッテルの「言葉」が違っていたとわかる例もあります。

C8: 「人の心など...」のP64の2行目には「少年が素直に話して...」と書いてある。だから、完全にその人の見方を表すには、やはり言葉でやりとりすることが必要だと思う。

T: 「人の心など...」が話題に上がっていますが、みんなはレッテルの「事例3」について考えていますね。しかし、この文章で筆者が一番主張したいことは何でしょうか?

C9: P63の「一番大切なことは...」で「本当にそうか?」という気持ちで相手に接することです。

C8: 意外と言葉って完全ではないような気がする。

T: もう一度改めて問いを考えてみましょう。言葉とは、何でしょうか。

3 「言葉とは何か」について考えをまとめ、河野先生の話聞く。

- 「言葉とは何か」について、話し合いを通して変化したり明確になったりした点を見いだすとともに、全体としての議論の深まり(よい質問が出たか、新しい視点から問いを掘り下げることができたか、新しい気づきを得たか、誰の発言に感動したかなど)について吟味すること

創造主体を生み出す手だて

※ 言葉に対する見方・考え方の類似点や対立点及び根拠となるテキストの叙述に気付くことができるようにするために、前時に与えられた各グループの意見をボードに示し、相互の関連を黒板に可視化する。

※ 話し合いの内容を深めていくことができるようにするために、1回目の話し合いの振り返りで有効だと感じた発言をもとに作成した「話し合いを深める質問例」を準備する。

※ 子供が問いを掘り下げることができるようにするために、子供が別々や逆だと思っていることをまとめて一般性をもつ新たな立場へと収斂する役割(「仮定」の質問をする、少数派の意見を擁護したり多数派の意見に反対したりするなど)を教師が果たす。

※ 自分たちの話し合いの成果を実感することができるようにするために、相互評価で話し合いの質を振り返らせるとともに、言語の専門家である河野先生の考えを聞く場を設定する。

第1・2学年ふじ組 生活単元学習指導案

指導者 大 櫃 玲 子

単元 だいすきな 6ねんせいを ぱあていいに しょうたいしよう

指導観

- 本学級の子供たちは、身近な人に、絵を描いて渡したり、全身を使って動いたりして、自分の思いや考えを自分なりに相手に伝えようとするよさがある。また、手順に見通しがもてればモデルを模倣して活動する子供や、目標が明確であれば工夫しながら活動する子供など、実態は様々であるが、集団の中で自分のできることを発揮しようとするよさもある。これまでに、自分の身の回りのことを自分で行うこと、相手の要望に合わせて対応することを学習してきており、集団の中で役割を意識した活動を積み重ねてきている。これらをふまえて、相手の状況や自分の思いから気持ちを伝える対応をすること、見通しをもって自分の役割を果たすことを身に付けることは価値があると考えます。
- 本単元では、6年生のためにパーティーを計画し、招待することを通して、集団の中で自分の役割を果たすことができるようになること、また、相手に理解してもらえるように自分の気持ちを伝えることができるようになることをねらいとしている。具体的には、① 6年生に感謝の気持ちを伝えるために粘り強く準備を進めること、②自分の役割を理解し、協力して会の準備や進行をすること、③感謝の気持ちを伝えたことに達成感、満足感を味わうことなどである。さらに、気持ちを伝えることを通して、聞いたり話したりすること、身近な材料をもとに造形する楽しさを味わうこと、音楽に合わせて身体表現すること、体を動かすことの楽しさを味わうことなどもねらうことができる。つまり、本単元において、6年生をパーティーに招待することは、自立的な生活に必要な事柄を実践的・総合的に学習することができるという価値がある。
- 本単元の指導にあたっては、自分の役割を理解して集団の中で果たすこと、気持ちを伝える対応をすることができるようにする。そのために、まず、卒業する6年生に感謝の気持ちを伝えるパーティーについて計画させる。その際、自分の気持ちを伝えることだけでなく、相手の好みなどにも応じることができるようにする。次に、パーティーの準備として、プレゼント作り、感謝状作り、音楽パフォーマンスの練習を行う。個人の作業で進める時間、役割を分担して進める時間を設定しながら、役割を自己選択して活動できるようにする。最後に、6年生を招待してパーティーを開き、これまでお世話になったことについて感謝の気持ちを伝えながら、達成感を味わえるようにする。

単元の目標

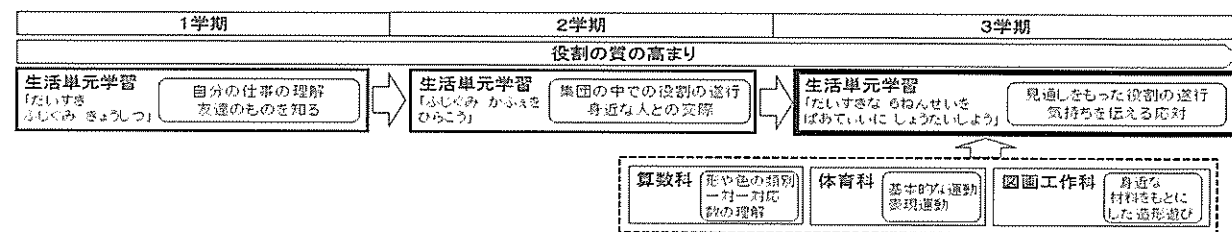
- 6年生をパーティーに招待することに向かって意欲的に準備を進めたり、自分の役割を選択したりすることができる。(主体性)
- 自分のわかることを活かして、思いを表現したり、一連の活動に見通しをもって自分の役割を果たしたりすることができる。(自己発揮性)
- これまでお世話になったことに感謝の気持ちを伝えるパーティーに6年生を招待して、達成感、満足感を味わうことができる。(成就性)

単元の計画(全19時間)

学 習 活 動 と 内 容	
1	6年生が卒業する前に思い出を作りたいと思っていることを動画で知り、計画を立てる。②
	○ パーティーをすることに対する意欲を高め、必要な物や振る舞いについて気付くこと
※ 意欲をもつための6年生からのメッセージ動画	
2	パーティーに向けて準備をする。
	(1) 相手の好みをインタビューして、それに合ったプレゼントを作る。③
AG	少ない作業工程の手順を理解して作ること
BG	材料の配置の仕方を工夫して作ること
※ 作業工程が見てわかる手順表	
※ 色や形で配置の工夫ができるモデルの提示	
	(2) 音楽パフォーマンスをつくる。④
AG	身近な物で楽器を作って出る音を楽しむこと
BG	音楽に合わせて全身で表現すること
※ 異なる音の出る素材の準備	
※ パフォーマンスを構成できる操作ボード	
	(3) 自分の役割を理解し、作業を分担して共同で感謝状を作る。⑥ 本時4/6
AG	身近な材料をちぎって細かくすること
BG	道具を使って作業工程の通りに進めること
※ できあがりが見てわかるモデルの提示	
※ 道具の使い方がわかる動画	
	(4) パーティーの進行を決める。②
	○ パーティーの進行に見通しをもって自分の役割を選択すること
3	6年生を招待して、感謝の気持ちを伝えるためのパーティーを行う。②
	○ 学習してきたことを活かして6年生に感謝の気持ちを伝え、達成感、満足感を味わうこと
※ 6年生の感想を聞く場の設定	

本単元の考え方

本単元は、以下のように、生活単元学習の積み重ねにより役割の質が高まるとともに、教科の学習と関連している単元である。



本時の目標

- 自分にできる役割を選択して、6年生への感謝状作りに進んで粘り強く取り組むことができる。 (主体性)
- 感謝状が完成するまでの一連の活動に見通しをもって、自分の役割を果たすことができる。 (自己発揮性)
- (Aグループ) 6年生の好きな色を選んだり、必要な材料やその量を理解して準備したりすることができる。
- (Bグループ) 活動に見通しをもって必要な道具の準備や整理、友達の活動の引き継ぎをすることができる。
- 6年生の好みに合わせた感謝状作りができたことに、達成感、満足感を味わうことができる。 (成就性)

本時の展開 (13/19時)

学 習 活 動 と 内 容					手だて
1 6年生をパーティーに招待するまでの流れを確認して、本時のめあてについて話し合う。 ○ 6年生に感謝の気持ちを伝えるための感謝状を、自分で作ることに對する意欲を高めること めあて 6ねんせいに ありがとうの きもちが つたわる ような かんしゃじょうを つくろう。					1 本時の活動に向かわせるための支援 ※6年生に感謝の気持ちを伝えるのは「6年生が大好きだから」という単元の目的を振り返ることができるようにするための写真の提示
2 自分でできることを確認しながら、色の付いた紙を作る。 (1) 6年生の好きな色を選んで紙に色を付けたり、そのために自分が何の役割ができるか選択したりして、色の付いた紙を作る。					2 できるようになったことを実感しながら、その力を高めさせるための支援 ※一連の作業における役割を選択し、進度を確認しながら動くことができるボード ※個に応じた支援
A G		B G			
a 児	b 児	c 児	d 児	e 児	
○6年生の好きな色を選んで紙を染めること	○手順に見通しをもって材料を分量通り準備すること	○準備する材料の量を確認して手順通りに進めること	○手順を理解して見通しをもち必要な道具の準備をすること	○作業の全体を見渡して役割を確認し、まとめること	
よさ 同じ大きさがわかる 数を順番に数えられる 形を整えることができる 役割 細かくちぎる ミキサーをかける 型に流し入れる よさ 印で量がわかる 一対一対応ができる 役割 材料を量る 好みから色を選ぶ					
(2) 紙に付ける色の数が増えたり、紙の大きさが増えたりしても、同じように6年生の好きな色を選んで紙に色を付けたり、そのための自分の役割を確認したりして、2色の色が付いた紙を作る。					(a 児) ・色を選ぶためのボード (b 児) ・色を付ける場所がわかる印 (c 児) ・工程と材料がわかる手順表 ・必要な材料の量を確認して準備できる道具に付いた印 (d 児) ・手順と道具を一致させて確認する手順表 ・場の整理の仕方がわかる写真 (e 児) ・工程と役割を確認して、点検できるボード
a 児	b 児	c 児	d 児	e 児	
○6年生の好きな色を2色選び、場所を考えて紙を染めること	○作りたい紙の大きさに合わせて材料を分量通り準備すること	○作りたい紙の大きさに合わせて必要な材料の量を確認して作ること	○手順を理解して見通しをもち場を整理してから必要な道具の準備をすること	○作業の全体を見渡して役割を確認し、点検をしながらまとめること	
3 6年生のことを考えて材料を準備したところや、感謝状の紙を作ったところなどを発表する。 ○ 6年生に感謝の気持ちを伝えるための感謝状を作ったことについて振り返り、達成感、満足感を味わうこと					3 達成感、満足感を感じさせるための支援 ※感謝の言葉を書いた紙を貼って感謝状を完成させる場

第5・6学年梅組 体育科学習指導案

指導者 藤 康 宏

題材 いろいろあるき いろいろはしりで もりたんけん

指導観

- 本学級は、知的障害のある子供5名で編制している。子供たちは運動に対して意欲的であり、活動に対する安心感や活動に対する見通しをもつことができれば、生き生きと活動することができる。これまでに子供たちは今できる動きを繰り返しながら場が難しくなっても繰り返していくことで新たな動きを獲得してきている。その中でAグループ(AG)は「場に慣れることで安心感をもつと、活動を繰り返して没頭する」ことができた。Bグループ(BG)は「活動の見通しをもつことで落ち着いて学習する」ことができた。Cグループ(CG)は、「活動に対する興味をもつことで、生き生きと活動に取り組む」ことができた。そこで主体的に運動に取り組み、身体機能の発達が盛んなこの時期に、動きを継続させることをねらう学習は、子供の心身の成長をはぐくむ上で価値がある。
- 本題材では、森探検を通して様々な運動遊びを行い、運動の楽しさを味わうことをねらいとしている。具体的な活動内容は、①運動遊びを何度も繰り返し行うこと、②身体の動きを調節し、ものを使ったりバランスをとったりしながら移動すること、③いろいろな運動遊びに対する満足感を味わうことなどである。森探検では、「わくわく」させながら活動に取り組ませることができ、個に応じた運動課題や場を設定することが可能である。技能を習熟させたり、動作の工夫や修正を行ったりしながら、運動する楽しさを味わうことができる上で価値があるといえる。
- 本題材の指導にあたっては、教師が設定する森ランドをふじ・さくら組の友達と一緒に遊びながら探検を楽しむことを目的としてもたせる。そこで、「知る」段階では、メッセージ動画や遊びの目的を用意し、活動に対する意欲を高める。「試す」段階では、活動を体験した後に、個の実態に合わせて運動遊びを複線化させる。具体的には、(AG)新たな環境に不安を感じる子供は反復中心のブロック型、(BG)見通しがもてないと不安な子供は規則的に体験するシリアル型、(CG)活動に飽きやすい子供にはランダム型などの内容を設定する。また、活動に際してはそれぞれの好む学び方に応じて、個別の支援を行っていく。「味わう」段階では、実際にふじ・さくら組の友達を招いて一緒に遊ぶようにする。また、必要な動きができたことに対する満足感や最後まで動きを継続させることができた達成感を味わわせる。

題材の目標

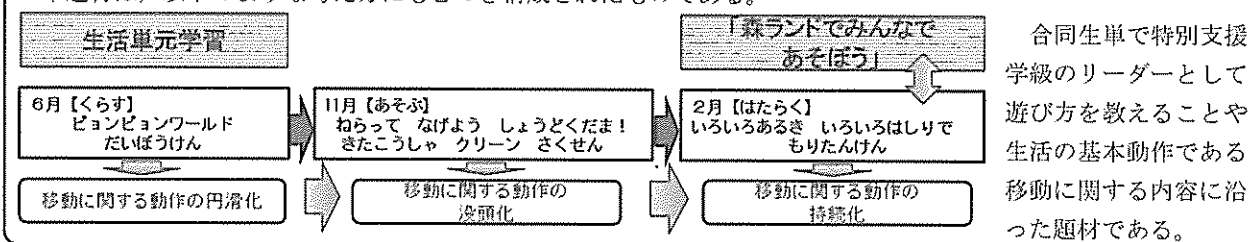
- ふじ・さくら組の友達と一緒に遊ぶために、何度も運動遊びを行うことができる。(主体性)
- ものをつかったりバランスをとった移動の仕方や場に応じた走り方をつかみ、身に付けることができる。(自己発揮性)
- (AG) バランスをとりながら移動することを楽しむことができる。
- (BG) 跳んだり走ったりする運動を楽しむことができる。
- (CG) 場の変化を楽しみ、様々な運動遊びを楽しむことができる
- 仲良く遊ぶことができた満足感や粘り強く活動することができた達成感を味わうことができる。(成就性)

題材の計画(全7時間)

学 習 活 動 と 内 容	
【事前】ふじ・さくら組の友達と一緒に森ランドで一緒に仲良く遊ぶ。——— 合同生活単元学習②	
1 森ランドでふじ・さくら組の友達と一緒に遊ぶための活動について話し合う。 ①	○ 学習の目的をつかみ、見通しをもつこと ※ 遊ぶ意欲を引き出すメッセージ動画の準備
2 いろいろな移動の仕方を体験しながら森ランドにあるコースを進む。	
(1) 森ランドを探検して遊ぶ。 ②	○ 全ての場における遊び方を理解すること ※ 自己評価機能のある教具の準備 ※ 活動の手順を示す資料の視覚化 ※ 動作を言語化したオノマトベによる助言
(2) 遊びの達人を目指して、森ランドにある自分のコースに繰り返し挑戦する。 ③ 本時3/3	
AG	バランスをとって移動する動きを楽しむこと
BG	勢いよく動動することを楽しむこと
CG	場の変化を楽しみ、動作を変換することを楽しむこと
※ 動きを焦点化させる補助教具の準備 ※ 状況に合わせて動きを引き出す視覚的資料の準備 ※ 難易度を変化させることのできる教具の準備	
3 森ランドで梅組の友達と一緒に、自分のコースの遊び方を教えながら一緒に遊ぶ。 ①	○ 何度も繰り返しコースを進むことができたことに対する満足感を味わうこと ※ これまでの学習を想起させるためのコースで遊んだ場や遊び方をまとめたボードの提示
【事後】ふじ・さくら組の友達に森ランドで遊びを教えながら一緒に仲良く遊ぶ。合同生活単元学習②	

本題材の考え方

本題材は、以下のような考え方にもとづき構成されたものである。



本時の目標

- あそびの達人を目指して、粘り強くコースに挑戦することができる。 (主体性)
- 道具を使ったりバランスをとったりして歩いたり、いろいろな走りを楽しむことができる。 (自己発揮性)
- (AG) 傾斜や障害物が置いてある一本橋をバランスをとりながら歩いて渡ることを楽しむことができる。
- (BG) かけ足で走ったり、跳ねたりする運動遊びを楽しむことができる。
- (CG) ものを使ったり走ったりするなど、様々な運動遊びを行うことを楽しむことができる。
- 前時よりも難しくなったコースを回れた回数が増えたことに対する達成感を味わうことができる。 (成感性)

本時の展開 (6/7時)

学 習 活 動 と 内 容			手だて
1 本時の森探検に必要な動きを確認し、活動の仕方を話し合う。 ○ これまでの活動を振り返り、各コースでの活動の見通しをもつこと めあて あそびの たつじんを めざして なんども たんけんコースを すすもう。			1 活動の見通しをもたせて、目標設定をさせるための支援 ※活動に目的意識をもたせるためのメッセージボードの準備
2 自分の担当する動きにあたる活動をコースに沿って繰り返し行う。 (1) いろいろ歩きやいろいろ走りをして、探検コースを進む。			2 見通しに沿ってコースを進めていくための支援 ※個に応じた支援
AG (バランスコース)	BG (スピードコース)	CG (道具コース)	(Aグループ)
○傾斜や障害物がある一本橋を、バランスをとりながら歩く動作をつかむこと (ブロック型) (一本橋の繰り返し)	○横跳びや段差の上り下り、障害物を走り越す運動を勢いよく行う動作をつかむこと (シリアル型) (横跳び→ありかわし→段差のぼり)	○用具を操作しバランスをとり、走り越す運動を行うことを楽しむこと (ランダム型) (全部の活動を順不同で)	・高さの高低差を感じさせないための幅の広い場の設定
AG バランスコース ブロック型	BG スピードコース シリアル型	CG 道具コース ランダム型	(Bグループ)
			・視線と動作を結ぶための視覚的支援具の準備
(2) 遊びの達人を目指して、探検コースに挑戦する。			・教師による動作補助
AG (バランスコース)	BG (スピードコース)	CG (道具コース)	・個別で難易度を設定できる教具の準備
○傾斜や障害物がある一本橋を、バランスをとりながら歩く動作を身に付けること (ブロック型) (一本橋の繰り返し)	○横跳びや段差の上り下り、障害物を走り越す運動を勢いよく行う動作を身に付けること (シリアル型) (横跳び→ありかわし→段差のぼり)	○用具を操作しバランスをとり、走り越す運動を難易度を上げて行うことを楽しむこと (ランダム型) (全部の活動を順不同で)	(Cグループ)
			・無作為に次の活動を決めるための活動カードの準備
3 本時の探検を終えて、自分の頑張りをもみんなに紹介し発表する。 ○ 最後まで自分の力でコースを進むことができたことや、学習を通してできるようになったことに対する達成感を味わうこと			※活動の見通しをもたせるためのスタートとゴールの明確化 ※本時の活動の手順をつかませるための、手順表の活用 ※活動に参加させるための、個の実態や障害特性に合わせた教具や支援具の準備 ※自分の進むコースを理解させるために、それぞれの場に個人ボードを設置 ※活動の促進を促す助言
			3 活動に満足感をもたせるための支援 ※活動を想起させる資料の提示

トークセッションⅡ

未来創造型の資質・能力を育成する 授業のポイント

○ 講演者

国立教育政策研究所 総括研究官 福もと 徹 先生

本学 教育心理学講座 教授 大坪 靖直 先生

本学 学校教育講座 准教授 樋口 裕介 先生

○ 司会

本校 研究部長 二串 英一

MEMO

第1学年2組 自然探究学習指導案

指導者 曾根崎 達 雄

題材 かぞえて できたよ (B数理)

指導観

- 本題材では、ペットボトルキャップの数を数えたり、パネルを並べたりするなどのペットボトルキャップを使って壁飾りを作る活動を通して、数の意味について理解し、数を用いることができるようにすることをねらいとしている。具体的には、①個数や順番を正しく数えたり表したりすること、②数の大小や順序を考えることによって数の系列をつくること、③2位数の表し方について理解すること、④簡単な場合について、3位数の表し方を知ること、⑤数を十を単位としてみることなどである。本題材において、学級全員で1つの壁飾りを作るという活動を位置付けることは、知的好奇心を発揮させ、主体的な学びを通して数の意味を理解させる上で価値がある。
- 本学級の子供たちは、1学期の題材「かずと ともだち」「20までの かず」の学習において、具体物と数図ブロックとを対応させながら、ものの個数を比べる活動を行ってきた。ここでは、個数を正しく数えたり、数えたものの個数を数字で表したりする活動を通して、数の大小や順序について知り、20までの数の概念の理解をしてきている。また、20までの数を2ずつや5ずつ、10と幾つという数え方で、簡単に数える方法をとらえてきている。そこで、数を10のかたまりと幾つに目を向けつつあるこの期に、本題材を設定する。そして、ペットボトルキャップを使って、学級の壁飾りを作る学習を通して、十進位取り記数法の原理についての基礎的な理解を図ることができるようにしていきたい。
- 本題材の指導にあたっては、100よりも少し大きい数を数えたり、表したりすることができるようにする。そのために、まず、導入段階では、試しの活動として、ペットボトルキャップを使った壁飾り作りを位置付ける。ここでは、みんなで協力して、数を間違えないように数えて、壁飾りを作るという目的意識をもつことができるようにする。次に、展開段階では、ペットボトルキャップの数を、簡単に、正確に数える方法を話し合ったり、作ったパネルを順番に並べたりする活動をすることで、十進位取り記数法の原理についての基礎的な理解を図ることができるようにする。最後に、終末段階では、数の数え方や数の系列などを振り返ったり、完成した壁飾りのペットボトルキャップの数を数えたりすることで、100を超える数の数え方や数の系列などを理解することができるようにする。

題材で育成する資質・能力

- ◎ 壁飾りのモデルを見て、試行錯誤しながらペットボトルキャップの数を数えてパネルに付けたり、番号順にパネルを並べたりして、数の意味をとらえ、数を用いることができる。(創造性)
- グループで協力して、ペットボトルキャップの数を確かめながらパネルを作ったり、他のグループと協力して、パネルがつながるように順番に並べて、壁飾りを作ったりすることができる。(協働性)
- ペットボトルキャップを使った壁飾りを作るために、自分の問題解決過程や考えを振り返り、数の数え方や数の系列、大小の比べ方を見直すことができる。(向上性)

題材の計画 (全10時間)

学 習 活 動 と 内 容	
1	ペットボトルキャップを使った壁飾りを作る活動から、題材の学習課題を話し合う。② ○ ペットボトルキャップを使った壁飾りを作る活動を通して、課題意識をもつこと ※ モデル図をもとに試行錯誤しながら壁飾りを作らせる試しの活動の設定
モデルの絵のドットの数とキャップの数を間違えないように壁飾りを作ろう。	
2	間違えずに数を数える方法について話し合いながら、壁飾りを完成させる。 (1) ペットボトルキャップを間違えずに数える方法について話し合い、壁飾りを作る。③ 本時/3 ○ 100よりも小さい数の仕組みをとらえること ※ たくさんのペットボトルキャップの中から必要な数を数えて取り出す場の設定 (2) パネルを組み合わせさせて飾りを完成させる。④ ○ 100よりも小さい数の、大小比較や数の系列をとらえること ※ 番号の順番に並べていくことで飾りが完成するパネルの仕組み
3	壁飾り作りで学んだ数の意味について振り返り100よりも大きい数の仕組みを話し合う。① ○ 100よりも大きい数の仕組みをとらえること ※ 壁飾り作りで数えた数と完成した飾りの100を超えたペットボトルキャップの数の比較

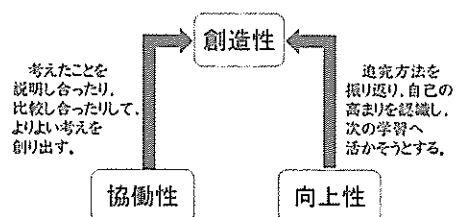
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性

ペットボトルキャップの数を、簡単に、正確に数える方法を考えたり、2位数の仕組みを考えたりしている。

- ・ 10ずつのまとまりをつくと簡単に数えられるよ。10が8つあるから80で、あと9つあるから合わせて89になるよ。
- ・ 10が8個と1が9個あるから、89と書くと思うよ。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開（3／10時）

学 習 活 動 と 内 容	創造主体を生み出す手だて
1 試しの活動のビデオを見て、本時のめあてについて話し合う。 ○ 飾り作りでペットボトルキャップの数を正しく数えることができず困っていたことに気づき、正しく数える方法を考えたいという思いをもつこと めあて たくさんの キャップを かんたんに ただしく かぞえる ほうほうを みつけよう。 2 たくさんのペットボトルキャップの数え方について話し合う。 (1) ペアごとに決められたペットボトルキャップの数を、できるだけ簡単に正確に数える方法を話し合う。 ○ 10のまとまりをつくって数えることのよさを実感し、100までの数の数え方をとらえること	※ ペットボトルキャップの数を簡単に正しく数える方法を考える必要性を感じさせるために、前時の試しの活動で困っている様子を視聴させる。 ※ 子供たちにずれを起こさせ、数を確かめたいと感じさせるために、グループごとに数える数を変えたり、10のまとまりが間違えていないかを確かめることができる、1列が10個のパネルを用意したりしておく。
(2) 100までの数の仕組みについて話し合う。 ○ 十の位、一の位について理解し、2位数は10の幾つ分と1が幾つで表されていることをとらえること	※ 2位数は10のまとまりの個数と端数という数え方をもとにして構成されていることに気付かせるために、ペットボトルキャップの数を数えた活動と、その数を数字で書き表したものの比較を通して、共通点を見つける活動を位置付ける。
3 本時見つけた数の仕組みを振り返り、壁飾り作りにどのように活かせるのか話し合う。 ○ 10のまとまりをつくって数えると、正しくペットボトルキャップの数を数えることができ、飾り作りに活かすことができることをとらえること	※ 次の学習の見通しをもたせるために、本時学習でわかったことが壁飾り作りにどのように活かせるか考える場を設定する。

第2学年2組 健康学習指導案

指導者 鞭馬 あゆみ

題材 さむさにまけない 元気な毎日大作せん (A心 B運動生活 C食生活 D生活環境)

指導観

- 本題材では、自分の健康に関心をもち、様々な実験を通して寒い冬を元気に過ごすための方法を調べたり、実際にやってみてそのよさを実感したりしてこれから自分にできることを積極的に生活に取り入れていこうとすることをねらいとしている。具体的には、①ウイルスを体内に取り入れないようにするためには、石けんを用いた丁寧な手洗いをすることが大切なこと、②室内の換気をしたり、乾燥を防ぎ湿度を保ったりすることも風邪の予防につながる、③日常的に適度な運動をしたり、バランスのよい食事をしたりすることは風邪を予防するために大切なことなどである。本題材において、自分の健康に関心をもち、健康に生活するために自分たちにできることについて扱うことは、自分の健康をマネジメントしようとする態度を育てる上で価値がある。
- 本学級の子供たちは、2学期題材「ぼくのわたしのエネルギー」の学習において、好き嫌いをせずに食べることは、自分の健康のためにはとても大切なことであることを理解している。そこで、自分の健康は自分でつくっていくものであるということに気付くこと、この期に、本題材を設定する。そして、寒い冬でも元気に生活するためには、食べ物だけでなく、自分の身体を清潔にしたり、環境を整えたりすることが大切であることに気付かせるこの学習を通して、健康に生活するために自分たちでもできることに取り組んでいきたいという意識を高めていきたい。
- 本題材の指導にあたっては、さまざまな実験や体験を通して、元気に生活するためのよりよい方法を見つけることができるようにする。そのために、まず、自分の今の生活を振り返る。そして、養護教諭から冬には欠席が多くなるという現状を話してもらうことで、冬を元気に生活するためにはどうしたらよいのかを自分たちで考えたいという課題をもつことができるようにする。次に、正しい手洗い・うがいや換気の仕方、適度な運動の取り入れ方、体を冷やさない食べ物などを、実験や体験を通して調べさせ、よりよい方法がわかるようにする。そして、わかったことをもとに、自分で取り組みたいことを考える。最後に、自分の元気に生活するための取組を振り返り、グループで成果と課題の報告会を行う。友達との取組の成果を知ること、よりよい生活行動を取り入れ、継続していくことができるようにする。

題材で育成する資質・能力

- ◎ 寒い冬も元気に生活するために大切なことや自分でできることがわかり、自分の課題を解決するために、自分に合った方法を選んで実践することができる。 (創造性)
- 友達と話し合いながら、課題を解決するためにこれから続けていく方法や継続するためのよい方法を決めることができる。 (協働性)
- 今の自分の生活を振り返り、寒い冬でも元気に生活していくために自分にできることを進んで取り組んでいこうという意欲をもつことができる。 (向上性)

題材の計画 (全12時間)

学 習 活 動 と 内 容	
1	昨年度の学級の欠席数と理由を見て、これから元気に過ごすための方法を話し合う。 ② ○ これからの時期、風邪やインフルエンザによる欠席が増えることに気付くこと ※ 風邪などの症状が起こる原因の提示 寒い冬も元気に生活するために、自分でできることを見つけて、やってみよう。
2	元気に生活するために大切な手洗い・うがい、食事、運動、窓開けについて詳しく調べ、自分でできることを実践する。 (1) 正しい手洗い・うがい、元気になる食事や体を冷やさない食べ物、運動するよさ、早く空気を入れ換える窓開けについて詳しく調べる。⑥ ○ 元気に生活するために必要なことが自分でできることに気付くこと ※ 実感を伴った理解ができるための実験 (2) 元気に生活するために取り組みたい行動目標を決め、生活の中で実践する。 ②+課外 ○ 元気に生活していくために自分にできることを続けようという意欲をもつこと ※ 取組の成果を視覚化する「元気グラフ」の作成
3	これまでの取組の成果を発表し、これからの活動について話し合う。 ② 本時2/2 ○ 自分の生活行動を振り返り、よい行動を継続していくための方法に気付くこと ※ 各自の成果を視覚的に理解できるための「できたよ」カードの作成と提示

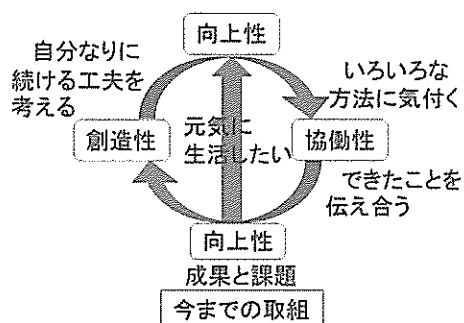
本時に最も重視する資質・能力

☆向上性

友達の「できたよカード」の取組を参考にしながら、今までの取組では十分ではなかったところを見直し、これから自分でどのように取り組んでいくのかを考えている姿

- ・ 寒い日は外に出て遊ぶことがあまりできていなかったな。友達がやっていたように、最初に体を温めるためにたくさん動けるおにごっこをして、その後にドッジボールや縄跳びをするようにしたら、寒い日でも外で遊べそうだな。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開 (12/12時)

学 習 活 動 と 内 容	創造主体を生み出す手だて
1 これまでの学級全体での成果を振り返り、寒い冬でも元気に生活するために自分に取り組んだことを話し合う。 ○ それぞれが元気に生活するために取り組んだことには違いがあることに気づき、自分とは違う方法について関心をもつこと めあて 自分でできたことをはっぴょうして、これからも元気な生活をつづける方ほうを考えよう。	※ 学級全体が元気に過ごすことができた成果を視覚的に理解できるための、これまでに学級でつくってきた「元気グラフ」を提示する。
2 これまでの取組の成果を書いた「できたよカード」をもとに、グループでそれぞれの取組を発表し、自分の生活行動を見直す。 (1) 前時に作成した「できたよカード」をもとに、3人のグループでそれぞれの今までの取組の成果を発表する。 ○ それぞれの手洗い・うがい、食事、運動、換気への取り組み方や成果を聞き合うことで、自分とは違う取り組み方があることに気付くとともに、課題に対してよい方法を見つけようとする	※ 自分の取組のよさを実感するとともに、新たな考えに気付くための、3人のグループでの成果と課題を発表する場を設定する。
	※ これからどのように取り組むか考えることができるように、いつ、どこで、どのようにという具体的な視点を提示する。 ※ 自分が活動を続けていくことの価値に気付かせることができるように、活動に対しての保護者からのコメントを紹介する。
(2) 友達の「できたよカード」の取組をもとに、寒くても元気に生活するためにこれからどのように行動するのか話し合う。 ○ 今までは十分にできていなかったことが、これからはできるようにするための新たなよい方法について、友達の「できたよカード」を参考にしながら考えること 3 新たに決めたこれから取り組んでいきたい活動を発表し、これからみんなが元気に生活するために大切なことを話し合う。 ○ 自分が元気にすごすために生活の中で実践することが、周囲の家族の元気な生活にもつながっていることがわかり、これからも続けていくことの価値に気付くこと	

第3学年1組 生き方学習指導案

指導者 伊 澤 直 美

題材 めざせ 地いきねこサポーター（Aいのち）

指導観

- 本題材では、地域の野良猫を増やさない活動をしている方の生き方に関心をもち、動物の生命を大切にするために自分たちができることを実践していこうとする態度を養うことをねらいとしている。具体的には、①野良猫の生命を守るために、猫を増やさない地域活動をしている人がいることに気付くこと、②動物の生命も大切にしていこうと感じ取ること、③動物の生命を大切にするために、自分たちにできる活動を実践しようとするなどである。そこで、本題材では地域ねこ活動をしている方から話を聞いたり、一緒に活動したりする場を設定する。本題材において、動物の生命を大切にするために自分たちで考えたことに取り組む活動を扱うことは、理想とする自分をイメージし、猫の生命を守るためにできることをしようと努力する自己形成をする力を育てる上で価値がある。
- 本学級の子供たちは、1学期に自分の成長に関わる人たちへ関心をもち、自分の成長には、多くの人が関わっていることに気付き、感謝の気持ちを表現してきた。また、2学期には地域の高齢者のための交流の場づくりに貢献している方や、そこに参加する人々との交流を行った。そして、自分たちにできる関わり方を考え、実践してきた。このことから、仲間とともに、身近な人や地域のためにできることを実践しようとする態度が育ちつつあると考える。そこで、本題材では、地域にいる身近な動物を取り上げ、生命の大切さに気付き、その生命を守るために自分にできることを実践しようとする態度を養う。
- 本題材の指導にあたっては、地域の野良猫の生命を守るために、猫を増やさない活動している方々の思いや願いに気付き、たった一つの与えられた生命を大切にすることについてとらえる。そして自分にできることを考え、実践しようとする態度を養うことができるようにする。そのために、まず、動物に対する子供の意識調査や猫に関するデータを提示し、地域の猫に関する課題をつかませる。次に、猫の生命を守るための活動に参加したり、動物愛護管理センターの方から話を聞いたりする場を設定する。そして、猫の生命を守るために自分にできることや、自分の意識の変化について話し合わせる。最後に、自分たちで考えた動物の生命を大切にするための活動の場を設定し、活動後には、これからの自分の生き方についての考えをもつことができるようにする。

題材で育成する資質・能力

- ◎ 生物に与えられたたった一つの生命を守るためにできることを考え、他者と関わりながら実践しようとするができる。 （創造性）
- 猫の生命を守るために、自分たちができる活動について、仲間の考えや他者の考えと交流しながら協力して取り組むことができる。 （協働性）
- 生命を大切にするために、どのようなことができるのかについて、自分なりの考えを自己決定することができる。 （向上性）

題材の計画（全20時間）

学 習 活 動 と 内 容
1 動物に接する体験や殺処分に関する資料から、動物の生命について考えたことを話し合う。 ③ ○ 猫やウサギに触れる体験や1年間に処分される猫のデータ資料から、生命についての課題意識をもつこと ※ 猫やウサギに触れる場の設定や子供の意識調査の結果、猫の殺処分に関する資料の提示 -- どのような取り組みがあるのだろう。 2 地域の猫の命を守る活動について調べたり体験したりして自分の意識の変化について話し合う。 (1) 地域ねこ活動や動物愛護管理センターでどのようなことが行われているか調べたり、活動へ参加したりする。 ⑦ ○ 猫の生命を守るための活動や、取り組みがあることを知ること ※ 地域ねこ活動への参加や、施設職員の方から話を聞く場の設定 -- なぜ、活動を続けているのだろう。 (2) 猫の生命を守ることにについての思いを聞き、自分の考えについて話し合う。 ④ 本時3/4 ○ 地域ねこ活動に関わる方の思いを知り、これからの自分についての思いをもつこと ※ 子供の意識の変容をとらえるシートの提示 -- これからの自分には、どのようなことができるのだろう。 3 猫の生命を守るために自分にできることを行いこれからの自分の生き方について話し合う。 ⑥ ○ 猫の生命を守るためにできることの実践を行い、自分のこれからの生き方につなぐこと ※ 猫の生命を守るために、自分が考えたことを実践したり、実践後に交流したりする場の設定

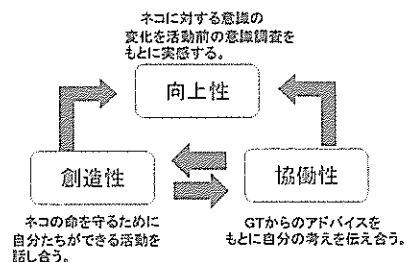
本時に最も重視する資質・能力

☆向上性

猫の生命を守るために自分にできることを話し合いながら、猫の生命を守ることにについての自分自身の考えの変容をとらえる姿

- ・ 前は、野良猫のことなど何にも気にしてなかったけど、1匹でも多くの猫の生命を救うために、地域ねこ活動をしたい。
- ・ 猫の生命を守るために、できることはあるのかどうかかわからなかったけど、何か自分にできることはないかと考えた。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開 (13/20時)

学 習 活 動 と 内 容	創造主体を生み出す手だて
1 猫の生命を守るために、自分にできる活動にはどのようなものがあるかについて、そのことが実践できるかということについて話し合う。 ○ 猫の生命を守るために自分にできる活動について、どのように取り組むか、課題別グループで意見をまとめること めあて ねこのいのちを守るために、自分にできる活動について話し合おう。 2 猫の生命を救うために、自分ができる活動の必要性や実践の内容について話し合い、自分の意識の変容について話し合う。 (1) 猫の生命を救うための活動について、取り組む必要性や実践できるのかどうかについて話し合う。 ○ 猫の生命を救うための活動について、自分の立場を明確にして、グループの友達と活動に取り組む必要性について考えを整理したり、友達の意見を聞いて自分の考えを修正したりすること (2) 自分にできる活動について、どのようにしていくか、自分の意識の変容を友達と話し合う。 ○ これまでの学習を通して、最初の猫に対する意識と今の自分の意識とを比べながら、猫の生命を守ることや、そのための取り組みについての自分の考えをもち、猫のためを思うようになっていくことに気付くこと	※ 自分ができる活動についての考えを交流させるために、課題別のグループを設定する。 ※ 自分にできる活動の必要性や、実践できるのかについて話し合わせるために、友達と相談したり、ゲストティーチャーから助言をもらったりする場を設定する。
	※ 自分の考えの変化を表現させるために、友達やゲストティーチャーと話し合ったことを整理する場を設定する。 ※ 今後の活動への見通しをもたせるために、話し合ったことをもとに、これからの活動についての自分の考えを自己決定する場を設定する。
3 話し合ったことをもとに、猫の生命を救うための活動について、どのように取り組んでいくかということについての見通しをもつ。 ○ 猫の生命を救うためにできることとして、今後、活動するとき自分が大切にしたい視点や活動の内容についての見通しをもつこと	

第4学年2組 言語文化学習指導案

指導者 田 中 菜 穂 子

題材 伝え合おう 言葉のみ力（Bコミュニケーション）

指導観

- 本題材では、言葉の魅力を探るという目的のもと、商品名の秘密を追究して、プレゼンテーション（以下「プレゼン」）を作り、伝え合う活動を通して、商品名や物の名前がもつ言葉の魅力を見いだすことをねらいとしている。具体的には、①お茶に関する複数の商品名を比べる活動や商店の見学を通して、追究したい課題について話し合うこと、②自分の強く心に残った商品名の特徴や込められた思いについて追究し、プレゼンにまとめること、③チームで商品名と物の名前の関係から言葉の魅力について話し合うことなどである。つまり、本題材において、商品名の秘密を追究し、伝え合う活動を扱うことは、言語の機能や役割、使い方に対する自分の考えをもち、言葉の魅力から見方・考え方を広げることができるという価値がある。
- 本学級の子供たちは、1学期題材A「古の言葉の世界」は、語り継がれる俳句や短歌における特徴や言語の運用、先人の思いが込められていることにも気付いている。また、2学期題材C「言葉でつくる笑いの世界」では、「おもしろい話をつくりたい」という願いのもと、とんち話を読み比べ、明らかになったおもしろさの観点を使い、創作する活動を通して聞き手を意識した言語表現の大切さを見いだすことができた。これは、協働性による向上性、創造性の高まりともいえる。そこで、互いの共通点を感じ、よりよいものを見いだすことへの意識が高まりつつあるこの期に本題材を設定する。このことで、普段何気なく使っている言葉への見方・考え方を広げる学習を通して、言語文化の向上を担う主体としての意識を高めていきたい。
- 題材の指導にあたっては、自分の強く心に残る商品名の秘密を追究し、伝え合う活動を通して、言葉のもつ魅力を明らかにするという目的のもと、言葉の機能や役割、使い方に気付くとともに、見方・考え方の変容を見いだすことができるようにする。そのために、まず、複数のお茶に関するCMや広告を視聴する活動を位置付け、学習課題を設定させる。その際、同じ商品でも名前に使われる日本語（平仮名・漢字・片仮名)や英語による表記の違いに気付かせ、興味をもたせる。次に、商品名の秘密を追究し、プレゼンを使って伝え合う。その際、言葉の機能や役割、使い方における共通点に気付かせる。最後に、言葉の魅力とは何か話し合い、気付きから見方や考え方など変容したことを見いださせる。その際、可視化できるよう評価を積み上げさせる。

題材で育成する資質・能力

- 物を価値付ける商品名や物の名前から言葉の魅力を追究し、プレゼンで伝えたり、自分の言葉で表現しようとすることができる。（創造性）
- ◎ 商品名や物の名前について、比べたり、関係付けたりしながら自分の考えを伝えたり、話し合ったりしようとすることができる。（協働性）
- 毎時間の振り返りから、言葉の機能や使い方といった魅力に気付き、言葉の見方・考え方を広げていくことができる。（向上性）

題材の計画（全15時間）

学 習 活 動 と 内 容
1 3種類のお茶の広告やCMを比較しながら、追究したい課題について話し合う。 ⑤ ○ 身の回りにある物には名前が付いていること（ 平仮名・漢字・片仮名 を使う言葉）や商品名についての興味をもち、課題解決への意欲をもつこと
自分の心に強く残る商品名の秘密を調べ、交流しよう。
2 自分の強く心に残る商品名の秘密を調べる。 (1) 強く心に残る商品名の秘密を調べる。 ④ ○ 特徴を明らかにしたり、日本語と英語を使いわけのよさや効果を考えたりすること ※ 外来語と和製英語の意味や違いを明らかにするため、ALTや帰国子女学級との交流の場の設定 (2) 商品名の秘密を伝え合う。 ③ ○ 商品名に使われる言葉に着眼したプレゼンをつくり、質問で考えを関係付けて考えたり、同商品を比べて共通点を話し合ったりすること ※ 具体的な助言や価値付けのためのGTとの交流
3 商品名がもつ言葉の魅力について話し合う。 (1) プレゼンを聞いて商品名における共通点や物の名前との関係について話し合う。②本時2/2 ○ 商品名と物の名前の関係から言葉の魅力を話し合うことで言葉の見方・考え方を広げること ※ 言葉の魅力を追究させるための話し合いボードの準備と関係性を整理・分類するための板書 (2) 言葉に対する変容や気付きを話し合う。 ① ○ 言葉の魅力から、これまでの自他の言葉への見方・考え方と比べ、変容をとらえること ※ 言葉について毎時間書いたノートや評価表の提示

本時に最も重視する資質・能力

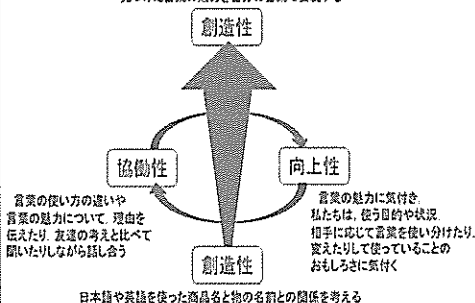
☆向上性

商品名と物の名前を通して、言葉には価値付けをしたり、視点（状況や相手、目的）によって使い方をええたりしていることに気付くことができる。

- ・ 物を買うときには、商品名のもつ魅力に惹かれて買うことが多い。しかし、使うときや友達とのやりとりするときは、物の名前を使う。私たちは、言葉を使う状況、相手や目的などによって言葉を使い分けたり、ええたりしている。言葉っておもしろい。

子供が発揮する資質・能力の関係

商品名と物の名前を関係付けて考え、見つけた言葉の魅力を自分の言葉で表現する



本時の展開 (14/15時)

学 習 活 動 と 内 容	創造主体を生み出す手だて
1 商品名の秘密を振り返り、本時のめあてについて話し合う。 ○ 「強く心に残る商品名の秘密を明らかにするために、秘密の共通点を確認、言葉の魅力を明らかにしたいという思いからめあてをもつことめあて 強く心に残った商品名の秘密を比べ、言葉の魅力について話し合おう。 2 商品名と物の名前の使い方の違いから、言葉の魅力について話し合う。 (1) 商品名と物の名前との関係について、追究ペアチームで話し合う。 ○ それぞれの商品の名前のもつ秘密と物の名前の使い方を関係付けながら比べ、どの商品においても、共通して「商品名と物の名前には関係があること、自分たちは、状況や相手、目的によって無意識のうちに使い方をええていること」に気付くこと	※ 課題意識をもたせるために、「強く心に残る商品名には、共通する言葉の魅力があるのだろうか」という課題のもと、前時ペアチームで追究した商品名の秘密を振り返る時間を設定する。 ※ 自分たちの意識していないところで、言葉の使い方を変えていることに対する自分やチームの考えをもつことができるようにするために、商品名と物の名前との関係に着目して話し合わせ、付加・修正しやすくするために、交流の際は、色マーカーや付箋を使う。
(2) 言葉の魅力について、全体で話し合う。 ○ 商品名と物の名前を、具体的な場面を根拠に挙げながら比べ、使う状況や相手、目的に応じて言葉を使い分けたり、使い方をええたりするのは、言葉を理解したり、意思疎通を図ったりするためであることに気付くこと	※ 言葉の魅力について、生活とつないだ自分やチームの考えや発言をもつことができるようにするために、追究ペアチームから出てきた発言を、物の名前と商品名と分類、整理しながら関係性を可視化できるように板書する。 ※ 深まった考えや変容した見方・考え方を自分の言葉で書いて述べるようにするために、導入段階で考えた言葉に対する考えや学習ノート、板書を手がかりに振り返らせる。
3 言葉のもつ魅力について、学習前の自分の考えと比べ、100字程度で書く。 ○ 普段何気なく使っている物の名前と、自分が強く心に残った商品名とを関係付けて、学習を通して、言葉に対する見方・考え方で変わったことを明らかにすること	

第5学年1組 自然探究学習指導案

指導者 永田 裕二・坂本 憲明（本学教授）

題材 実現しよう 飛行プラン（C数理科学）

指導観

- 本題材では、2学期に調べた飛ぶ仕組みを再追究する過程で、浮く仕組みと飛ぶ仕組みには空気の流れと複数の力が関わり合っていることを理解することをねらいとしている。具体的内容としては、①浮くためには、揚力を生み出す主翼や尾翼の位置関係や形、大きさが関わり合っていることを理解できること、②遠くに飛ぶためには翼の角度、発射角、重心位置やゴムの引く力を変えることで、飛距離を制御できることをとらえることである。本題材において、飛行機の飛ぶ仕組みを扱うことは自然や数理で培った資質能力をもとに、新たな考えを創造していく態度や探究する能力を育てる上で価値がある。
- 本学級の子供たちは、1学期「エコロン池構想プロジェクト」、2学期「飛ぶ仕組みを発見しよう」の学習を通して、条件を制御して実験を行う問題解決の能力や、複数の数量について割合の見方を用いながら、帰納的に考える能力を培ってきた。そこで、本題材では、「飛ぶ仕組みを発見しよう」で学んだ翼の角度やゴムの巻き数と飛距離の関係を使ってさらに追究を深めていく。その際、滞空時間を伸ばすために必要な、主翼や尾翼の角度の条件を組み合わせたり、重力に逆らう揚力との関係を見つけ出したりして、問題解決に必要な解決方法を、複数の条件を組み合わせで自ら導き出していくことをねらう点からも意義深いと考える。
- 本題材の指導にあたっては、ゴムを引く力で飛ぶ飛行機を用いて、飛距離を操作できるようにする。そのために、A自然で培われる資質能力「ゴムと力の関係性をとらえようとする態度」「条件制御する力」「仮説・考察をする力」とB数理で培われる「2つの数量の関係をとらえるために資料を整理する力」「ものごとを演繹的・帰納的に考える力」「筋道立てて論理的に説明する力」を活用したり組み合わせたりしながら解決していく。まず、導入段階では、ものが飛ぶ仕組みの観点で2学期の成果と課題を出し合い、紙飛行機に学びを適用して自由に飛ばす活動を設定する。そこから生まれた新たな課題を学習課題として設定する。次に、展開段階では、一番遠くに飛ぶ数値を実験で調べ、仕組みの共有化をする。その後、「つくった飛行機をねらった枠に飛ばす」という共通の目的をもたせる。最後に終末段階では、飛ぶ仕組みを報告書としてまとめ、学級内で報告し合うことで、2学期から追究してきた研究について達成感を実感させるようにする。

題材で育成する資質・能力

- ◎ 仮説が実行可能か検討し、主翼や尾翼の位置関係や形、大きさ、重心位置やゴムを引く力を追究の観点として、より遠くに飛ぶ飛行機をつくることができる。（創造性）
- 様々な飛行機を飛ばす体験から、飛ぶ仕組みを他者と交流し、空気の流れを根拠に説明することができる。（協働性）
- 浮く仕組みと飛ぶ仕組みを、空気の流れと関連付けて、条件を制御しながら実験を繰り返し行うことができる。（向上性）

題材の計画（全12時間）

学 習 活 動 と 内 容	
1	2学期の学習を振り返り、紙飛行機を飛ばす活動から学習課題を話し合う。④ ○ 紙飛行機を飛ばす活動を通して、遠くに飛ぶ仕組みについての学習課題をとらえること ※ 1枚の画用紙を使った浮く仕組み体験や世界一遠くに飛ぶ紙飛行機の作り方の提示 より遠くに飛ぶために翼の角度や飛ばす角度、重心の位置と飛距離の関係を再追究しよう。
2	設計図をもとに実験を繰り返し行い、データを蓄積していき、遠くまで飛ぶ飛行機を製作する。 (1) 翼の角度と発射角度、重心を変えて、一番遠くに飛ぶ数値を見つける。④ ○ 遠くに飛ぶ仕組みとして、条件を制御しながら実験する必要性をとらえること ※ データを蓄積するためのボードや、飛ぶ方向を見るためのタブレットの活用 (2) 積み重ねた仕組みを使って、ねらったところに飛行機を飛ばすことに挑戦する。② 本時2/2 ○ グループ追究を行い、成功率を上げるためには、データ処理の必要性をとらえること ※ グループで数値を変えて、ねらった枠に着地する数値を計測し、翼の角度や重心の位置を関係付けながら成功率を上げるためのデータ処理
3	追究してきた飛行機の飛ぶ仕組みを振り返り、追究報告書を作成する。② ○ 今まで積み重ねてきたことを整理してまとめることで、飛ぶ仕組みをとらえること ※ 学級の友達からの他者評価の場の設定と、調べてきた成長を可視化する2学期末の報告書の比較

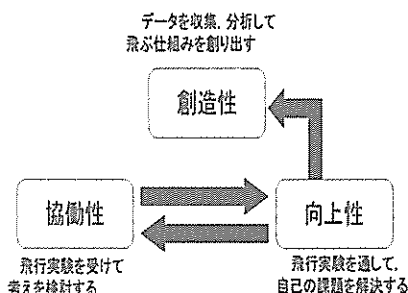
本時に最も重視する資質・能力

☆創造性

翼の角度、発射角度、重心位置など、条件を変えながら飛距離を調べ、統計的に飛ぶきまりを発見しようとしている。

- ・ 飛び出す角度を30° にすると、目的地まで届かない。しかし、水平にすると目的地からはみ出るから、風を受けることを考えて角度を変えてデータを取り続けて、着地する角度を見つけよう。
- ・ データ結果から重心位置もわかってきたから、もう少し記録をとって、着地する成功率を100%に近づく数値を導き出そう。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開 (10/12時)

学 習 活 動 と 内 容

1 本時までの飛行の学びを振り返り、本時のめあてを話し合う。

- 目的地着地に向けての本時仮説の交流から、本時検証の方向性を明確にすること

めあて

飛行の条件を変えて、10m先の目的地に多く着地できるようにしよう。

2 グループで、目的地に着地する条件とその成功率を調べる。

(1) 数値設定を行い、目的地に着地する飛行機の条件を調べる。

- 飛ばす角度や主翼の角度など、調べる条件のみを変えながらデータを取り、記録を表にまとめること

飛行距離一覧

重心	角度	引く力	太さ	飛距離	飛行の様子
主翼にクリップ2	水平	20cm	4mm	8~15m	重心を変えると距離も変わる
おもりなし	30° 上向き	10cm	1mm	5~8m	角度を上げると飛びにくくなる
おもりなし	水平	20cm	1mm	8~12m	引くほど、もどる力が生まれる
おもりなし	水平	10cm	4mm	8~12m	太い方が進む力が生まれる

方法

クリップで微妙な重さを加え、重心の位置を変える。

方法

ヘアで角度を確認して飛ばすことができるようにする。

方法

ゴムの太さを変える。
ゴムを引く長さを変える。

見つけたきまり

- ・ 上記の条件を組み合わせると15m以上の飛行もできる。
- ・ 引く力を強くすると勢いがついて、空気の力にのるまでに遠くに飛ぶ。
- ・ 角度も風を受ける角度になるようにする。

(2) 数値のきまりが妥当性を満たし、成功率を高めるために再実験をする。

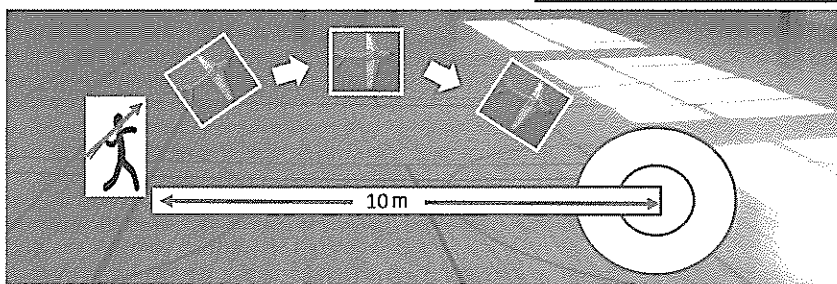
- グループによる飛行機ごとに適した、発射角や主翼の角度、ゴムを引く力と飛距離の関係性に再現性や客観性をもたせること

基本のデータ

①主翼の角度	②飛ばす角度	③おもりの位置	④ゴムを引く力	⑤ゴムの太さ
水平	水平	基本	15cm	1mm

改善点からの再実験

複数回実験後に条件を変えて調べる。



3 発見した飛ぶ仕組みを全体交流し、今までの研究成果について坂本先生の話聞く。

- つくり上げた飛行のきまりが、グループによって違いがあっても、主翼や尾翼に受ける風との関係が共通していることを、今までの実験からとらえること

創造主体を生み出す手だて

※ 本時仮説を設定する根拠のために、飛行機の条件と今までの飛行実験で飛距離をまとめた飛距離一覧表を活用する。

※ 飛行の条件を考える話合いに必然が生まれるようにするために、初めて到達した数値からの成功率を導き出すようにする。

※ 再実験によるグループでつくり出した飛行距離のきまりや、目的地着地の成功率の高まりを実感できるようにするため、T T指導による即時評価を位置付ける。

※ 今までの追究で発見した飛行距離と複数の条件との関係を価値付けるために、福岡教育大学の坂本先生の話位置付ける。

第6学年2組 マイタイム学習指導案

指導者 齋 藤 淳

主題 10年後の自分と語ろう～夢～

指導観

- 本学級の子供たちは、これまでにマイタイムの時間を通して、客観的に自分を見つめたり、自分の目標設定に対する評価を仲間とともに話し合ったりすることができた。マイタイムノートの中では、今まで見過ぎていた自分の課題や学級全体に関わる問題について考え、自分なりの解決策を示し、どのように自分自身の行い方を変えていきたいのか具体的に行動目標を決めることができた。このことが、自分の課題に目を向け、それを克服することのよさの実感につながっている。このように学び方や行い方を振り返ることが新たな自分のよさやこれからの行い方を見出す姿につながった。しかし、子供たちの中には学芸会や運動会などの行事が終わると意欲をなくしたり、目標を見失ったりしている子も多い。そこで、卒業を控えた子供たちにこれからの自分の生き方の方向性に関わる長期的な目標や自分たちの卒業までの道筋などを具体的に考えさせる。そのため、「生きる道シート」を活用し、自分の振り返りをより大きな視点から見たり、自分の取組のよさや課題を見つめたりすることができるようにしたい。その中で、今の自分の学び方と行い方のよさと課題を振り返らせ、「生きる道シート」の目標設定の付加・修正を行わせることで、深い自己肯定感を育むことに寄与できると考える。
- 本主題では、学校の下級生や家族からの声をもとに自らの学び方や行い方を見つめ、これからの自分のすべきことについて考えることをねらいとしている。具体的には、①自分たちが下級生や家族から信頼され、期待されていることに気付くこと、②求められる自分と今の自分について比較して考えたり、悩みを相談したりして、仲間とともに自分を多面的に見つめること、③長期目標や中期目標、短期目標という視点で自分の目標設定を新たにすることなどである。そこで、本主題においては、客観的に自分を見つめるために、保護者や友人などの温かくも厳しい視点から評価や期待があることを理解させる。その上に立って、子供たちは自分自身をよりよくしようと考えさせたり、新たに組みたいことを目標設定させたりする。このことは様々な視点で自分自身を見つめさせ、領域全体の学びの高まりを意識させることにつながり、特にマイタイムで最も重視する「向上性」を育むことにつながると考える。
- 本主題の指導にあたっては、様々な人々の自分たち

に対する思いを聴くことを通して、学校や地域社会の一員として求められている自分に気付き、自分のよさや課題を見つめるとともに、自分が達成したい目標を設定するようにする。そのために、まず、導入段階では、下級生の手紙にあるような自分になれているか問い、自分の今の課題を意識させる。さらに、「生きる道シート」にある目標を達成させる自分への手紙にしたいという思いから課題を設定させる。次に、展開段階では、自分が努力して成長することができていることや、努力しているにもかかわらずできていないところや悩みなどについても話し合い、お互いに思いに共感できるようにする。そこで、出し合った意見をもとに自分の今を客観的に振り返ったり、新たな自分の目標を立て直したりしたことを全体で話し合わせる。さらに、子供たちにとって身近な保護者から書かれた手紙をもとに感じたことや決意を新たにすることを語り合うことができるようにする。最後に、学級の友人と語り合ったことや下級生や保護者からのメッセージをもとに、タイムカプセルに入れる手紙に書くテーマについて話し合い、自分の考えをマイタイムノートに書くことができるようにする。

主題で育成する資質・能力

高学年期の子供たちは、3つの資質・能力に次のような特性があると考えられる。創造性では、「現実の社会にはなくても、新たなものを生み出そうと挑戦的に活動することができる」ということである。協働性では、「あらゆる多様な社会の人々で自分との接点が薄い人であっても相手の立場に立って考え、適切な行為を考えることができる」ということがある。そこで、マイタイムで重視する向上性においては、自己効力感、自己有用感、自己肯定感の3つから、自分自身をあるがままに見つめ、自分自身は存在する価値があるということを自覚させることが重要である。そこで、以下の3つをねらいとする。

- ・ 自分自身で気付いた自分のよさも課題も善悪という点から見つめるとともに、冷静にあるがままを認めることができる。 (自己肯定感)
- ・ 自分は何かを成し遂げたり解決したりすることができると思える。 (自己効力感)
- ・ 人や社会とのつながりの中で自分が必要とされていると思える。 (自己有用感)

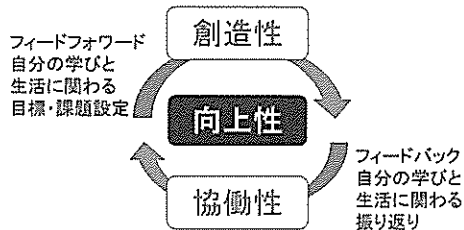
本時に最も重視する資質・能力

☆向上性

本校を卒業して多方面で活躍する先輩や下級生からのコメント、保護者からのあたたかい激励をもとに感じたことや決意を新たにすることを語り合う姿

- 頑張っていることをいろいろな人が認めてくれている。
- 仲間や下級生、家族の期待に少しでも応えたい。

子供が発揮する資質・能力の関係



本時の展開

学 習 活 動 と 内 容	創造主体を生み出す手だて
1 卒業に向けて自分を成長させようと努力してきた今までの自分の取組を振り返り、できたことや不十分だったことを話し合い、みんなでこの時間に考えたいことを話し合う。 ○ 下級生からの手紙をもとに、自分たちの今までの学校生活を振り返り、「生きる道シート」に示した自分の目標に向かって自分が高まっているかどうか考え、自分への手紙に何を書くか課題を明確にすること 考えたいこと 創立150周年で開けるタイムカプセルに入れる10年後の自分への手紙に、どのようなことを書いたらよいか話し合おう。 2 10年後の自分への手紙に書き記したいものを明らかにするために、今までの自分の成長や課題と思うことをもとに10年後の自分に伝えたいことについて、お互いの考えを語り合う。 (1) 今の自分が努力したり継続したりすることができていることやできていないことをもとに、自分の12年間の成長や課題とこれからの期待や悩みについて話し合う。 ○ それぞれが感じている努力の過程や成長への喜び、悩みなどの思いを受け入れ、お互いの思いに共感すること (2) 保護者からのこれから10年を生きる上での助言を中心とするメッセージをもとに感じたことや決意を新たにすることを語り合う。 ○ 出し合った意見をもとに自分の今を客観的に振り返ったり、新たな自分の課題を見つけたりすること	※ 10年後の自分への手紙に何を書きたいのか課題をもたせるために、下級生の手紙とこれまでの「生きる道シート」とマイタイムノートに見えてきた自分の高まりや課題を視覚化する。 ※ 今の自分の具体的にできたこととできていないこと、これからの期待と悩みについて見つめさせるために、メンターチームで話し合う活動を設定する。
タイムカプセルに入れる10年後の自分への手紙	※ 自分の知らないよさや自分の知らないこれからの可能性に気付かせるために、保護者から自分が歩んだ12歳から22歳までの10年の経験をもとにしたメッセージをもらう場を設定する。
3 本時の話し合いを通して、自分が考えた長期目標をもとにタイムカプセルに入れる自分への手紙のテーマを書く。 ○ 今までの行い方の振り返りとともに、自分の見方・考え方の変容を自己評価し、これから10年への課題を自己決定すること	※ 感じている思いや願いを生かすために、タイムカプセルの手紙に書くテーマを選ぶ活動を設定する。

帰国子女学級 言語文化学習指導案

指導者 菊 竹 一 平・杉 本 克 如

題材 H A I K Uで広がる言葉の世界（Bコミュニケーション）

指導観

- 本題材では、俳句が表す様子について考えたことを友達や留学生と伝え合い、H A I K Uに表すことで、日本の伝統的な言語文化である俳句のすばらしさをとらえることをねらいとしている。具体的には、①松尾芭蕉の句「古池や かわずとびこむ 水の音」の表す様子について自分の考えをもつこと、②留学生と日本語や滞在国の言葉などを使って「古池や～」の句をH A I K Uとして表すこと、③留学生と句会を開き、俳句のおもしろさを実感することなどである。俳句は、世界で最も短い定型詩であり、海外においても「H A I K U」と呼ばれ、様々な国で親しまれている。つまり、本題材で俳句を通して友達や留学生などと交流する活動を行うことは、帰国子女である子供たちにとって、日本の伝統的な言語文化のよさに改めて気づき、俳句を通して、友達や留学生など多くの人との関わりを広げていくことができる価値がある。
- 本学級の子供たちは、2学期生き方の題材「キャラクターで関わりを広げよう」の学習において、世界で親しまれている日本のキャラクターについて、滞在国の人と共通の話題で伝え合う楽しさを感じてきている。また、滞在国のキャラクターを日本にも伝えるなど、帰国子女としてお互いの文化を伝えることができるよさにも気付いている。しかし、現代の日本の文化には親しんでいるが、伝統的な文化については、まだよく知らないという実態がある。そこで、本題材では、短い言葉で豊かな想像を広げることができる日本の伝統的な言語文化である俳句のすばらしさに気付かせ、帰国子女として、俳句に親しみ、俳句を通して多くの人と関わることを楽しめる楽しさを実感させたい。
- 本題材の指導にあたっては、帰国子女として、日本の伝統的な言語文化である俳句に親しみ、多くの人と俳句を通して関わりを広げていく楽しさを実感させる。そのために、まず、留学生が、「古池や～」の句が表す様子について、英訳したH A I K Uでは、よくわからないので教えてほしいと思っていることを知り、学習課題を設定する。次に、留学生が疑問に思う観点に沿って「古池や～」の句が表す様子について伝え合い、自分がとらえた様子について留学生に伝えるようにする。そして、自分がとらえた様子が伝わる新たなH A I K Uをつくる。最後に、留学生と同じテーマで句会を開き、伝統的な言語文化である俳句を通して、多くの人と関わりを広げることができる楽しさを実感させるようにする。

題材で育成する資質・能力

- ◎ 松尾芭蕉の句から想像した様子について、留学生や友達に知っている言葉で伝えたり、H A I K Uに表したりすることができる。（創造性）
- 著名な俳句や自分がつくった俳句について、留学生や友達と感想や意見を積極的に伝え合うことができる。（協働性）
- 帰国子女として、日本の伝統的な言語文化である俳句のことを知り、俳句を通して多くの人との関わりを広げようとしている。（向上性）

題材の計画（全12時間）

学 習 活 動 と 内 容	
1	留学生が日本の俳句に興味をもっていることを知り、学習課題を話し合う。 ① ○ 日本の伝統的な言語文化である俳句が世界で親しまれていることをとらえること ※ H A I K Uに書かれてある様子について疑問をもつ外国の方との交流
「古池や～」の俳句で留学生が疑問に思うことについて話し合い、新たなH A I K Uを作ろう。	
2	留学生が「古池や蛙飛び込む水の音」の句について疑問に思うことに対する自分の考えを伝え、新たなH A I K Uを作る。 (1) 留学生がH A I K Uで疑問に思うことについて、自分の考えを伝え合う。 ⑤ ○ 俳句の表す様子について自分の考えをもち、多様な解釈があることに気付くこと ※ 「古池や～」の俳句の解釈を深めるための2つの観点での交流の場の設定 (2) H A I K Uについての考えを留学生と伝え合い、新たなH A I K Uを作る。 ② 本時 2/2 ○ 「古池や～」の表す様子について日本語や滞在国の言葉などで伝え合い、自分がとらえた様子が伝わる新たなH A I K Uを作ること ※ 俳句を解釈するために、H A I K Uを2つの観点で作直す活動の設定
3	同じテーマで俳句やH A I K Uを作り、留学生と句会を開いて、感想や意見を伝え合う。 ④ ○ 作った俳句の表現のよさを認め合い、日本の伝統的な言語文化に親しむよさをとらえること ※ 俳句のよさを実感するための留学生との共通のテーマによる句会の場の設定

本時に最も重視する資質・能力

☆創造性

芭蕉の「古池や～」の句について、自分が想像している様子を日本語や滞在国の言葉で伝え、留学生と協力してHAIKUを作る姿

- ・ ぼくは、作者が蛙が飛び込んだ水の音で静かさを感じたことを一番に伝えたいから、「sound of water」のところを「I feel silence」に変えたらいいと思うな。

子供が発揮する資質・能力の関係

俳句のもつ価値に気付く

向上性

創造性

言葉を選んで
HAIKUを作る

協働性

自分の考えを
伝え合う

本時の展開（8/12時）

学 習 活 動 と 内 容	創造主体を生み出す手だて
1 留学生が抱く疑問を聞き、本時のめあてを話し合う。 ○ 留学生から伝えられた小泉八雲のHAIKUについての疑問を一緒に解決したいという意欲をもつこと めあて 「古池や かわず飛び込む 水の音」が表す様子について伝え合い、新たなHAIKUを作ろう。 2 「古池や蛙飛び込む水の音」の句が表す様子について滞在国の留学生と伝え合い、新たなHAIKUを作る。 (1) 古池と蛙についての自分の考えを日本語や滞在国の言葉で伝える。 ○ 「古池や～」の句について、想像した古池や蛙の様子を日本語や滞在国の言葉を使って、わかりやすく伝えること 俳句 古池や かわず とびこむ 水の音 HAIKU Old pond frogs jumping in sound of water ◎留学生の疑問 ① 「Old pond」は、どんな池なのか。 ② かえるは、なんびきとびこんだと思うか。	※ 「古池や～」の句が表す様子を新たなHAIKUにしたいという思いをもたせるために、小泉八雲のHAIKUについて疑問に思うことを留学生に伝えてもらう場を設定する。 ※ 「古池や～」の句について、より具体的にとらえさせるために、①古池はどんな池なのか、②蛙は何匹飛び込んだと思うかの2つの観点に絞って、自分の考えを留学生に伝える場を設定する。
(2) 滞在国グループで、「古池や かわずとびこむ 水の音」の表す様子が伝わるHAIKUを作る。 ○ 「古池や～」の句について、自分の想像した様子が伝わる英語を選んでHAIKUで表すこと 自分たちが俳句で感じたことをHAIKUにする 静かな池だと伝えたいから、「Quiet pond」にしたら、どうかな。 静かな池だけど、大塚公園のように大きな池も想像できるよね。 最後には、静けさを感じたことを入れたら俳句の様子が伝わると思うよ。 小さな池だということも伝えたいからね。「Small quiet pond」はどうかな。 作ったHAIKU Small quiet pond a frog jumping in I feel silence	※ 短い言葉で想像が広がる俳句のよさや留学生との感じ方の違いや共通点を実感させるために、自分たちが想像したことを留学生と英語でHAIKUにする活動を設定する。
3 作ったHAIKUを発表し、俳句のよさについて話し合う。 ○ 留学生の感想から、短い言葉で様々な想像を広げることができる俳句のすばらしさをとらえること	※ 俳句のよさを実感させるために、俳句のすばらしさについて留学生に伝えてもらい、それを聞いた感想を伝え合う場を設定する。

第3・4学年さくら組 国語科学習指導案

指導者 辻 本 拓

題材 しん1ねんせいに しょうかいしよう「ふくおかしょうがっこう」

指導観

- 本学級は、第3学年男子1名、女子1名、第4学年男子3名の5名の子供たちで構成されている。言葉の実態として、主に一語文で話す子供、主語と述語の二語文で話す子供、多語文で話す子供がいる。教師や友達に自分のことを話したり、自分の知っていることを教えたりすることが好きな子供たちである。また、これまでに2学期に行った「つくってはなそう『おはなしアルバム』」で、校外学習で体験した楽しかったことを、「おはなしアルバム」をつくって友達に紹介する学習をしてきた。子供たちは楽しかったことや体験したことを意欲的に友達へ紹介することができた。しかし、相手と言葉のやりとりを通して、聞いたり話したりすることへの意識が薄かった。そのため、本題材では小学校のことを知らない新1年生への紹介することで目的意識や相手意識が生まれると考える。
- 本題材では、自分の知っていることや体験をもとに新1年生に福岡小学校の行事などを詳しく話すことをねらいとしている。具体的には、①小学校や北校舎の行事の紹介活動に進んで取り組むこと、②写真をもとに、自分が教えたことを選んで紹介活動に取り組むこと、③紹介することができた達成感を味わうことなどである。これらは、生活場面でも自分が教えたことや知っていることを言葉で話したり、詳しく話したりして伝えることにつながる。つまり、本題材において、新1年生に小学校の行事等の紹介活動を行うことで、子供たちが紹介したいことを詳しく話すことは、日常生活の中で相手の話を聞いてわかったり、相手に自分の思いを伝えたりすることができるようになることへとつながっていくという点で価値がある。
- 本題材の指導にあたっては、新1年生に小学校の行事等を紹介する活動を通して、詳しく話をするができるようにする。まず「知る」段階では、昨年度のお迎えの会や、さくら組の子供たちの入学前の写真を提示する。そして、新1年生に小学校の楽しい行事等を紹介するという目的意識や相手意識をもたせる。次に、「試す」段階では、福岡小学校や北校舎の行事について、新1年生に紹介したいことを話させたり、友達に話すことができた実感をもたせたりする。そのために、言葉を詳しくして話す活動を設定する。事後活動として、生活単元学習の中の「新1年生のお迎えの会」で今までの学習をもとに行事等を紹介させることで、成就感を味わわせる。

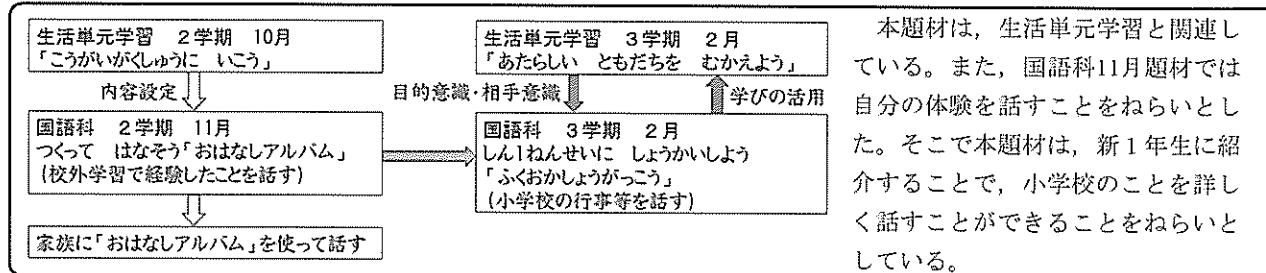
題材の目標

- 新1年生に、福岡小学校の楽しい行事等を伝えようとする意欲をもつことができる。（主体性）
- 言葉をつなげたり、言葉を付け加えたりして詳しく話すことができる。（自己発揮性）
- (AG) 行事の内容や時を表す言葉を入れて二語文で話すことができる。
- (BG) 行事の内容や気持ちを表す言葉を入れて二、三語文で話すことができる。
- (CG) 行事の内容について言葉を付け加えて、多語文で話すことができる。
- 詳しく話すことができた実感を持ち、満足感を味わうことができる。（成就性）

題材の計画（全5時間）

学 習 活 動 と 内 容	
【事前】	
・新1年生のお迎えの会があることを知り、会の役割分担について話し合う。——生活単元学習②	
1	生活単元学習で役割分担した小学校のことを紹介する時間があることを知り、自分が紹介したい福岡小学校や北校舎のことについて話し合う。①
○ 新1年生に福岡小学校の楽しい行事等を紹介したいという意欲をもつこと	
※ 過去のお迎えの会の写真の提示	
2	紹介したい行事等について時や気持ちを表す言葉を入れたり、言葉を付け加えたりして話す。
(1) 小学校のことについて話す。 ②	
AG	「〇〇をします」という話し方がわかること
BG	「(何を、いつ) します」という話し方がわかること
CG	言葉を付け加えると詳しくなることがわかること
※ イラストが補助としてある言葉の準備	
※ 「何を」や「いつ」を示した視点の提示	
※ 言葉を付け加えて話すためのカードの準備	
(2) 北校舎のことについて話す。 ② 本時2/2	
AG	「(何を、いつ) します」という話し方がわかること
BG	「(何を、いつ) します」や気持ちを表す言葉の話し方がわかること
CG	言葉を付け加えて話す話し方がわかること
※ 時を表す言葉を話すためのボードの準備	
※ 文を並び替えると、話す文になるボードの準備	
※ 言葉を付け加えて話すための話し方のモデル演示	
【事後】	
・お迎えの会の準備をする。——生活単元学習②	
・新1年生お迎えの会を開く。——生活単元学習②	

本題材の考え方



本時の目標

- 自分が紹介したい福岡小学校の楽しいことを伝えようとする意欲をもつことができる。 (主体性)
- 北校舎の行事について、言葉を付け加えたり、時を表す言葉や気持ちを表す言葉を入れたりして話すことができる。 (自己発揮性)
- (Aグループ) 「何を」「いつ」の言葉を入れて、二語文で話すことができる。
- (Bグループ) 「何を」「いつ」や気持ちを表す言葉を入れて二、三語文で話すことができる。
- (Cグループ) 行事の内容に言葉を付け加えて、多語文で話すことができる。
- 言葉を付け加えたり、詳しく話したりすることができたことに自信をもち、達成感を味わう。 (成就性)

本時の展開 (5/5時)

学 習 活 動 と 内 容			手だて
1 前時までの学習を振り返り、新1年生にお迎えの会で北校舎の行事を紹介することについて話し合う。			1 活動の見通しをもたせるための支援
○ 紹介したい北校舎の行事について、言葉をつなげたり、詳しくしたりして話すという学習の見通しをもつこと			※新1年生お迎えの会までの学習の流れを確認する場の設定
めあて しん1ねんせいに しょうかいしたい きたこうしゃの ことを おはなし しよう。			※活動の流れを視覚的に示した手順の提示
2 自分が新1年生に紹介したい北校舎のことを決め、友達に話す。			2 子供が主体的に北校舎の行事を紹介するための支援
(1) 自分が紹介したいことについて話す。			※グループに応じた北校舎の年間行事の提示
Aグループ	Bグループ	Cグループ	※北校舎の行事を想起させるために教師や友達と話し合う場の設定
○「(何の行事を、いつ) します」や行事の内容について二語文で話す方法がわかること	○「(何を、いつ) します」や行事の内容、気持ちを入れて、二、三語文で話す方法がわかること	○行事の内容について、詳しくする言葉を付け加えて多語文で話す方法がわかること	※紹介したいことを選ぶことができる複数の写真の提示
(2) 自分が紹介したい北校舎のことについて、詳しく話したり、付け加えたりして話す。			※個に応じた支援
Aグループ	Bグループ	Cグループ	(Aグループ)
○行事が変わっても「(何の行事を、いつ) します」や行事の内容について二語文で話す方法がわかること	○行事が変わっても「(何の行事を、いつ) します」や行事の内容、気持ちを表す言葉を入れて、二、三語文で話す方法がわかること	○行事が変わっても、行事の内容について詳しくする言葉を付け加えて多語文で話す方法がわかること	・イラストが補助として入った言葉カードの準備
			・時を表す言葉を意識することができるボードの準備
			(Bグループ)
			・話す言葉を選択することができるカードの準備
			(Cグループ)
			・付け加える言葉を選択することができるカードの準備
			・言葉を付け加えることができる紹介ボードの準備
3 今日の学習のできるようになった紹介の仕方や、自分が紹介することを発表し、一人一人が頑張ったことについて話し合う。			3 学習の達成感を味わわせるための支援
○ 言葉を付け加えたり、時や気持ちを表す言葉を入れたりして話すことができたことに達成感を味わうとともに、お迎えの会への期待をもつこと			※一人一人が学習を振り返ることができる発表の場の設定

未来創造講演会

次期学習指導要領にみる

未来創造型の資質・能力を育成する授業の価値

○ 講師紹介

文部科学省 初等中等教育局

視学官 ^た田 ^{むら}村 ^{まなぶ}学 先生



○ 職歴等

昭和37年新潟県生まれ。新潟大学教育学部卒業後、昭和61年4月より、新潟県上越市立大手町小学校教諭、上越教育大学附属小学校教諭、新潟県柏崎市教育委員会指導主事、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官を経て、平成27年4月より現職。

日本生活科・総合的学習教育学会理事も務める。

主な編著書

『これからの生活・総合』（東洋館出版）

『幼稚園・保育所と小学校との連携ポイント』（ぎょうせい）

『総合の新しい授業アイディア』（ぎょうせい）

『小学校生活 イラストで見る 全単元・全授業のすべて』（東洋館出版）

『思考ツールの授業』（小学館）

『新教科誕生の軌跡』（東洋館出版）

『生活・総合 アクティブ・ラーニング』（東洋館出版）

『授業を磨く』（東洋館出版）など多数

研究紀要目次

全体研究構想	68
--------------	----

文部科学省研究開発学校指定（平成27～30年度 2年次）

未来社会を創造する主体としての子供の育成Ⅱ

－ 未来創造型の資質・能力を育成する新領域の学習展開 －

領域「言語文化」の構想・指導事例	78
------------------------	----

領域「自然探究」の構想・指導事例	92
------------------------	----

領域「社会共創」の構想・指導事例	104
------------------------	-----

領域「表現」の構想・指導事例	112
----------------------	-----

領域「健康」の構想・指導事例	120
----------------------	-----

領域「生き方」の構想・指導事例	130
-----------------------	-----

「マイタイム」の構想・指導事例	146
-----------------------	-----

特別支援教育部構想	154
-----------------	-----

生活をつくり出す子供をはぐくむ教育課程の創造

－ 「わかること」と「できる」をつなぐ題材の開発と配列 －

未来社会を創造する主体としての子供の育成Ⅱ

－未来創造型の資質・能力を育成する新領域の学習展開－

1 未来社会を創造する主体としての 子供を育成することの重要性

(1) 未来社会を創造するとは

「厳しい挑戦の時代」と呼ばれている、自分たちが成人している20、30年後の社会を生き抜いたり、そのような社会に適応したりすることにとどまらず、自らの手で理想とする社会を切り拓き、多様な他者と豊かに関わりながらよりよい社会像を見通し、創り出していくこと

(2) 未来社会を創造する主体としての子供とは

未来は自分たちで創り出すものであると強く求め、今日的な価値を再吟味したり、新たな価値を創造したりすることのできる資質・能力を十分に発揮して、多様な他者と協働し、現在を能動的かつ主体的に生き抜こうとする子供

(3) 未来社会を創造する主体としての子供の 育成を重視する根拠

① グローバル化は、多様性を尊重する教育を必要としている

現代社会は、急速にグローバル化が進んでいる。グローバル化とは、人・物・文化・情報・経済などが国境を越えて自由に動くことである。グローバル化は、子供たちの日常にも急速な勢いで入り込んできている。知りたい情報は、ネットワークを通じてすぐに手に入り、周りを見渡せば諸外国の人や言語にも接しやすい状況が当たり前のようにある。そのような日常にあって大切なことは、自分と他者とは違って当たり前であることを自覚すること、自分と他者との違いを認めること、つまり多様性を尊重しながら自分の言動をつくり上げていくことである。

また、情報化においても、多様性は尊重されなければならない。情報化は、コミュニケーションを直接的なものから間接的なものへと推し進める。間接的なコミュニケーションは空間的、時間的な面でとても有効であるが、意思の疎通という面からは相手の心情を推し量る態度や能力の育成を妨げている懸念もある。

このことから、自分や相手の状況や心情を理解し、自分の言動をつくり上げる態度や能力の育成が重視されなければならない。

② 情報化は、知識の更新と創造を不断に行う教育を必要としている

現代社会は、情報化社会でもある。情報化が進むにつれて、新しい生活の仕方が求められており、日々知識の更新と創造が行われている。米国デューク大学のキャシー・デビッドソン氏は、「2011年度、アメリカの小学校に入学した子供たちの65%は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう」と未来予測をしている。情報化が進む現在では、一つの国で起こった変化が瞬間に他国に広がることを考えると、大小あれども日本でも同様のことが起き得ることが予想される。しかし、我が国の現在の教育は大学において専門家を養成することを頂点として、そのために必要な知識や技能を小学校から中学校、高校へと段階的に積み上げていく仕組みが19世紀末から変化していない。キャシー・デビッドソン氏が予測するように、子供たちが将来目指す職業が安定したものでなくなるとすれば、教育の在り方を大きく変えていく必要がある。

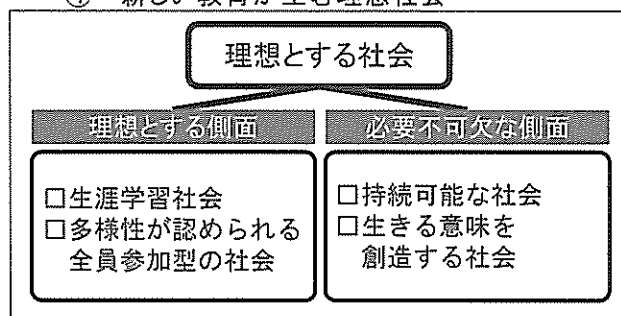
そこで、これからの教育で着目すべきことは、知識や技能のみの育成ではなく、どのような社会に直面しようとも揺るがない、柔軟で強固な、転移性の高い資質・能力である。

③ 未来社会こそ、知のネットワーク化、文化の 継承・創造が大切にされるべきである

未来社会は、ますます高齢化、生産労働人口の減少化が進むとされている。それに伴い、人工知能の発達、IoT(ものの情報化)など第4次産業革命にも拍車がかかるとされている。容易に調べたいことの情報が手に入る現在であるが、手に入れた情報は表面上の知識であることが多く、経験に基づく知識とは言い難い。経験に基づかない知識は喜びや嬉しさといった快感を伴わず、また他の知識とも結び付いていない単体のものであるため、以後に役立つ知識にはなり得ない。情報化の進展には、このような危険が潜んでいる。

また、風土や風習に基づいた国や地域特有の文化は、コンピューターやスクリーンの画面からだけでは、その意味や価値を実感することは難しい。時代を支え、文化を継承してきた「ひと」に直接関わることで、文化の意味や価値を実感することができる。文化継承の意味や価値を実感することで、新しい文化の創造の視点を見いだし、創造に向けて行動を起こすことができるのである。

④ 新しい教育が生む理想社会



【図1 新しい教育が生む理想社会】

本研究では、新しい教育が生む理想社会を、理想とする側面と必要不可欠な側面とで整理している(図1)。

「理想とする側面」にある「生涯学習社会」とは、「生涯学習の考え方を基礎にして、豊かで活力ある社会や人間関係を築いていくためのモデルとなる社会像」のことである。現在、そのような社会の構築が目指され、様々な場や機会等の基盤整備が行われているところである。この実現に当たっては、「多様性が認められる全員参加型の社会」が基盤になくてはならない。

一方、「必要不可欠な側面」にある「持続可能な社会」とは、「環境」「経済」「人間・社会」のバランスがとれた社会のことである。有限な地球環境の中で環境負荷を最小限にとどめ、資源の循環を図りながら、生態系を維持していくことが急務とされている。また、「生きる意味を創造する社会」とは、一人一人が自分自身の生きる意味を創造する社会のことであり、時代の変化に伴って、今後より一層「何のために生きるのか」と考えることは、必要不可欠になってくる。

以上のような、理想社会を創り出すことを可能にする資質・能力の育成が今後求められる。

2 本校が育成をめざす資質・能力像

(1) 教育界の動向

平成26年11月の文部科学大臣諮問文(中央教育審議会, 2014)は、グローバル化の進展, 社会構造の変化, 雇用環境の変化などを根拠に, 子供たちが成人して社会で活躍する頃を「厳しい挑戦の時代」と表現している。そのような社会をたくましく生き抜くために, 平成28年12月の「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について(答申)」(中央教育審議会, 2016: 以下, 2016中教審答申)では, 次期学習指導要領等が目指す姿として, 学習する子供の視点に立ち, 教育課程全体や各教科等の学びを通じて「何ができるようになるのか」という観点から, 育成すべき資質・能力を整理することの必要性を述べている。

(2) 近年の教育改革に対する本校の立場

しかしながら, 資質・能力の育成について, 日本カリキュラム学会はその問題点を指摘し, それに対する返答を白水始氏(2016)が行っている。

【日本カリキュラム学会の指摘と白水始氏の返答】

「経済的な利益追求となり, 教育の保護が疎かになる」
→○ 資質・能力を使って学ぶことこそが学習者の権利になる。

○ 資質・能力を「子供が潜在的にもつ力, 繰り返し使うことで自覚的に使えるようになる力」と見ることで, 子供の学ぶ力を引き出して育てるという学習観が成立する。

「家庭での教育的環境に大きく依存する」

→○ 学校での学びは, 科学者や専門家がつくった原理原則的な抽象度の高い知識と, 子供達の経験を基盤とした具体的な知識とを結び付けることで進む面があるため, 経験の貧困は, そのまま学びの貧困につながりかねない。

「評価によって, 学校が息苦しい空間となる」

→○ 資質・能力がすべての学習者にあるとする評価観であれば, 引き出すことができていないのは, 学習環境側の責任になり, 資質・能力の評価は授業改善のツールとなる。

「教科の内容が十分に扱われなくなる」

→○ 教科内容を十分に扱うために, 資質・能力がある。
○ 資質・能力と教科内容を別物としてとらえてしまうと, 資質・能力を別途トレーニングすることになり, 教科内容を教える時間を圧迫することになる。

また, 安彦忠彦氏(2014)も, 人格形成の視点から以下のような問題点を述べている。

「自立した人格」を育てる上では協力・協働すべきであり, 「未来の日本の主権者としての主体形成」の責任を共有しなければなりません。この点で, 「コンピテンシー」に「主体的人格の形成」の視点が弱く, 「能力」ばかりで「資質」の面への言及がその一部に部分的に含まれるだけで終わっている憾(うら)みがあります。

あらためて「人格」の重要性を訴えます。

コンピテンシー(資質・能力)重視の学力論においては, 能力のなかに人格的なものを入れようとする傾向が強く, その結果, 能力にとって都合のよい人格性や道徳性のみが扱われるという状況をつくりだしてしまいかねない。よって「能力形成」は, あくまでも「人格形成」の過程であり, 教育の目的が人格の完成であることから, 学校教育においては人格形成こそ最重要視されなければならない。つまり, 能力が人格に包み込まれるような構造でとらえることが大切になってくると言える。

一方で, 諮問とほぼ同時期に経済同友会が教育への提言を出している(経済同友会, 2014)。そこでは, これから必要になる教育として「自らの考えや意思を日本語で明確に伝える教育」「グローバル化に対応した教育」「社会の一員としての自覚や職業観の醸成を促す教育」を挙げ, グローバル化への対応に加えて, コミュニケーション能力の育成やキャリア教育の充実などについても教育界に対し求めていることがわかる。

併せて、「コミュニケーション能力」「論理的思考力」「課題発見・解決力」などのほか、新たに「ストレス耐性」や「ストレスコントロール能力」等も求められるようになってきている。これらのことから、経済界では、企業即戦力となり得る質の高い能力をもつ人材を重視する傾向にある。また、そのような人材を育成する視点からの教育改革に期待を膨らませているものの、そこには子供を客体として手段視する見方が見え隠れするのも否定できない。そこで、本校は時代の変化に流されず、よりよい社会を創り出していく主体性のある「人格」を求める必要性を強く打ち出している。

3 未来創造型の資質・能力とは

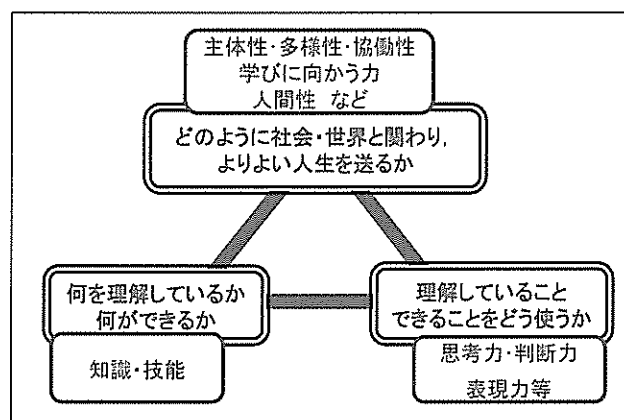
(1) 未来創造型の資質・能力の背景

① 「学習の転移」の実現

これまでの学校教育は、どちらかといえば各教科等の固有の知識や技能の習得を目指して行われてきた。これは、質の高い問題解決力そしてそれを保有した問題解決者を育てることを視野に入れた教育だといえる。コンテンツ・ベースの教育は、学問・科学・芸術などの文化から知識・技能を選びすぐり、子供たちに学習内容として伝えていくことで、その目標達成を図ってきた。そして、子供たちは優れた文化が所有する知識や技能を活用することで、問題解決が練り上げられ、よりよい人生を築き上げていくと考えられてきた。これは、「学習の転移」がその背景にあったのではと推察する。しかし、学習の転移については心理学分野においても、近年の全国学力・学習状況調査結果においても、容易には起きないことが証明されている。

そこで、一生涯にわたる問題解決の実現に必要な学力の育成が求められるようになってきた。その学力とは、知識・技能の習得に留まらず、初めて出会う事象においても効果的に活用する思考力・判断力・表現力など汎用性のある認知的スキルのことである。また、粘り強く問題解決に取り組む意欲、感情の自己調整、直面する対人関係的困難を乗り越えるなどの社会的スキルのことでもある。

② 育成すべき資質・能力の3つの柱



【図2 育成すべき資質・能力】

2016中教審答申においては、育成すべき資質・能力の3つの柱を図2のように示している。

「何を理解しているか、何ができるか」は、各教科等に関する個別の知識や技能など一般的に基礎的・基本的な知識・技能と呼ばれるものである。これには、身体的技能や芸術表現のための技能等も含むとされている。

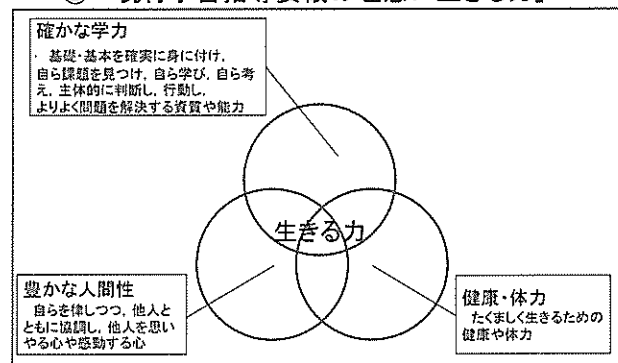
「理解していること・できることをどう使うか」は、以下の2つのために必要な思考力・判断力・表現力等とされている。1つは、「問題を発見し、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、そのプロセスを振り返って次の問題発見・解決につないでいくこと（問題発見・解決）」。

2つは、「情報を他者と共有しながら、議論することを通じて互いの考え方の共通点や相違点を理解し、相手の考えに共感したり多様な考えを統合したりして、協力しながら問題を解決していくこと（協働的問題解決）」。

「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」は、先述の2つの資質・能力を、どのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素であり、情意や態度等に関わるものが含まれる。主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する能力などの、いわゆる「メタ認知」に関するものでもある。この中には、多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなど、人間性に関するものも含まれている。

これら3つは、「個別の知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」の基盤の上に「主体性・多様性・協働性・人間性など」が位置付けられているようにとらえがちだが、3つが相互に作用し合ってそれらの関係が強化される構造としてとらえる方が、資質・能力育成の教育には適している。

③ 現行学習指導要領の理念:「生きる力」

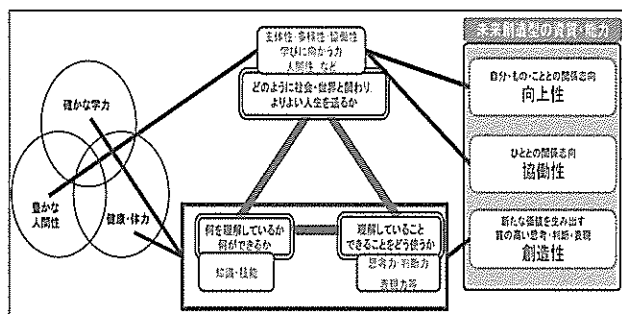


【図3 「生きる力」の要素】

現行学習指導要領は、「生きる力」を育むという理念のもと、知識や技能の習得とともに、思考力・判断力・表現力などの育成を重視している（図3）。

この「生きる力」は、1996年の中教審答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」が初出であり、1998年改訂及び2003年改訂の学習指導要領にも登場している。中でも、1998年改訂では、「総合的な学習の時間」が設定された点に大きな特徴が見られ、従来の教科の知識体系による縦割り型の学力に対して、それを横断的に総合科して課題対応型の学力を身に付けさせることがめざされた。言わば、「知の総合化」と「知の主体化」とを志向し、教育課程全体の構造について視野に入れた改革であったと考えられる。つまり、「生きる力」の理念実現のためには、教育課程の編成を抜きにして考えることはできないのである。

(2) 未来創造型の資質・能力の設定



【図4 未来創造型の資質・能力と「生きる力」の3つの柱の関係】

「学力の転移」の実現からは、認知的スキルだけでなく、社会的スキルも含めた学力育成の重要性、2016年中教審答申の育成すべき資質・能力の3つの柱からは、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「主体性・多様性・協働性・人間性など」の3つの相互作用とメタ認知の重要性、現行学習指導要領の「生きる力」からは、教科横断的な学力の重要性を読み取ることができる。そこで、本校では、子供たちの20、30年後の未来社会で必要となる資質・能力を、向上性、協働性、創造性の3つの側面をもつ「未来創造型の資質・能力」と名付け、他者と共に理想とする社会を創り出していくことを可能にすると同時に、どのような未来社会が到来しようとも適用するであろう資質・能力と規定している（図4・5）。

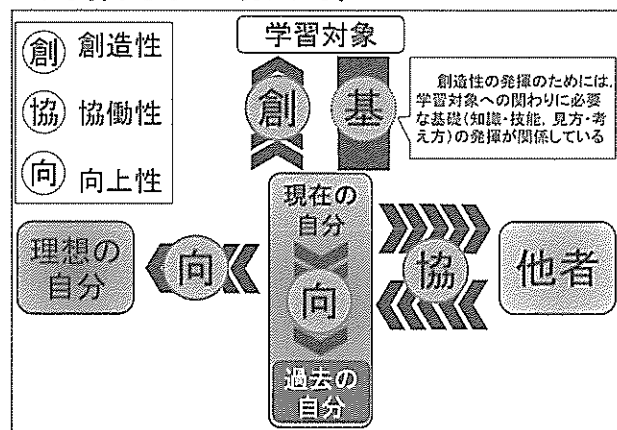
未来創造型の資質・能力		
他者と共に理想とする社会を創り出していくことを可能にすると同時に、どのような未来社会が到来しようとも適用するであろう資質・能力		
創造性	協働性	向上性
同質や異質の情報を結び付けて、新たな考えや価値を生み出す態度と能力 （構成要素） ・言語、数量、情報、身体に関する知識・技能 ・問題解決、発見 ・論理的思考、批判的思考、創造的思考 ・判断、表現 （特徴） ・本質的な問いによって発揮 ・協働的な場面で特に発揮	ものごとの多様性を認め、自分の役割や責任を果たしながら、他者とよりよい関わりを築く態度と能力 （構成要素） ・メタ認知 ・関係形成 ・感情、行動制御 （特徴） ・責任や役割が必要な場面で発揮 ・ひととの比較によって発揮 ・最適解、納得解を求める場面で発揮	自分の行いや在り方を深く省察し、今の自分を認め、よりよい自分を求める態度と能力 （構成要素） ・メタ認知 ・学び方の学び （特徴） ・もの・ことの比較によって発揮 ・価値の学習と密接に関係

【図5 未来創造型の資質・能力の概念規定】

創造性とは、同質や異質の情報を結び付けて、新たな考えや価値を生み出す態度と能力のことであり、知の統合に着目した資質・能力である。学習対象との関係づくりを目指しており、具体的には、知識・技能、見方・考え方を使って思考、判断、表現する姿などとして現われる。

協働性とは、ものごとの多様性を認め、自分の役割や責任を果たしながら、他者とよりよい関係を築く態度と能力のことであり、多様性に着目した資質・能力である。自分と他者との関係づくりを目指しており、具体的には、感情や行動を制御する姿として現われる。

向上性とは、自分の行いや在り方を深く省察し、今の自分を認め、よりよい自分を求める態度と能力のことであり、内省に着目した資質・能力である。向上性は自分との関係づくりを目指したものであり、具体的には、自己を肯定したり、志をもって目標を設定したりする姿などとして現われる。



【図6 未来創造型の資質・能力の構造】

また、3つの資質・能力の構造を図6のように整理している。創造性は、学習者が学習対象へ働きかけるときに発揮される資質・能力である。学習者がもつ基礎（知識・技能、見方・考え方）が学習対象に活かされると判断したとき、学習者のもつ基礎と学習対象とが含みもつ基礎とが結び付いて創造性が発揮される基盤がつくられる。協働性は、学習者が他者へ働きかけるときに発揮される資質・能力である。その際、学習者と他者とが問題を解決していく上で共通の目標や計画をもち備えていることが重要である。向上性は、学習者が自分に働きかけるときに発揮される資質・能力である。向上性が発揮される場面は二つある。一つは、過去の自分に働きかけるフィード・バック、一つは、未来の自分に働きかけるフィード・フォワードである。フィード・バックは、現在の自分と過去の自分とを比較してありのままの自分を認める活動であり、フィード・フォワードは、現在と過去の自分の比較から生じたありのままの自分を認める自己肯定感と、さらにこうありたいと願う未来志向をもとに、達成目標や向上目標を設定するなど理想の自分を設定する活動である。

4 未来創造型の資質・能力を育成する 新領域の学習展開

(1) 新領域構想の基本的な考え方

① 教科分化論の限界

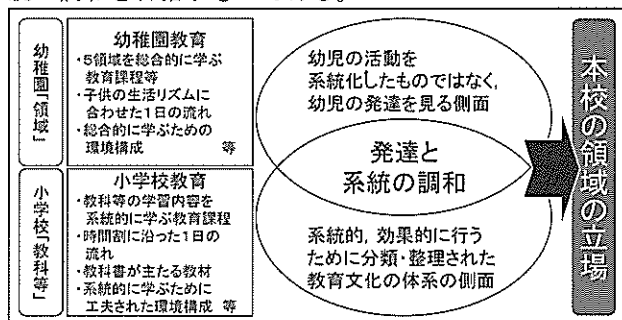
- これまでの教科分立の教育課程では、調和のとれた人格形成は難しい面もある。結果、各教科内容を教えておけば、それらは大人になるにつれて子供たちの中で統合されるとの考えにつながっている。
- 子供たちの学習をさらに活性化するためには、教科枠に閉じ込められた系統学習では限界がある。
- 「現代的課題」は、教科の枠組みを超えて、総合的な取組を要求している。

これは、教科分化論の限界から「領域」が求められる背景を整理したものである。教育課程は、教育者が社会に存在する文化の中から次世代に伝えたい内容を選びとることによって編成されているが、予測できない未来社会の到来を前にして、果たして子供たちに必要な文化とは何か、また、それはどのように組織されるべきなのか、十分に検討されなければならない。

② 幼稚園教育における「領域」の考え方

教科分化論の限界から、新たな教育課程を考えていく上で、幼稚園教育の「領域」の考え方を参考としている。幼稚園教育では、生きる力の基礎となる心情、意欲、態度の育成をねらいとし、心身の健康に関する「健康」、人とのかかわりに関する「人間関係」、身近な環境とのかかわりに関する「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」、感性と表現に関する領域「表現」の5つの「領域」をもとに、発達にとって必要な経験が得られるような状況づくりを大切に、幼児期にふさわしい生活が展開されるように意図されている。

本校の新たな教育課程でも「領域」論の立場をとるが、幼稚園教育とは性質が異なっている。本校が設定しようとしている「領域」は、図7のように発達と系統の調和を目指すものである。

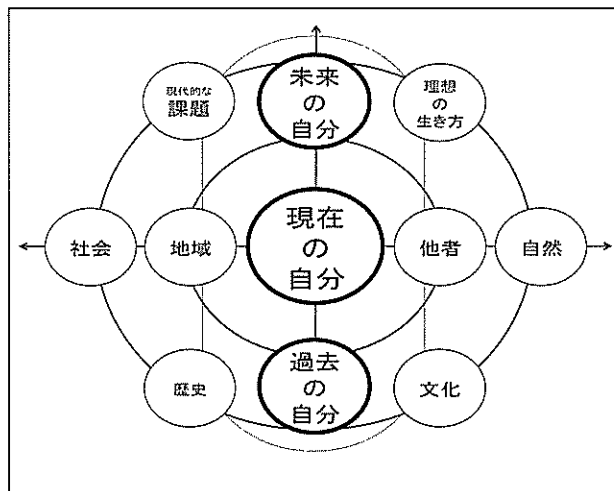


【図7 「領域」の考え方についての本校の立場】

(2) 新領域の設定

未来創造型の資質・能力を育成していくためには、「これまでと同様にこれからも大切にしないといけないものは何か」、「何を学ばなければいけないのか、学

びたいのか」、「これから必要となるべきことは何か」、「人間として、どのようなものを学ぶべきなのか」といった視点から見いだしたものを教育内容とすることが大切である。



【図8 「人間として生きること」と環境の関係】

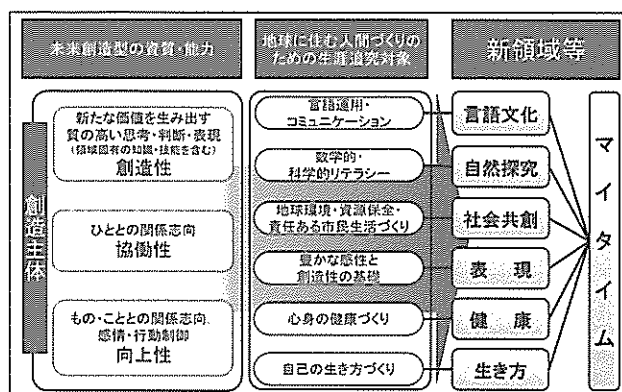
図8は、人が「人間として生きること」において、生涯かかわる環境を空間軸と時間軸とで整理したものである。人間は、過去・現在・未来といった自己の人生の時間軸を生き、そこでは自然や他者、地域社会等といった空間軸と密接にかかわり合って生きていく。従来も大切にされてきた「人間として生きること」を質的に深めていくことが、今後重要であるとの立場に立ったとき、時間軸及び空間軸内に点在する対象を束ねて系統的、意図的に学習することが必要となる。

そこで、本校ではそのような対象を「地球に住む人間づくりのための生涯追究対象」とし、「文化継承・創造」「社会的課題」「人間的欲求」の3観点で分けて、「新領域」として位置付けている（表1）。

【表1 新領域設定の観点】

文化継承・創造	認識の枠組みや道具としての言語や数、図形、それによって構成される哲学、自然、社会、芸術、技術、道徳等
社会的課題	公民的、職業的な能力にかかわる政治的、経済的及び人間関係なもの
人間的欲求	人間性の尊重と、人間的、人類的責任能力に対応する平和、資源、環境等
学習者の求め	発達、興味、関心などに応ずる性格、個性、特性、あるいは遊び、経験などの心理的、生活的なもの

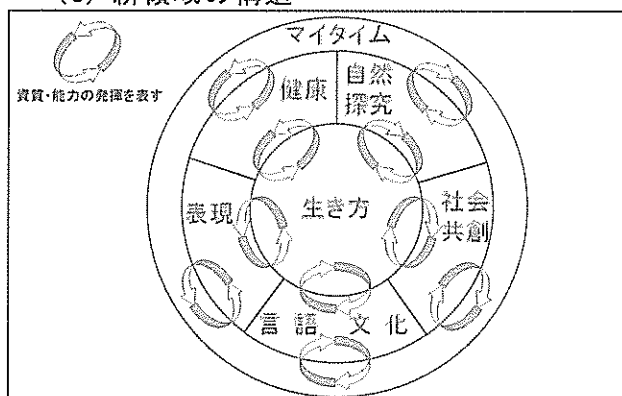
また、新領域においては「学習者の求め」を重視している。これは、これまで大切にされてきたことではあるが、内容の枠のくくりや系統といったものにより、十分に子供たちの求めに応じきれていなかったことも事実である。そこで、従来の教科型教育課程のように、内容に子供を近付けるのではなく、子供に内容を近付ける立場をとる。そうすることで、子供の求めに応じやすい状況、つまり、未来創造型の資質・能力を発揮しやすい状況をつくることができると考える。



【図9 本校が設定している新領域等】

新領域は、具体的に「文化継承・創造」の観点では、「言語運用・コミュニケーション」を内容の中心とする領域「言語文化」、「数学的・科学的リテラシー」を内容の中心とする領域「自然探究」を設定している。「社会的課題」の観点では、「地球環境・環境保全など責任ある市民生活づくり」を内容の中心とする領域「社会共創」、「自他の健康づくり」を内容の中心とする領域「健康」を設定している。「人間的欲求」の観点では、「豊かな感性と創造性の基礎」を内容の中心とする「表現」、「自己の生き方への内省・解決」を内容の中心とする「生き方」を設定している。また、これら6領域に加えて、6領域の学びをつなぎ、自己の学びを方向付けていくことをねらいとする「マイタイム」の1時間を設定している。

(3) 新領域の構造



【図10 新領域の構造】

図10は、新領域の構造を表したものである。本校では、「生き方」を中心とし、他の5つの新領域が周囲に位置付く構造をとっている。これは学習対象が違っていても、学習の最終ゴールは自己の生き方をつくっていくことにあるからである。「言語文化」「自然探究」「社会共創」「表現」「健康」の5つの新領域は、それらが担う学習対象へのかかわりを通して自己の生き方をつくっていく学習ともいえる。また、「生き方」と他の5つの新領域は、互いに未来創造型の資質・能力を発揮し合う関係としてとらえている。「マイタイム」は、6つの新領域の学びをつなぎ、自己の学びの方向

性をつくっていく時間であることから、一番外側に位置付けている。「マイタイム」と6つの新領域においても、資質・能力が発揮し合う関係にあるととらえている。特に、向上性については、それが明確に見とれるものと考えている。

(4) 新領域の内容設定

前述表1の新領域設定の観点を踏まえて、各新領域、表2のように内容を設定している。

【表2 各新領域の内容設定】

	言語文化	自然探究	社会共創	表現	健康	生き方
内容A	言語基礎	自然	自分と社会	造形	心	いのち
内容B	コミュニケーション	数理	自分と環境	音楽	運動生活	みらい
内容C	創生	数理科学	自分と文化	総合	食生活	くらし
内容D					生活環境	なかま

「言語文化」は、言語を人間の成長・発達に欠かすことのできない存在としてとらえ、言語の獲得過程において出合う対象を言語文化としている。この言語文化には、文学・落語などの「(文化)財」、広告やガイドブックなどの「もの」、挨拶や話し合いの手順などの「生活」がある。これらを「A言語基礎」「Bコミュニケーション」「C創生」といった3つの内容で構成している。

「自然探究」は、「A自然」「B数理」「C数理科学」の3つで内容を構成している。科学的な根拠をもとに多様・多量な情報を処理し、問題解決に生かす態度と能力の必要性が叫ばれている今日において、統計学の基礎となる学習を経験しておくことは大切である。このような背景のもと、「C数理科学」は設定されている。また、「A自然」及び「B数理」は、「C数理科学」を支える基礎として位置付けている。

「社会共創」は、「経済」「民主主義」「平和」「持続可能性」「文化」といった現代社会の特質や課題を内容構成の視点とし、「A自分と社会」「B自分と環境」「C自分と文化」の3つで内容を構成している。普遍的な市民知（どこの国、どの時代であろうとも、存在するものの認識）は、自分とのかかわりでしか生み出されないとの立場に立っていることが特徴である。

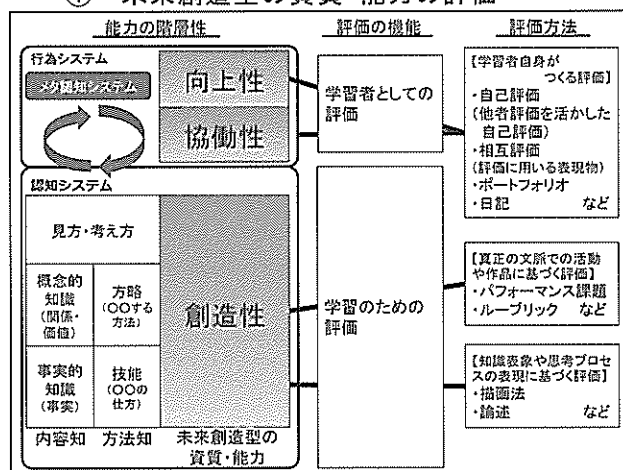
「表現」は、人間の表現活動及び芸術分類を内容構成の視点とし、「A造形」「B音楽」「C複合」の3つで内容を構成している。表現の組み合わせによる新しい芸術世界が広まってきている今日において、「C複合」は個々の表現の価値を組み合わせる新しい表現の価値を感じ取る上で意義ある内容である。よって、「A造形」及び「B音楽」は、「C複合」を支える基礎として位置付けられるものである。

「健康」は、こころの健康に着目し、こころと生活の関係を内容構成の視点とし、「A心」「B運動生活」「C食生活」「D生活環境」の4つで内容を構成している。「A心」は単独ではなく、他の内容と組み合わせて取り扱うことで、こころと身体の健康の双方における主体的な学びが期待できる。

「生き方」は、人の生き方にふれることで自分らしさに気づき、自分らしさを守り、生き方の幅を広げていくことをねらいとしている。そこで、人間軸、時間軸、空間軸、これら3つを包含する生命を人が関わるべき対象をとらえ、「Aいのち」「Bみらい」「Cくらし」「Dなかま」の4つで内容を構成している。特に、「Aいのち」は、生命倫理が揺らぎつつある今日において、重要な位置を占めるものである。

(5) 新領域の学習展開

① 未来創造型の資質・能力の評価

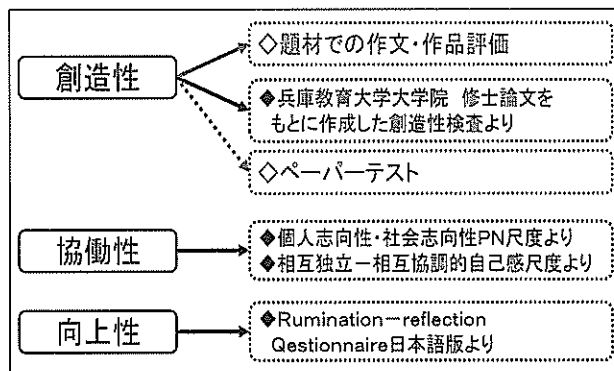


【図11 能力の階層性と評価の関係】

ウィギンズらの「知の構造」（ウィギンズ・マクタイ、2012）をもとに、石井英真氏が再構成した「知識のタイプ分け」に本研究の資質・能力を当てはめると、認知システムのうち、事実的知や概念的知識といった内容知、技能や方略といった方法知において「創造性」が発揮される。また、見方・考え方においても、「創造性」が発揮される。メタ認知を含む行為システムでは、「向上性」と「協働性」が発揮される（図11）。

このように考えると、評価の機能としては、「創造性」は形成的評価のうち、「学習のための評価」となる。「向上性」と「協働性」は「学習者としての評価」となる。また、評価方法については、「創造性」は、音声言語や文字言語、記号などによって表現される知識の表象や思考過程について定性的に評価する。「向上性」と「協働性」は、子供自らがつくるポートフォリオや日記などの表現物の相互評価、相互評価を基にした自己評価を参考に評価する。

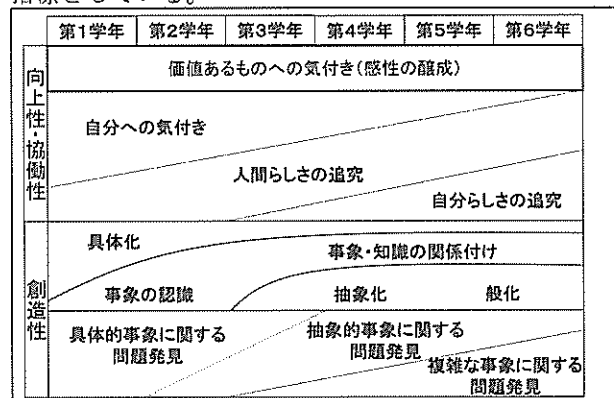
また、開発尺度を基にした意識調査を7月、11月、2月の年3回行い、その変容を分析することで、定量的にも未来創造型の資質・能力の育ちを見取る（図12）。



【図12 未来創造型の資質・能力の開発尺度】

② 未来創造型の資質・能力の評価指標

コンピテンシー・ベースの教育課程においては、全学年を視野に入れて、学習課題や学習活動に重複や偏りがないか、学年の発達に応じた資質・能力の質的な高まりがあるかを見ていくことがとても大切である。そこで、学年の発達に応じた資質・能力の質的な高まりについては図13のように系統化を図り、それを評価指標としている。



【図13 未来創造型の資質・能力の評価指標】

「向上性」については、比較思考が伸びることで、自分を主体から客体化して観ることができるようになっていくといった、自己を意識し始める発達段階から系統化を図っている。「協働性」については、自分志向と他者志向の相互作用から、「向上性」と同様にその系統化を図っている。「創造性」については、問題解決の発端である問題発見と、解決を進める思考方略の傾向性から系統化を図っている。

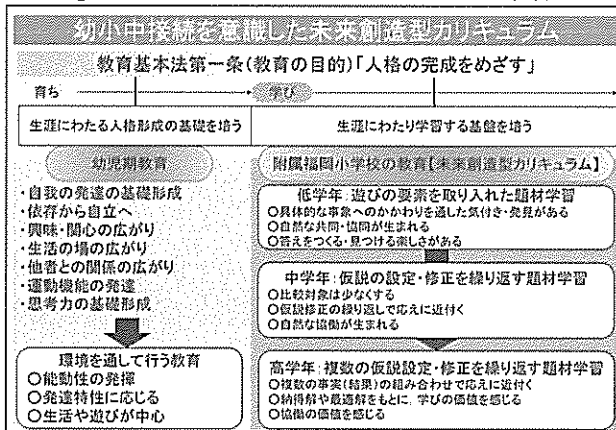
③ 各新領域の資質・能力の明確化

表5は、各新領域における未来創造型の資質・能力の要素を整理したものである。未来創造型の資質・能力と各新領域の要素との関係を明らかにすることは、教育課程全体で資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントへとつながる点で価値がある。カリキュラム・マネジメントについては、2016中教審答申でも、学習指導要領等の理念を実現するための必要な方策として重視されている。このことから、本校の取組は次期学習指導要領改訂の方向性とも合致している。

【表3 各領域における資質・能力の要素】

	創造性	協働性	向上性
言語文化	課題発見・解決	合意形成	言語視形成
	言語感覚	伝え合い	自己認知
	言語論理		
自然探究	分析・生産		
	発見力	関係形成	自己調整
	探究力	他者受容	自己決定
社会共創	未来発想力		自己伸長
	見方・考え方		
	共創的な見方・考え方	公民的態度	問題発見力
表現	芸術的な思考・表現力	参画意識	反省的思考
	社会認識	義務や責任	
	表現欲求	美的共感	自己認識
健康	知識・技能	内面伝達	自己決定
	感性的思考		
	自己開放		
生き方	適応への理解	双方向的 はたらきかけ	合意形成
	健康志向の態度		意志決定
	知識・技能		
生き方	自己形成	他者の尊重	自己への 見方・考え方
	価値認識	相互理解	意志決定
	実践的態度		
生き方	探究力		
	生き方への 関心・意欲		

④ 幼小中の接続から生まれる学習条件



【図14 新領域の学習条件】

幼児期は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う「育ち」の教育であり、小学校期は生涯にわたり学習する基礎を培う「学び」の教育である。このような特質を踏まえ、幼児期教育で大切にしている、生活や遊びを中心とし、子供が能動的に環境に働きかけることができるように、子供の発達特性に応じて環境を施す「環境を通して行う教育」を、全学年とも重視して学習を展開する。なかでも、低学年は、「遊び」を重視し、「遊び」の要素を取り入れた活動を積極的に取り入れて学習を展開する。中学年は、自己中心的な目線が他者にも目が向くようになり、具体的な思考をもとに抽象的な思考が可能になる時期といわれている。そのような発達特性を踏まえて、仮説を設定し、仮説修正を繰り返しながら応えを導いていく学習を展開する。ただし、比較可能な対象はできるだけ少なくすること

を学習構想の留意点としている。高学年は、抽象的な思考が深まり、現在の事象をもとに過去や未来の事象を推測することができるようになる時期といわれている。そのような発達特性を踏まえて、仮説を複数設定し、仮説修正したり、事実を組み合わせたりしながら応えを導いていく学習を展開する(図14)。

⑤ 新領域の題材構成と配列

本研究では、以下にある子安(2016)の考えをもとに、題材を開発、構成している。このような手順によりつくり出された題材を、学年段階や時期、育成される資質・能力の関連等を考慮しながら配列することにより、各新領域の年間指導計画は成立する。

【題材の構成手順】

- ① 題材のテーマ設定
- ② 題材で育成する資質・能力の具体化
※ 題材ごとに違いが生まれ、年間指導計画を作成する必要性
- ③ 題材に関わりのある素材の調査
※ 題材を学習するにふさわしい素材の発見
- ④ 素材に対する疑問づくり(子供の目線)
※ 素材に対する子供の反応を多様に構想
- ⑤ 素材の構造化を通じた教材化
※ 素材の構造を明確にし、教材化へ
- ⑥ 題材計画の立案、学習活動の組織
※ 題材計画に沿った学習活動の位置付け
- ⑦ 準備物や人的配置の検討
- ⑧ 次題材への発展の検討
※ 年間指導計画を意識した題材開発へ

各新領域においては、表6のように留意点を見だし、題材を仮配列している。

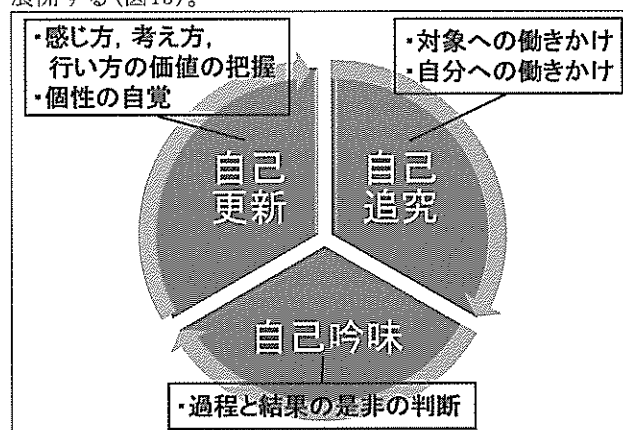
【表4 題材配列の留意点】

	留意点
言語文化	① 言語への接近の仕方を観点に、3つの内容を配列する。 ② 文化や活動の価値への気づきをもとにして、日本語と英語を関連付ける。
自然探究	① 内容A「自然」や内容B「数理」の後に、内容C「数理科学」を配列する。 ② 内容Aと内容Bにおけるかかわりがある場合は、同時期に配列する。
社会共創	① 空間軸、時間軸、社会システム軸のつながりや広がりを見点を配列する。 ② 学年ごとに取り上げる内容の視点を設定する。
表現	① 内容A「造形」や内容B「音楽」の後に、内容C「複合」を配列する。 ② 内容A、内容B、内容C「複合」に共通のテーマを設定し、同時期に配列する。
健康	① 目標設定のためのオリエンテーションを設定する。 ② 内容A「心」は、必ず内容B「運動生活」、内容C「食生活」、内容D「生活環境」との関連を図る。
生き方	① 内容A「いのち」は、全学年で重視する。 ② 低・中・高学年の各段階で、重視する内容を設定する。

⑥ 1 題材レベルの学習過程

本研究では、対象との強いかわりを通して自分の感じ方、考え方、かわり方がよりよいものになっていく活動の中にこそ、未来創造型の資質・能力を十分に発揮する子供の姿が見てとれると考えている。このことを、全新領域共通の学びを設定することで可能にしようと考えている。

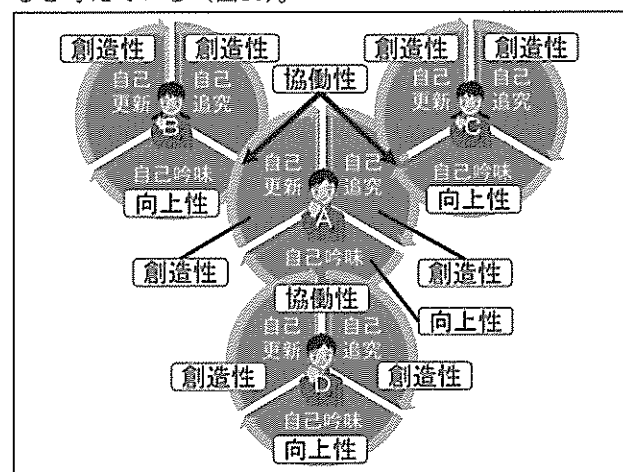
具体的には、どの新領域も「自己追究」「自己吟味」「自己更新」の3つの活動による題材レベルの学習を展開する(図15)。



【図15 全領域共通の学び】

「自己追究」とは、強い求めを基盤とし、対象と対象に向かう自分とに自ら働きかける主体的な活動である。「自己吟味」とは、「自己追究」過程とその結果についてその是非を問う、自己内における主体的な交流活動である。「自己更新」とは、「自己追究」で見いだした自分の感じ方、考え方、行い方に価値を見いだしたり、自分の個性をとらえて自分の中に取り込んだりする主体的な活動である。

3つの活動と未来創造型の資質・能力とは、「自己追究」と「自己更新」の活動で「創造性」が、「自己吟味」の活動で「向上性」が主に発揮される関係にあると考えている。また、3つの活動各々において必然性に基づく他者とのかわり方で「協働性」が発揮されると考えている(図16)。



【図16 題材レベルの学びと資質・能力の関係】

5 本年度研究の成果と今後の方向性

(1) 子供の姿の変容

○ 題材学習が進むにつれて、学習材が子供にとって身近な存在へと変わっていった。

(例) 学習時間以外にも個人的に調べている。／いろいろな解決・表現方法を子供自ら組み合わせている。

○ 毎時間の学習を楽しみに待つ姿、活動や思考に没頭する姿が数多く見られるようになった。

○ グループの活動で、自分がもつ能力以上のものを発揮する子供の姿が見られた。

○ 今まででは見過ごしていたものにも気を留めて、気付きや発見を教師や友達に伝える姿が増えてきた。

(2) 質問紙調査から

【表5 高い数値の維持が見られた資質・能力項目】

	協働性		向上性		創造性		
1年	推量	貢献	向上心			疑問追究	原因分析
2年	推量	貢献	向上心	体験想起	挑戦意欲	疑問追究	原因分析
3年	推量	貢献	自己省察	体験想起	挑戦意欲	疑問追究	原因分析
4年	推量	貢献	自己省察	体験想起	挑戦意欲	粘り強さ	原因分析
5年	推量	貢献		体験想起	挑戦意欲	疑問追究	原因分析
6年	推量	貢献		体験想起		粘り強さ	原因分析

表5は、平成27年7、11月、平成28年2、7、11月の計5回(1年生は平成28年7、11月の2回)の児童への質問紙調査において、高い数値を維持している項目を取り出したものである。協働性については、他者の気持ちや考えに思いを寄せる「推量」、みんなの役に立ちたい「貢献」、向上性については、成功や失敗経験を思い起こす「体験想起」、創造性については、失敗してもあきらめずにその原因を探ろうとする「原因分析」が全学年に共通しているとの結果が得られた。

このことから、協働性としての他者志向の育ちは、向上性や創造性の自分志向の育ちに関係しているのではと推測している。昨年度明らかにできなかった向上性と協働性、創造性の関係が見えてきた。

(3) 今後の方向性

子供の知的な好奇心を喚起し、本気になって問題解決に挑む学習材の開発を続けるとともに、各新領域が特に育成する未来創造型の資質・能力を明らかにすることで、新領域各々の存在意義を示していきたい。

また、未来創造型の資質・能力の育成指標の見直しも必要である。特に、向上性、協働性、創造性それぞれの関係を正しく見取ることができる信頼性の高い評価内容と方法を明らかにしていきたい。

(研究部長 二 串 英 一)

参考・引用文献

- 中央教育審議会 (2014). 「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について (諮問)」. 文部科学省
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm) .
- 安彦忠彦 (2014). 『「コンピテンシー・ベース」を超える授業づくり (教育の羅針盤)』. 図書文化社.
- 経済同友会 (2014). 「学習指導要領改訂へむけた意見」. 経済同友会
(<http://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2014/pdf/141126c.pdf>) .
- 松下佳代 (2010). 「〈新しい能力〉概念と教育—その背景と系譜」. 松下佳代 (編).
『〈新しい能力〉は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー』. ミネルヴァ書房. 1-42.
- 国立教育政策研究所 (2013). 「教育課程の編成に関する基礎的研究報告書 5
社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」. 国立教育政策研究所
(<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/Houkokusho-5.pdf>) .
- 国立教育政策研究所 (2015). 「資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書 I
使って育てて21世紀を生き抜くための資質・能力」. 国立教育政策研究所
(http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h27/2-1_all.pdf) .
- 中央教育審議会 (2015). 「教育課程企画特別部会 論点整理」. 文部科学省
(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/09/24/1361110_1.pdf) .
- 石井英真 (2015). 「今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影—」.
日本標準.
- 文部科学省 (2008). 「幼稚園教育要領解説」. 文部科学省.
- 安彦忠彦 (2006). 「新版 カリキュラム研究入門」. 勁草書房. 209-238.
- 水原克敏 (2010). 「学習指導要領は国民形成の設計書: その能力観と人間像の歴史的変遷」. 東北大学出版会.
199-254.
- 松尾知明 (2014). 「教育課程・方法論—コンピテンシーを育てる授業デザイン—」. 学文社.
- 石井英真 (2016). 「教育展望—カリキュラム・マネジメントで求められる評価のあり方」. 教育調査研究所.
- 石井英真 (2016). 「カリキュラム研究—資質・能力ベースのカリキュラムの危険性と可能性」.
日本カリキュラム学会. 83-89.
- 白水始 (2016). 「カリキュラム研究—「21世紀型能力」の整理を通じた学習論と学力論の関係再考」. 2016年3月.
日本カリキュラム学会. 99-104.
- 安彦忠彦 (2016). 「教育方法学研究—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影—人格形成を見据えた能力
育成をめざして」. 日本教育方法学会紀要第41巻.
- 石井英真 (2016). 「教育方法学研究—『コンピテンシー・ベース』を超える授業づくり—人格形成を見据えた能力
育成をめざして」. 日本教育方法学会紀要第41巻.
- 石井英真 (2015). 「現代アメリカにおける学力形成論の展開」 (増補版). 東信堂.
- 安彦忠彦 (2002). 「改訂版 教育課程編成論—学校は何を学ぶところか—」. 放送大学教育振興会.
- 西岡加名恵・石井英真・田中耕治 (2016). 「新しい教育評価入門」. 有斐閣コンパクト.
- 西康隆 (2001). 「小学生の創造的態度についての研究—体験・学力・創造的思考との関連を通して」.
兵庫教育大学大学院学校教育研究科
(<http://repository.hyogo-u.ac.jp/dspace/bitstream/10132/2314/1/ZF30302-002.pdf>) .
- 堀洋道 (監修). 吉田富二雄 (編) (2001). 『心理測定尺度集Ⅱ—人間と社会のつながりをとらえる
〈対人関係・価値観〉—』. サイエンス社.
- 堀洋道 (監修). 松井豊 (編) (2001). 『心理測定尺度集Ⅲ—心の健康をはかる〈適応・臨床〉—』. サイエンス社.
- ジーン・レイヴ, エティエンヌ・ウェンガー (1993). 「状況に埋め込まれた学習」. 産業図書.
- サンドラ・ジョンソン&キャスリン・ティラー (2016). 「脳科学が明らかにする大人の学習」.
ヒューマンバリュー.
- アンジェラ・ダックワース (2016). 「GRIT やり抜く力」. ダイアモンド社.
- 新教育課程ライブラリ VOL 1~12 (2016). ぎょうせい.
- 中央教育審議会 (2016).
「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について (答申)」.
文部科学省 (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm) .

領域「言語文化」部

生活から言語を見つめ、言語の価値を実感する領域「言語文化」

1 設定の必要性

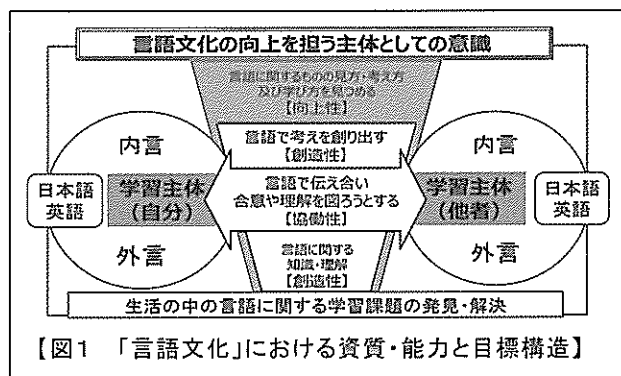
子供たちに実感させたい「言語の価値」とは、言語は、思考及びコミュニケーションを深めたり豊かにしたりするというものである。言語は人間の内と外の世界を繋ぎながら、感性や情緒の基盤となっている。しかし、母語である日本語と第二言語である外国語では、日本人であるわたしたちにもたらす価値が異なるを考える。わたしたちは、物事を知覚したり考えを創り出したりする際に心の中で言葉を発するが、その「内言」には母語である日本語を用いる。外国語で知識を増やしたり思考を進めたりすることは困難である。これに対して、実際に外に向かって音声化された「外言」が重要となるのは、外国語である。子供の言語発達プロセスでは、生活の中で聞こえる発音や単語を真似するだけの「外言」の習得から始まり、自己中心的言語としての外言を話して遊んでいるうちに、次第に思考する言葉としての「内言」を獲得していく。つまり、外国語を学ぶプロセスは、「外言」による他者とのコミュニケーションの重要性を特に意識させるのである。

以上のことからわたしたちは、子供たちが言語の価値を実感するためには、日本語と外国語（主として英語を扱うことから以後「英語」）の特性を相対的にとらえることが極めて重要であると考えた。そこで、日本語と英語を「言語」というまとまりでとらえ、子供たちが自分の生活の中にある言語を見つめ、言語の価値を実感する領域「言語文化」を構想した。

2 目標と内容

(1) 目標について

生活の中の言語について課題を発見し、その解決を図る主体的・協働的な言語活動を通して、言語に関する適切な理解のもと進んで伝え合う能力と創造的に思考する能力を高め、言語文化の向上を担う主体としての意識を育む。



(2) 内容について

言語は、わたしたちの成長・発達において欠かすことのできない存在である。子供は、乳幼児期から身近な人との関わりや生活の中で言語を獲得していき、発達段階に応じた適切な環境の中で、言語を通じて新たな情報を得たり、思考・判断・表現したりして、他者と関わる力を獲得していく。その過程で出合うのが言語文化である。

言語文化には、文学・落語などの「文化財」、広告やガイドブックなどの「もの」、挨拶や話合いの手順などの「生活」という3つの側面がある。そこで、子供が生活の中の言語についての課題を発見・解決することを通して、自分自身が言語文化の向上を担う主体であるという意識を育むことをねらい、表1に示す3つの内容を設定した。

【表1 領域「言語文化」の内容】

A 言語 基礎	ア 日本語や英語の語感、言葉の適正、リズム、美しさ、優れた表現などに関心をもつこと イ 日本語や英語の言葉、文や文章を話したり聞いたり、書いたり読んだりする際に必要な基礎的・基本的な知識・技能を習得すること（英語は日本語よりも初歩的な知識・技能とする） ウ 言語の機能・役割に気付くこと
B コ ミ ュ ニ ケー ション	ア 感じたり想像したり考えたりしたことを相手にわかるように説明すること イ 姿勢、表情、身体の動きなど、非言語の効果を意識すること ウ 様々な見方・考え方をする人々と、言語を通して情報や考えを伝え合い、合意形成や課題解決を図ること
C 創 生	ア 生活において見られる様々な言語事象から問いや課題解決のための道筋を見い出すこと イ 言語に関する課題を解決するための情報を収集・整理・分析し、価値ある考えを創り出すこと ウ 言語を通して自分と相手とを相対的に見つめ、よりよい言語文化を創り出そうとすること

領域「言語文化」の3つの内容は、表1左のように、重点的に育成する資質・能力が異なる。向上性については学びを深化させる上でB・Cに関わる。

3 資質・能力の系統

【表2 領域「言語文化」の資質・能力表】

資質・能力	構成要素	低学年	中学年	高学年
創造性	課題発見・解決	言語生活に関する具体的な活動や体験を通して、気になることやしたいことを見つけ、楽しく表現しようとしたり、新たな自分の考えを創り出そうとしたりする。	言語生活に関する考えのずれや対象へのあこがれから、言語生活について追究したいことを見い出し、よりよい言語生活を目指して活動しようとする。	言語生活に関する疑問や課題について自分なりの仮説を立て、疑問や課題の解決のために言語を駆使し、よりよい言語生活を創り出そうとする。
	言語感覚	日本語や英語のリズムに慣れ親しみ、楽しんで表現するとともに、言語の読み書きや基本的な言語の仕組みを理解する。	日本語や英語の語感、リズムの違いを感じ取り、進んで表現できるとともに、言語の読み書きや基本的な言語の仕組みを理解する。	日本語や英語の語感、言葉の適正、リズム、美しさ、表現の工夫などに関心をもち、言語の読み書きや言語が果たす多様な働きを理解する。
	言語論理	話や文章の大体をとらえたり、人物の言動、言葉の使い方や事柄の取り上げ方に考えをもったりする。	言葉や文などを関係付けて情報の中心をとらえたり、人物の言動、論の展開に考えをもったりする。	複数の文や文章を関係付けて意図や要旨をとらえたり、場面の描写や人物同士の関係、表現の工夫について考えをもったりする。
	分析・生産	言語生活に関する具体的な活動や体験を通して、日本語や英語のリズムに慣れ親しみ楽しんで表現したり、話や文章の大体をとらえて自分の考えを創り出したりする。	出された考えを図や表、メモなどを使って分析・評価する活動を通して、自分の考えを創り出し、理由や事例などを挙げながら説明しようとする。	複数の考えを図や表、メモなどを使って、関係付けたり、意味付けしたりする活動を通して、新たな考えを創り出し、理由や根拠を明確に説明しようとする。
協働性	合意形成	他者が伝える内容に興味をもち、進んで比較しながら聞いたり話したりしようとする。	自他の考えを関係付けながら、聞いたり話したりしようとする。	異なる考えをもつ者が納得できるよりよい考えを追求しながら、聞いたり話したりしようとする。
	伝え合い	自分の思いや考えについて、話題に沿って大事なことを落とさないように伝え合おうとする。 自分の考えを相手を意識しながらはっきりと伝えようとする。	話合いの流れに沿って、他者が伝える内容の中心について質問、感想、意見などを伝え合おうとする。 自分の考えを姿勢、表情、身体の動きなどを意識しながら伝えようとする。	他者が伝える内容の価値に気付き、自分の考えの根拠や理由、意図がわかるように伝え合おうとする。 自分の考えを姿勢、表情、身体の動きなどを工夫して効果的に伝えようとする。
向上性	言語観形成	日本語や英語に関わる言語文化に親しみをもち、進んで言葉に関わることができる。	日本語と英語における言語文化の共通点に気付き、言葉の使い方について考えをもつことができる。	日本語と英語における言語文化の共通点への理解を深め、言語の役割について考えをもつことができる。
	自己認知	言語生活に関わる問題について、教師の支援を受けながら解決の方法を考えて学び、自己の変容に気付くことができる。	課題解決の過程を振り返り、自他の変容や高まりを認め合い、次の目標と方法を考え、活動することができる。	課題解決の過程を振り返り、自他の変容や高まりを価値付けたり、よりよい言語生活に向けて期待をもったりすることができる。

4 学習展開

(1) 教材化

未来社会を生きる一員として、自分はどのように言語と関わって生きるのかという課題と向き合うことができるように、子供たちが「やってみたい」と切望する学習課題を見い出させる。そのために、教材化に値する言語文化の条件を以下に示す。

教材化に値する言語文化の条件

- 日常生活の中で触れる頻度が高いもので、子供が強い興味・関心を抱いている言語文化【親和性】
- 日常生活の中で触れる頻度は高いが、子供が見過ごしやすい、価値ある言語文化【価値性】
- 子供が「よく知らない」、または「知っているつもり」と思っているが、深く追究すると現在の認識から広がったり、新たな認識へと迫り着いたりする言語文化【発展性】

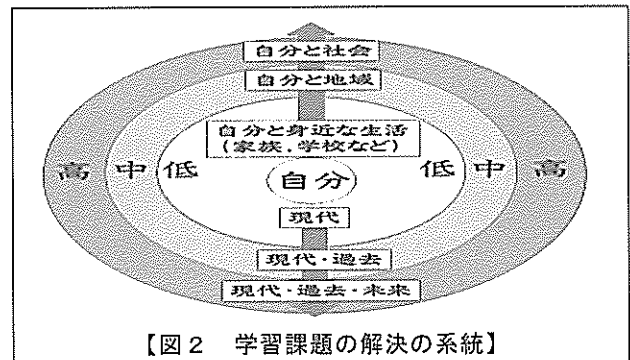
上記のような言語文化を学習のために対象化したものが学習材である。まず、〔内容A：言語基礎〕では、話す・聞く、書く、読む、言語の知識・技能などすべての基礎的な内容の習得を図ることができるものを学習材とする。次に、〔内容B：コミュニケーション〕及び〔内容C：創生〕では、内容Aで身に付けた力を基盤にして、言語文化の向上に資するものを学習材とする。どちらも、教科書教材を含む物語、新聞、説明文、随筆などの各種文章はもちろん、講話、映像、広告、パンフレット、記号やシンボル、流行語や挨拶などの話し言葉、世界各国で異なる言葉、落語や百人一首などに代表される伝統的な言語文化などが具体的な学習材となる。また、一題材の中で用いる学習材は一つではなく、題材の導入・展開・終末の各段階のねらいに応じたものを複数用いる。

(2) 題材の配列

領域「言語文化」の題材配列において、重視したことは①子供と学習材の関わり、②言語への接近の仕方の特徴、③日本語と英語の関連の3つである。

① 子供と学習材の関わり

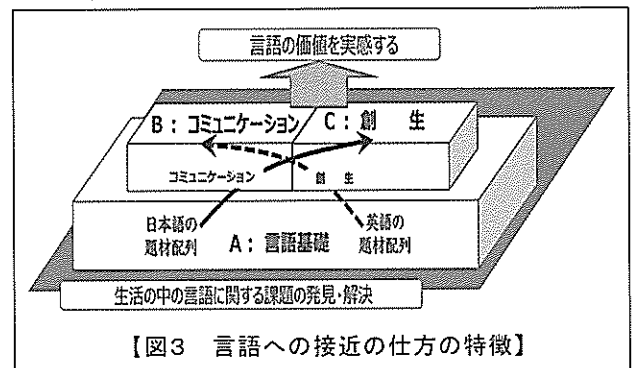
生活の中から言語を見つめるためには、子供が学習材に主体的に関わる必要がある。そこで、低・中・高学年の2学年ごとに学習課題の解決に挑む広さの系統（スコープ）を子供の興味・関心、学習材の特徴、学習課題の解決を考慮して設定した。具体的には、時間の系統として、低学年から現代、中学年では過去、高学年では未来の言語文化と学習課題の解決に挑む広さが広がっていく。また、対象の系統として、低学年から身近な生活、地域、社会の言語文化と学習課題の解決に挑む広さが拡充していくようにする（図2）。



【図2 学習課題の解決の系統】

② 言語への接近の仕方の特徴

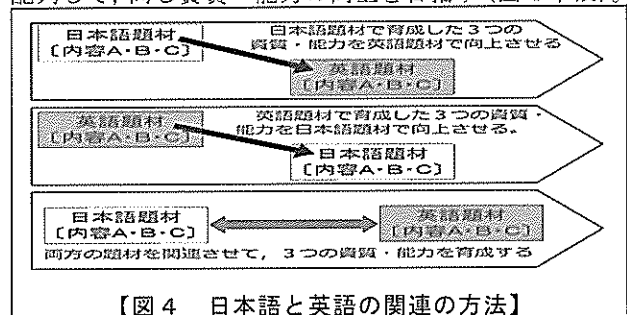
年間指導計画については、日本語分野・英語分野に分けて題材を配列する。〔内容A：言語基礎〕には、言語に関する知識・理解を図る「ことば」の学習を毎学期位置付ける。日本語分野では最終的に〔内容C：創生〕の学習を通して、言語を通して自分の考えを創り出す価値を実感することを目指す。英語分野では最終的に〔内容B：コミュニケーション〕の学習において、言語を通して人とのつながりを豊かにしていく価値を実感することを目指す。両者の特性を活かして言語の価値を実感させる（図3）。



【図3 言語への接近の仕方の特徴】

③ 日本語と英語の関連を図る題材配列

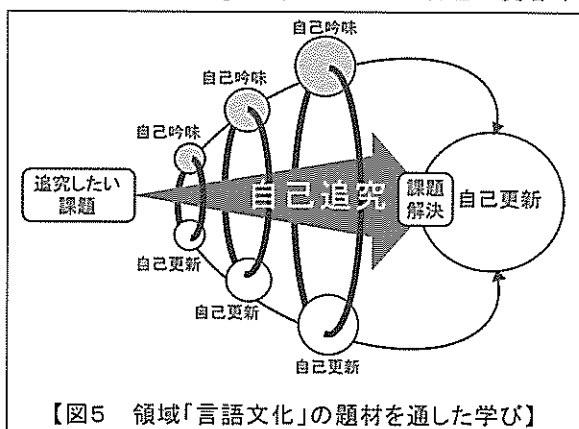
日本語と英語の関連を図る題材配列には三つの方法がある。領域「言語文化」では、言語への新たな気付きを日本語と英語を関係付けて見い出すようにする。そこで一つ目の方法は、英語文化への気付きを促す日本語題材を、関連する英語題材の前に位置付けて題材を配列する（図4上段）。二つ目は、日本語文化への気付きを促す英語題材を、関連する日本語題材の前に位置付けて題材を配列する（図4中段）。三つ目は、日本語文化と英語文化相互に関連する題材を並行して配列して、同じ資質・能力の向上を目指す（図4下段）。



【図4 日本語と英語の関連の方法】

(3) 題材を通した学び

領域「言語文化」の題材を通した学びでは、題材を貫く「自己追究」の学びが、「自己吟味」の学びによって深められ、「自己更新」の学びによって自己の変容や言語の価値を実感するに至ることをねらう（表2）（図5）。



【表2 領域「言語文化」の題材を通した学び】

自己追究	言語についての課題解決の必要性を意識して取り組みながら、言語の機能や役割等を感じたり気付いたりする学び
自己吟味	友達などの他者の多様な考えに触れながら、自分の判断や考えを見つめ直したり、新たな考えを生み出す喜びを感じたりする学び
自己更新	学んだことや学習の過程を振り返りながら、言語の価値を実感したり、自分の変容を見い出したりする学び

題材の導入において、子供たちは学習材と出会い、言語についてできるようになりたいことや知りたいことを話し合い、追究したい課題を明確にする。ここで発揮される資質・能力は「創造性（課題発見・解決）」である。この資質・能力は、題材の最後まで子供を「自己追究」に向かわせる根幹である。

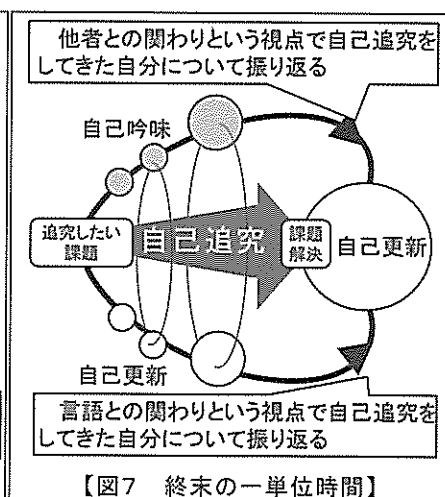
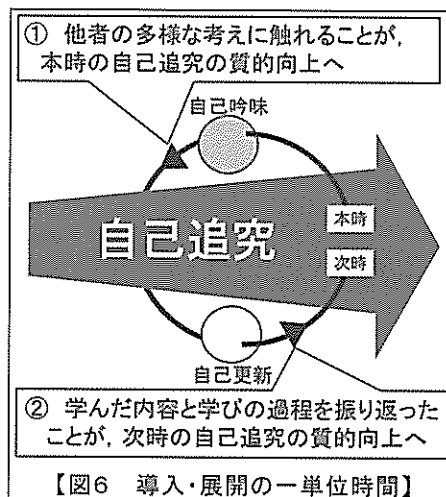
題材の展開においては、子供たちは課題解決に向けて、自分と教師で立案した計画に基づいて「自己追究」をさらに進めていく。ここで発揮される資質・能力は、主に言語に関する気付きを促す「創造性」である。だが、この「自己追究」を維持・活性化するために必須となるものが「自己吟味」と「自己更新」の学びである。これらの二つの学びは、「自己追究」の学びと同時にを行うことで学びの効力をさらに高めると考える。なぜなら、まず、「自己吟味」の学びで発揮される資質・能力は「協働性」であり、他者の多様な考え方に触れることで、自分の言語に関する見方・考え方を広げたり深めたり、修正したりすることができるからである。また、「自己更新」の学びで発揮される資質・能力は「向上性」であり、子供自身が自分の学びや変容を価値付けることで、言語の価値を実感したり、学習への満足感を感じたりすることができるからである。

「自己更新」の学びは題材の終末で比重が大きくなるが、一単位時間の学びにおいても、自分が学んだことや学習の過程をメタ認知的に振り返ることで、考えを形成し深める力を着実に高めていくことができると考える。

(4) 一単位時間の学び

領域「言語文化」における一単位時間の学びについては、題材の導入・展開は「自己追究」、終末においては「自己更新」の学びが主となる。他者の多様な考えに触れて自分の判断や考えを見つめ直す「自己吟味」の学びは、どの時間でも表出する学びである。

題材の導入・展開の一単位時間の学びでは、「自己吟味」の学びが本時の「自己追究」を刺激し、「自己更新」の学びが次時の「自己追究」に作用する仕組みである（図6）。題材の終末の一単位時間の学びでは、学習対象である言語と自分の関わり方（自己吟味）、他者と自分の関わり方（自己更新）の両面から、題材全体の「自己追究」の学びを振り返る仕組みである（図7）。



【引用・参考文献】

- 浜本純逸、「国語教育総論」、溪水社、2011。
 桑原隆、「言語生活者を育てる～言語生活論&ホール・ランゲージの地平～」、東洋館出版社、1996。
 細川英雄、「『ことばの市民』になる～言語文化教育学的思想と実践～」、ココ出版、2012。
 OECD教育研究革新センター、「グローバル化と言語能力」、明石書店、2015。

領域「言語文化」年間指導計画

学年	学期		1 学期							
	内容区分									
第1 学年	日本語	A 言語基礎	ことば⑩							
		えをみて はなそう⑤		くらべて よもう⑦	おはなしを たのしもう⑧	おおきくなったよ⑨	よんでみよう⑥	よくみて かこう④		
		コミュニケーション		たからものは なんですか⑩				ことばの おみせを ひらこう⑩		
	英語	C 創生	おはなが いっぱい⑩							
		B コミュニケーション	Hello!④ せかいの いろいろな ことばで あいさつしよう		Brwn Bear,brwn bear what do you see?④ いろいろな いろと どうぶつの いいかたを しろう		I'm happy.③ ジェスチャーを つけて つたえよう			
		C 創生	Storytelling① えいごで おはなしを きこう		Storytelling① おはなしを えいごで きこう					
A 言語基礎	ことば② アルファベット、フォニックス		ことば① アルファベット、フォニックス							
年間時数(306時間)			99時間							
第2 学年	日本語	A 言語基礎	ことば⑩	お話を音読しよう⑩	ていねいにかんさつして 記ろくしよう⑩	じゅんじよに 気をつけて読もう⑩	大きななまめんと シナリオにしよう⑩	ことば⑩	読んで 考えたことを話そう ⑩	
		B コミュニケーション	お話クイズをしよう⑩		インタビュー名人になろう⑩					
		C 創生	ことば遊びで楽しもう⑩				英語と日本語で絵本を楽しもう⑩			
	英語	B コミュニケーション	Do you have "a"?④ アルファベットクイズをつくろう		Let's make a zoo.④ 動物園をつくろう		I like soccer.③ 好きなものを つたえよう			
		C 創生	Storytelling① 英語でお話を聞こう		Storytelling① 英語でお話を聞こう		Storytelling① 英語でお話を聞こう			
		A 言語基礎	ことば① アルファベット、フォニックス	Numbers① 1から20まで		ことば① アルファベット、フォニックス				
年間時数(315時間)			108時間							
第3 学年	日本語	A 言語基礎	ことば⑩	場面の様子を思いうかべて 音読しよう⑩	まとまりをとらえて読み、 かんそうを伝えよう⑩	せつめいのくふうについて 話し合いをしよう⑦	ことば⑩			
		B コミュニケーション	みんなでつくろう ミュージカル⑩				出発!			
		C 創生	大きなファンタジー作品をしようかいしよう⑩							
	英語	B コミュニケーション	Do you like soccer?④ 好きなスポーツを伝えよう		I can swim.④ できることをしようかいしよう		What do you like?③ 好きなもの、なあに?			
		C 創生	Storytelling② 英語を聞いて想像しよう		Making a speech.⑤ できることをスピーチしよう		Storytelling① 英語を聞いて想像しよう			
		A 言語基礎	ことば⑩ アルファベット、フォニックス、ローマ字		What day is it today?① 今日は何曜日?		アルファベット、			
年間時数(280時間)			96時間							
第4 学年	日本語	A 言語基礎	ことば⑩	段落相互の関係を とらえて読もう⑩	興味をもったことや自分の考えを 新聞で伝えよう⑩	俳句と短歌の世界⑩	ことば⑩	故事		
		B コミュニケーション	だれもが関わり合うために⑩				ことわざからの学びを			
		C 創生	物語のひみつをさぐる⑩							
	英語	B コミュニケーション	What do you like?③ 好きなものをたずねよう		What do you want?④ 誕生日にほしいもの		What's this?④ クイズ大会をしよう			
		C 創生	Storytelling① 英語で聞いて想像しよう		This is my favorite.⑥ お気に入りのものをしようかいしよう		Storytelling① 英語を聞いて想像しよう			
		A 言語基礎	ことば⑩ アルファベット、フォニックス、身近な単語		ことば⑩ アルファベット、フォニックス					
年間時数(280時間)			96時間							
第5 学年	日本語	A 言語基礎	ことば⑦	新聞を読もう⑥	筆者の考えの進め方をとらえよう①		ことば⑥			
		B コミュニケーション	「きく」をつなごう④		あなたをとりこにする言葉のヒミツ⑩					
		C 創生	登場人物どうしの関わりが面白い物語を紹介しよう⑩		事実と意見を区別して報告書を書こう⑩		伝記を読み、自分の 生き方について考える⑦			
	英語	B コミュニケーション	Directions② あつのおすすめスポット		I study Japanese.④ マイ時間割をつくろう		What do you like?④ 友だちにインタビューしよう			
		C 創生			Making a speech.② 英語でスピーチ		What's this?④ 英語で説明しよう			
		A 言語基礎	ことば② アルファベット、フォニックス、身近な単語	ことば⑤ アルファベット、フォニックス、身近な単語						
年間時数(245時間)			84時間							
第6 学年	日本語	A 言語基礎	ことば⑩	筆者の意図をとらえ 自分の考えを発表しよう⑦	思考を助ける図表⑥	音で感じる日本語のこころ⑩	ことば⑦			
		B コミュニケーション	立場を明確にして話し合おう⑩		つくろう おいしい広告⑩		自分はこう考える⑧ 考え			
		C 創生	視点を変えて書こう⑩				登場人物の関係を とらえ、 人物の生き方について話し合おう⑩			
	英語	B コミュニケーション	This is our school!⑤ 外国の方に附属小を紹介しよう		What time do you get up?⑤ 休日の過ごし方		What are you doing?④ 今、何をしていますか?			
		C 創生			Making a speech.② 修学旅行の思い出					
		A 言語基礎	ことば② アルファベット、身近な単語や英文	Let's sing.④ 英語で歌う日本の歌		ことば② アルファベット、身近な単語や英文				
年間時数(245時間)			84時間							

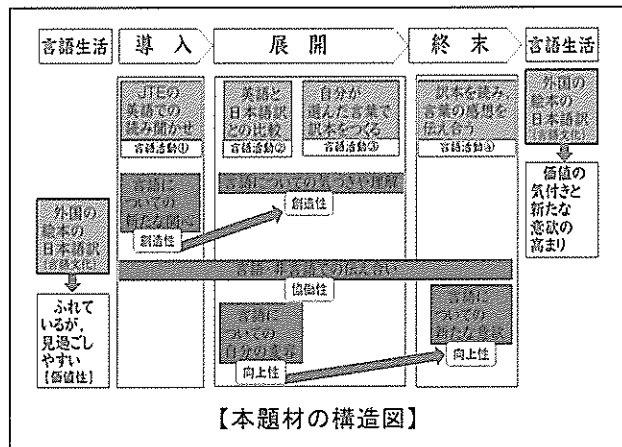
2 学期				3 学期			
ことば⑤				ことば⑩			
こえに だして よもう⑤	じゅんじょを かんがえながら よもう⑤	しらべたことを かこう⑤		てがみを かこう⑤	じかに きをつけて よもう⑤	すきなところを みつけて よもう⑤	しを よもう⑤
きいて しらせたいな ぼく・わたしの たのしいこと⑤	おはなしかいを ひらこう⑤			ふたりで かんがえよう⑤		もうすぐ 2年生⑩	
ふくおかに つたわる おはなしを しょうかいしよう⑩				みつけないな ぼく・わたしと にている おはなし⑤			
Fruits Vegetables.③ いろいろな くだものと やさいの いいかたを しろ				Making a Speech.⑤ ありがとうの きもちを つたえよう			
Making a speech.④ じぶんのことを えいごで しょうかいしよう		Storytelling① おはなしを えいごで きこう		Storytelling① えいごで おはなしを きこう			
		Christmas songs.① クリスマスソングを うたおう		ことば① アルファベット、フォニックス		FUKUWARAI② 体の部位の言い方を知ろう	
126時間				81時間			
音読けきをしよう⑩	せつめいのしかたに 気をつけて読もう⑩	組み立てを 考えて発表しよう⑩	人ぶつと自分を くらべて読もう ⑩	ことば⑩	知っていることと つないで読もう⑩	お話をそうぞうしながら 読もう⑩	すすんで考えを 出し合おう⑩
読み聞かせでつながろう⑩				ありがとうをつたえよう⑩			
				心にひびくことばでつくろう⑩			
Let's play cards.③ 休み時間を楽しもう				I like start② すきな形をつたえよう			
Making a speech.④ すきなものをスピーチしよう		Storytelling① お話を聞いてそうぞうしよう		Storytelling① お話を聞いてそうぞうしよう		Making a speech.④ 1年間の思い出を気もちとともにつたえよう	
		Christmas songs.① 英語で歌おう		ことば① アルファベット、フォニックス		Twister Game.① 体の部位の言い方を知ろう	
126時間				81時間			
場面のうつりかわりを とらえて感想をまとめよう⑩	おもしろいと思うところを しょうかいしよう⑩	組み立てにそって 物語を書こう⑩		ことば⑩	考えの進め方をとらえて、 科学読み物をしょうかいしよう⑦		見せながら話すときには⑦
あらつ町へ！ローマ字探検隊⑩				落語でみがく言葉の力⑩			
ビクトグラムが伝える言葉⑩				心にのこる あの言葉⑩			
Let's have a barbecue.④ バーベキューの買い物をしよう		I'm good at playing soccer!④ ぼくの特技、教えます		What's "Osechi"?④ 日本のお正月を説明しよう			
		Let's present yourself.⑤ 自分のことをプレゼンしよう		Storytelling① お話を聞いて想像しよう		Let's make a skit.⑥ 英語でスキットをつくろう	Storytelling① お話を聞いて想像しよう
ことば⑩ フォニックス、ローマ字		Christmas songs.① 英語で歌おう		ことば⑥ アルファベット、フォニックス、身近な単語			
112時間				72時間			
成語の世界⑤	説明の仕方を とらえて読もう⑤	クラブ活動リーフ レットを書こう⑩	場面の移り変わりや 気持ちの変化を読み 想像文に書こう⑩	ことば⑤	詩を楽しもう③	事実と意見をとらえ、報告書を書こう⑩	
伝えよう⑩		言葉でみせる 伝えたい思い⑩		伝え合おう 言葉のみ力⑤			
言葉でつくる「笑」の世界⑩				作者の思いを感じ取ろう⑩			
Turn right.④ 道案内をしよう				Let's go abroad.④ 世界の国々のみ力を発見しよう			
		Let's read and sing "SUKIYAKI". ① みんなでつくる "SUKIYAKI"ソング		音読でLet's talk!⑩ ～We are good friends.～			
クス、身近な単語				ことば① アルファベット、フォニックス、身近な単語			
112時間				72時間			
説明の仕方の 工夫を見つけよう⑥	古典の世界④	すぐれた表現に着目して、 物語のみ力を伝え合おう⑥		ことば⑤	手紙・メール・FAX・ いろいろな通信文⑤	事例と意見の関係をおさえて、自分の考えを書こう⑩	
言葉でえがく未来⑩				最後の一年に期待をこめて⑤			
				想像を広げて書こう⑦			
do you like?④ メニューを作ろう	伝える？和食・WASHOKUのみ力⑤			What did you do?② 冬休みの思い出		Discover JAPAN!⑩ 世界にほこる日本文化を伝えよう	
				Making a speech.⑥ 英語でスピーチ			
Let's introduce Japanese items to the world.⑩ プロに学ぶ プレゼン英語				ことば② アルファベット、フォニックス、身近な単語			
98時間				63時間			
感じたことを 朗読で表現しよう⑥		筆者のものの見方をとらえ、 自分の考えをまとめよう⑥		ことば④	伝統文化を楽しもう ④	読み手が納得する意見文を書こう⑩	
よう ネットケット⑦		オマージュ作品で読み解く物語の世界⑩					
この思いを届けよう！感動CM制作所⑩				共に考える～言葉って何だろう～⑩			
go to Italy.④ を旅行に誘おう	解決しよう！ニッポンの不思議⑩			My dream④ 「夢宣言」をしよう		プレゼンしよう！6年間の思い出⑩	
Making a speech.④ 自分のこと				Making a skit.⑥ オリジナルの物語をつくろう			
		Let's sing and dance!④ フラッシュモブに挑戦		ことば① アルファベット、身近な単語や英文			
98時間				63時間			

1 資質・能力

- 英語と挿絵から場面の登場人物の様子に合う日本語を想像したり、訳者の言葉の選び方の工夫をとらえたりすることができる。（創造性）
- 場面の様子について想像したことや英語と日本語を比べて、気付いたことなどについて自分の考えを意欲的に伝え合い、それぞれの感じ方の違いを認め合うことができる。（協働性）
- 英語と日本語訳を比べて読むことで、訳者の表現の工夫や日本語の多様さに気付き、想像を広げて楽しんで読書しようとするすることができる。（向上性）

2 題材の考え方

本題材では、イギリスの絵本「Rosie's Walk」の英語と日本語訳された「ロージーのおさんぽ」を比べて読み、訳者の言葉の選び方の工夫や日本語の多様さ、人によって言葉の感じ方が違うことなどに気付くことをねらいとしている。そのために、まず、導入段階では、JTEをしている坂井さんに「Rosie's Walk」を英語で読み聞かせしてもらい、物語の内容について英語と絵から想像して話し合う。そして、絵本に書かれている英語の意味を帰国子女学級の友達に教えてもらい、英語と日本語訳の違いについて追究する学習課題をとらえる。次に、展開の前段階では、挿絵と英語から想像を広げ、場面に合う日本語を話し合い、訳者の言葉の選び方の工夫や友達との場面や言葉についての感じ方の違いに気付くことができるようにする。最後に、終末段階では、自分の選んだ言葉で訳本をつくり、互いの訳本を読み合うことで、原作の英語と日本語訳の言葉、日本語訳の言葉と自分の言葉、友達が選んだ言葉と自分の言葉の3つの観点で言葉比べて気付いたことを伝え合い、言葉についての感じ方の変容を実感できるようにする。



【本題材の構造図】

3 学習の流れと考察

導入段階のねらい：1～3/15時

英語で読み聞かせを聞き、英語と日本語を比べて読もうとすることができる。

- (1) 英語で読み聞かせを聞き、感想を話し合う。

この写真は、導入段階の学習の様子を示しています。左側の写真では、先生が英語で読み聞かせをしており、生徒たちが興味を持って聞いています。右側の写真では、生徒たちが日本語訳の「ロージーのおさんぽ」を早く読んでみたいという感想を話し合っています。また、英語だけで絵を見ると大体わかるからおもしろいという感想も出ています。

【資料1 英語で読み聞かせを聞き、感想を話し合う】

- (2) 英語と日本語訳を比べて、学習課題を話し合う。

この写真は、展開段階の学習の様子を示しています。左側の写真では、生徒たちが「went for a walk」は「おさんぽに 行った」という意味だと話し合っています。右側の写真では、生徒たちが日本語訳の「おさんぽに おでかけ」と書いてあることを指摘し、他の日本語訳はどんな言葉になっているのかなと話し合っています。

【資料2 日本語訳について気付いたことを話し合う】

この写真は、学習課題を話し合った後のA児の感想を示しています。A児は、えい語と日本語を比べると、すごしちがって、なんでうづうんだらうと思ってるわくわくが、いっぱいある。これからは、どんなことばがでてくるのかたのしめです。

【資料3 学習課題を話し合った後のA児の感想】

導入段階では、英語で読み聞かせをしてもらい、感想を話し合った（資料1）。そして、帰国子女学級の友達に英語の意味を聞き、気付いたことを話し合った（資料2）。その際、A児は、直訳と日本語訳との違いに疑問をもち、今後への期待感を高めた（資料3）。

考察1

英語で読み聞かせをしてもらい、帰国子女学級の友達に聞いた英語の直訳と日本語訳とを比べる活動は創造性を育む上で有効であった。その根拠は、言葉の違いに問いをもち、英語と日本語訳を比べて読みたいという意欲の高まりが感想から読み取れるからである。

展開段階のねらい: 4～13/15時

挿絵と英語から場面の様子を想像し、訳者の言葉の選び方の工夫に気付く、場面の様子に合う言葉を選んで、訳本を作ることができる。

- (1) 挿絵と英語から場面の様子を想像して、場面に合う言葉について話し合う。



挿絵のロージーの動きをよく見てみよう。

across the yard
おにわを

庭を「横切って」を、訳者はどんな言葉で訳しているのかな。

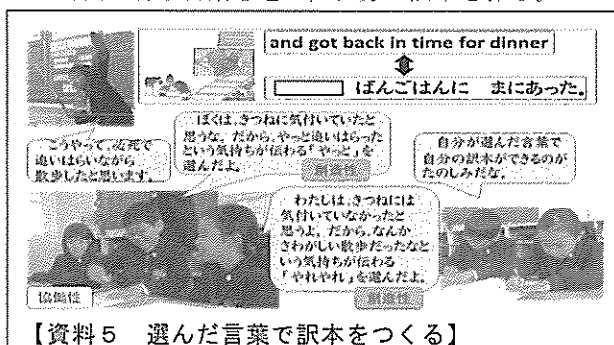
訳者は「すたこら」と訳しているよ。どうしてかな。

「森のくまさん」の歌詞と同じで「すたこらささ」と述べている感じを表しているんじゃないかな。

訳者は場面の様子にぴったりの言葉を選んでるんだね。

【資料4 訳者の言葉の選び方の工夫を話し合う】

- (2) 友達と伝え合った言葉や訳者が選んだ言葉から場面に合う言葉を選び、自分の訳本を作る。



and got back in time for dinner
ばんごはんは まにあった。

ぼくは、さつねに気付いていたと思うな。だから、やっと思い出したという気持ちで「やっ」と選んだよ。

自分が選んだ言葉で自分の訳本ができるのがたのしみだな。

わたしは、さつねには気付いていなかったと思うよ。だから、なんかさわがしい散歩だったなという気持ちが伝わる「やれやれ」を選んだよ。

【資料5 選んだ言葉で訳本をつくる】

友だちがえらんだことは、つかれたが、やれやれ、かんいなのものがたくさんありました。同じ場面でも、いろいろなそうぞうができておもしろかったです。こぼれかちがうと、そうぞうが広がったのいいなと思います。

【資料6 伝え合った後のA児の感想】

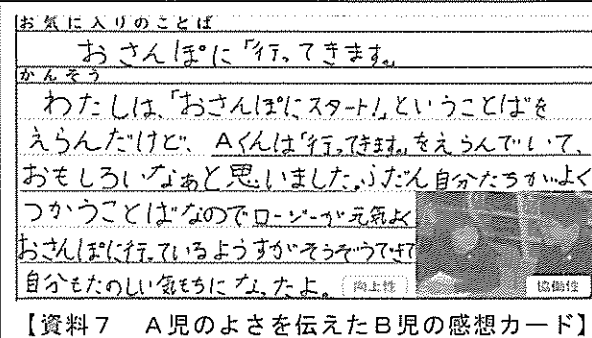
展開段階では、直訳と日本語訳を比べて、訳者の言葉の選び方の工夫について話し合った（資料4）。その後、挿絵と英語から訳者の言葉以外で、場面に合う言葉を伝え合った。その際、「主人公のロージーがきつねに気付く、わなをかけながら散歩をした」のか「きつねには気付かずただ散歩をしていた」のかで解釈が分かれ、それぞれの解釈に合う言葉を選んで、自分の訳本を作った（資料5）。

考察2

訳者の表現の工夫や場面に合う言葉を伝え合い、訳本を作る活動は創造性を育む上で有効であった。その根拠は、A児の感想から、同じ動作を表す日本語の多様性に気付いたり、同じ場面でも言葉の違いで想像が広がるなど想像を広げて絵本を読む楽しさを実感している姿が読み取れるからである（資料6）。

終末段階のねらい: 14～15/15時

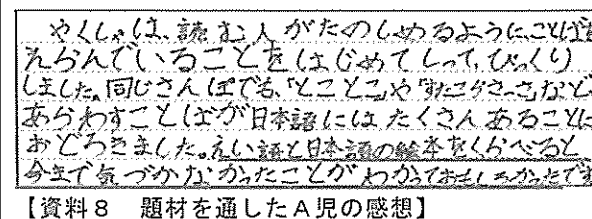
友達がつくった訳本を読み、選んだ言葉のよさを認め合い、題材を通して学んだ言語の価値をとらえることができる。



お気に入りのことば
おさんぽに「行、てきます。」

かんそう
わたしは、「おさんぽにスタート!」ということばをえらんだけど、Aくんは「行、てきます」をえらんでいて、おもしろい「あ」と思いました。自分たちよりよくつかうことばなのでロージーが元氣なおさんぽに行っているようすがそうぞうで自分たちのいい気持ちにふたよ。

【資料7 A児のよさを伝えたB児の感想カード】



やくい、は、読む人がたのしめるようにことばをえらんでいることをはじめてして、びっくりしました。同じさんぽでも、ことばや「さつね」さなごあらわすことばが日本語にはたくさんあることにおどろきました。えい語と日本語の絵本をくらべると、今まで気づかなかったことがわかっておもしろかったです。

【資料8 題材を通したA児の感想】

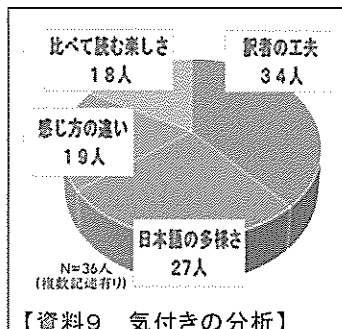
終末段階では、作った訳本を読み合い、選んだ言葉のよさを感想カードに書いて伝え合う活動を設定した。その際、A児は、自分たちがよく使う言葉を選ぶことで、想像が広がって楽しいことをB児から伝えられ、訳本を作る達成感を味わうことができた（資料7）。

考察3

選んだ言葉のよさを感想カードで伝える活動は、向上性を育む上で有効であった。その根拠は、同じお話でも、場面に合うと考えて選んだ言葉が人によって違うおもしろさに気付いたり、「散歩する」という言葉を表す日本語の多様さや訳者が言葉を選ぶ工夫に気付く、英語と日本語訳を比べて読書する楽しさを実感したりしている姿が見られたからである（資料8）。

全体考察

題材終了後の感想では、訳者の言葉の選び方の工夫や日本語の多様さに気付くなどの創造性、絵本を比べて読む楽しさをとらえるなどの向上性の表出が見られた（資料9）。それは、場面に合う言葉を訳者や友達と比べて、訳本を作る活動が有効に働いたためと考える。今後は、他の訳本でも英語と日本語訳を比べて読むなどして、さらに日本語の多様さやおもしろさに気付かせていく必要がある。



1 資質・能力

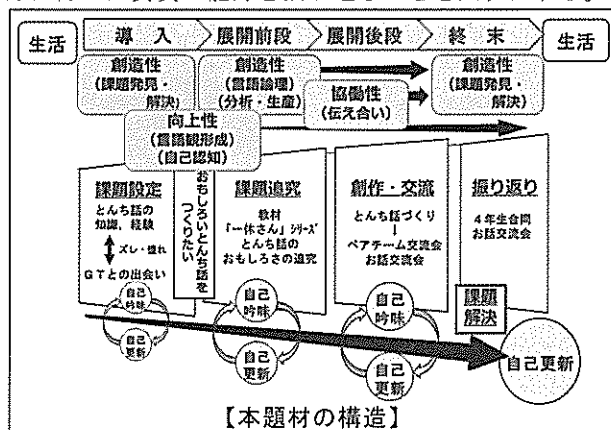
- とんち話のおもしろさ（とんちを使った内容、人物像、構成）を明らかにし、自分たちの思いに合うとんちや話を考えながら、言葉にして創作したり、表現したりしようすることができる。（創造性）
- 日本や世界のとんち話のおもしろさや込められた思い、語り継ぐ願いについての考えを伝えたり、自分たちの創作とんち話の工夫点やつくりかえる点を話し合ったりしようすることができる。（協働性）
- 毎時間の振り返りから、相手を意識した言葉の使い方に対する考えを出し合いながら、表現したいという思いを高めていくことができる。（向上性）

2 題材の考え方

本題材では、「おもしろいオリジナルとんち話をつくりたい」という願いのもと、おもしろさは何か追究し、込められた思いや語り継ぐ人の願いをとらえた上で、創作や伝え合う活動を通して、言葉の使い方を考えた言語表現をしようすることをねらいとしている。

そのために、①とんち話を語り継ぐ人との出会いをもとに、とんち話への興味をもち、学習課題について話し合うこと、②福岡及び九州、日本や世界に語り継がれるとんち話のおもしろさを追究しながら、作品に込められた思いや語り継ぐ人の願いをとらえること、③自分たちが見いだしたとんち話のおもしろさ（内容、人物像、構成、表現）を創作の観点とし、とんち話をつくり、ペアチームで伝え合いながら、付加・修正、強化していくこと、④「4年生合同とんち話交流会」を開き、言葉への気付きやわかったこと、自分が変容したことから、これから日常生活の中で言葉を使うにあたり、大切にしたいことを話し合うことである。

特に、③においては、使う言葉にこだわって創作したことを受け、④では、これからの生活につなげたい身に付いた資質・能力を振り返ることを大切にする。



3 学習の流れと考察

導入段階のねらい：1～3/20時

G Tによるとんち話の語りを聞き、笑い話に興味をもち、学習の課題を話し合うことができる。

G Tによるとんち話を聞き、学習課題を話し合う。



導入段階では、笑い話に関心をもつために、落語の学習や学芸会の取り組みで、聞き手が笑ってくれた経験を振り返った。「もっとおもしろい話を知りたい」という願いから、とんち話に関心をもつため、外国のG Tと出会う場を設定した。外国で有名な日本のとんち話を知ることで、自分のおもしろいと感じていた話とのズレを感じることができた。さらに「まだ知らない話を知りたい」という願いから、より関心を高めさせるために、日本人G Tと出会う場を設定した。福岡に語り継がれる話を知ったとき、「自分もおもしろいとんち話をつくりたい」という願いをもった（資料1）。

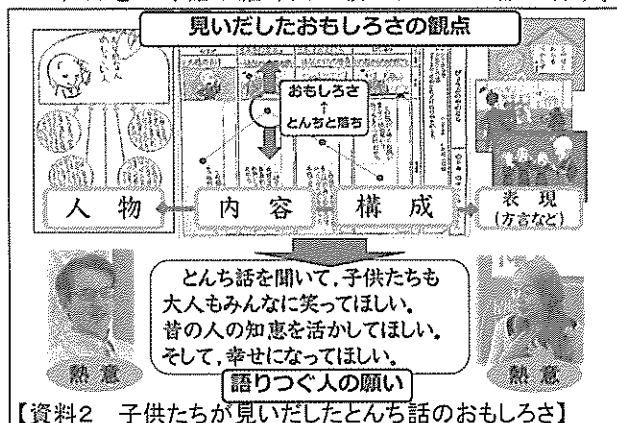
考察1

課題意識をもたせるために、語り継ぐG Tとの出会いの場を段階的に設定し、関わり方を工夫したことは創造性を高める上で有効であった。それは、子供たちは、これまで第3・4学年に渡り、落語や博多にわか、百人一首と身近である伝統的な言語文化を材に追究した経験ととんち話に対する興味がつながったこと、2人のG Tとの関わりから、自分たちもつくって伝えたいという追究意欲をもつことができたことである。

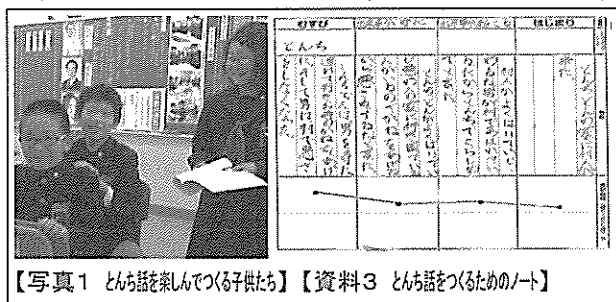
展開段階のねらい：4～17/20時

とんち話のおもしろさを追究し、自分たちの創作オリジナルとんち話をつくることことができる。

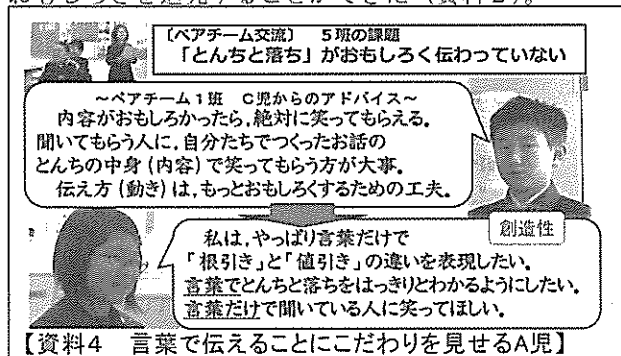
- (1) とんち話のおもしろさを追究し、作品にこめられた思いや語り継ぐ人の願いについて話し合う。



- (2) 追究したことを活かして、とんち話をつくる。



展開段階前段では、とんち話をつくるために、複数の作品を読み比べる活動を設定した。読み比べたことから、おもしろさの観点①内容②構成③登場人物を見いだすことができた。また、とんちの型(①おもしろ言葉②ひっくり返し③なるほど解説)に気付くこともできた。そして、今も世界中に多くの作品が残る理由について、とんち話を語り継ぐ2人のGTとともに話し合う場を設定した。子供たちは、語り継ぐ人の願いを聞くことで、視点を移し、おもしろさを追究することができた(資料2)。



後段では、自分たちで見いだしたおもしろさの観点を活かし、とんち話を創作する活動の場を設定した。A児、B児のチームはともに「なるほど言葉型」を選択し創作した(資料1, 資料3)。さらに「チームの話がおもしろいか試したい」という願いに応じ、ペアチームやGTの先生との交流の場を設定した。B児のチームは「かねが〇〇」の述語にまでこだわったとんちを考え、言葉を吟味することができた。A児は、動きを工夫するのではなく、使う言葉を吟味することでおもしろさを追究することにこだわりをもつことができた(資料4)。

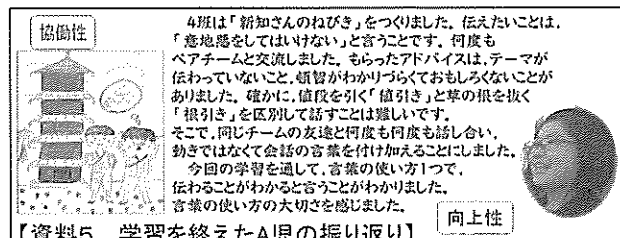
考察2

創作において段階的にGT(脚本家を含む)との交流の場をもったことは創造性を高める上で有効であった。その根拠は、創作したとんちの言葉の使い方に着眼した助言をもらうことで、動きでおもしろさを表現しようとした子供たちが、再度言葉に返り、つくりかえる姿から見取ることができるからである(資料4)。

終末段階のねらい: 18~20/20時

「お話交流会」を開き、自分の変容に気付くとともに、大切にしたいことを話し合うことができる。

- (1) 4年生合同の「お話交流会」を開き、これから大切にしていきたいことを話し合う。



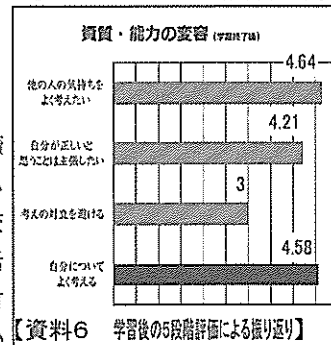
終末段階では、「お話交流会」を開き、自己の変容や気付きから、今後大切にしたいことを話し合う場を設定した。「お話交流会」では、初めて聞く話に対して、聞き手がとんちから型を考えたり、使っている言葉を吟味して聞いたり、動きよりも言葉にこだわった感想が多く聞かれた交流会となった。B児は、これまでの活動を振り返り、言葉にこだわって何度も話し合い、つくりがえながら仕上げたことへの充実感と、これから日頃自分が使う言葉が相手にどうなのかを考えていきたいという意識をもつことができた(資料5)。

考察3

創作と交流を並行しながら作品をつくり上げたことは協働性を高める上で有効であった。その根拠は、交流を重ねることで、伝え方で魅せるのではなく、使う言葉への意識がより一層高まったこと、何度もつくりかえる活動を通して、チームの仲間と共に新たなものをつくり出すことの楽しさ、喜びを感じることができたことが読み取ることができるからである(資料5)。

全体考察

本題材では、向上性と協働性の伸びがわかる(資料6)。GTやペアチームとの意図的、段階的な交流、チームによる創作活動を設定したことが、言葉にこだわりおもしろいとんちにしたいという思いをより高め育む上で有効に働いたためであると考えられる。今後の課題は、創造性につながる個の力の高まりを実感できる場の設定である。



指導事例3 第6学年 題材 この思いを届けよう！感動CM制作所

指導者 山田 深雪

1 資質・能力

○ 物語の構成、言葉と人物の性格・心情との関連、言葉と人物の行動との関連、言葉と映像との関連、伝えたい「思い」の主張性などを考えながら、ドラマ仕立ての感動性の高いCMをつくることができる。

(創造性)

○ 学習内容やチームワークの振り返りを通して、CMを見る人の心が動くように、シナリオの表現や提示する映像をよりよくしていきたいという意識を高めていくことができる。

(協働性)

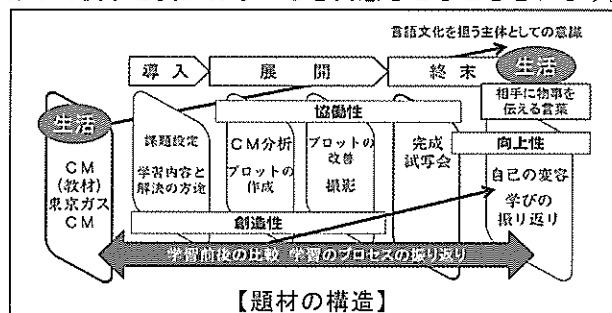
○ 他者の考えに共感したり主体的に自分の考えを述べたりしながらCMに使う言葉や映像を吟味したり、学習への取り組み方について話し合ったりすることができる。

(向上性)

2 題材の考え方

本題材では、仲間と協働しながらCMをつくることを通して、言葉には、情動的意味（文や状況から独立した辞書的な意味）と感化的意味（文化及び個人のイメージ・経験によって異なる情緒的・連想的な意味）の二つの側面があることに気付き、情報を受け取る側の解釈を想定しながらよりよい言葉や映像を吟味して伝えようとする態度を養うことをねらいとしている。そのために、①見た人に強い感動を与える場面や台詞がある、②テーマが明確である、③構成の工夫や人物の心情がわかりやすい、④物語の場が生活場面である、これらの4点を満たす「東京ガス『家族の絆』CMシリーズ」を教材として取り上げる。

具体的な学習活動は、①感動性の高いドラマ仕立てのCMを視聴し、学習課題について話し合うこと、②言葉と人物の行動や心情、言葉と映像との関連等について考えながら、自分たちの伝えたい思いが伝わるCMをつくること、③CMを見た感想を交流し合い言語の価値を見いだすことである。特に③の感想交流においては、「人によって同一の言葉や文から想像したり感じたりすることは同じではないからこそ、言葉を吟味して使う必要があることを実感させることをねらう。



3 学習の流れと考察

導入段階のねらい：1～4/22時

複数のドラマ仕立てのCMを視聴し、学習課題及び課題解決の見通しについて話し合うことができる。

(1) 複数のドラマ仕立てのCMを見て、学習課題について話し合う。

【資料1 学習課題について話し合う】

(2) 課題解決のために、何をどのように学ぶのか、CMで伝える共通テーマについて話し合う。

【資料2 学習内容と計画について話し合う】

導入段階では、教材CMの視聴を通してCM制作への意欲をもった（資料1）。その上で必要な学習内容と方途、共通テーマについて話し合った（資料2）。子供の多くが「人と人とのつながり」を希望したため、テーマを「環（わ）」とし、「友情」「七転八起」「自分らしく生きていく」など自分たちと見る人をつなぐ「思い」のこもったCMを班ごとにつくるようにした。

考察1

思いを伝えるCMづくりに関する問いをもたせるために、4点を満たすCMを教材化したことは創造性を高める上で有効であった。その根拠は、CMの中心人物である子供や、くり返される場面の様子や言葉に強い共感を覚えた子供が多かったため、ごく自然に「感動性の高いストーリーのCMをつくってみたい」という課題追究意欲をもったからである。さらに、A児のように見る人のことを考えながら、必要な学習内容と順序を話し合うことができたからである（資料2左）。

展開段階のねらい: 5～16/22時

教材CMから表現の工夫を見つけたり、映像制作に携わる方から話を聞いたりしたことを活かしてCMプロットをつくり、それぞれのよさや改善点を交流することがことができる。

- (1) 映像制作に携わる方 (GT) から制作のアドバイスを聞き、班ごとに伝えたい「思い」を決め、シナリオの書き方を知り、CMのプロットをつくる。

伝えたい「思い」

ブレインストーミング

ストーリーが浮かび、共感を呼ぶ「思い」を選ぶ。

起承転結と人物

ショット割←4コマまんが

「結」の1コマをふくらませてショットを割る。

シナリオには、映像に映せるものしか書けないよ、見えない努力は、何度も出かけて、勉強したり試験を受けたりする「忙しい毎日」のくり返して表そう。

毎日のくり返しは、左側のシーンを場面がまわるたびにに入れよう。

【創造性】

【協働性】

シナリオ

ショット割

【資料3 CMプロットをつくる】

- (2) プロット交流会を開き、CMのよさや改善点について他班とともに話し合う。

シナリオを貼ったボードに話し合ったことをメモしていく。

① 父親の「女性の外科医は難しいぞ。」というせりふが、夢を応援する言葉にはみえない。親は子供の夢を応援するものだから、母親のフォローを入れるか言葉をかえた方がいいと思う。【創造性】

② 父親のせりふは「それでも自分らしく生きる」ことを強調するために入れたけれど、冷たく感じるなら改善した方がいいね。【協働性】

A児の指摘を受け「もう一度考えようね。」母のせりふを追加

人物どうしの関係から言葉の使い方を指摘するA児

【資料4 プロット交流会でアドバイスをし合う】

展開段階では、まず、4つの教材CMの共通点を調べ、自分たちのCMに活かそうなことを話し合った。次に、撮影に必要なCMプロットを作成した。GTの方から『起承転結』の筋を通すために、4コマ漫画を作成して、場面の様子を広げていくとよい」というアドバイスを受け、4コマ漫画のイメージをシナリオで言語化するようにした(資料3)。そして、それらをCMプロットにまとめ、交流会を行った(資料4)。

考察2

4コマ漫画をもとに、場面の様子をさらに細かく描き出した「ショット割」を作成したことは、協働性を発揮させながら創造性を高める上で有効であった。その根拠は、ショット割で場面の様子を確かめながらシナリオの言葉の妥当性を検討し合う姿や、伝えたい思いが伝わるように物語の筋や人物像を検討し合う姿が見られたからである(資料3・4)。

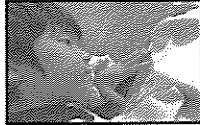
終末段階のねらい: 17～22/22時

感動CMを制作し、完成披露試写会で感想を交流し合い、学びを振り返ることができる。

- (1) 完成したCMプロットをもとに撮影をする。

C児の班が撮影した画面の例(画面のサイズを工夫)





状況伝えるロング 場面の様子伝えるミドル 心情伝えるタイト

【資料5 ショット割を活かしたC児の班のCM撮影】

- (2) 完成披露試写会を開いて感想を交流し、この学習を通して学んだことについて振り返る。

C児の振り返り

「言葉の感情的意味」について気付いた言葉を使う側がどのような意図をもった言葉と言葉を組み合わせるかで、言葉の意味が変わると述べる。

「根拠」他班のCMの言葉の使い方

「言葉の感情的意味」について気付いた言葉を使う側がどのような意図をもった言葉と言葉を組み合わせるかで、言葉の意味が変わると述べる。

「根拠」他班のCMの言葉の使い方

【資料6 学習後の言葉への見方・考え方(向上性)】

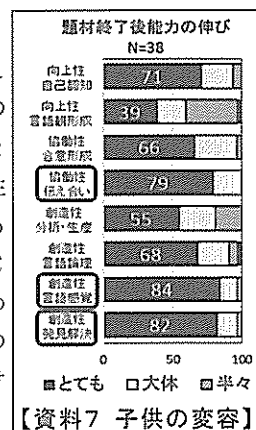
終末段階では、完成披露試写会を行った。試写会では、他班のCMについて「言葉の使い方」「言葉を支える映像」「思いが伝わるか」の視点で、よさを中心とした相互評価の場を設定した。C児は、全体の振り返りで言葉の働きについて「組み合わせ次第で自由自在」と述べ、A児の班の言葉の使い方を根拠に挙げた。また、B児は言葉の働きを「言葉は同じ意味のもので伝え方によって相手のとらえる意味が変わる」と述べ、シナリオづくりの経験を根拠に挙げた(資料6)。

考察3

題材を通して人によって解釈が異なる言葉と事実を直接伝える映像(資料5)を組み合わせるCM制作を行ったことは、言葉の働きや役割に価値を見いださせる向上性を養う上で有効であった。その根拠は、子供が言葉の意味について、言葉を受け取る相手の解釈を想定しようとする姿が見られたためである(資料6)。

全体考察

創造性の伸長が顕著であることがわかる(資料7)。前述の振り返りの分析により、A児と伝え合ったB児やC児に創造性(言語感覚)の発揮が見られることから、協働性が強く働くCM制作はねらいを達成するために有効であると考えられる。今後の課題は向上性の伸長に働きかける活動の充実である。



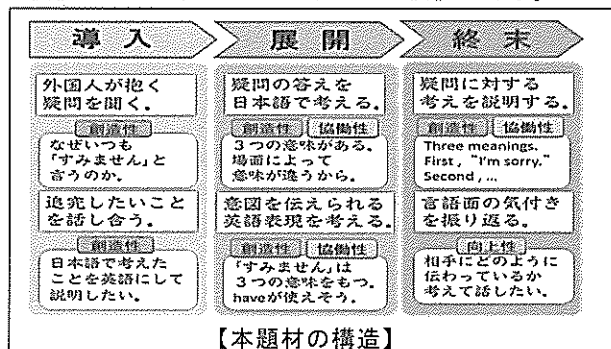
1 資質・能力

- 外国人が抱く日本文化や慣習に関する疑問の答えについて、自分たちの意図を相手により正確に伝えるために、言葉を選択したり、つないだりしながら説明することができる。（創造性）
- 外国人が抱く疑問に対する自分たちの答えを日本語で考えたり、それらを英語や非言語を活用しながら外国人に説明したりすることができる。（協働性）
- 自分たちの意図が伝えられる英語を考え、より意図に合う英語表現を選びながら話すことの大切さをとらえたり、第2言語である英語を自分の言葉として使う意欲を高めることができる。（向上性）

2 題材の考え方

本題材では、外国人が抱く日本文化や慣習に関する疑問の答えを探り、外国人に説明したり、意見交換したりする交流活動を通して、第2言語として英語を話す価値をとらえ、意欲を高めることをねらいとしている。そのために、まず、自己追究の段階では、外国人が抱く疑問を語っている映像を視聴させ、それらの疑問を解決して、日本文化をより知ってもらいたいという課題意識をもつことができるようにする。次に、自己吟味の段階では、疑問の答えについて調べ、説明する内容を考え、説明が適切に伝わる英語表現を調べることができるようにする。最後に、自己更新の段階では、外国人との交流において、外国人に疑問の答えを説明したり、意見交換したりすることができるようにする。そして、交流を通して獲得した言語に関する気付きについて話し合い、英語を話す価値をとらえ、主体的に話す意欲を高めることができるようにする。

本題材において、外国人の視点を通して、子供たちの日常生活にある日本文化を取り扱うことは、これまで子供たちの意識が向いていなかった身近な日本文化や慣習に気付かせ、その意味を考えさせたり、文化的な価値をとらえ直させたりする上で価値がある。

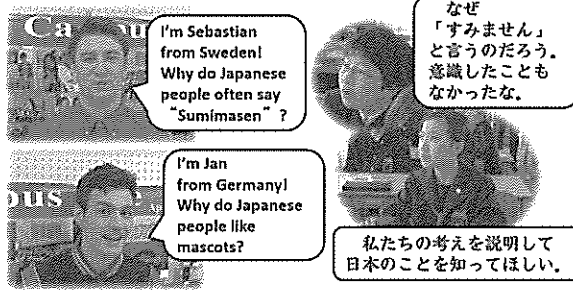


3 学習の流れと考察

導入段階のねらい：1/10時

日本文化や慣習について外国人が抱いている疑問や興味を知り、学習課題を考えることができる。

- (1) 外国人が日本文化や慣習に対する疑問や興味を語っている映像を視聴する。



【資料1 外国人の疑問を聞き、課題を見出す姿】

- (2) 日本文化や慣習について、外国人が抱く疑問や興味をもとに、学習問題について話し合う。

日本人には当たり前のことを外国人は疑問に思っていることを知っておりました。日本人の私も理由がわからないものがあ、創造性、日本語で理由や考えを言えるようになって、知っている英語や新しく覚える英語で外国の人に説明したいです。

【資料2 言語ブックにおけるA児の振り返り】

導入段階では、子供たちに明確な相手意識と目的意識をもたせるために、既習題材で交流した経験のある外国人複数名が抱く日本文化や慣習に関する疑問や興味をビデオ映像で提示した。そのときにA児は、外国人が抱く疑問や興味に対して、自分たちの考えをつくり、説明したいという学習課題を考えた（資料2）。また、これまで意識が向いていなかった身近な日本文化や慣習に気付き、その意味を考えることに価値を見出している子供の姿も多く見られた。

考察1

子供に題材を貫く明確な相手意識と目的意識をもたせるために、交流経験のある外国人が身近な日本文化や慣習に関する疑問や興味を子供たちに語る映像を活用したことは、有効であった。その根拠は、多くの子供たちがA児と同様の課題を見出し、「外国人が抱く疑問や興味について調べ、英語で説明したい」という追究課題を記述していたからである。

展開段階のねらい: 2~8/10時

疑問に対する自分の考えをつくったり、日本語の意図に合う英語表現を考えたりすることができる。

- (1) 外国人が抱く疑問や興味に対する答えを調べたり、自分たちの考えをつくったりする。

なぜ日本人はマスコットが好きなのか？

①幼い子供にもすぐに商品を見てもらえる。

②印象に残りやすく商品をアピールできる。

③日本のマンガやアニメの文化が影響していると思うな。

⑤マスコットやゆるキャラが日本の「かわいい文化」を発信していると思う。

④日本人はかわいいものが好きだから。

【資料3 疑問に対する自分たちの考えを話し合う姿】

- (2) 外国人が抱く疑問に対する自分たちの考えを伝えるために、意図に合う英語表現を話し合う。

①Why do Japanese people often say "Sumimasen"?

②使う場面で意味がちがうから。

④意味があるを意味をもつに変える。

⑤3つの意味はthree meanings.

④場面ごとに3つの意味がある。

⑦もつはhaveだね。

③ちがうはdifferentかな。

【資料4 意図に合う日本語や英語の表現を広げる姿】

協働性

「印象に残る」がわからなかったで「頭に残る」という日本語に変えて考えました。headという英語と「残る」を保つに変えて、keepとしてみました。ラダ先生にkeep in my headという表現を教えてもらい自分たちが考えた英語でも伝わるということがわかり

創造性

【資料5 言語ブックにおけるA児の振り返り】

展開段階では、外国人が抱く疑問や興味に対して、自分たちの考えを日本語でつくり、意図に合う英語表現を考える活動を行った。そのときにA児は、日本語で考えた自分たちの考えを英語で伝えられるように、まず、簡単なわかりやすい日本語に変換し、それらを自分たちが使える英語で表現しようとした（資料5）。

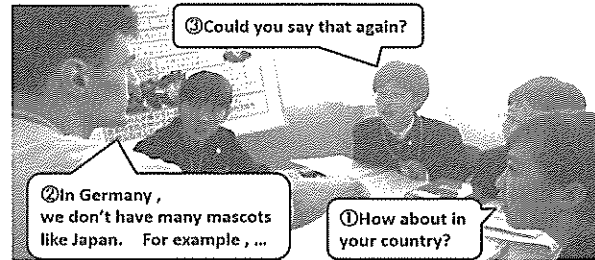
考察2

意図に合う日本語や英語の表現を広げさせるために、シンキングボードを活用させたことは有効であった。その根拠は、英語で表現するために日本語表現を見直し、また英語表現を探るという日本語と英語とを往還させながら思考する姿や（資料4）、その大切さをとらえた記述が多く見られたからである（資料5）。

終末段階のねらい: 9・10/10時

外国人との意見交流を通して、外国語を学び、外国語を話す価値をとらえることができる。

- (1) 疑問や興味に対する考えを説明したり、外国での文化や風習を尋ねたりしながら意見交流する。



【資料6 外国人と即時的にやりとりする姿】

- (2) 外国人との交流を振り返り、言語面における自分の気づきや成長を全体で交流する。

ジャンさんと話す中で、その場でやりとりすることは難しかったけれど、わかりやすい日本語に変えて、知っている英語で話すことが向上性。自分が話す英語を使ってやりとりする楽しさを実感しました。自分が考えた英語でも、と外国の人と話したいです。

【資料7 言語ブックにおけるA児の振り返り】

終末段階では、グループ交流から全体交流へと発展的に交流活動を設定した。A児は、グループ交流、全体交流においても、自分の意図を伝えるために、使える英語を選び、組み合わせながら、何とかして自分の言葉で伝えようとする姿を見せた（資料6）。

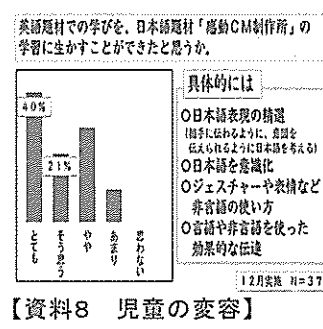
考察3

外国語である英語を話す価値に気付かせ、主体的に話す意欲を高めるために、交流経験のある外国人と交流させたことは有効であった。その根拠は、資料7 A児の振り返りのように、言語の価値を自分なりに感じ、外国語である英語を自分の言葉として使い、コミュニケーションを図ることへの意欲を高めている振り返りの記述が多く見られたからである。

全体考察

本題材で、英語での学びが日本語に転移していることが明らかとなった（資料8）。それは、資質・能力を関連させた題材配列が有効に働いたためであると考え。今後の課題

は、日本語へのフィードバックをより深めるための英語題材の開発と日本語題材との関連である。



【資料8 児童の変容】

領域「自然探究」部

自然事象の仕組みを粘り強く探究する領域「自然探究」

1 「自然探究」の必要性

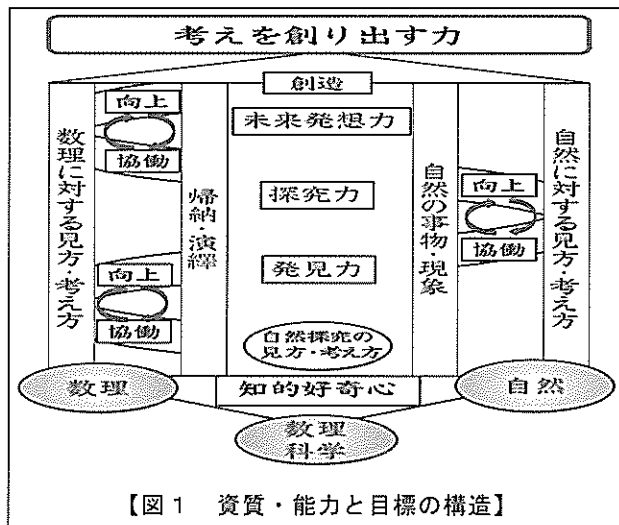
小学校の理数教育では、算数科と理科の教科目標に共通する、「見通しをもって論理的に考える」ことを大切にしながら問題解決学習を展開し、科学的・数学的な見方や考え方の育成を図ってきた。これからの社会で子供たちには、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、複雑な情報を処理したり、ビッグデータを分析・考察したりと、自分の仮説に沿って、何度も繰り返し実証し、考えを創り出す力がさらに求められている。この現状を受け、新たな仕組みを創り出す STEM 教育を取り入れたり、高等教育を中心に、「数理探究」を立ち上げたりして、考えを創り出す学習過程を重視するようになってきた。

そこで、領域「自然探究」が担うものは、自然事象の仕組みを、知的好奇心をもって粘り強く探究し、考えを創り出す子供の育成であると考え。そこには自然事象に働きかけて課題を発見（発見力）し、得られたデータについて数的な処理を行いながら何度も練り直し（探究力）、問題解決を通して考えを創り出そうとする（未来発想力）3つの力の発揮が必要になる。この3つの力を発揮した姿は、算数科や理科に関する知識・技能の活用だけに留まらず、「新たな仕組みやきまりをどのように創り出していくか」を考え、創り出す能力の育成につながる。

2 目標と内容

(1) 目標について

自然の事物・現象にかかわる仕組みを、知的好奇心をもとに粘り強く探究していく過程を通して、発見力、探究力、未来発想力を発揮し、自然の事物・現象にかかわる考えを創り出す能力を育てる。



【図1 資質・能力と目標の構造】

(2) 内容について

領域「自然探究」では、発見力、探究力、未来発想力を発揮し、考えを創り出す能力を育てる内容を設定する。自然界や科学技術の発展、これまでの文化継承などに視点を当て、領域「自然探究」の内容を「A自然」、「B数理」、「C数理科学」の3つで構成する。

「A自然」においては従来の理科の内容区分（物質・エネルギー、生命・地球）を内容と資質・能力の系統性から見直し、低学年にも位置付け、内容を厳選する。

「B数理」においては、従来の算数科の内容区分（数と計算、量と測定、図形、数量関係）を、内容と資質・能力の系統性から見直し、内容を厳選する。特に「B数理」においては、学年の系統性を重視する。

「C数理科学」においては、従来の教科の枠組みに縛られず、科学技術や自然事象を追究していく過程で資質・能力が養われる内容を厳選する。

内容区分	身に付けるもの
A 自然	自然を探究する学び方や、自然事象の知識・技能、自然事象に対する基本的な見方・考え方を身に付ける。
B 数理	数理を探究する学び方や、数学的な知識・技能、数理に対する基本的な見方・考え方を身に付ける。
C 数理科学	自然事象の仕組みを、発見力、探究力、未来発想力を発揮しながら探究し、創造性を中心に身に付ける。

図2のように、A自然、B数理、C数理科学は、それぞれ内容が関連している。特に、C数理科学において

自然に対する基本的な見方や考え方

A 自然

活用

C 数理科学

数理に対する基本的な見方や考え方

B 数理

【図2 A、B、Cの内容関連】

は、A自然、B数理で培った基本的な見方や考え方を活用する立場にある。また、A自然においては、B数理の統計的な見方などを活用する場合もある。B数理も同様に、自然に対する見方や考え方を活用する場面もある。このように、領域自然探究では、学習内容によって、子供たちは資質、能力を発揮し、科学的、数学的根拠にもとづいた仮説検証を通して、考えを創り出すことができると考える。

3 資質・能力の系統

領域「自然探究」では、未来創造型の3つの資質・能力について、創造性の育成を中心に9つの構成要素を設定し、学年の発達特性に応じて以下のような系統にまとめた。本領域では、向上性や協働性を培うことで社会スキルを発揮し、創造性を培うことで認知スキルを発揮するようにする。向上性では、主体から客体に自己を意識し始める発達段階を考慮し、協働性においても、自分志向から、他者志向に重点化していけるように低中高での内容を設定した。

【表1 領域「自然探究」の資質・能力表】

資質・能力	構成要素	低学年	中学年	高学年
創造性	発見力	事象と事象を比べながら、興味をもったことを課題として見い出すことができる。	既習の知識や経験をもとに未知の内容に対して追究していきたい課題を見い出すことができる。	多面的、多角的な視点で、事象と事象をつなぎ、生活場面につないだ課題を見い出すことができる。
	探究力	課題に対して、考え方の見通しをもち、課題を解決しようとすることができる。	既習の知識や経験から課題を解決するための方法を考え、見直すことができる。	実行可能か検討し、計画を練り直し、課題を解決するための方法を考えることができる。
	未来発想力	事象を比較しながら新たな視点や考えを見い出すことができる。	事象を比較、関係付けて、新たな考えを見い出すことができる。	条件を整理し、多面的に判断して新たな考えをつくり出すことができる。
	自然探究の見方・考え方	身近な自然の事物・現象に親しみ、それらを見たり試したり、育てたりして、事物・現象の特徴に気付く見方や考え方をもちつことができる。	見い出した課題について、比較を通して、事物・現象の共通点や差異点に気付き、根拠のある仮説を立てる見方や考え方をもちつことができる。	自然の事物・現象の変化や働きについてその要因や規則性、関係を分析、考察して、より妥当な考えをつくる見方や考え方をもちつことができる。
協働性	関係形成	自分の考えをもとに他者の考えを聞き、似ているところや違うところに気付くことができる。	自分の考えをもとに他者の考えに共感し、共通点や差異点の視点で比べ、自他の考えを認めようとすることができる。	自分の考えを明確に説明したり、多様な他者の考えの内容を合意形成したりしようとすることができる。
	他者受容	自分の考えを押しつけない、他者の考えを受け入れ、自分の考えに生かそうとすることができる。	自分の考えと比べながら、いいところを選択し、自分の考えに取り入れようとするすることができる。	他者の考えを尊重し、自分の考えの共通点や差異点を受け入れ、自分の考えに転換することができる。
向上性	自己決定	自分の生活上の経験や学習内容をあてはめて、解決方法を考え、実際に活動することができる。	解決したい場面と既習の内容や気付きを関連付けて、実行可能な解決方法を考え、活動することができる。	問題場면을解決するために、既習内容や気付きを組み合わせて、誰もが納得できるような解決方法を考え、活動することができる。
	自己伸長	自分の課題を解決した過程や考えを創り出したことについて、どれだけ自分が高まったのかを振り返ることができる。	自分が解決したことや見出した考えを振り返り、自己の成長を振り返ることができる。	これまでの自分の考え方を振り返り、どのように成長したのかをもとに、今後の自分の姿を思い描くことができる。

4 学習展開

(1) 教材化

領域「自然探究」では、創り出す力を育てることをねらいとする。教材化の基本的な考え方としては、創造性、協働性、向上性の資質・能力が発揮されるように仕組む必要がある。

自然探究で目指す資質・能力である創造性の発見力、探究力、未来発想力が発揮されるのは、すべての内容であるが、最も表れるのが「C数理科学」だと考える。「A自然」「B数理」「C数理科学」において、創造性を発揮させるために、教材化の視点や教材へのアプローチを工夫する必要がある。

そこで、以下の5つの視点から教材化を図るようにする。

- 素朴な疑問や生活経験、自然の事象にかかわる体験から、不思議さや疑問点、曖昧さなどを集約し、課題意識を高めることができるもの
- 試しの活動や実験・観察などの活動によって、科学的、数学的な情報を集めることができ、仮説に立ち返って考察することができるもの
- 表や絵図などで分析したり、整理したりして、他者との情報の交流によって、数理や真理の一般化を図ることができるもの
- 身近にあるもので、日常生活に活用したり、日常生活に用いたりする法則や規則性などで子供自身が感じ、考えることができるもの
- 不易と流行での流行の視点から、現代社会の課題や要請、大学改革での学部編成の動き、最先端技術など、今後の未来社会で活かせるもの

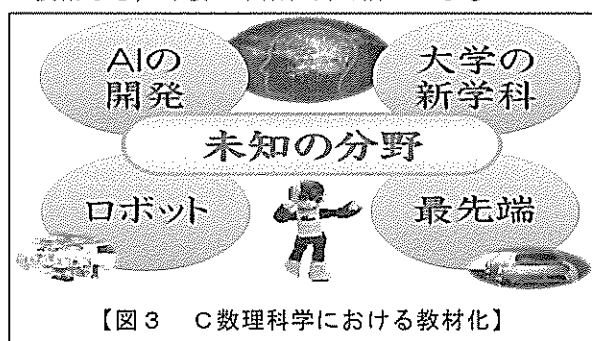


図3のように、最先端医療、人工知能、大学の学科、PCの開発など、様々な未知の分野において、小学校の発達段階に合わせた教材化を図り、「C数理科学」の内容に合わせて、選定する必要がある。

また、自然探究における教材化を図る上でも、どのように子供に教材へのアプローチをさせるかなどの工夫も必要である。導入での出合わせ方や終末までの課題意識の連続など、様々な教材へのアプローチを変えていくことで、子供の思考が連続、発展していくと考える。

(2) 題材の配列

各学年の題材は、「A自然」、「B数理」、「C数理科学」のそれぞれの内容を配列する。「A自然」「B数理」「C数理科学」は、各学期に指導内容の系統性と子供の発達段階を考慮して位置付ける必要があると考える。脳科学者の茂木健一郎氏によれば、「人間の脳はいろいろな能力をもっている。しかし、時代の変化とともに知識というものの価値が薄くなってきた。知識や計算が特に重視される時代ではない。」と述べている。

つまり、題材の配列も、各内容項目について、それらを結び付けながら学習を活用することができるような題材配列を考えることが大切である。

	第1,2学年	第3,4学年	第5,6学年	中学校
A自然	季節と生き物 (小1～小2) 生き物いっしょ (小1～小2)	昆虫と植物 (小3) 身近な自然の観察 (小3) ふしぎだね 自然の中の水 (小4)	動物の誕生 (小5) 生物と地球環境 (小6)	【数学】 比例、反比例 (中1) 一次関数 (中1)
B数理		表や棒グラフ (小3) 折れ線グラフ (小4) 資料の分類整理 (小4)	割合、百分率 (小5)	【生物】 自然環境の保全と 科学技術の活用 (中3) 根本原因 (中3)
C数理科学	しげんと ふれあう	自然は数を知っている 自然の生き物たち	未来へつなぐ エコロジカルプロジェクト	

【図4 自然をもとにした題材配列の具体例】

図4は、自然をもとにした題材配列の具体を示している。前述したように、A自然、B数理の内容を活用しながら、C数理科学の内容を進めていき、中学校へと接続するように仕組んでいる。

では、具体的に、3つの内容がどのように関連しているか、第4学年の実践をもとに述べていく。

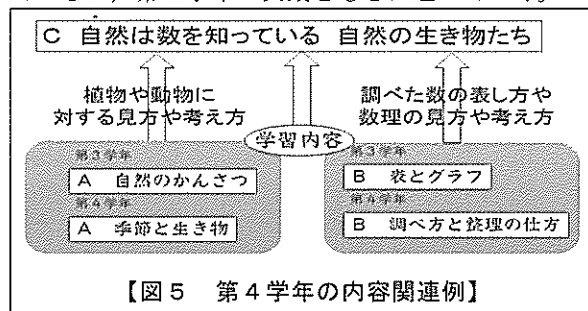


図5のように、「A自然」においては、植物や動物に対する見方や考え方を発揮したり、内容を関連付けて考えたりすることができる。「B数理」は、調べた数の表し方や整理の仕方など、数理に対する見方や考え方を使得、解決できるようにすることが大切だと考える。本題材においては、自然に対する既習の知識を使得、木の育ち方や葉の様子を調べ、その結果を表やグラフで表したり、数値で整理したりする。つまり、それぞれの自然や数理の内容の関連は、見方や考え方をつなげたり、知識としての内容を関係付けたりして、考えを創り出す力を高めることが重要である。

(3) 題材を通した学び

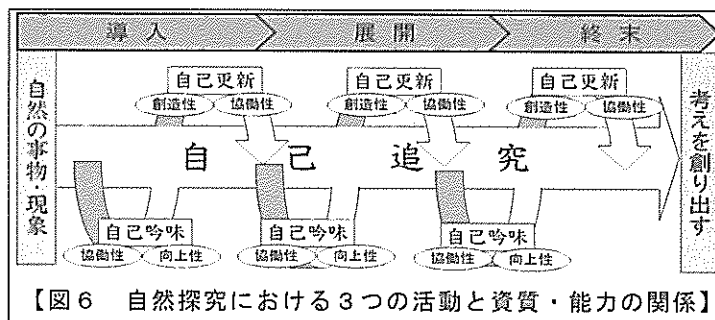
領域「自然探究」における題材を通した学びは3つの活動（自己追究、自己吟味、自己更新）を通して行われるものとする。自然探究における3つの活動は次のように考える。

自己追究とは、自然の事物・現象との出会いから問題意識を強くもち、自主的な活動計画のもとに解決していく活動のことである。

自己吟味とは、意図的・計画的に観察、実験を行い、その結果から計画を見直し、再観察・実験する活動のことである。目的に沿って結果の是非を判断し、次への追究活動へと発展していくものである。

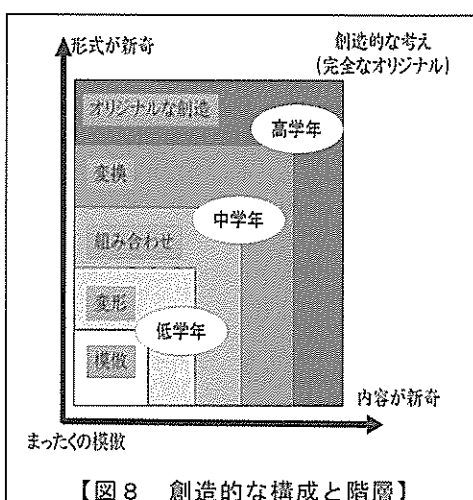
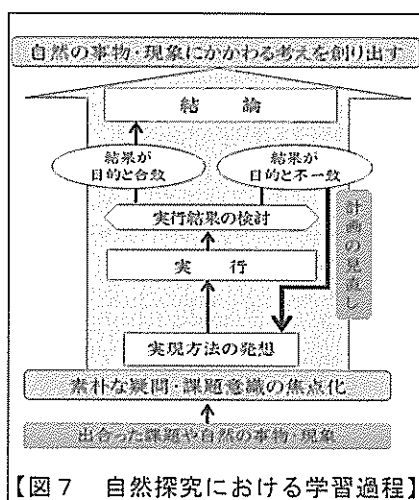
自己更新とは、新たな視点や考えを見い出したり、受け入れたりする活動のことである。この3つの活動を通して、自然の事物・現象に興味をもち、知的好奇心を喚起して、科学的・数学的な見方や考え方をを用いて、主体的に探究し、考えを創造することができるようになることが、「自然探究における学び」である。

図6は各段階において、特に発揮される資質・能力や、自己更新しながら、自己吟味や自己追究を繰り返し行っていることを示している。自然探究の領域においては、題材を通して、創造性である問題発見力、探究力、未来発想力を身に付けるために、各段階において、向上性や協働性を相互に発揮させることが大切である。



(4) 一単位時間の学び

自然探究における題材を通した学びで大切なことは、問題解決の過程である。基本的な問題解決の学習過程は、図7のようになる。事象の提示や体験活動を通して、身近な自然や生活の中で疑問に思っていることなどを学習課題とし、追究意欲を喚起させる。次に、見通しをもたせるために追究計画を立て、課題を検証するために観察、実験の方法を工夫し、実践していくよ



うにする。自然に対する疑問や問題の解決にあたっては、見たり、探したり、育てたり、作ったり、試みたりしながら、対象から情報を集め、考えを高めていけるようにする。問題が解決できないときは、視点や立場を変えて検討し、情報を収集し直すことによって、新たな論理を構成して、解決へと進むようにする。こうして、次第に、自然の事物・現象を論理的、客観的にとらえ、考えを創造できると考える。

創造的な考えは構成や段階があり、その段階を踏まえて、目指す資質・能力を適切に高めるようにすることが重要である。CCR（カリキュラム・リデザイン・センター）によると、低学年は模倣や変形、中学年は組合せや変換、高学年はオリジナルな創造ができる。図8のように、発達段階における創造的な考えを高め、自然探究の目標である自然の事物・現象に関わる仕組みを粘り強く探究し、発見力、探究力、未来発想力を発揮して、自然の事物・現象に関わる考えを創り出す力を育てることができると考える。

【引用・参考文献】

- 岸学. 21世紀の学習者と教育の4つの次元. 北大路書房. 2016.
- 畠山雄二. ことばの分析から学ぶ科学的思考法. 大修館書店. 2012.
- 岩崎允胤. 宮原将平. 科学的認識の理論. 大月書店. 1977.
- 桜井邦朋. 自然科学とは何か. 森北出版. 2012.
- 小林昭文. 7つの習慣アクティブラーニング. 産業能率大学出版部. 2016.

領域「自然探究」年間指導計画

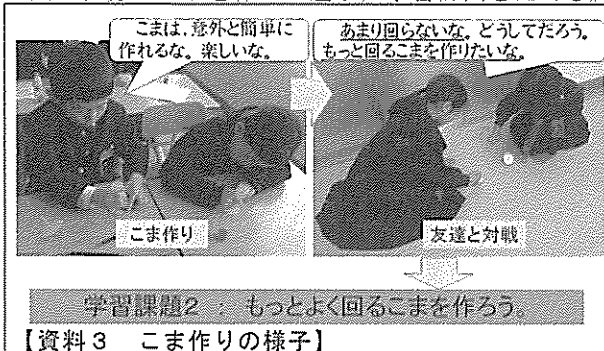
学年		学期 内容区分	1 学期																			
第1 学年	A 自然	はると なかよし⑩										なつと なかよし⑨										
	B 数理	かずと ともだち⑩					いろいろな かたち③		ふえたり へつたり⑩			20までの かず⑨ いま なんじ③ 3つの かずの けいさん④		たしざん⑥								
	C 数理科学																					
年間時数(204時間)			60時間																			
第2 学年	A 自然	しよくぶつ いっぱい⑤										太陽の光をしらべよう⑪										
	B 数理	とけい⑥		たし算とひき算⑪			長さ⑦		1000までの数⑭		かさくらべ⑦		たし算とひき算の 筆算⑬ 計算のじゅんじょ②		かけ算(1)⑮							
	C 数理科学								しぜんとふれあおう⑮													
年間時数(210時間)			68時間																			
第3 学年	A 自然	こん虫を育てよう⑥						ゴムや風で ものを動かそう⑥						動物のすみかを調べよう⑤								
	B 数理	九九の表と かけ算④		わり算⑩		円と球⑥		たし算とひき算の筆算⑪			一億までの数⑨		たし算と ひき算④		時間と長さ⑤		あまりのある わり算⑦		三角形⑦			
	C 数理科学							すごいね 風で運ばれる種のひみつ⑪														
年間時数(210時間)			67時間																			
第4 学年	A 自然	季節と植物②			天気と気温④			すがたを変える水⑩			星や月③			わたしたちの体と運動⑨			星や月⑨					
	B 数理	角と その大きさ⑥		1けたでわるわり算 ⑩		折れ線グラフ⑨		一億を こえる数⑥		垂直と平行⑪		小数⑧		式と計算の 順序⑦		2けたでわるわり算⑨						
	C 数理科学							身近な自然の変化を調べよう⑩														
年間時数(245時間)			84時間																			
第5 学年	A 自然	天気の変化⑤			植物の発芽と生長⑧			メダカや人のたんじょう⑧						植物の実や 種子の でき方⑤		台風の天気と 変化⑤		流れる水の 土地のつく				
	B 数理	整数と小数⑤		体積⑩		小数×小数、小数÷小数⑪			式と計算⑤		合同な図形⑨			整数⑩		分数⑩						
	C 数理科学							エコロン池構想プロジェクト⑬														
年間時数(245時間)			84時間																			
第6 学年	A 自然	ものの燃え方⑤			植物の生長と日光の関わり ⑤			体のつくりとはたらき⑤			植物の生長と水の関わり⑤			月と太陽と地球環境⑩			水よう液					
	B 数理	対称な図形⑦		文字と式⑥		分数×分数⑩		分数÷分数⑤		円の面積⑧		比と その利用⑦		図形の拡大と縮小⑩		速さ⑩						
	C 数理科学							科学ビー玉コースターをつくらう⑩														
年間時数(245時間)			80時間																			

2 学期				3 学期			
	あきと なかよし⑩			ふゆと なかよし⑩			
	かたちづくり⑥	ひきざん⑬ ものと ひとの かず③		かぞえて できたよ⑩	100までの かずの けいさん⑦ いま なんじ④	おおきさくらべ⑥ もうすぐ 2ねんせい④	
	よくまわる こまを つくろう⑩					あつめて はっけん かずや かたちの ひみつ⑩	
89時間				55時間			
		じしゃくで遊ぼう⑥				しぜんかんさつ⑦	
100cmを こえる長さ ②	かけ算(2)⑬	三角形と四角形⑩		九九のきまり⑤	10000までの数④	はこの形⑤	分数⑤
かけ遊びを楽しもう⑩				くらべて遊ぼう じしゃくの力⑦			
94時間				48時間			
太陽の動きと 地面の様子を調べよう⑨		ものの重さを調べよう⑥		豆電球にあかりをつけよう⑥		じしゃくのふしぎを調べよう④	
1けたをかけるかけ算②		重さ④	分数⑩	計算のきまり① 表とグラフ④	小数⑨	2けたをかけるかけ算⑥	□を使った式④
	附属小こん虫園鑑⑬					電気の仕組みをとき明かそう⑬	
88時間				55時間			
	ものの温度と体積④		もののあたため方⑩			ふしぎだな 自然の中の水⑨	
面積⑨	がい数とその計算⑩	小数の計算④		調べ方と 整理の仕方④	分数⑩	変わり方⑥	直方体と立方体④
		自然は数を知っている 自然の生き物たち⑩					広げよう ぼく・わたしの創造の世界⑬
103時間				58時間			
はたらきと り変化④	ふりこの動き⑨			使ってみよう 電磁石の仕組み⑬		もののとけ方④	
面積⑩	平均とその利用⑩	単位置 あたりの 大きさ④	分数⑩	割合⑫	円と正多角形⑥		変わり方②
		飛ぶ仕組みを発見しよう④		実現しよう 飛行プラン④			
103時間				58時間			
の性質⑪	てこのはたらき⑩		電気の性質とその利用⑩	生き物と地球環境⑤		卒業研究～科学って何？～⑩	
比例と反比例⑬		資料の調べ方⑨	場合を順序よく 調べて⑫	量の単位⑩		卒業研究～算数から数学へ～⑩	
		地域を守ろう！ 室見川ハザードマップ⑬			未来のものづくりへ ロボットの仕組み⑬		
113時間				52時間			

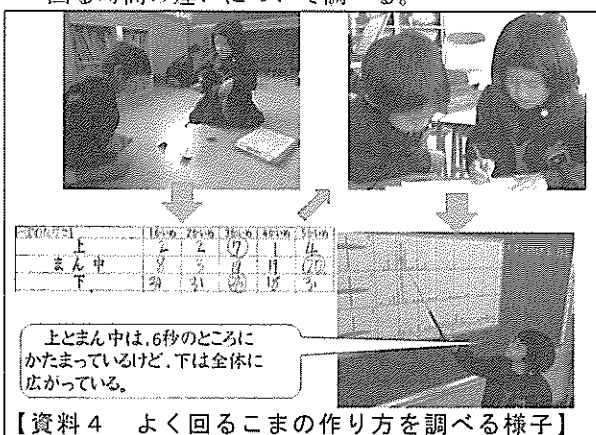
展開段階のねらい：3～10/12時

よく回るこま作りに挑戦し、よく回るこまを作るための条件を見い出すことができる。

(1) 自分でこまを作って遊び、学習計画をたてる。



(2) つばの形や重さ、心棒の付け方などと、こまの回る時間の違いについて調べる。



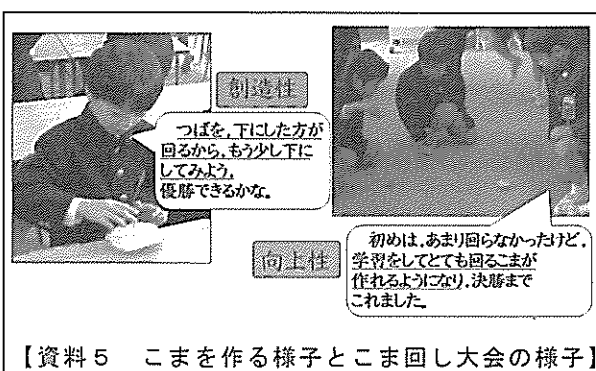
展開段階では、まず、こま作りを行い自分で作ったこまで、友達と対戦したり、回る様子を観察したりした。そのことを通して、「どうして回るこまと、あまり回らないこまがあるのだろう。」や「もっとよく回るようにするにはどのようにすればよいのだろう。」と発言したり、「もっとよく回るこまを作りたい。」という感想をもったりした(資料3)。次に、「こまは、重さや形、つばの位置などによって回り方が変わると思う。」という子供たちの予想から、よく回るこまの作り方について調べる活動を行った。子供たちは、ペアで調べたことを一枚のグラフにドットシールを用いてまとめていった。グラフをもとに全体交流を行い、よく回るこまの作り方を考えていった(資料4)。

考察2

ペアの結果を整理したグラフをもとに全体交流をしたことは、よく回るこまの作り方を見つける上で有効であった。その根拠は、ペアによって違う結果が出ていて、結果にばらつきがあったが、資料4のように全体交流でグラフを見て、かたまりや最高値を根拠によく回るこまの作り方を見つけていく姿が見られたからである。また、友達の説明を聞き、「確かにそうだった。」という発言があったからである。

終末段階のねらい：11～12/12時

これまで追究してきたことを活かしながら、オリジナルのよく回るこまを作り、こま回し大会を通して、達成感を味わうことができる。



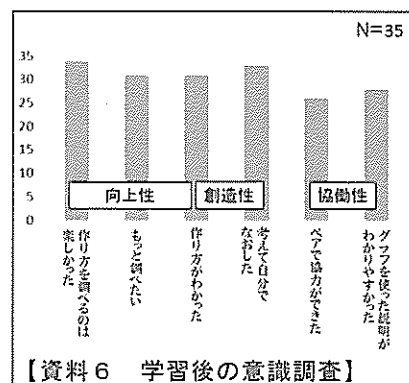
終末段階では、展開段階に子供たちが追究して見つけたよく回るこまの作り方をもとに、一人一人が自分のオリジナルのこまを作り、誰のこまがよく回るのかこま回し大会を行った。子供たちは、優勝できるように、つばの形や大きさを選び、つばをつける位置や真っ直ぐになっているかななどを調整しながら、こまを作っていた。B児は「最初は、2秒や3秒しか回らなかったけれど、学習したら37秒の最高記録が出せました。」という感想をもった。また、D児は、見つけたよく回るこまの作り方をもとに「工夫をすればとてもよく回るのでとても楽しかった。もっとよく回るこまを作りたい。」という感想を記述した。

考察3

よく回るこまの作り方を調べた後に、こま回し大会を行ったことはオリジナルこまを作る上で有効であった。その根拠は、資料5右のD児の感想から、学習を通して見つけたよく回るこまの作り方をを使って、よく回るこまを作って回したことに達成感を味わっていることがわかるからである。

全体考察

考察1・2からは、遊びやものの作りを取り入れた活動構成は課題を発見する発見力や救済的な処理を行いながら何度も繰り返し探究力など、創造性を育てる上で有効であったと判断できる。また、資料6から、遊びやものの作りを取り入れた本題材は、自らこまを修正したり、できるようになった自分を自覚したり、創造性や向上性の伸長に有効であったと判断することができる。



【資料6 学習後の意識調査】

展開段階のねらい：5～13/17時

自然の植物を分析したり、数のきまりを見い出したりして、フィボナッチ数列をもとに追究活動を行い、自然の数のきまりを見い出すことができる。

- (1) 秘密がありそうな植物や自分が調べたい植物を調べて分析し、数のきまりについてわかったことを学習ノートにまとめる。

私が調べたときも、5枚が多かった。違う花でも、結果が同じになってよかった。私の仮説は間違っていなかった。

この花びらは、5枚が多いね。この前、いっしょに調べた花も5枚が多かった。何か数のきまりがありそうだね。

向上性

創造性

【資料3 見通しをもとに結果をまとめ分析している】

- (2) 自然にひそむ数のきまりについて、これまで調べた結果を出し合い、分類したり、整理したりして、数のきまりを結論付ける。

花びらは、5枚、8枚、21枚が多いみたいだね。つまり、花びらはフィボナッチ数になっているんだね。予想通り。

向上性

結果をまとめ、結論に導く分類シート

分類シートにまとめている

【資料4 結果を分類し、数のきまりを結論付ける】

展開の段階では、自分が調べたい植物について、木、葉、花に着目して、目的が同じ追究グループをつくって調べた。何度も観察し、思ったような結果が出ないときもあったが、結果の蓄積をしていくことの大切さを実感し、次への追究意欲を高めた。そして、結果を分類、整理しながら結論を導き出していった。そのときにA児は、「グループの結果をまとめると、やはり、5、8、21枚などの数が多く、フィボナッチ数になることがわかった。」と考えていた（資料4）。

考察2

自分が調べたい植物を選択させ、数のきまりという視点で考えさせたことは新たな視点で物事を見ることのよさを実感でき、課題が解決するための方法を自ら見い出すことができる上で有効であった。その根拠は子供が主体的に観察を行い、新たな視点である数のきまりで植物を観察することができたからである。また、数のきまりについて、結果を導き出すために分類シートをもとに考えをまとめることができたからである。

終末段階のねらい：14～17/17時

他の自然の生き物の形態にも、数のきまりが適用できるものがあり、そのきまりにもとづいていることに気付くことができ、自然の神秘や不思議さを実感することができる。

子供がまとめた学習ノート

①魚のむねの数
②やぎのつづね
③カメレオンのしっぽ
④猫のまるまり方
⑤巻き貝のうすまき方
⑥くもの巣のうすまき方

巻き貝の形も、創造性
フィボナッチ数に関係している
思った。いろいろな場面でも
フィボナッチ数が出てきて、
植物はすごいと思った。

向上性

生き物の数のきまりを説明している

【資料5 生き物の数のきまりを説明している】

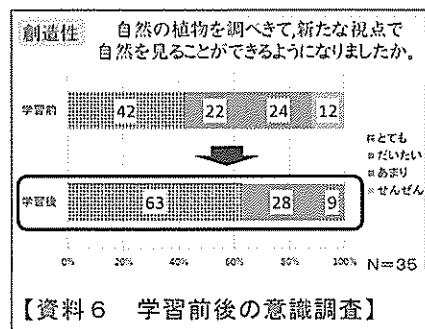
終末の段階では、「他の自然の生き物を調べたい」という意欲をもとに、自然の生き物について調べ、これまで調べてきた事象と比べながら、更なる追究事象へとつなげていった。そのときに、生き物の形と数という視点をもとに調べていった。そうすることで、数のきまりという視点がずれないからである。A児は「魚の群れや、猫のまるまり方、巻き貝の渦巻き方などを調べ、フィボナッチ数があることがわかって、本当に自然はすごい」と考えた（資料5）。

考察3

見つけた数のきまりが他の自然の生き物でも適用できるのか考えさせたことは、視点を広げることや他の適用ができることを学ぶことができる上で有効であった。その根拠は、数のきまりを見い出すことで、その数のきまりが他にもないのかと思うことは当然の思考だからである。また、子供自身が自然の不思議さやすごさ、すばらしさを実感することができ、さらなる追究意欲を高めることができたからである。

全体考察

新たな視点を見い出し、自然のすばらしさを実感できる本題材は、事象を比較、関係付けして、新たな考えを見い出すこと



ができる創造性の未来発想力を育成する上でも意識調査の結果から有効であったと判断できる（資料6）。それは、考察1、2からわかるように、自ら課題を考え、自分なりに結論を導き出す姿が表れていたからである。今後は、様々な課題解決のアプローチの工夫が必要であると考えられる。

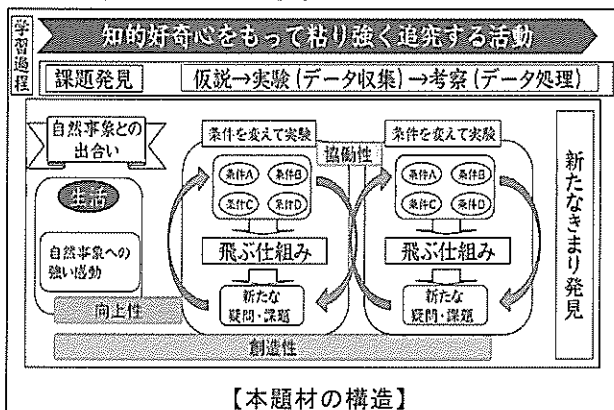
1 資質・能力

- ◎ 翼の形と揚力の関係をもとに、左右の翼の形、おもりの重さを観点として、より遠くに飛ぶ動力飛行機をつくることができる。 (創造性)
- 作成した動力飛行機を見合う中で、飛ぶ仕組みを理解することができる。 (協働性)
- 翼の角度や機体の重さなど、多面的な視点で動力飛行機を改良することができる。 (向上性)

2 題材の考え方

本題材では、「飛ぶ仕組み」として、動力飛行機は揚力を基本とした、複数の条件が関わり合いながら飛んでいることを理解することをねらいとしている。題材設定としては、A 自然の内容、第3学年の「風やゴムのはたらき」でのゴムの性質や規則性を使い、B 数理の内容、集合やデータ処理の考え方を柔軟な発想で活用することで、創造性にある探究力や未来発想力を発揮する姿につなぐようにする。題材に取り組むにあたっては、C 数理科学では課題意識をもつことが大切になるため、ものが飛ぶ仕組みに視点が向くように、飛ぶものを実物や映像で出合わせた。その後、自由に紙飛行機を飛ばす体験を行う中で、「もっと遠くに飛ばしたい」という気持ちを抱かせた上で、九州大学の航空工学科を見学に行き、飛行機が飛ぶ仕組みを学ぶ場を設定した。題材の主張点は、①仕組みを探究するために、様々な形状の飛行機を作成してデータ収集したこと、②継続的に作成した研究分析シートを活用し、図面と飛行実験結果を比較し、飛ぶ仕組みを追究する学習過程を行ったこと、③題材の導入と終末で航空工学専門のGTに出会わせ、追究を通して生まれた悩みを尋ねたり、今の段階で発見したきまりを伝えたりすることで、飛ぶ仕組みについて追究してきたことの達成感を実感させたことである。

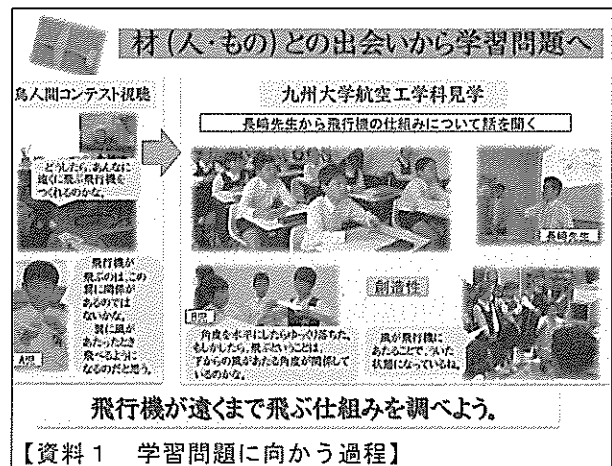
3 学習の流れと考察



導入段階のねらい：1～4/14時

身の回りの飛ぶものの翼の形状の比較や、九州大学の航空工学科見学を通して、飛ぶ仕組みの追究への意欲を高めることができる。

導入段階では、自由に紙飛行機を飛ばす活動や人の手づくりあげた大型飛行機の映像(鳥人間コンテストの視聴)を通して、A児は「どうしたら人の手で、あんなに遠くに飛ぶ飛行機をつくることができるのだろう」「自分たちにもつくれるのかな」という期待感をもった。そこで生まれた期待をさらに高めるために、九州大学航空工学科の長崎先生を訪ねた。九州大学での体験の中でB児は、「あの大きな飛行機が浮いているのも、紙飛行機が浮いているのも仕組みは同じで、どちらも風を受ける翼の角度が大事ではないだろうか」と考えた。また、長崎先生の講話の後に風洞と呼ばれる、風を送り出して浮いている状態を見学させていただいた。子供は何気なく空を見上げていた飛行機や飛んでいる鳥の羽に仕組み(工夫や規則性)があることに気づき、疑問を解決していきたいという意欲をもつことができた。以上のような出会いを通して、「飛行機が飛ぶ仕組みを調べよう」という学習問題をたてることができた(資料1)。



考察1

日常にある紙飛行機飛ばし体験や、飛ぶ仕組みに視点をあてた専門の方との出会いは、身の回りに存在するものの仕組みを調べたいという課題意識をもち、課題解決の方向性を決める上で有効であった(創造性：発見力)。その根拠は、「飛ぶ仕組みとは何か」ということを考えさせる映像や人との出会いによって、子供が飛ぶ仕組みを調べたいと意識を高めたからである。

展開段階のねらい：5～12/14時

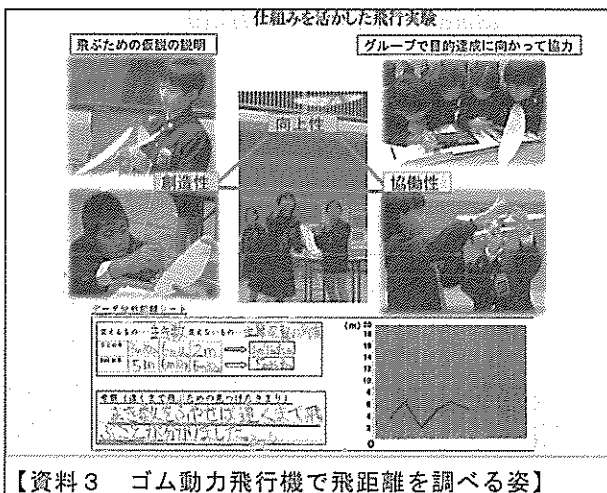
揚力を生み出す翼の角度に視点を当てた厚紙飛行機、ゴム動力飛行機づくりに挑戦し、飛ぶための条件を見い出すことができる。

- (1) 図面をもとに作成し、厚紙飛行機の主翼や尾翼の条件を変えながら検証する。



【資料2 仮説をもとにした厚紙飛行機づくり】

- (2) 飛ぶ仕組みを明らかにするために、ゴム動力飛行機を作成し、主翼の角度やゴムの巻数を調べて検証する。



【資料3 ギョム動力飛行機で飛距離を調べる姿】

展開段階では、まず自分の仮説をもとに作成した厚紙飛行機の飛行実験を通して、B児のように「翼の角度」にこだわる姿が見られた（資料2）。その後、飛ぶ仕組みの進み力を調べるために、ギョム動力飛行機を作成した。B児は、「推進力」として「巻数を多くすればよい」と主張したが、実験を通して、「巻いて生まれる風の力は、まっすぐ飛ぶためだけに作用するわけではない」という結論を導くことができた（資料3）。

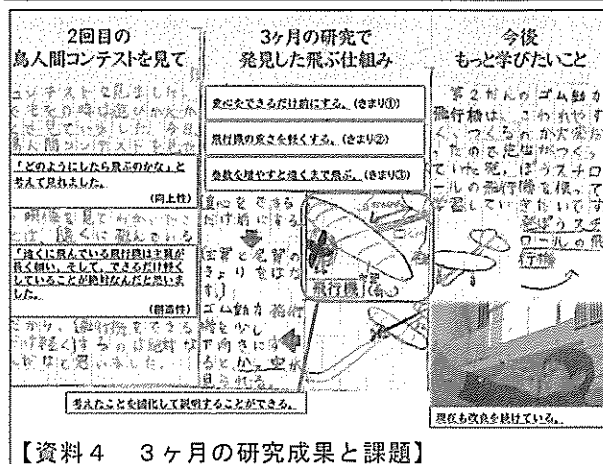
考察2

図面を継続的にかき、その上で飛行機づくりを行い飛行実験したことは有効であった（創造性：探究力、協働性：関係形成）。その根拠は、B児の発言や活動の様子からも、未知のことに対して、あきらめずに、

何度も追究する姿が見られたからである。また、飛ばしたいという共通の目的をもった上で実験に取り組んだことで、自然と交流する姿が見られた点からである。

終末段階のねらい：13～14/14時

現段階の発見を長崎先生に伝えることで、追究してきたことの達成感の実感と、今後の意欲向上を図ることができる。



【資料4 3ヶ月の研究成果と課題】

終末段階では、子供たちが追究してきた研究成果と今後の課題を明らかにする場（自分を見つめ直す場）を設定した。条件を変えながら実験して見つけた飛ぶきまりや、新たな課題を出し合い、九州大学の長崎先生にも飛行の様子を見ていただいたことで、今後の飛行実験に取り組んでいく方向性が明らかになった。

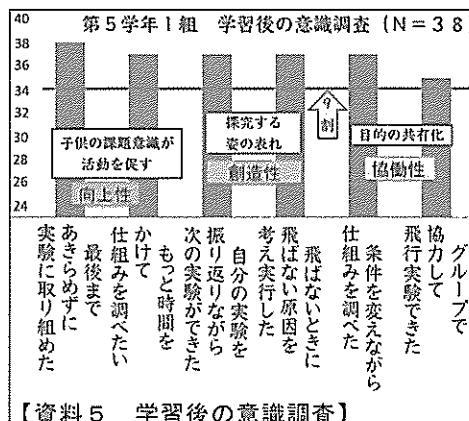
考察3

学びの振り返りと長崎先生への飛行実験提案は有効であった。その根拠は、追究成果としての自己の見つめ直しが、新たな課題発見、探究意欲向上につながったからである（資料4）。

全体考察

本題材はとくに創造性の伸長に有効であったと判断できる（資料5）。

考察1、2からは、共通の課題解決に対し



【資料5 学習後の意識調査】

てあきらめずに向かう姿から向上性と協働性が発揮されたことが、創造性の発揮に大きく影響したと考えられる。以上のことから創造性を発揮するためには、仕組みを探究したいという欲求が大切であり、困難な課題に対しても解決欲求が高ければ、意欲は向上し続けることも、今回の実証授業から考察することができる。

領域「社会共創」部

持続可能な未来社会を拓く領域「社会共創」

1 領域「社会共創」の必要性

持続可能な未来社会を拓くとは、社会や環境、文化との調和を図る未来社会の実現に向けて、社会的な義務や責任を果たしながら、公正な判断ができる資質・能力を発揮することである。

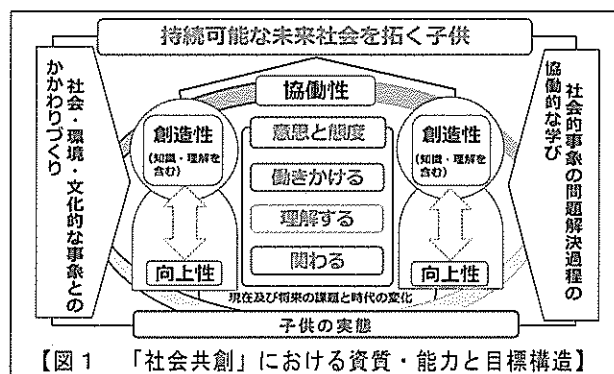
現在及び将来において、環境・人権・平和・開発といった地球規模の問題、エネルギーや食糧問題などの人類の存在基盤を脅かす諸問題が一層深刻化するとともに、国際化・情報化の波もさらに加速するといわれている。特筆すべきは、2030年問題（人口の3分の1が65歳以上の高齢者になる超高齢化）、技術革新による、2045年問題（人工知能が人間の知性を凌駕する『シンギュラリティ』）等の未来予測である。生産年齢人口の減少や技術的失業（新しい技術の導入がもたらす失業）が高い確率で予測されており、我が国の国力の維持・向上が危惧されている。

来たるべき時代に、我が国の国力を維持・向上させていくためには、社会のルールづくりを中心に、生産性の向上を希求し、リーダーシップを発揮しながら、持続可能な社会の実現に働きかけることができる国民の育成が重要だと考える。来たるべき時代を担うミドルリーダーは、現代の子供たちである。その子供たちが将来的に、社会生活の中で、自らの行動を変革し、持続可能な社会を形成していくためには、持続可能な社会の形成の根幹を成す経済や環境、文化的な社会的事象と主体的に関わる態度、それらとの関係を理解する能力、そして、社会に働きかけ、自分の活動によって社会をよりよくできるという当事者意識を伴った意思と態度を育む領域「社会共創」が必要である。

2 目標と内容

(1) 目標について

かわりづくりの活動を通して、自分と社会、環境、文化との関係理解を図り、持続可能な社会に働きかける意思と態度を育む。



持続可能な未来社会を拓く子供に必要な力は、過去の先人たちが生み出してきた解決策を知り、現在及び将来的な課題を考え、未来を創るべく行動するといった生産性やリーダーシップである。その根幹を成す資質・能力は、問題認識力や画期的な解決方法への強い希求心をもって社会的事象に関わる向上性。社会的な見方・考え方を働かせながら、多角的に社会の仕組みや人々の営みを関係付けて理解し、付加価値の創造や生産性の向上に働きかける創造性。社会の一員としての自覚をもち、社会的な義務や責任を果たしながら、社会との関わりを強めようとする協働性である。これらは、かわりづくりの内容や協働的な学びが相互作用することで働くと考えられる。そして、自分と社会・環境・文化との関係の理解と持続可能な社会の実現に、関わる、働きかける意思と態度が育つことにより、地域社会の一員としての市民、国家の成員としての国民、国際社会に生きる日本人という性格を併せもつ公民としての自覚をもった、持続可能な未来社会を拓く子供が育つと考える（図1）。

(2) 内容について

目標に迫るためには、「経済」、「民主主義」、「平和」、「持続可能性」、「環境」、「文化」といった現代及び未来社会の課題やESDの対象を内容構成の視点とする。本領域では、社会、環境、文化との関わりを起点とし、以下のような内容を設定する。

〔A自分と社会〕

地域や我が国、世界の産業や経済、法やきまりを視点に、国力の維持・向上の実現、平和で民主的な社会の仕組みや働きをとらえることができる。

〔B自分と環境〕

地域や我が国、世界の自然環境、防災、持続可能性を視点に、循環型社会の実現の仕組みや働きをとらえることができる。

〔C自分と文化〕

地域や我が国、世界の文化、人権、国際関係を視点に、多様性を尊重し合う共生社会の仕組みや働きをとらえることができる。

上記の内容を設定することにより、持続可能性な未来社会を拓く子供を育てる。そのためには、発達段階に応じた資質・能力を割り出すとともに、重点内容の設定や教材、題材の学びを工夫する必要がある。

なお、中学年は地域学習にとどまらず、世界の諸地域の生活の内容を盛り込むことで、グローバルな視点から地域社会を創る子供の育成を図る。

3 資質・能力の系統

【表 1 領域「社会共創」の資質・能力表】

資質・能力	構成要素	第3, 4 学年	第5 学年	第6 学年
創造性	社会的な見方・考え方	位置や空間, 時期や時間, 事象や人々の相互関係を視点に, 事実や事象を相互に比べ, つなげる。	位置や空間, 時期や時間, 相互関係, 共存・共栄や持続可能性を視点に, 事象と国民生活とを関連付ける。	位置や空間, 時期や時間, 相互関係, 共存・共栄や持続可能性を視点に, 複数の資料や因果, 条件を結び付ける。
	問題解決能力	社会的な見方・考え方を働かせて, 地域の特色や相互の関連を多角的に考察し, 社会への関わり方を選択・判断する。	社会的な見方・考え方を働かせて, 持続可能な産業や環境の在り方を多角的に考察し, 社会への関わり方を選択・判断する。	社会的な見方・考え方を働かせて, 歴史的事象と我が国の発展, 国際社会における役割を多角的に考察し, 社会への関わり方を選択・判断する。
	社会的現象に対する理解	地域の産業や消費生活, 人々の健康や安全を守る諸活動, 地域を創生する人々の働きをとらえる。	我が国のグローバル化する経済や産業, 情報化の進展による産業の変化と国民生活との関連をとらえる。	経済格差等の問題に対応する地方公共団体の働き, 選挙の意味や我が国の政治の働きとその考え方をとらえる。
	環境文化	地域の地理的環境, 防災や環境保全に対応する市の働きをとらえる。	我が国の防災, 環境保全や安全な国土(領土)を守る人々の働きをとらえる。	世界の諸地域における環境保全等の地球規模の課題に対応する人々の働きをとらえる。
協働性	公民的態度	地域社会に対する誇りや愛情, 地域社会に生きる市民の一員としての自覚をもつ。	持続可能な産業や国土の環境を保護・創造する国家の一員としての自覚と国土への愛情をもつ。	歴史や異文化への愛情, 国際社会における日本の役割に誇りをもち, 国際社会に生きる日本人としての自覚をもつ。
	参画意識	地域社会の発展を願い, 実現に向け, 地域社会との共創の必要性に気付く。	我が国の産業や環境を持続させる社会の実現への共創に必要性をもつ。	我が国や国際社会の環境の保全, 安全と平和に貢献する共創の意識をもち続ける。
	義務や責任	集団や地域社会における自分の発言や行動に責任をもって, 地域の人々と共生する意識をもつ。	集団や社会における自分の発言や行動に責任をもち, 自分の役割を自覚する。	集団や社会における自分の言動に責任をもち, 自分の役割を踏まえた上で, 主体的に参加しようとする。
向上性	問題認識力	地域社会における問題を把握し, 追究の視点や解決の見通しをもつ。	我が国の国土や産業における問題を把握し, 追究の視点や解決の見通しをもつ。	地球規模の社会的現象の問題を把握し, 追究の視点や解決の見通しをもつ。
	問題解決への計画力	過去や現在に基づき, あるべき地域像を予想し, 他者と共有しながら, 自分の関わりを考える。	過去や現在に基づき, あるべき未来像を予測し, 他者と共有しながら, 持続可能な社会の実現を構想する。	過去や現在に基づき, あるべき未来像を予想・予測・期待し, それを他者と共有しながら, ものごとを計画する。
重点内容	A 自分と社会	・地域の活性化 ・障がい者との共生 ・地域産業と世界とのつながり	・新しい技術と国民生活 ・国内企業と外国企業の連携 ・経済の上での世界との関係	・我が国や世界の貧困問題 ・日本と世界の法や裁判
	B 自分と環境	・防災に努める市の働き ・地域の環境の変化 ・世界の人々の水と生活	・世界の特色ある環境 ・地下資源と領土問題	・地球温暖化の防止 ・日本と世界のエネルギー
	C 自分と文化	・地域の変化する祭 ・日本と世界の祭 ・地域の外国人との共生	・我が国の年中行事, 伝統産業を保護・創造する人々 ・情報の国際化	・世界遺産の保護・創造 ・世界の紛争・戦争と平和

4 学習展開

(1) 教材化

教材化は、子供が社会に潜む問題の解決の過程において、「創造性」「協働性」「向上性」の3つの資質・能力を身に付け、発揮できるように開発する。さらに、現代社会の問題であると同時に、未来社会においても懸念される問題（ESD が対象としている課題であるところの「経済」「民主主義」「平和」「持続可能性」「環境」「資源」「文化」を含むもの）である。

ここでは、将来、子供が地域や我が国、国際社会を生活舞台とし、持続可能な社会の実現に向けて、問題解決の仕方や働きかけ方を「かかわりづくり」を通して、身に付けていくことを重視する。子供が社会的事象に関心をもち、自分の生活との結び付きをとらえたりできるものや、よりよい生活や社会の実現に働きかける意思と態度をもつことができるものを教材開発の視点にする。このことによって、未来社会を創造する主体を育むことができると考える。そこで、教材化の視点と条件を以下のように設定する（表1）。

【表1 教材化の視点と条件】

視点	内容条件
創造性との関わりから	持続可能な未来社会を創造している人々の営みや願い、社会の仕組みや働きをとらえることができること
協働性との関わりから	よりよい社会の実現に向けて共創への関心を高め、社会に生きる一員としての自覚をもつことができること
向上性との関わりから	事象が及ぼす社会や生活への影響をもとに、驚きや疑問をもち、問題解決の見通しをもつことができること

(2) 内容の構成

内容主題は、中学年を「地域社会生活」5学年を「国民生活」、6学年を「国民生活と国際社会」とする。構成は、社会（経済や民主主義）、環境（自然や資源、防災）、文化（歴史や伝統、国際関係、平和）とし、その際、「空間」「時間」「社会」という3つの軸を視点に考える。

【第3学年】

「地域を愛し、様々な人と暮らそう」を大主題とし、「まちづくりへの共創」を視点に構成する。

内容の視点	社会 空間 時間 社会	環境 空間 時間 社会	文化 空間 時間 社会
題材	・地域の特色ある産業の歩み ・まちおこし(商店街の活性化) ・地域の政治	・地域の地理的な特色 ・地域の安全な生活 ・飲料水の確保	・地域の外国人 ・スーパーの中の世界 ・受け継がれる博多の文化と未来

【第4学年】

「地域をよりよくしよう」を大主題とし、「地域生活の向上を図る人々との共創」を視点に構成する。

内容の視点	社会 空間 時間 社会	環境 空間 時間 社会	文化 空間 時間 社会
題材	・地域と日本の産業 ・世界の特色ある産業 ・日本の政治の昔と今	・防災と市の働き ・世界の人々の水と生活 ・地域の環境の変化	・障がいのある人々の生活 ・多文化理解 ・日本の祭と世界の祭

【第5学年】

「国民生活を豊かにしよう」を大主題とし、「国土や産業を保護・創造する事象への共感・共創」を視点に構成する。

内容の視点	社会 空間 時間 社会	環境 空間 時間 社会	文化 空間 時間 社会
題材	・経済の上での世界との関係 ・新しい技術と国民生活 ・国内企業と外国企業の連携	・日本の環境の変化 ・世界の特色ある環境 ・資源開発と領土問題	・情報の国際化 ・我が国の年中行事、伝統産業を保護・創造する人々

【第6学年】

「日本人としての自覚をもち、国際社会に生きよう」を大主題とし、「人や環境、文化との共存・共栄」を視点に構成する。

内容の視点	社会 空間 時間 社会	環境 空間 時間 社会	文化 空間 時間 社会
題材	・日本の法の歴史 ・日本と世界の法や裁判 ・我が国や世界の貧困問題	・地球温暖化を防ぐ ・日本と世界のエネルギー ・持続可能な開発のために	・NPO ・ユニセフとユネスコ ・世界遺産を守る ・世界の紛争と平和

(3) 内容の取り扱い

各学年においては、「A 自分と社会」「B 自分と環境」「C 自分と文化」の内容を空間軸、時間軸、社会システム軸のつながりや広がりや視点を年間計画に配列する。その際、第3学年では、「まちづくりへの共創」、第4学年では、「地域生活の向上を図る人々との共創」、第5学年では「国土や産業を保護・創造する人々との共創」、第6学年では、「人や環境、文化との共存・共栄」を視点に、産業構造、生活様式の変化、グローバル化、情報化の進展に対応する内容を取り上げる。

(4) 題材を通した学び

領域「社会共創」の特色は、持続可能な社会づくりのための担い手として、社会、環境、文化とのつながりや関わり認識にとどまらず、それらとよりよい関係をつくっていかうとする意思と態度を育てることにある。この意思と態度は、以下の3つのかかわりづくりの内容を通して育成されると考える（図2）。

○ かかわりづくり1（間接的な体験）〔自己追究〕

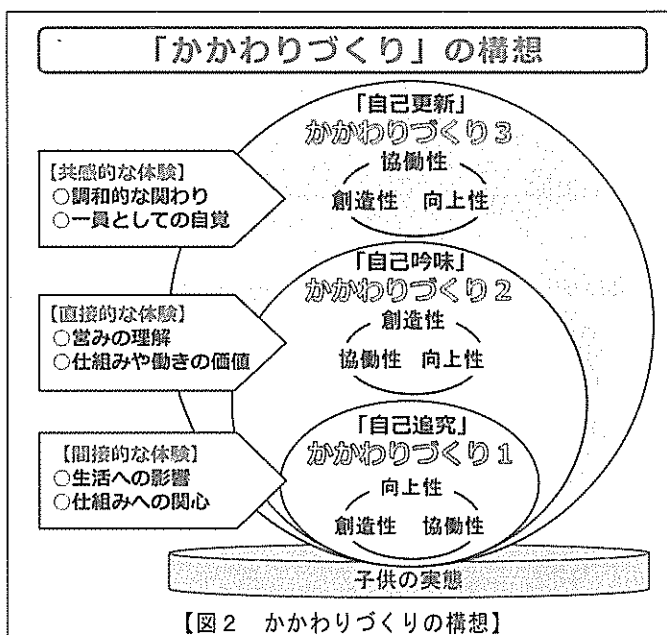
自分を取り巻く、社会・環境・文化との調和的なつながりや関わりの実現を図る人々の営みや社会の仕組みそのものの理解ではなく、それらの営みや仕組みが自分とどのような関係にあるのかについて問いをもつことである。この問いは、社会づくりにかかわる担い手としての自覚（主体的な行動力）を促すと考えられる。

○ かかわりづくり2（直接的な体験）〔自己吟味〕

自分を取り巻く、社会・環境・文化とのつながりや関わりの実現を図る仕組みのすばらしさ、自分の生活にとっての価値を醸成し、自分も何か役に立ちたい、関心をもち続けたいという思いや願いをもつことである。この思いや願いが実践する内容や関心の方向を決定していくと考える。

○ かかわりづくり3（共感的な体験）〔自己更新〕

社会・環境・文化との関係をどのように高めていくか、その高めて行く方向である。社会への創造（自分が役に立つこと、関心をもち続けること）を行うことで、自分と社会との相互的な関係の理解や調和的な精神の大切さを一層学んでいくと考える。



身近な社会や世界の諸問題（社会・環境・文化）における当事者の営みと課題解決への関わりを学習対象とし、3段階のかかわりづくりの内容により、持続可能な未来社会を拓く主体としての意思と態度の育成を目指す。

領域「社会共創」における学習のプロセス

かかわりづくり1〔自己追究〕		かかわりづくり2〔自己吟味〕		かかわりづくり3〔自己更新〕
動機付け	方向付け	情報収集	考察・構想	実践・まとめ
社会問題の把握 追究課題の設定	解決の見通し ・予想・計画	情報収集 課題の追究	●社会的事象の持続可能性を 多角的に考察する。 ●事象の価値を見だし、 付加価値を創造する。	●解決に向けて構想したことを 実践する。 ●これからの自分と社会との 関わりについてまとめる。

(5) 一単位時間の学び(例)

	自己追究	自己吟味	自己更新
学 習 活 動 と 内 容	1 前時の想起や学習計画をもとに、本時追究する課題について話し合う。 (1) 前時の想起や学習計画を確認する。 ○ 問題の把握 (2) 本時追究する課題について話し合う。 ○ 追究の視点の共有	2 追究の視点をもとに調べ、事象の特色や意味について話し合う。 (1) 追究の視点をもとに、資料を活用して調べる。 ○ 資料活用による自己追究 (2) 調べたことや考えたことを出し合い、事象の特色や意味について話し合う。 ○ 仕組みや働きの意味理解	3 本時学習における学びを振り返り、見方・考え方の変容について話し合う。 (1) 本時学習における学びの成果を振り返る。 ○ 見方・考え方のとらえ直し (2) 新たな課題について話し合う。 ○ 事象との関わり合いの見直し
手 だ て	※ 実社会の現実課題の提示 ※ 学習計画表	※ 出し合い→比べ合い ※ GTによる思いや願いの提示	※ 自己評価による振り返りの場 ※ 新資料の提示

【引用・参考文献】

- 伊賀泰代.『生産性（マッキンゼーが組織と人材に求め続けるもの）』.ダイヤモンド社.2016.
- 唐木清志 他.『シティズンシップ教育でつくる学校の未来』.東洋館出版社.2015.

領域「社会共創」年間指導計画

学年	学期 内容区分	1 学期			
第3学年	A 自分と 社会		地いきの特色ある仕事のうつり変わり⑩		唐人町商店街
	B 自分と 環境	たんけん、はっけん！福岡市⑪ ～調べよう！福岡市の様子～			
	C 自分と 文化			スーパーの中の世界⑧	
年間時数(105時間)		31時間			
第4学年	A 自分と 社会		日本の政治の昔と今⑬	地域と日本の産業⑪	世界の特色
	B 自分と 環境	防災と福岡市の働き⑬			
	C 自分と 文化				
年間時数(105時間)		31時間			
第5学年	A 自分と 社会				
	B 自分と 環境	日本の環境の変化⑭	世界の特色ある環境⑭	資源開発と領土問題⑭	
	C 自分と 文化				
年間時数(105時間)		31時間			
第6学年	A 自分と 社会			日本と世界の法や裁判⑮	我が国や世界
	B 自分と 環境				
	C 自分と 文化		日本の歴史⑯		
年間時数(105時間)		32時間			

2 学期			3 学期		
を元氣よく⑮	つくろう住みやすいまち⑮ ～福岡市に住む外国人～			地いきのせい治⑩	
		地いきの安全な生活⑬			
			受けつぐ博多の伝とうと未来⑫		
52時間			22時間		
ある産業⑫					
	世界の人々の水と生活⑪	地球の環境の変化⑭			
			障がいのある人とともに⑩	日本と世界の祭⑪	
50時間			24時間		
	新しい技術で変わる 国民生活⑮	国内企業と 外国企業の連携⑯			
			情報の国際化⑭	我が国の年中行事⑨	
45時間			29時間		
の貧困問題⑮			わたしたちの未来と政治⑩ ～熊本復興支援～		
	日本と世界のエネルギー⑯	地球温暖化を防ぐ⑨			
				世界の紛争と平和⑥	ユニセフとユネスコ⑥
51時間			22時間		

1 資質・能力

- 我が国の新しい技術開発による産業と国民生活との関連をとらえ、産業の進展がもたらす社会への影響を多角的に考察し、自分たちの社会との関わり方を構想することができる。 (創造性)
- 産業の発展を願う一員としての自覚をもち、産業の発展に伴う社会の中における人間の役割や責任の重要性に気付くことができる。 (協働性)
- 新しい技術開発による社会に見られる課題をもとに、社会と人間との共存のあるべき未来像を予測し、国民生活の向上と地球環境の持続可能な社会の在り方を考えることができる。 (向上性)

2 題材の考え方

本題材では、以下の3つのかかわりづくりの内容を通して、未来社会における人間の役割や責任に対する見方・考え方を高めることができるようにする。

○ 技術開発の生活への影響「かかわりづくり1」

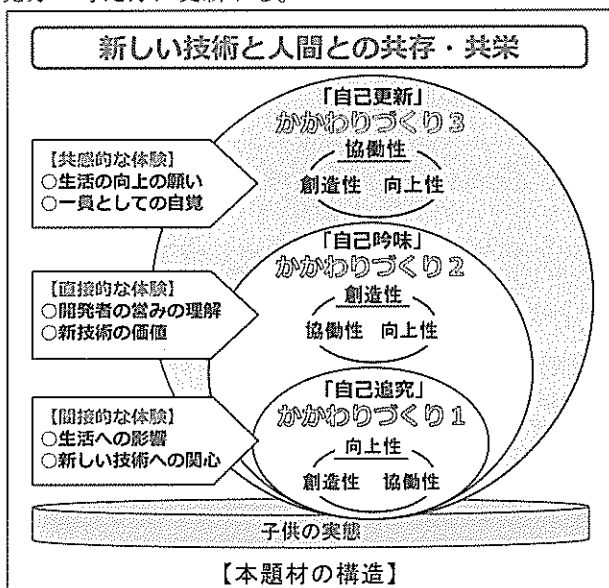
未来社会や国民生活における利点や不安な点を把握することができるように、新しい技術の開発による国民生活への影響を追究する。

○ ロボットと人間の共存「かかわりづくり2」

安川電機の技術開発と未来社会との関係をとらえることができるように、開発に携わる人々の働き、願いや努力の意味を吟味する。

○ 自分と未来社会との関わり「かかわりづくり3」

持続可能な社会の在り方を判断できるようにするために、安川電機や Panasonic、SoftBank の開発に携わる人々の願いや努力の共通点の導きから、共存・共栄の見方・考え方に更新する。



3 学習の流れと考察

導入段階のねらい: 1～3/13時 (かかわりづくり1)

技術開発による生活への恩恵を実感すると同時に、今後の開発による社会構造や国民生活の変化に関する問いをもつことことができる。

- (1) 我が国のこれまでの工業の特色や工業製品の移り変わりや国民生活の変化について調べる。
- (2) 新しい技術の開発による生活への影響について調べ、学習課題について話し合う。



【写真1 日本の技術の進歩はすごいな】

新しい技術と生活への影響
スマート家電はすごいと思いました。いろいろなものがスマートフォンでつながってとても便利になると思いました。でも人工知能のうが人間をこえるとか将来、仕事がなくなることがおきたら、不安になりました。日本の技術があがったら、どのような未来になるか知りたいです。

【資料1 A児の学習後の課題】

導入段階では、先端技術の開発に伴う生活への恩恵、変化に対する問いをもたせるために、工業製品の変遷に関する資料、IoT や人工知能などの新しい技術開発やそれに伴う「消える職業」の紹介し、国民生活への影響を考えさせた。子供たちは先端技術の進歩と新しい製品の開発に驚いた(写真1)。さらにA児は、新しい技術開発によって、近未来の生活がより便利で快適になることに対する期待感と、人間の仕事や役割が失われるといった不安感も併せもち、未来の社会像に対する学習課題をもった(資料1)。

考察1

新しい技術開発による未来の社会像に関する問いをもたせるために、工業の変遷や新しい技術による生活への影響を追究させたことは有効であった。その根拠は、児童が新しい技術開発による生活への影響をもとに、未来社会の構造や様子への関心や、自分事として考えていきたいという課題意識をもったからである。

展開段階のねらい: 4～9/13時 (かかわりづくり2)

安川電機の社会貢献について調べ、新しい技術開発による未来社会像を創造することができる。

- (1) 安川電機の社会貢献を調べる視点を話し合い、技術開発に携わる人々の営みや努力を調べる。



【資料2 安川電機の技術開発と社会貢献の追究】

- (2) 安川電機の開発を調べ、安川電機が目指す未来社会について話し合う。



【資料3 安川電機が目指す未来社会像の交流】

安川電機は、産業用ロボットのとく恵な技術で、人間しかできない質のよさとロボットがとく恵な量のタスクをそれぞれ組み合わせて、人間とロボットが共存できる未来をつくる。

【資料4 A児が判断した安川電機の未来社会像】

新しい技術開発に対する見方・考え方

はじめは、未来の人口が減って、技術の質や生活の質がおちるかもと心配だったけど、新しい技術(特に人工知能)は、人間のよさとロボットのよさがどちらも生かされるように、未来の開発や生活はもとよたかになると思います。

【資料5 A児の新しい技術開発への見方・考え方】

展開段階では、新しい技術開発による未来社会像を創造させるために、安川電機の社会貢献と安川電機が目指す未来社会像を追究する活動を設定した。子供たちは、開発に携わる人の仕事や努力を調査し、最先端の技術開発に驚いた(資料2)。A児は、安川電機が、全てをロボットに任せないことから、人間とロボットが互いの能力を生かし、共存する社会を目指していることをとらえた(資料3、4)。さらにA児は、安川電機の追究を通して、将来的な人口減少に伴う生活の質への不安を、人間とロボットの共存が、国民生活の向上に寄与するという見方・考え方に高めた(資料5)。

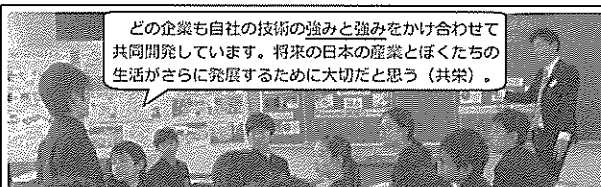
考察2

新しい技術開発による未来社会像を創造させるために、安川電機の技術開発や社会貢献に直接触れる場を設定したこと、安川電機が目指す未来社会について話し合う活動を設定したことは有効であった。その根拠は、資料4から未来社会における人間とロボットの役割をとらえた姿が、資料5から新しい技術開発と国民生活との関連をとらえた姿が読み取れるからである。

終末段階のねらい: 10～13/13時 (かかわりづくり3)

新しい開発による第2次産業の発展の方向と見え、自分と社会とのかかわりを判断することができる。

Panasonic (IoT 技術) や SoftBank (AI 技術) の開発を調べ、技術開発の特色や自分のかかわりを話し合う。



【資料6 各企業が他社と共同開発する意味の交流】

ドローンやスマートフォンを使った事件も起きていることも事実。未来の生活を平和で安全なものにするために、ぼくたちが使う側として、ロボットにはできない、きまりやルールづくりをしていくことが大切だと思う。

【資料7 A児の学習後の感想(一部抜粋)】

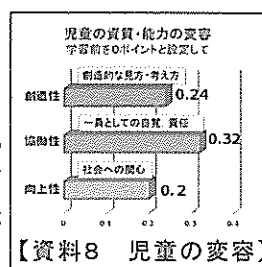
終末段階では、産業の発展の方向と自分のかかわりを判断させるために、Panasonic や SoftBank の開発を追究する活動や資料「先端技術の光と影」を視聴する活動を設定した。A児は、企業の連携による共存・共栄の仕組みに気づき(資料6)、未来における自分のかかわりを人間の役割という視点で判断した(資料7)。

考察3

生活の向上を共同開発の意味や自分のかかわりから判断させたことは、技術と人間の共存・共栄に気付かせる上で有効であった。それは、未来の人間の役割に気付いた姿が資料6から読み取れるからである。

全体考察

本題材では、3つの資質・能力が伸長したことがわかる(資料8)。これは、未来社会を創造している事象を教材化し、「かかわりづくり」を題材に配列したことが、持続可能な社会を拓く一員としての自



【資料8 児童の変容】

覚を育む上で有効に働いたためであると考え。今後の課題としては、特に、「かかわりづくり3」の方向を当事者や子供の求めから設定していくことである。

領域「表現」部

素材のよさを活かして感情やイメージを豊かに表す領域「表現」

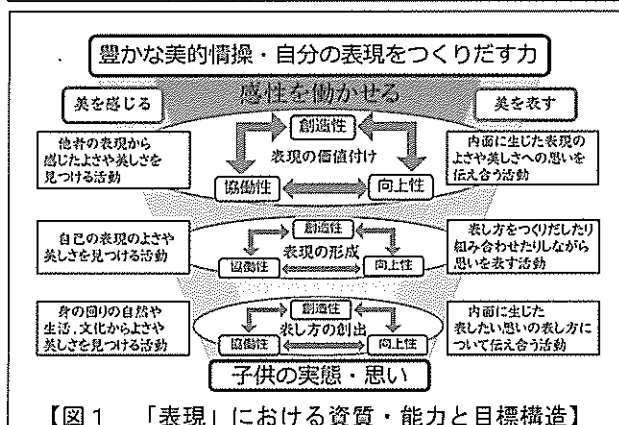
1 「表現」の必要性

これからの未来は、予測不可能な変化の激しい時代となると予想されており、正しい方向性や価値あるものを見いだしていこうとする態度や能力が必要となる。リード（1958）が「芸術はあらゆる有効な教育方法の基礎である」と述べているように、創造的な想像力を発揮する芸術表現は、新たな発想を生み出す力や柔軟性がこれまで以上に求められる社会では大変重要となってくる。従来の芸術表現に関する学習において、教科の本質にもとづき、感性を働かせながら美を感じ、自分の表し方をつくりだす子供たちの姿が見られた。一方で、近年の芸術表現には、多種多様な表し方を組み合わせているものも多数見られる。人間にとっての表現とは、本来多様な表現活動の中から1つを選択したり、複数を組み合わせたりして、内面にある感情やイメージを表に現しだすことである。「表現」は、従来の教科等の枠にとらわれずに、よりよい表現をつくりだすことに向かって活動を連続・発展させることのできる領域である。領域「表現」における「美」とは、視覚や聴覚、嗅覚などの諸感覚を通してそれを受領する人に感動を起こさせるものや現象である。つまり、自然や生活、文化にある美しいものを美しいと感じることができる豊かな感性をもつことが大切なのである。そのうえで、感じたことをもとに自分の表現をつくりだし、自分を表現しながら主体的に社会に関わることができる人間の育成を目指す。このような人間こそ、これからの時代に求められているのである。

2 目標と内容

(1) 目標について

感性を働かせながら、美を感じたり表したりする活動を通して、自分の表現をつくりだす力を高め、豊かな美的情操を養う。



【図1 「表現」における資質・能力と目標構造】

領域「表現」では、表し方の創出、表現の形成、表現の価値付けの各段階において美を感じ、美を表す。領域「表現」の学習では、表現を支える知識や技能を活かしたり、よさや美しさを感じ取ったり、表し方を見いだしたりする際に創造性が十分に発揮される。自分の表現をつくりだす際に、創造性を十分に発揮し、新たな考えや価値をつくりだすことで、高めていくことができる。また、他者による多様な表現のよさを感じ取ったり、それを自分の表現に活かしたりする際には協働性が発揮される。協働性は、自分の表現の価値を新たに見いだしたり、強化したりする。さらに、表現が自分の表したいことに適するか見いだす際には、自己の内面を見つめる向上性が発揮される。

(2) 内容について

領域「表現」の内容は、造形、音楽、複合の3つである（表1）。A造形とB音楽で特徴ある表現活動を行い、培った資質・能力を活かしながらC複合の学習を行うことで、従来の図画工作科と音楽科のよさを活かしつつ、近年の芸術表現の多様性に対応することができると考える。空間、時間という違いがある2つの芸術を関連付けながら表現活動に取り組むことで、さらなる創造性の発揮が期待できると考える。

【表1 3つの内容と表現活動や芸術の関連性】

内容	A 造形	B 音楽	C 複合
表現活動	造形表現	音楽表現	複合表現
芸術の分類①	空間芸術	時間芸術	時間芸術・総合芸術
芸術の分類②	美術 デザイン	音楽	舞台芸術・映像芸術 インスタレーション

3つの内容の具体は、以下の通りである（表2）。

【表2 領域「表現」における3つの内容の具体】

A 造形	形、色などの造形要素を含む素材への関わりをもとに、感じたことを造形的な表現活動を中心に表したり、互いの表現のよさや美しさを味わったりすること
B 音楽	音色、リズムなどの音楽要素を含む素材への関わりをもとに、感じたことを音楽的な表現活動を中心に表したり、互いの表現のよさや美しさを味わったりすること
C 複合	集団での美的な共有体験によって生じた表現への欲求をもとに、造形および音楽的な表現活動が協調・調和した形式で、素材のよさを活かした表し方を見いだし、表現を構成すること

3 資質・能力の系統

領域「表現」において育てたい資質・能力は、次の通りである（表3）。創造性は、表現に関する技能や知識、自分の表現をつくりだそうとする態度や、素材や表現のよさや美しさを感じ取り、それを自他の表し方に活かそうとする思考のことである。創造性を発揮した子供たちは、諸感覚を働かせ、多様な素材からよさや美しさを感じ取り、自分の思いを自分の表し方で

工夫して表す。協働性は、互いのよさや美しさを共有しながら表し方をつくりだす際に働く受容・伝達に関する資質・能力である。協働性を発揮した子供たちは、ともに納得して表現に没頭する。向上性は、自分の表し方のよさや美しさを見いだしたり、表したいことに合う表し方を選んだりする資質・能力のことである。向上性を発揮した子供たちは、自分の表し方のよさを価値付けたり、よりよいものを選択したりする。

【表3 領域「表現」の資質・能力表】

資質・能力	構成要素	低学年	中学年	高学年
創造性	自己開放	諸感覚を働かせ、身体全体を通して表現素材に関わりながら、自分の表し方をつくりだし、表す。	諸感覚を働かせ、表現素材に積極的に関わりながら、それらの特徴を活用して自分の表し方をつくりだし、工夫して表す。	諸感覚を働かせ、自然や文化、他者に働きかけながら、それらのよさを活かして自分の表し方をつくりだし、工夫して表す。
	表現に関する知識・技能の習得および活用	表現素材に実際に関わりながら、造形や音楽などの表現活動に関わる知識を身に付け、表し方づくりに活用することを楽しむ。	自己の思いや考えと表現素材の関連について試行錯誤しながら、造形や音楽などの表現活動に関わる知識を身に付け、活用できるかどうか試す。	自己の思いや考えと表現素材、社会や環境との関連について考えながら、造形や音楽などの表現活動にかかわる知識を身に付け、活用する。
	感性的思考	身の回りの自然や文化、自他の活動から、面白さや楽しさを感じ取るとともに、使ってみたい材料や場で表現素材に関わり、自分の表し方を見いだす。	身の回りの自然や文化、自他の活動から、よさや面白さを感じ取り、その価値を自分なりに考えるとともに、思いや考えを伝えるための材料や場を試しながら、表現素材のよさを活かした表し方を見いだす。	身の回りの自然や文化、自他の活動から、よさや美しさを感じ取り、その価値を自分なりに判断するとともに、感じた美しさなどの感じや用途、テーマにもとづき、表現素材のよさを活かした表し方を見いだす。
	表現欲求	自分の内面に生じた感動や共感、興味にもとづいた思いを伝える表現をつくろうとする。	自分の内面に生じた感動や共感、必要感にもとづいた思いを伝える表現をつくろうとする。	自分の内面に生じた感動や共感、テーマや必要感にもとづいた思いを伝える表現をつくろうとする。
協働性	内面伝達	相手の表し方から感じた面白さや楽しさを伝える。	相手の表し方から感じたよさや面白さを伝える。	相手の表し方から感じたよさや美しさを伝える。
	美的共感	相手の表し方の面白さや楽しさを、追体験や伝え合いを通して楽しみながら、表現素材の特徴を通して肯定的にみる。	相手の表し方のよさや面白さを、自分の表したい思いに合うかどうか試しながら、表現素材の特徴を通して肯定的に感じ取る。	相手の表し方のよさや美しさを、自分の思いや考えと統合・再構成しながら、表現素材の特徴を通して肯定的に感じ取る。
向上性	自己決定	自分の感覚にもとづいて表現素材や他者などに関わりながら表し方を楽しみ、好きな表し方や試してみたい表し方を選ぶ。	自分の思いや考えにもとづいて表現素材や他者などに関わりながら、目的に合わせて構成要素の特徴をとらえて選択する。	自分の思いや考えにもとづいて、目的に合わせて構成要素の組合せを考えながら、表現に適した方法を選択する。
	自己認識	自分の表し方の面白さや楽しさを見いだし、それらをもとにして表すことを心から楽しむ。	自分の表し方のよさや面白さを見いだし、表したい思いや考えと照らし合わせながら、明確にする。	自分の表し方のよさや美しさを見いだし、表したい思いや考えと関連付けながら、明確にする。

(3) 題材を通した学び

領域「表現」における題材の学びは、素材との出会いによる美的な感動にもとづく思いをもつことから始まる。その中で、創造性のうち、表現に関する知識や技能、感性的思考を発揮する自己追究の活動を通して表し方の創出やイメージの具体化を活発にしたり、向上性を発揮する自己吟味の活動で自分の表現のよさや方向性を確かめたりしながら、創造性を発揮する。このようにして、自己追究と自己吟味を往還しながら、自己更新を軸にして、表現への価値付けを行っていく。

この題材の学びを通して、感情やイメージ

を豊かに表していく（図3）。具体的には、導入段階では、表現に関する知識や技能を活かしながら、表現素材のよさを活かした表し方を見いだし、思いにもとづいて決定する。展開段階では、表現に関する技能を働かせながら自分の表し方をつくりだし、自分の表したい思いと照らし合わせながらよさや美しさを明確にしていく。一方では、感性的思考を働かせながら新たな表現素材と出会い、新たな表し方も見いだし、それらを組み合わせるなどしてよりよい表現をつくりだす。終末段階では、表現活動に関わる知識を活かしながらよさや美しさを感じること、自分の表現に対して自己認識を通して価値付けを行う。なお、相手のよさや美しさを受容し、感じたことを伝えたり、自分の思いや考えと統合・再構成しながらよさや美しさを感じ取ったりする協働性は、題材の学習の中でも展開や終末に向かうほど強く発揮され、自己更新や自己追究、自己吟味の活動を広げたり深めたりする。

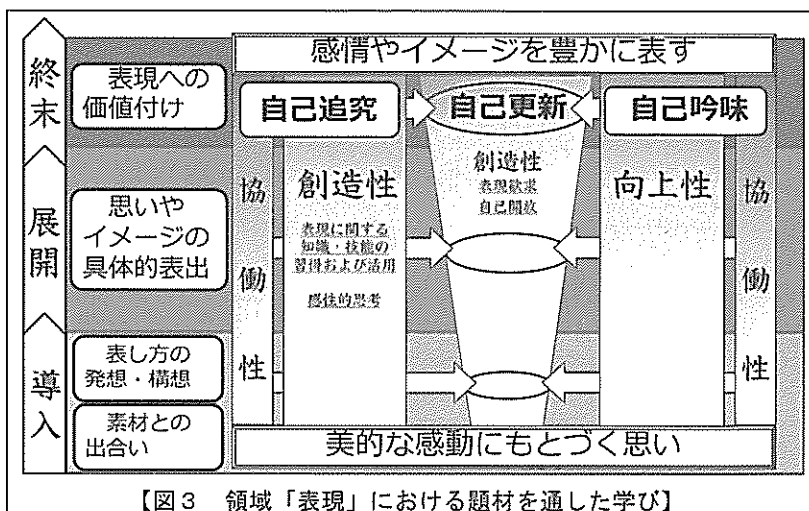
C複合における題材の学習計画の中で、造形要素と音楽要素のそれぞれを重点的に取り上げ、追究した方がよい時間がある場合は、チームティーチングによる学習指導形態を取り、子供たちの資質・能力がより発揮され、高まるようにしていくことも有効である。その際、子供がどのような表現の過程をたどってきたのかを十分に把握して、指導者間での共通理解を図り、指導の有効性を高めておくことが必要である。

(4) 一単位時間の学び

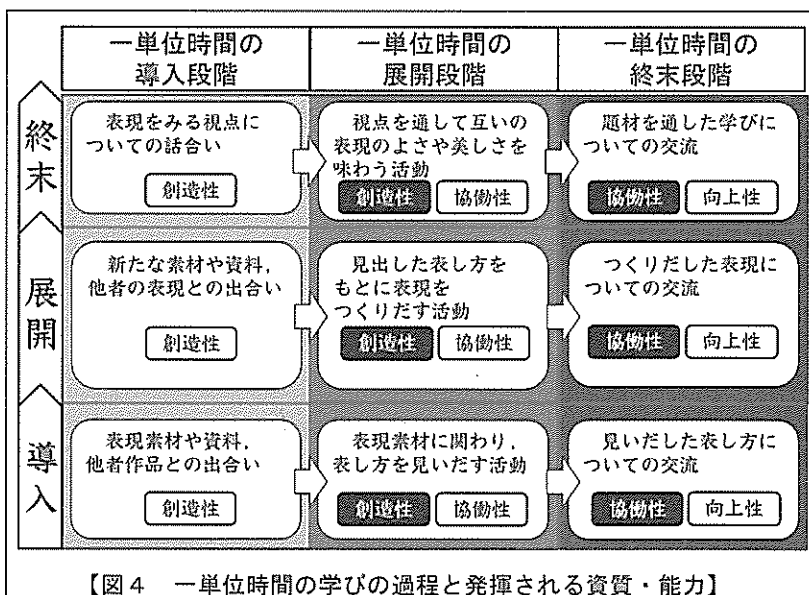
右の図4は、題材の各段階における一単位時間の学びのプロセスである。縦軸は題材の導入、展開、終末の各段階を表している。横軸は一単位時間のうちの段階を表し、左から導入、展開、終末となっている。領域「表現」の学習では、題材の各段階によって一単位時間の学びのプロセスは異なる。下段は題材の導入段階、中段は展開段階、上段は終末段階である。主な手だては、一単位時間の導入段階では、ヒント作品やヒント資料の提示、互いの表現について感じたことを伝え合う場の設定である。展開段階では、それらに加えて活動の場の工夫、終末段階では振り返りカードの提示などが挙げられる。

【引用・参考文献】

- ハーバート・リード、「芸術による教育」、フィルムアート社、2001
 レフ・セミョノヴィチ・ヴィゴツキー、「新訳版芸術心理学」、学文社、2006
 清水益治、森敏昭、「0歳～12歳の発達と学び」、北大路書房、2013
 長島知正、「感性的思考」、東海大学出版会、2014
 浅見均、「子どもと表現」、日本文教出版、2015
 国立教育政策研究所、「国研ライブラリー資質・能力〔理論編〕」、東洋館出版社、2016



【図3 領域「表現」における題材を通した学び】



【図4 一単位時間の学びの過程と発揮される資質・能力】

領域「表現」年間指導計画

学年	学期 内容区分	1 学期					
第 1 学年	A 造形	いっぱい かいたよ つくったよ⑧	しぜんと なかよし⑥	かみを きったら 生まれたよ⑥	きらきら いっぱい 見つけたよ⑥		見てさわって ひらめいて④
	C 複合					むかしばなしを げきで あらわそう⑩	
	B 音楽	みんなで うたおう⑩	がっきと なかよし⑩	すてきな 音 見つけた！⑥		リズムと	
年間時数(136時間)		52時間					
第 2 学年	A 造形	色と形のかくれんぼ⑥	あつまれ すてきな なかまたち⑥	ペアでうつして ペアで見つけて⑧	切って ひらいて わくわくタワー⑥		どうぶ 「はい！」
	C 複合					海のせかいを げきであらわそう⑩	あつまれ！ パレード
	B 音楽	音楽に気持ちをのせて⑧	お話と音楽⑩	楽きランドのたんけん⑧		楽しもう！ ミュージー	
年間時数(140時間)		52時間					
第 3 学年	A 造形	広がれ 絵の具の世界⑧	走り出せ！ドリームカー⑥	ゆめ広場から広がる ふぞく小ゆめの物語⑥	組み合わせで楽しもう！ 森のおくりもの⑩	光と色のファ	
	C 複合	げきで表すファンタジー⑩					
	B 音楽	春を感じて⑥	楽ふとドレミ⑥	新たな表し方との出会い ～リコーダーの音色～⑥	楽きで重なるハーモニー④	音楽の森⑩	つくろ ぼうけんミュ
年間時数(140時間)		52時間					
第 4 学年	A 造形	カードで味わう形・色⑥	木から生まれる物語⑩				これぞ！日本の
	C 複合	自然と音～展覧会を開こう～⑩				日本のみ力を げきで伝えよう⑩	
	B 音楽	気持ちを合わせて 歌と合奏で⑩	いろいろな楽器の 音色⑥	心休まる ナチュラルミュージック⑧		日本の音階で	
年間時数(140時間)		52時間					
第 5 学年	A 造形	流れる風によって⑧		表そう！お気に入りのマイタイム・マイプレイス⑩			糸のこ
	C 複合	友とのきずなをげきで表そう⑩					
	B 音楽	音の量なりとひびき⑩		つくろう！わたしたちのテーマ曲⑩		音楽で表す美の世界⑩	
年間時数(140時間)		50時間					
第 6 学年	A 造形	季節を感じる四季の窓⑩		世界のアート⑩			動きで表す
	C 複合	劇で伝えるメッセージ⑩					
	B 音楽	四季の音楽を味わおう⑩		音楽世界旅行⑩		音楽で表す美の世界⑩	つくろう ワールド
年間時数(140時間)		50時間					

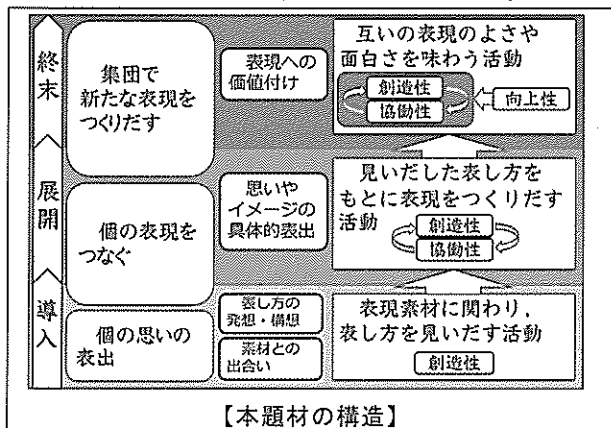
2 学期			3 学期		
	いろと かたちから 見つけた おはなし⑤	はこ ハコ 大しゅうごう⑥	たのしいな しよくべにえのぐで いろあそび⑥	気もちを とどけて すてきな マイロボット⑥	
					6年生に ありがとうの 気もちを つたえよう⑩
なかよし⑧	ドレミと なかよし⑧	きこえてくるよ すてきな音 ⑧	みんなの 音がく パーティー⑧		
52時間			32時間		
つさんと ポーズ」⑥	きせつをかんじる色⑤	つながる ひろがる みんなのまち⑤	ざいりょうのへんしん⑤		
あらつっ子 たい④				音と光であそぼう④	
どうぶつ ジック⑥	きせつをかんじる音楽⑤	サウンドマップをつくろう⑥	おまつりの音楽⑥		
58時間			30時間		
ンタジー⑧			かがやきを集めて つくろう⑧	カラフル ライン ワールド⑧	
	みんなおいでよ！秋の小部屋⑨			音楽からつくりだそう⑩	
う！ ージック⑩			わたしたちの リズムカルファンタジー⑩		
58時間			30時間		
わざ⑩	はんで表す一場面⑩		10才の願いを種にこめて⑩		
		伝えよう！ 私たちが感じる日本のよさ ⑩			10才のぼく・わたし⑫
節づくり⑧	リズムで感じよう 日本と世界⑤		10才の音楽アルバムをつくろう⑧		
58時間			30時間		
クルージング⑧	イメージから生まれるデザイン⑫		転がるぼう陰ワールド⑩		
		ミュージックビデオをつくろう⑩			思いをつないでつくろう！ シンボルタワー⑩
声で旅する日本と世界⑩				つくろう！ぼくたち・わたしたちの「希望と誇り」⑩	
60時間			30時間		
動きを表す⑫	心を伝える絵手紙⑧		メモリーボックスをつくろう⑩		
		世界に誇る！クールジャパン⑩			伝えよう！マイワード 残そう！マイマモリー⑩
ぼくたち・わたしたちの ミュージック⑩				つくろう！ぼくたち・わたしたちの「希望と誇り」⑩	
60時間			30時間		

1 資質・能力

- 表現素材の特徴を活かし、秋について感じているイメージを伝える表し方の工夫を考え、表したいイメージに合う表し方で表すことができる。(創造性)
- 友達を表し方のよさや面白さを感じ取り、自分との共通点やつながりを見だし、互いのよさや面白さを活かした表現を考えることができる。(協働性)
- 秋のイメージが伝わるか確かめながら、よりよい表し方を見だし、秋に対する思いを表すために最適なものを選ぶことができる。(向上性)

2 題材の考え方

本題材では、秋から感じているイメージが伝わるように、表現素材の特徴を活かしながら表し方を考え、友達と考えを伝え合い表現をつくりだす喜びを味わうことをねらいとしている。そのために、個の思いやイメージから表現素材の魅力を見だし、追究して自分の表現をつくりだし、他者との協働的な表現へと発展させる学習過程を踏む。具体的には、表現素材の魅力を見いだす段階で、様々な表し方を組み合わせながら表し方を見いだすことの楽しさを味わうことができる活動を設定し、個の思いを表出させる。次に、個々の表現を集団による表現へと発展させる段階では、秋のイメージと素材をもとにグループをつくる活動を設定する。さらに、他者との協働により表現を高める段階では、視覚や聴覚、嗅覚などの諸感覚を通して感じた秋のイメージを様々な素材の特徴を活かして表す場を設定する。また、題材を通して、多様な表し方を組み合わせた表現のよさや面白さを見いだすことができる材料や資料の提示を行う。なお、素材となる秋の自然物は、色の美しさや形の面白さ、音の楽しさなど、造形や音楽の要素を含むものを選定し、それらに触れる場は身近な校内や西公園のもみじ谷とした。



3 学習の流れと考察

導入段階のねらい: 1～5/20時

彩りの木をつくったり校内を散策したりする活動を通して、季節のイメージを感じ取ることができる。

- (1) 彩りの木づくり、イメージしたことについて話し合う。



【資料1 彩りの木を見て季節のイメージを伝えるA児】

- (2) 季節を感じるものや、諸感覚で感じるイメージを探す。

導入段階では、まず薄墨と食紅えのぐを使って彩りの木を描き、感じたことを伝え合う活動を設定した。次に、校内を散策して感じたことを話し合わせた。子供たちは、互いが諸感覚を通して感じた季節のイメージについて伝え合う活動を楽しんだ。(資料1)。

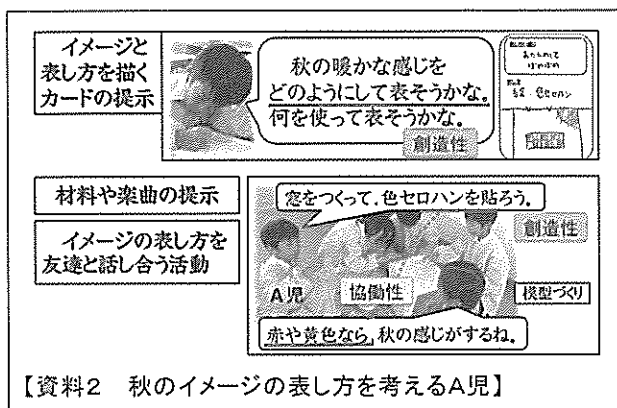
考察1

季節のイメージを感じ取らせるために、彩りの木を描いたり校内を散策したりして感じたことを話し合う活動を設定したことは、創造性を発揮させるために有効であった。その根拠は、資料1のA児のように色から発想を広げたことを友達と伝え合い、自分の思いを明確にしなが、もっと友達と伝え合いたいという思いをもつ子供の姿が見られたからである。子供たちが、互いが感じた秋のイメージを伝え合うことへの表現欲求を高めることができたからである。

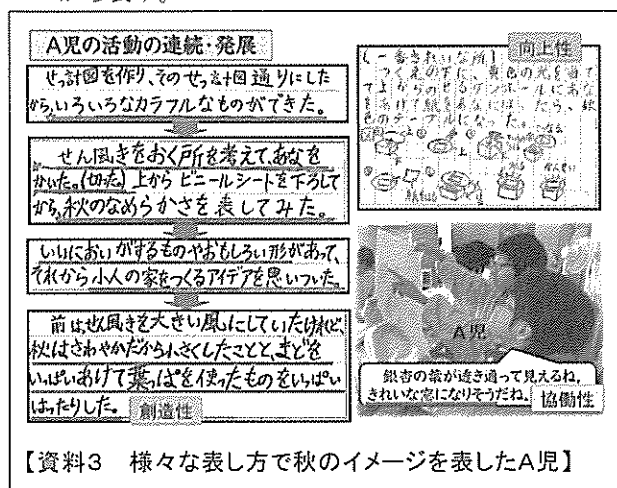
展開段階のねらい: 6～18/20時

自分が感じた秋のイメージの表し方を見だし、素材のよさを活かしながら表すことができる。

- (1) 表したい秋のイメージをもとに、グループで感じたことや表し方について話し合う。



(2) グループで、音や色、形などの組合せを試しながら表す。



展開段階では、まず秋のイメージの表し方について、個、グループと形態を変えながら考えさせた。そして、表し方を試し、秋のイメージを表す小部屋をつくる活動を設定した。子供たちは、友達と一緒に表し方について話しながら、自分たちのグループの秋の小部屋の表し方について考えた(資料2)。そして、和紙や落ち葉などの様々な材料や光、風、音楽などとの組合せによる表し方の効果を活かしながら、秋の小部屋の中で自分の思いをもとに秋のイメージを表し、活動を連続、発展させていた(資料3)。

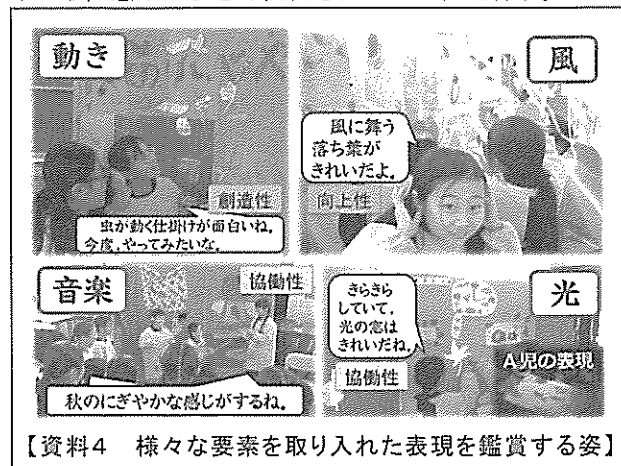
考察2

光、風、音楽など、様々な表し方を組み合わせて秋のイメージを表すことができるようにしたことは、協働性を発揮することを通して創造性を高める上で有効であった。その根拠は、資料2のように友達とともに表し方を明確にしていき、資料3のように活動を連続発展させながら自分が感じた秋のイメージを表すA児のような子供の姿が読み取れたからである。

終末段階のねらい: 19~20/20時

他のグループの友達とともに、秋の小部屋の鑑賞会を行い、感じたイメージを表す工夫のよさや面白さを伝え合うことができる。

グループごとにつくりだした秋の小部屋に入り込みながら、感じたよさや面白さについて伝え合う。

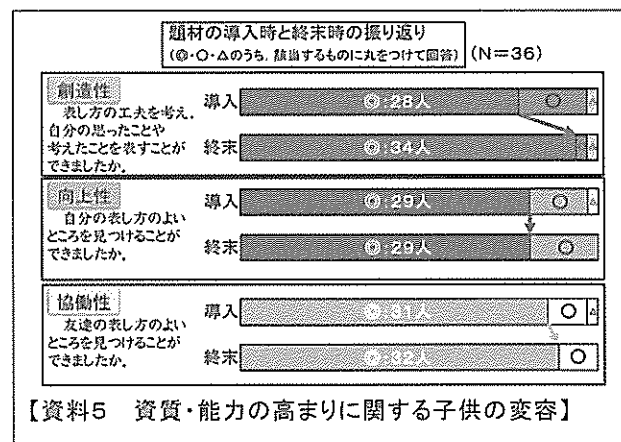


終末段階では、学年合同での秋の小部屋の鑑賞会を行った。子供たちは、様々な要素を取り入れた表現のよさや面白さを味わった(資料4)。

考察3

学年合同で秋の小部屋を鑑賞し合うことは、創造性の発揮から向上性を高める上で有効であった。その根拠は、A児のように表現の工夫を行った作品や音楽などの鑑賞を通して、子供たちが互いの秋の小部屋のよさや面白さをたくさん見つけて伝え合い、自分の表現に自信をもっていたからである。また、自分が行っていない表し方をしてみたいという、さらなる表現欲求をもつ子供の姿が見られたからである。

全体考察



資料5より、特に「創造性」が伸長したことがわかる。それは、感じた秋のイメージの表し方について、個の思いを十分に出し、その後の他者との協働による秋の小部屋づくりの活動において表現を高めたこと、子供の活動の連続・発展に対応する材料及び資料の提示が有効に働いたためであると考え。今後の課題は、表現領域における向上性の内容分析および評価の仕方、向上性の高まりを具現化するための表し方や作品などと自分の資質・能力の高まりとをつなぐ自己評価カードの工夫が必要であると考え。

領域「健康」部

望ましい生活行動を実践し、健やかな心と体を育てる領域「健康」

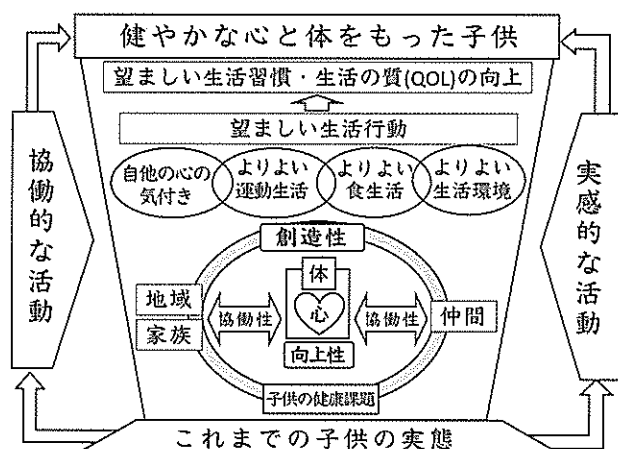
1 「健康」の必要性

子供が心身ともに健やかに育つことは、時代を越えて全ての人々の願いである。しかし、現代社会は、親の就労環境や生活時間の多様化が子供の食生活をはじめとする生活習慣に大きな影響を与えている。また、子供が安心して遊べる身近な空間が狭まり、自由に遊べる空間や外遊びの減少は子供たちの体力低下やけがの発生という状況を招いている。さらに、社会の変化は、成人社会に生活習慣病という新たな病気をもたらし、それは子供たちにも広がりつつある。このような中、毎日の生活に満足感をもちながら、身体的な健康や精神的な健康を維持したりして、子供に生活の質（QOL）を向上させていくための力の基礎を身に付けさせることは大切なことである。そのためには、まず、現在の自分の状況を多面的に判断し、より自分らしく元気に、快適に、安全に生活できるようになりたいという思いを子供自身がもつことが大切である。そして、健康な生活のために自分に必要なものを、たくさんの情報の中から選択し、決定していくことができるようにしなければならない。また、自分の健康に関する課題を解決していく方法を見い出すとともに、解決するための基本的な知識や技能を習得していく必要がある。以上のことからこれからの健康な生活のための方法を選び、必要な知識や技能を身に付けていくために領域「健康」が必要である。

2 目標と内容

(1) 目標について

自分の身体や生活環境に関わる課題解決に向けた体験的な活動を通して、必要な知識・技能を自ら獲得するとともに望ましい生活行動を実践しようとする態度を育てる。



【図1 「健康」の資質・能力と目標構造】

(2) 内容について

健康日本21『休養・こころの健康』において、「適度な運動や、バランスのとれた栄養・食生活は身体だけでなくこころの健康においても重要な基礎となるものである」と述べている。これは、健康な生活を送るためには、健やかな心と体には運動と食事が関わっているということである。また、医学博士和田雅史は、「健康な生活を実現していくためには、生活環境を整備し、食生活や嗜好品への認識を高め、適切な身体活動を実践し、心の健康の維持」が必要であると述べている。そこで、領域「健康」は、A「心」、B「運動生活」、C「食生活」、D「生活環境」の4つの内容で構成する。そして、それぞれの内容は、以下の項目で構成する（表1）。

【表1 領域「健康」の内容】

A 心	ア 自分の感情に気付いて表現すること イ 他者や社会と建設的でよい関係を築いていこうとすること ウ 状況に応じて適切に考え、現実的な判断をすること
B 運動 生活	ア 発達段階に応じた基本的な動きを身に付けること（基礎体力） イ 遊びや運動を工夫しながら生活の中に取り入れること（日常運動）
C 食 生活	ア 食べるものの意味や食事のマナーなど食事への関心を高めること イ 栄養と身体の成長の関係を理解すること ウ 基礎的・基本的な調理技能を身に付け、自分の食生活を創り出していくこと
D 生活 環境	ア 衛生的な生活の大切さがわかり、日常生活で実行すること イ 快適な生活に関心をもって、資源や器具を適切に活用しながら自分の身近な生活環境を整えること

領域「健康」では、子供に自分の健康課題に気付かせ、その課題解決を通して、健康な生活に必要な知識や基本的な技能を習得できるようにする。この健康課題は、内容によって異なり、個人の健康課題の場合もあれば、身近な集団の健康課題の場合もある。また、題材を構成する際には、内容相互の関連を図るようにする。特にA「心」は、生活の質（QOL）を向上させようとする意欲につながるため、単独の題材を設定するのではなく、他の内容と関連させることによって双方向的な高まりが期待できる。

3 資質・能力の系統

領域「健康」において育てたい資質・能力は次の通りである。創造性とは、自分の生活を改善していく際に発揮される判断力や望ましい生活行動を継続させていこうとする態度のことである。自分の現状をふまえて、多様な情報の中から必要な情報を集めて整理したり、よりよい解決方法を見い出したりしていく際に創造性が発揮される。この創造性を発揮して、望ましい生活行動を実践するためには、基本的な知識や基礎的な技能が必要である。具体的には遊びや運動に親しむための体力、発達段階に応じた基礎的な動き、調理に関する技能などである。創造性の中には、このような知識や技能も含まれている。協働性とは、よりよい生活行動を実践するために、自分以外の他者と目的や課

題を共有し、関わり合いながら課題解決の方法を見い出すことである。他者と協働することで複数の情報を共有して多様な解決方法を見い出したり、共通の課題解決のためによりよい方法を合意形成したりすることができる。向上性とは、今の自分の心身の状態や自分を取り巻く生活環境の中から課題を見つけ、多角的、多面的な視点から現状を把握し、今後の望ましい自分の姿に見通しをもつことである。今の自分の心身の状態をとらえ、なりたい自分の姿を思い描くことは創造性の発揮にも関わるものである。このように、3つの資質・能力を相互に関連させることで、状況に応じた適切な判断を行い、自らの生活の質（QOL）を向上することにつながる。

【表2 領域「健康」の資質・能力表】

資質・能力	構成要素	低学年	中学年	高学年
創造性	健康を志向する態度	いくつかの方法を試しながら、解決方法を選び、生活の中で続けようとする。	自分の身体や生活を考えて、よりよい解決方法を選び、生活の中で続けようとする。	自分や周囲の人や環境のことを考えて、よりよい解決方法を選び、生活に取り入れようとする。
	適応への判断	健康課題に対し、自分が最もよいと思う方法で解決しようとする。	健康課題に対し、今の自分の状態に合った方法で解決しようとする。	健康課題に対し、自分の周りの状況も考えて、解決しようとする。
	健康に関する知識・技能	運動や生活に関する知識や技能を身に付けることができる。	身体や生活に関する知識や技能を身に付けることができる。	身体や生活に関する知識や技能を身に付けることができる。
	健康に対する意欲	自分でできることに取り組み、健康な生活を送ろうとする。	身近な人たちと協力して健康な生活をつくっていこうとする。	自分や周りの人たちの健康な生活を自分で作り出そうとする。
協働性	双方向的働きかけ	ペアの友達と、健康課題を解決するための自分の考えを伝え合うことができる。	グループで、健康課題を解決するための自分の考えを伝え合うことができる。	自分の考えの根拠を明らかにして、グループで健康課題を解決する方法を伝え合うことができる。
	合意形成	ペアの友達と、健康課題を解決するためによい方法を決めることができる。	グループで健康課題を解決するための考えを出し合い、よりよい方法を決めることができる。	グループで健康課題を解決するための方法を、複数の考えを組み合わせで決めることができる。
向上性	変容の発見	自分の身体や身近な生活の関連に気付くことができる。	自分の身の回りから身体や生活に関する変容を見つけることができる。	自分の身近な集団から身体や生活に関する変容を見つけることができる。
	改善への意志決定	これからの自分が健康に過ごすための方法を選ぶことができる。	これからの自分や身近な人々が健康に過ごすための方法を考えることができる。	これからの自分と身近な集団がよりよくなるための方法を考えることができる。
	健康課題解決の見通し	自分にできそうな解決方法を考えることができる。	自分や自分の生活に合った解決方法を考えることができる。	自分や自分の身近な集団に適した解決方法を考えることができる。

4 学習展開

(1) 教材化

領域「健康」の教材化においては、現在の自分の身体や生活の中から見つけた課題を解決し、望ましい生活行動を日常の生活の中で実践し、満足感などを味わうことができるものであることが大切である。

医学博士宮坂忠夫は、「知識を習得しただけでは、行動の変容は起こらない。なぜならば、人の生活行動は個人の価値観や信念をはじめとする様々な要因から複雑に影響し合って構築されているものだからである。」と述べている。子供たちの生活も、周囲の環境や個人的背景と深い関わりをもち、多種多様な形で営まれている。そのため、子供に望ましい生活行動の必要性を実感させ、実行への強い動機付けを図ることができるものでなくてはならない。さらに、生活行動は、継続的な取り組みによって生活習慣となる。そのため、子供が日常生活の中で継続的に取り組むことができ、その過程や結果を自己評価できるようなものであることが大切である。

また、WHOでは、「健康とは、肉体的、精神的、社会的に完全に良好な状態」と健康を定義している。つまり、健康には他者との良好な関わりによる豊かな人間関係が必要であるとされており、領域「健康」の学習においても他者との協働的な関わり合いを大切にしていく。

そこで、望ましい生活習慣を実現するために以下のような視点で教材化を図る。

- ・ 自分自身の現在の健康の状態を可視化することができ、そこから課題を見い出すことができるもの
- ・ 子供にとって身近で、日常生活で継続して実践することができるもの
- ・ 他者との学び合いによって、多様な解決方法を見い出したり、新たな解決方法をつくり出したりすることができるもの
- ・ 学習することによって、子供が自分のこれからの生活について考えることができるもの

(2) 内容の構成

各内容の構成は、各学年で段階的に発展していくものとする。A「心」は、対象を自分に関することから他者へと広げる。また、気付きとともに、快感情も質的に高まっていくようにする。B「運動生活」は、動きの質を高めていくとともに、生活への取り入れ方も遊びから運動へと変化できるようにする。C「食生活」は、低学年から段階的に食べ物の体内での働きやバランスのよい食事について理解し、高学年では、自分で食事をつくることのできる基礎的な技能習得までをねらう。D「生活環境」では、低学年では、自分の身体や身近なところから始め、段階的に周辺の環境にも目を向けることができるようにする。

A 心

低学年	中学年	高学年
・ 熱中する気持ちのよさ ・ 自分の今の状態に気付くこと	・ 達成する気持ちのよさ ・ 友達のよさに気付くこと	・ つくりだす気持ちのよさ ・ 自他のありのままを受け入れること

B 運動生活

低学年	中学年	高学年
・ 多様な動き ・ 生活への遊びの広がり	・ 巧みな動き ・ 生活への遊びの深まり	・ 巧みな動き ・ 生活への運動の広がり

C 食生活

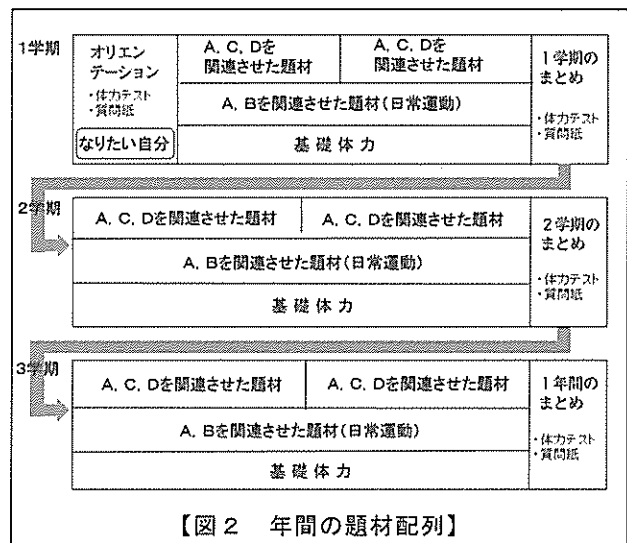
低学年	中学年	高学年
・ 食品の分類とそれぞれの役割	・ バランスのよい食事 ・ 成長と食物の関係	・ バランスのとれた食事計画 ・ 調理に関する基礎的な技能

D 生活環境

低学年	中学年	高学年
・ 自分の身近な環境の衛生と快適さ	・ 自分や家族を取り巻く環境の衛生と快適さ	・ 身近な環境の整備、衛生 ・ 身近な環境を整える技能

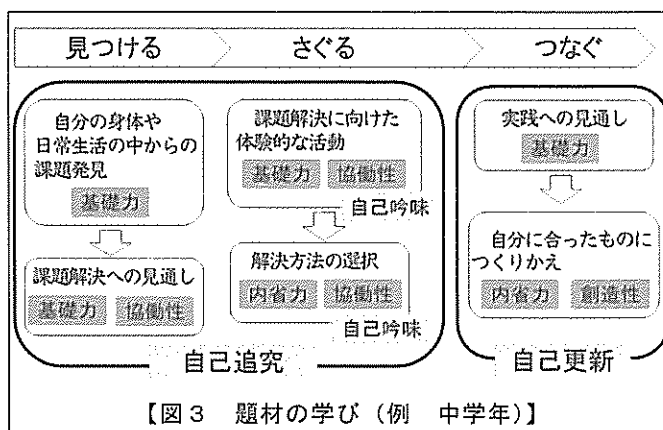
(3) 題材配列

望ましい生活行動を実践するために、年間を通して段階的に子供の意識を高めていく。そのために、学年始めにオリエンテーションを位置付ける。その中で、簡単な体力テストを実施し、現在の体力状況を把握するとともに、質問紙によって、自分の心、食生活、生活環境についての状況を確認し、「なりたい自分」像をもつことができるようにする。そして、学期末に振り返りを位置付けることによって、自分の変化に気付くことができるようにする（図2）。



(4) 題材を通した学び

領域「健康」における題材を通した学びは、自分の身体に関することやその周囲の環境、日常生活の中から課題を見つけることから始まる。そして、体験的な活動を通して課題の解決を図り、自分に合った方法で望ましい生活行動を実践していくという3つの段階での題材構成を基本とする。課題を見つけたり、解決の見通しをもったりする段階を「見つける段階」、活動を通して課題を解決するためのよりよい方法を見出す段階を「さぐる段階」、見出した解決方法を自分に合った方法で日常生活において実行しようとする段階を「つなぐ段階」とする。また、子供が自分の生活を見直し、それまでの習慣や行動を変化させるためには、

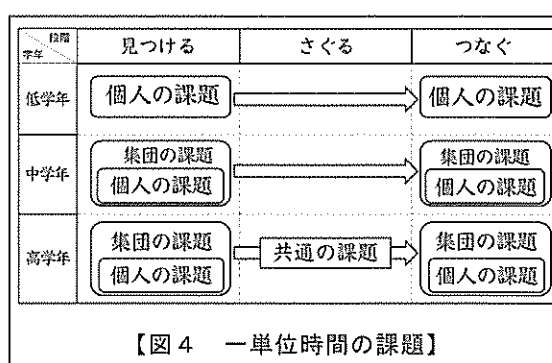


は、「科学的に理解する」、「行動を起こしたいという感情や規範をつくる」、「行動する方法がわかる」という3つの段階が必要である。そこで、それぞれの段階に対応した「自己追究」「自己吟味」「自己更新」を効果的に位置付けて題材を展開する（図3）。

まず、事象を科学的に理解する「自己追究」では、自分の生活から課題を見つけることから始める。そして、その課題を解決するために必要な知識や技能を、体験的な活動を通して得ることができるようになる。これは、題材の見つける段階とさぐる段階に位置付ける。次に、行動への意欲や規範をつくる「自己吟味」では、追究活動によって得た科学的な知識や技能を、自分の健康課題を解決していくためにどのように活用していくのかを判断することができるようになる。これは、さぐる段階を中心に位置付ける。低学年では、選択した解決方法が自分にできそうかどうかという視点で自己吟味を行う。高学年では、実践への見通しをもつ際にも自己吟味を行い、望ましい生活習慣につないでいくことができるようになる。最後に行動する方法がわかる「自己更新」では、見出した解決方法がより自分に合ったものになるようにつくりかえ、実行していくことができるようになる。これは、つなぐ段階に位置付け、学習したことを生活の中で実行していくものである。低学年においては、実践への意欲をもとに自分に合った方法を選択することで、自分のよさや成長にも気付くことができるようになる。高学年では、自分だけでなく、周囲の様々な状況を判断して、解決方法を適切なものにつくりかえていくことで、自分で自分の健康をつくり出し、生活の質の向上（QOL）をとらえることができるようになる。

(5) 一単位時間の学び

領域「健康」の一単位時間の学びは、解決したい健康課題の解決を図る問題解決的な学習を基本とする。題材を通して最終的に解決する課題は、個人や子供が所属する学級や家族などの集団のものであるが、それまでの一単位時間で解決する課題は、「個人のもの」、「所属する集団のもの」、あるいは個人や集団の課題から共通点を見出した「共通のもの」など、学習段階や学年によって変わってくる（図4）。見つける段階の一単位時間は、自分の身体や日常生活の中から課題を見つけることを目的とするため、どの学年も個人の課題が中心であるが、中学年後半から高学年では、集団の課題にも目を向けさせる。さぐる段階の一単位時間では、低学年は個人の課題解決をおこなう。中学年は、個人の課題とともに集団の課題解決も徐々に取り扱うようになる。高学年では、共通課題の解決を中心に行う。つなぐ段階の一単位時間は、どの学年も個人の課題解決が中心となるが、中学年後半や高学年では、学級集団の課題や、それぞれの家族の課題の解決に向けた学習ができるようにしていく。



【引用・参考文献】

- 和田雅史、「健康科学 ヘルスプロモーションの理念」、犀書社、2007。
- 畑 栄一・土井由利子、「行動科学 健康づくりのための理論と応用」、南江堂、2009。
- 宮坂忠夫・川田智恵子・吉田亨、「最新 保健学講座 健康教育論」、メヂカルフレンド社、2014。
- 山村直成・浦上智子・中根芳一、「生活科学」、オーム社、2014。
- 古荘純一・柴田玲子・根本芳子・松崎くみ子、「子どものQOL尺度その理解と活用」、診断と治療社、2014。

領域「健康」年間指導計画

学年		学期 内容区分		1 学期						
第1 学年	A 心	B 運動生活	オリエン テーション ②	かけっこ・おにごっこ⑥	すもう・つなひき⑧	みずと なかよし⑧	1学期の まとめ②	ボールけり ゲーム⑤	とん	
		C 食生活		おいしい きゅうしよく⑥						
		D 生活環境						きれいな からだで まい日		
年間時数(102時間)				34時間						
第2 学年	A 心	B 運動生活	オリエン テーション ②	円形ドッジボール⑧	すもう・つなひき⑧	水の中で やってみよう⑩	1学期の まとめ②	ボールけりたからおに⑧		
		C 食生活								
		D 生活環境		気持ちのよい生活⑤						
年間時数(140時間)				35時間						
第3 学年	A 心	B 運動生活	オリエン テーション ②	走って ジャンプ⑨	すもう・つなひき⑨	水の中で運動しよう⑩	1学期の まとめ②	はばとびジャンプゲーム⑩		
		C 食生活		かんで強い歯⑤				毎日元気なわたしのために⑨		
		D 生活環境								
年間時数(140時間)				40時間						
第4 学年	A 心	B 運動生活	オリエン テーション ②	はばとび⑩	すもう・つなひき⑩	水泳⑩	1学期の まとめ③	ボートボール⑩		
		C 食生活						バランスのよい食事⑧		
		D 生活環境		快適・安全なくらし⑤						
年間時数(140時間)				45時間						
第5 学年	A 心	B 運動生活	オリエン テーション ②	陸上運動⑩	すもう・つなひき⑩	水泳⑩	1学期の まとめ③	バスケットボール⑬		
		C 食生活		はじめてみよう クッキング⑬	つくろう 快適な生活⑦			わたしの健康と食べもの⑦		
		D 生活環境								
年間時数(175時間)				57時間						
第6 学年	A 心	B 運動生活	オリエン テーション ②	陸上運動⑩	すもう・つなひき⑩	水泳⑩	1学期の まとめ③	ぼくわたしの バスケットボール⑩		
		C 食生活		食事のできる病気の予防⑧		朝から元気⑩				
		D 生活環境						わたしたちの安全なくらし⑦		
年間時数(175時間)				57時間						

2学期				3学期			
学校でも あそんでみよう⑦			2学期の まとめ②	いえでも やってみよう⑩			学年の まとめ②
だり はねたりして あそぼう⑤		とびばこ あそび⑤		なわとび あそび⑥	ぐらぐら たんけんたい⑤	てつぼう あそび⑥	
		さむさに まけない げんきな からだ③		大きくなる からだ⑤			
げんき③							
34時間				34時間			
友だちとなかよしあそびにとりくもう⑦			2学期の まとめ②	家でもチャレンジしよう④			学年の まとめ②
たからとりおに⑧		つづけて走ろう 5分間⑦		なわとびあそび⑥	ならびっこベースボール⑥	とびばこあそび⑤	
ぼくのわたしのエネルギー③		さむさにまけない 元気な毎日大作せん⑩					
35時間				35時間			
昼休みなかよしゲームをつくろう⑩			2学期の まとめ②	家でもチャレンジしよう⑪			学年の まとめ②
シュートゲーム⑩		6分間走⑧		マット運動⑧	なわとび運動⑧	エンドゴールサッカー⑧	
見つけてみよう 家族のくふう⑦		わたしにもできる 明るい生活⑦					
56時間				44時間			
昼休み心も体もスッキリゲームをつくろう⑪			2学期の まとめ③	家でもチャレンジしよう⑩			学年の まとめ②
鉄棒・マット運動⑪		6分間走⑨		なわとび⑤	三角ベースボール⑤	グリッドサッカー⑤	
成長するわたし⑤		いつでも元気に⑤					
60時間				35時間			
昼休み運動プロジェクト⑫			2学期の まとめ③	つくろう マイ運動プログラム⑩			学年の まとめ③
器械運動⑫		8分間走⑨		なわとび⑧		グリッドサッカー⑨	
和食でつくる わたしの健康⑪		チャレンジクッキング⑩					
		家族とつくる暖かい生活⑤					
73時間				45時間			
昼休み運動プロジェクト⑬			2学期の まとめ③	チーム縄跳び⑩		学びを生活に取り入れよう⑩	学年の まとめ③
器械運動⑬		8分間走⑩		エンジョイクッキング⑬			
工夫しよう 1食分の食事⑪		工夫しよう 家族の生活⑦					
73時間				45時間			

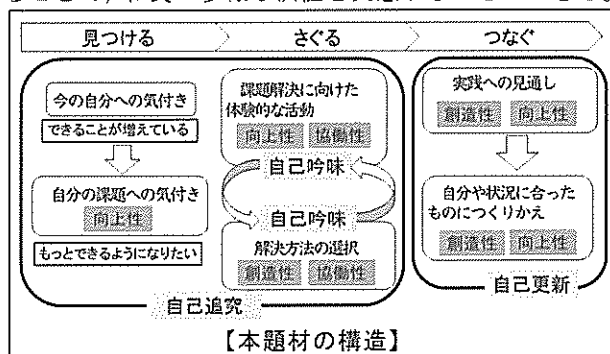
1 資質・能力

- 和食のよさがわかり、日常的に和食を食べるために自分にできることを増やそうとしたり、自分の課題に合った和食を生活に取り入れようとしたりすることができる。 (創造性)
- グループで協力して、和食の特徴の一つであるだしの働きやとり方を調べたり、和食を日常的に取り入れる方法を考えたりすることができる。 (協働性)
- 自分の日常の食生活を振り返り、和食を取り入れることがこれからの自分の健康とどのような関係があるのかを考えることができる。 (向上性)

2 題材の考え方

本題材では、和食の特徴やよさを理解し、自分にできることを増やし、和食を生活の中に取り入れることで、健康な食生活を実践しようとすることをねらいとしている。そのために、自分でできることが増えたことを子供に実感させることから題材を始める。そして、和食への関心をもたせるとともに、和食の取り入れ方についての課題をもたせて、自分の和食づくりへとつないでいくように題材を構成する。また、体験的な活動を位置付けることによって、実感を伴った理解ができるようにする。具体的には、まず、日常的に多くの子供が食べているみそ汁の調理をすることで、自分にできることが増えたことを実感させる。そして、だしの飲み比べやだしの有無による味の違いを比較することでだしを活用することのよさについて理解できるようにして、和食の特徴を理解するとともに、自分の和食づくりに意欲をもたせる。

また、本題材は、言語文化との関連を図る。そうすることで、言語文化において言語を通して学習した和食の魅力について健康の学習によって実感を伴った理解をすることができる。また、健康の学習で自分の和食をつくる計画づくりの際に、料理を盛り付ける際の見た目や食材など言語文化での学びを取り入れたことで、和食の多様な価値を実感することができる。



3 学習の流れと考察

導入段階のねらい: 1～5/12時

みそ汁の調理の仕方がわかり、和食は健康的な食事であることに気付くことができる。

- (1) これからできるようになりたいことを話し合い、みそ汁の調理をする。



【写真1 みそ汁の調理をしよう】

みそ汁づくりは、すごく難しいものだと思っていたけれど、意外につくりやすくてびっくりしました。朝のちょっとした時間でもつくれるなと思いました。

【資料1 A児のみそ汁づくりをした感想】

- (2) 資料をもとに、和食のよさについて調べ、和食が健康な食事といわれていることから、自分の食事に取り入れる方法を話し合う。

和食は、基本は一汁三菜だけど、栄養のバランスがよく、多様性がある食事ということがわかりました。家で和食を食べることが少ないので、四季の要素を取り入れたものを自分でつくれるようになりたいです。

【資料2 A児のこれからの学習課題】

導入段階では、まず、これからできるようになりたいことを話し合った。そして「毎日でも食べられるもの」として、みそ汁の調理を行った。実際に調理すると、意外に簡単にできることに気づき、自分でもできることを実感することができた（資料1）。そして、資料で和食について調べると、和食は「健康によい食事」ということがわかり、自分の食事にどのように取り入れたらよいかという課題をもった（資料2）。

考察1

和食に関心をもたせるために導入段階でみそ汁の調理を行ったことは、向上性を育てる上で有効であった。その根拠は、和食の代表的な汁物のみそ汁を自分で簡単に調理できることを実感して（資料1）、これから自分の生活に取り入れていきたいという思いをもつとともに、さらにみそ汁以外の他の和食を自分でつくることができるようになりたいという意欲をもつことができたからである（資料2）。

多くの和食で用いられるだしについて調べ、だしを用いるよさを考えることができる。

自分の食生活の振り返り

食	朝食	中食	夜食
サラダ パン ヨーグルト 味噌汁 牛乳	食パン半分 バナナ バナナ バナナジュース	京でよく食べているもの コンマヌーア ワリムン おまんこ おまんこ おまんこ おまんこ おまんこ おまんこ	京でよく食べている和食 おまんこ おまんこ おまんこ おまんこ おまんこ おまんこ おまんこ おまんこ

自分の食事の課題

赤、黄、緑の食事のバランスはよくとれているが、和食を食べることが少ない。朝は、緑や黄の食べ物が多いけれど、夜は赤の食べ物が多く、黄や緑の食べ物が少ない。

栄養のバランスがよい和食を作れるようになって、家族みんなの栄養バランスを考えたいです。

↑向上性

つくりたい和食 栄養バランスがよく、色どりのいい肉じゃが

QTによるだしの取り方の説明

昆布とかつお節は、だしの取り方が違うんだな。
かつお節からとっただしはどんな味なのだろう。

だしに食塩を加える

食塩をひとつまみ入れてみましょう。

こんな少しの食塩で味が変わるのかな。

同じ性

食塩を少し入れたら、味がきつくなね。

遠く通って、きれいな色だね。

かつお節と昆布のだしは、優しい味かな。

副産物

食塩は、だしのうまみを引き出す働きがなんだね。

【資料5】 だしの特徴に気付いた姿

ちがとらえ、だしの働きを見い出していたからである。そして、GTとだしの取り方や調味料との関係を学習することで、だしがもつうまみを実感し、少量の食塩を加えることによる味の変化を理解した子供の姿が読み取れるからである（資料5）。

自分のつくりたい和食の調理計画を立て、実践することができる。



【資料7】自分の食事への取り入れ

質問	はい (人)	いいえ (人)
和食を生活に取り入れたいですか	18	35
食事に気を付けていますか	20	32
できることを増やしたいですか	28	33

【資料8 子供の意識の変容】

- 127 -

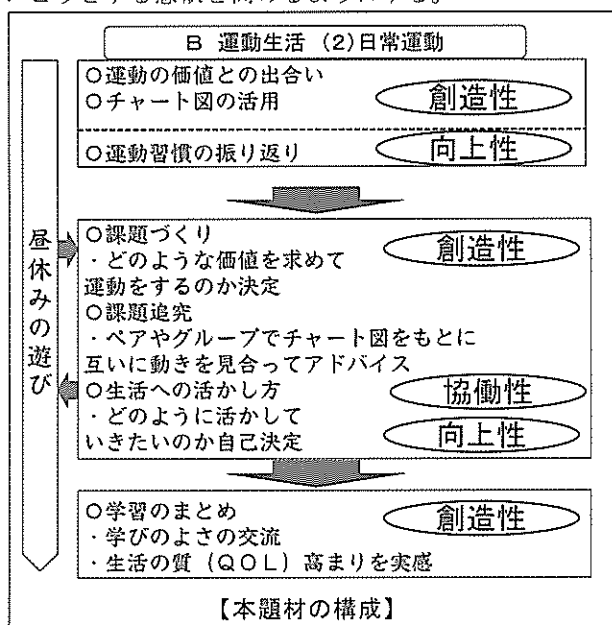
1 資質・能力

- 自分自身が運動習慣を身に付けることができる運動の取り組み方を考えることができる。（創造性）
- つくった運動で自分の運動課題を解決することができるかどうかを、ペアの友達から意見を聞いたり、伝えたりすることができる。（協働性）
- 自分の運動課題が何であるのかを考え、その課題を解決するためにどのような運動をどのように行うとよいのか、考えをつくることができる。（向上性）

2 題材の考え方

本題材は、運動を継続することが生活の質（QOL）を向上させることに気付き、自分自身の運動の取り組み方に対する課題を解決するために、運動のルールや取り組み方を工夫することで運動習慣を身に付けていくことをねらいとしている。そのために、休み時間にできる運動にどのような楽しさを見出し、取り組んでいくのかを決定し、それをペアで評価しながら振り返ることができるように題材を構成した。

具体的には、まず、導入の段階では様々な運動やスポーツの場面の写真を提示し、どのような楽しさを求めて行っているのかを話し合うことで、運動の価値や楽しさを見出させる。そして、展開段階では休み時間に行うことができるドッジボールと鬼ごっこのルールや取り組み方を見直し、休み時間の運動に活かしていく。最後に、終末段階で、運動習慣が身に付いたことを自覚し、学習で得たことを今後の生活に活かしていくようにする。



3 学習の流れと考察

導入段階のねらい: 1～3/10時

運動の価値や楽しさについて理解するとともに、運動習慣についての課題をつくる。

- (1) 運動やスポーツをしている人の写真を見て、運動をする理由を話し合う。

マラソン選手は、競うことは5点だよ。だけど、風船バレーをする人は、競うことは2点くらいじゃないかな。

風船バレーの人は、仲間づくりの楽しさの点数が5点だね。

市民ランナー

風船バレーをする年配の方

マラソン選手

パラリンピック選手

チャート図

競うことが楽しい

仲間づくりが楽しい

しゅみ

達成が楽しい

【資料1 運動の楽しさを交流する姿】

- (2) 自分の運動習慣を見直し、休み時間の運動にどのような楽しさを求めて運動をしたいのか学習課題をつくる。

1週間の運動時間と運動習慣等調査結果を比較して

運動習慣への理解(創造性)

課題の把握(向上性)

味わいたい楽しさ(創造性)

私の運動時間は全国平均よりも26分少ないことがわかりました。全国の人は休日によく運動をしていますことがわかりました。男子と女子の差が2倍くらいあることがわかりました。

味わいたい楽しさ(創造性)

私は運動が大好きで自分より少ない人はいやなので、休日に運動をしようという思いが湧いてきました。達成するとうれいという思いになるからです。

【資料2 A児の課題】

導入段階では、運動やスポーツの楽しさを話し合い、競争や達成、仲間づくりなど多様な楽しみ方があることへの理解を図った（資料1）。そして、自分の運動習慣を全国体力・運動能力等調査結果を比較することで、A児のように運動習慣を身に付けていきたいという意欲をもつことができた（資料2）。

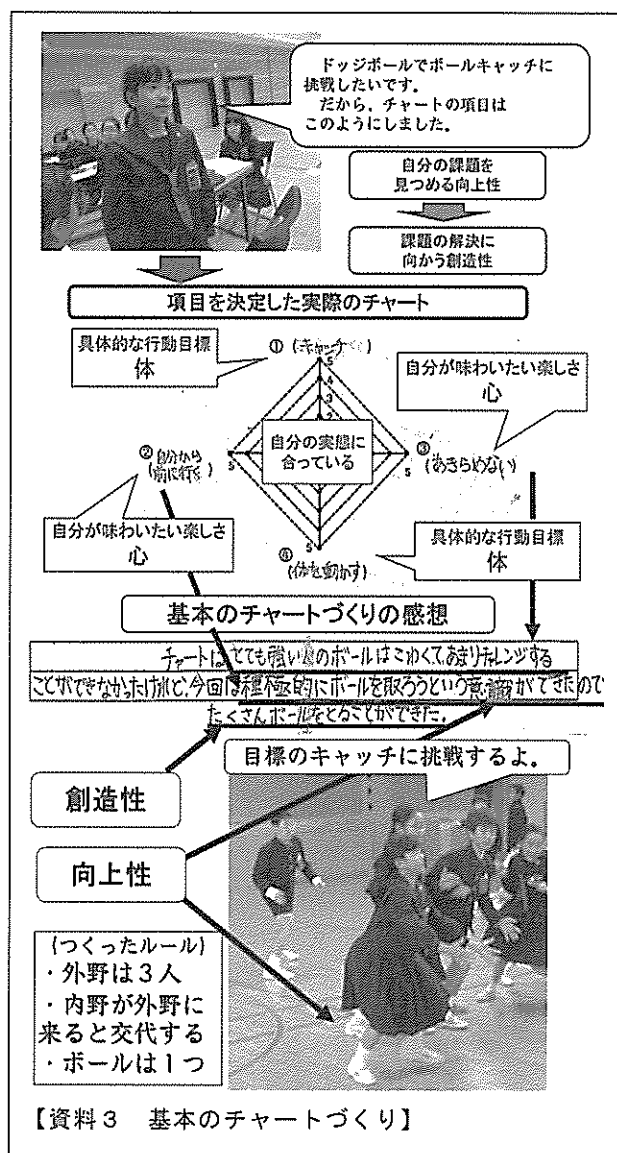
考察1

資料1のように、運動の楽しさや価値について様々な運動を比較することでとらえさせ、自分の運動習慣を振り返ったことは運動の価値を味わいながら運動習慣を身に付けていこうとする上で有効であった。資料2の「もっと増やしたい」「挑戦することで楽しさが味わえる」の記述から、運動の価値を求めて運動習慣を身に付けようとしていることがわかる。

展開段階のねらい：4～9/10時

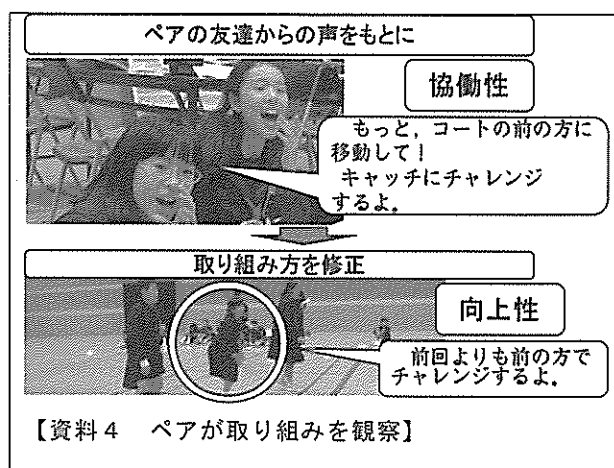
自分に合った運動の取り組み方をつくったり、学級の実態に合ったルールをつくったりする。

- (1) ドッジボールの課題を出し合い、基本のチャートをつくる。



- (2) ルールを変更し、マイチャートが広がるように動き方のめあてをたててドッジボールを行う。

展開段階で、運動習慣を身に付けるために目標を決めてドッジボールに取り組んだ。その中で、ペアで様子を観察し合い、アドバイスし合った(資料3, 4)。



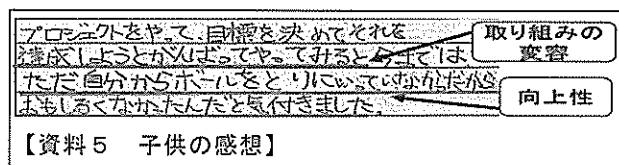
考察2

資料3の姿から、自己課題をもとにチャートを作成し、課題解決に取り組ませたことは、創造性や向上性を高める上で有効であった。また、チャートの課題をもとにペアで取り組み方を見合う場面を設定したことは、資料4から協働性を高める上で有効であった。

終末段階のねらい：10/10時

学習を通して、運動習慣の高まりを自覚する。

元気いっぱいプロジェクトに取り組んだ効果を、話し合う。



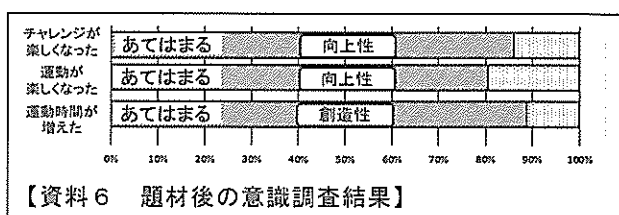
終末段階では、題材を通した自他の高まりを交流し、運動の楽しさを求めて、運動習慣を身に付けていくことができた(資料5)。

考察3

プロジェクトの効果について、自分の取り組み方と変容を振り返らせたことは変容の発見という向上性を高めることに有効であった。

全体考察

運動の楽しさを意識して休み時間の運動に取り組む子供や、運動時間が増えた子供が多かった(資料6)。向上性の高まりを実感していることから生活の質が向上したといえる。取り組みを振り返り、ペアの友達と見合ったことは創造性の高まりに関係したと判断する。



領域「生き方」部

人と対象との関わりから学び、自己形成を図る領域「生き方」

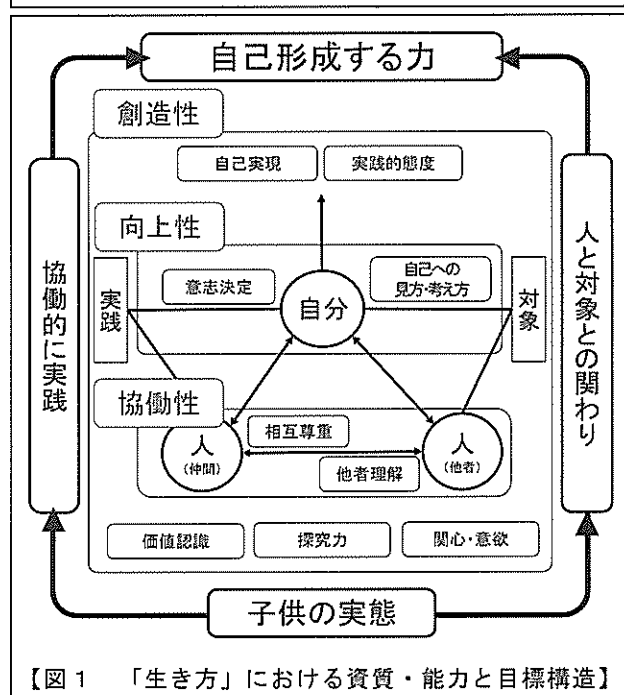
1 領域「生き方」設定の必要性

現代社会はグローバル化や情報化など急激な変化の時代にある。このような時代を生きる子供たちには、経済界や市民社会からは激動の変化に耐えることが要求されている。しかし、京都大学の石井英真氏は、「社会の荒波の中で消費され尽くされないための人間性の核」が重要であると述べ、それによって自分らしさを守り、生き方の幅を広げ、よりよく生きていく力が育まれると考えている。そこで、領域「生き方」は、生き方の多様性を見出す中で、過去、現在、未来の自分と向き合ったり、見つめたりして自分の姿を発見することを大切にする学習を行っていく。そのために、子供たちが多様な人の生き方から学ぶことを大切にする。子供たちにとって身近な対象と関わる魅力的な人と出会い、学習への願いや問いをもち、ともに学ぶ中で、自分とは異なる見方や考え方、行い方に触れることで自己を見つめ、生き方をつくっていく。つまり、人がもつ多様な価値に触れることで、自己の価値が感化され研ぎ澄まされ、自己形成を図っていくのである。

2 目標と内容

(1) 目標について

人と対象との関わりを考え、多様な他者と協働的に実践する活動を通して、生き方への価値認識、他者尊重、自己への見方や考え方、自己実現する力を高め、自己形成する力を養う。



【図1 「生き方」における資質・能力と目標構造】

(2) 内容について

先に述べたように、領域「生き方」では、人と対象との関わり（生き方）を学ぶことで、人がもつ多様な価値に触れながら自己形成を図る。そのための内容は、人の生き方に出会うことで触れる、人の多様な価値や見方や考え方、行い方であり、過去の自分と向き合ったり、現在の自分を見つめたり、未来の自分を思い描くことで発見する自分の姿である。すなわち、子供たちが、人と対象がどのように関わるのかを学び、自己の見方や考え方、行いに反映させながら自己の生き方を更新していくことが重要である。領域「生き方」では、人が関わるべき対象を、人と人との協働的な関わりである仲間という「人間関係」、過去、現在、未来へと続いていく「生涯」、家庭、学校、地域、日本、世界へと広がっていく「生活」、それらすべてを包含している「生命」そのものであると考える。この4つの視点をもとに、学習内容を「Aいのち」「Bみらい」「Cくらし」「Dなかま」から構成した。

【表1 領域「生き方」の内容】

内 容	内 容 の 観 点
A いのち	生命尊重・自然愛護を大切にして ・ 生命の誕生と成長 ・ 生命の終わり ・ たった一つの生命を生きる喜び ・ 生命のつながり ・ 自然愛護
B みらい	生涯を通した成長を大切にして ・ 自分の成長 ・ 自分の役割・責任 ・ 自分らしく生きる自己の実現 ・ 働くことの意義
C くらし	身近な生活を大切にして ・ よりよい生活習慣の形成 ・ 生活を充実させる遊びや余暇 ・ 自分自身を律する心 ・ 生活上のきまり、約束の遵守 ・ 家族への愛 ・ 学校生活の形成 ・ 国や郷土への愛
D なかま	人間関係を大切にして ・ 支えてくれる人への感謝、礼儀 ・ 人に対する思いやり、親切 ・ 家族や級友との関わり ・ 相手への尊敬と寛容さ

3 資質・能力の系統

領域「生き方」において育てたい3つの資質・能力「創造性、協働性、向上性」は次の通りである。

創造性とは、自分に自信をもって自分のもつ無限の可能性に向かって行動しようとすることである。具体的には、他者の生き方に興味や追究意欲をもったり、真偽・善悪を考え新たな価値に気付いたり、他者と共に役立つことを実践しようとする態度や、なりたい自分をめざそうとすることである。それは、他者からの評価を気にして自分を変えようとするのではなく、自分が何をしたいかという自分の考えや価値に従って行動することができるようになることである。

協働性とは、他者の行為や思いの背後にある見方・考え方を理解して合意形成を図ることのできる提案をし、やりとりの中でできることを決めていくことであ

る。具体的には、表面上の賛否や互いの利害を主張するのではなく、他者の行為や思いに対して、自分の見方・考え方との類似点や相違点を考え、ともに納得できる部分を見つけていくことである。それは、自分も他者も「それが『望ましい』、『よい』」と感じられる見方・考え方を選択できるということである。

向上性とは、他者との関わりから対象のよさや自分の姿を認めることである。具体的には、自分の見方や考え方、行い方を振り返り、自分の姿を受け入れ、今後に向けて自分の意志をもつことである。それは、「自分が自分であって大丈夫だと感じる」「自分自身を適切に評価できる」「自分のことを決められる」「自分が『望ましい』、『よい』と信じた見方・考え方を選択できる」ということである。

【表2 領域「生き方」の資質・能力表】

資質・能力	構成要素	低学年	中学年	高学年
創造性	自己実現	伸ばしたい自分のよさや可能性に気が付き、伸ばそうとする。	理想とする自分をイメージし、近づくための努力をしようとする。	理想を思い描き、実現するために大切な生き方を構築しようとする。
	価値認識	人や対象の存在や自分に与えてくれる影響、よさに気付く。	人と対象の自分にとっての意味を理解して、人々に与える影響をとらえる。	普遍的な真理、善さ、美しさをとらえ、変わらない価値を見い出す。
	実践的態度	他者とともに自分や身近な人のためにできることは何か考え、役に立つことをしようとする。	仲間や他者とともに身近な人、または地域社会のためにできることは何か考え、行動しようとする。	仲間や他者とともに未来社会のためにできることを具体的に考え、行動しようとする。
	探究力	対象への気付きから、思いや願いをもち、諸感覚を使って情報を集める。	対象への疑問やズレから問いをもち、具体的な活動を通して情報を集め取捨選択する。	自ら対象に働きかけ、解決したい問題を見つけ、実践的な活動を通して情報を集め分類・整理する。
	生き方への関心・意欲	他者の対象への関わりに関心をもつ。	他者の対象への関わりに関心をもつ。	自分の生き方を広げ深めることに関心をもつ。
協働性	他者を尊重する態度	友達の気持ちや考えを聴いて、自分の素直な気持ちを伝える。	仲間や他者の考えを理解し、自分と異なる考えにも耳を傾け、共感するとともに、自分の考えを伝える。	仲間や他者の思いや意図を理解し、考えを尊重するとともに、自分の考えや望みを相手に応じて伝える。
	相互理解	友達と仲良くして、人のよさを見つけ、助け合いながら自分の仕事や役割に取り組む。	他者が気付いていないよさを見つけ、集団活動に主体的に関わり、みんなのために力を発揮する。	自他の成長やよさを見つけ、集団や社会に進んで参画し、相手を尊重しながら互いの可能性を広げる。
向上性	自己への見方・考え方	自分のよさに気付いたり、自分の可能性について考えたりする。	他者との関わりの中で、自分では気付いていないよさを知り、自分の長所、短所を受け入れ、自分の特徴であるととらえる。	他者との関わりの中で、自分のよさも弱さも、あるがままの自分として受けとめることで自分の特徴を理解する。
	意志決定	自分や仲間のことを考え、自分がしたいことを選択する。	自分や仲間、地域社会にとって、自分にできるよりよい行動を自己決定する。	未来の自分や他者、社会において、自分にできる、より望ましい行動を自己決定する。

4 学習展開

(1) 教材化

① 教材の条件

教材化においては、学習で取り上げようとする教材そのものが、創造主体としての資質・能力と関係している必要がある。そこで、3つの視点を大切にする。

- 子供が対象と出会うことで、自分自身を見つめる機会を与えるものか。(向上性と関わって)
- 子供が対象に触れることで、仲間や他者との関わりが生まれるか。(協働性と関わって)
- 子供の知的好奇心を刺激し、強い追究意欲を生じさせるとともに、子供にとって対象が、これからの生き方につながる価値あるものか。

(創造性と関わって)

また、問題解決の際の「協働的に実践する活動」は、以下の3点を大切に活動である。

- ア 1人では解決困難な課題解決のための活動
- イ 目的意識、相手意識がある活動
 - ・自分または身近な人のために
 - ・仲間または地域社会のために
 - ・理想とする自分または未来社会のために
- ウ 多様な他者との関わりを必然とする活動

② 取り上げる他者の生き方

領域「生き方」では、多様な他者と深く関わりながら学習を進めていく。その中でも、それぞれの学習内容について、多様な他者が対象に対して、次のような関わり方をしていることを重視していく。

【表3 内容構成と取り上げる他者の生き方】

A いのち 「生命」に対する関わり 人や動植物、自然に関わる人の生き方	B みらい 「生涯」に対する関わり 目標や課題に向けて努力する人の生き方
C 暮らし 「生活」に対する関わり よりよい生活の営みを実現する人の生き方	D なかま 「人間関係」に対する関わり 友達や仲間との関係を大切にする人の生き方

「Aいのち」では、「生命」に対する関わりを大切にしたい。「Bみらい」では、理想とする「生涯」を思い描く人の生き方を取り上げたい。そこでは人が未来のために守り、理想を思い描き、切り拓き創っている人の生き方が重要である。「C暮らし」においては、人が生活をより楽しく、充実したものにしていく関わりを取り上げたい。さらに、「Dなかま」では、互いに支え合い助け合っ

(2) 題材の配列

① 年間を通した4つの内容配列

全学年において「Aいのち」「Bみらい」「C暮らし」「Dなかま」をすべて扱う。1題材に1つまたは複数の内容を取り扱うこともある。ただし、子供の発達段階に応じて、年間を通した取り扱いに軽重をつける。特に高学年では、題材の中核となる内容が4つの内容のいずれであっても、題材の終末段階には学習を通して学んだ価値を考え、「これから自分がどう生きるか」を考えるようにしていく。

② 「Aいのち」の重視

「Aいのち」は、動植物を含め生命をもつものを尊重するため、6カ年を通してどの学年でも大切にしたい。そこで、全学年において同程度扱うが、特に高学年では、学習問題として生命倫理に関わる現代的な課題を取り扱うことを重視する。

③ 各学年で重視する内容

	低学年	中学年	高学年
発達特性	自己中心性 教師や保護者の影響 身近な環境への好奇心	社会的な活動能力 自然や崇高なものへの意識 仲間意識の芽生え	他人の立場の理解 理想の追求 自分の役割や責任の自覚
内容	C 暮らし	A いのち D なかま	B みらい

【図2 題材配列】

低学年は「C暮らし」を重視する。低学年期の子供たちは、自己中心性が残る時期ではあるものの、身近な環境に興味・関心をもったり、具体的な活動を通して他者への関心を高めたりするようになる。そして、一緒に楽しく活動することで、自他のよさに気付くようになる。そこで、この発達段階から、自分との関わりが強い教師や保護者との関係をもとに、友達と一緒に活動することの楽しさやよさを実感させていきたい。

中学年は「Dなかま」を重視する。低学年期においても人間関係づくりは重要な課題である。しかし、中学年期は自他の理解が一層進み、ギャングエイジとも言われ、仲間意識が強固になっていく時期である。そのことから、社会的な活動能力が高まり、地域への働きかけも可能になる。そこで、子供たちの望ましい人間関係づくりがその後の生き方に関わる切実な問題となることから、重視する必要がある。

高学年は、「Bみらい」を重視する。高学年期の子供たちは思春期に入り、一人一人の自己のめざめが起り、存在価値への問いをもつ時期である。同時に、他者の立場をこれまでよりも深く理解することができる。その特性を生かして、自分の生き方への価値認識や自己の見方や考え方、行い方の幅を広げることができる人との出会いや、仲間との将来像の共感などが重要である。そして、将来の自分の生き方を学びの中から創っていくことが重要であると考えられる。

(3) 題材を通した学び

領域「生き方」の指導原理は多様な他者と協働的に実践し、人と対象との関わりを考えることである。この学びを実現するためにも発達段階に留意して、題材構成を考えていく必要がある。また、子供と人（仲間や他者）が、内容に直接結びつく関わり（内容的アプローチ）をするか、活動の中で関わる（方法的アプローチ）かを考慮していく。

まず低学年は試行錯誤の時期であり、子供たちが直接的な体験や活動することが大切である。そのため、自己追究を大切にした学習が必要である。ここでの他者との関わりは、子供たちが身近な対象に対する願いを実現するための方法的な関わりが次第に内容的なものになっていくことが望ましい。また低学年においては他者が学級の仲間や家族などの身近な人になることも考えられる（図3）。

次に中学年は、ある程度の見通しをもって学習をすることができるとともに、学びを通して次第に物事の本質をとらえることができる時期である。また、特にここでは、仲間や他者と自己吟味していくことが非常に重要である。そこで、子供たちが自己吟味を通して問いを発展させていくような発見的な学習のプロセスを大切にする。ここでの他者の関わりは、出会いと実践の場面で内容的な関わりと、協働の中での方法的な関わりがあると考えられる（図4）。

最後に、高学年は学ぶことの意味や価値を見出した上で、論理性や客観性を生かして一貫した課題意識をもった学習が可能になる。そこで、学びを通してどのように自己を成長させたいのかというゴール像を明らかにし、一つの問いを解決していく中で、自己追究と自己吟味を繰り返していくような学習が大切であると考えられる。他者との関わりは内容的なものに絞り、子供たち自身が仲間と協働しながら課題解決することを大切にしたい（図5）。

このように題材の中で、①子供たちが魅力的な人と出会い、価値ある生き方を見出すこと、②生き方に関する課題解決に向けて、仲間や他者と協働すること、③自分の生き方につながる実践をすること、④自分への見方や考え方、行い方の変容に気づき、自分らしさを見出すことなどが大切である。

(4) 一単位時間の学び

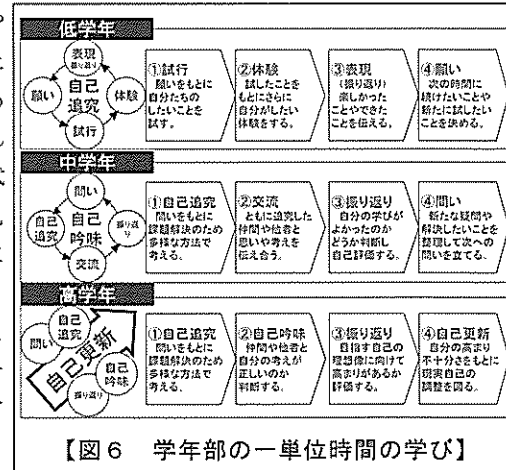
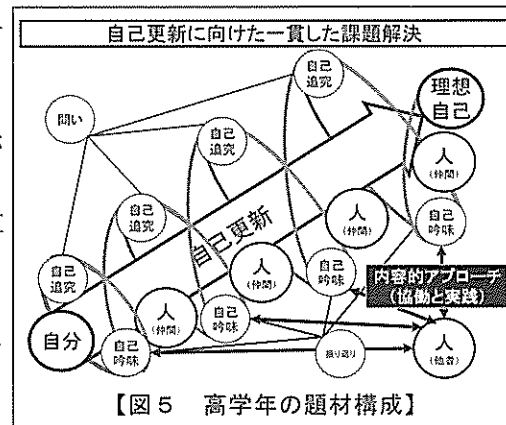
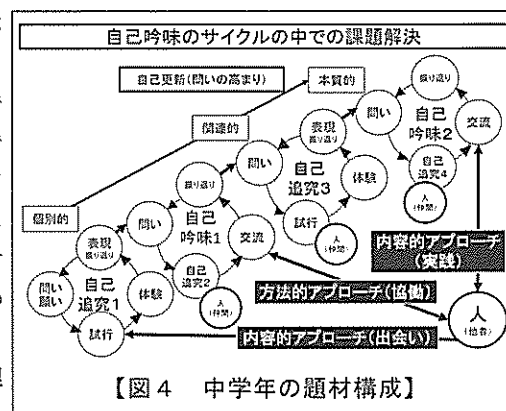
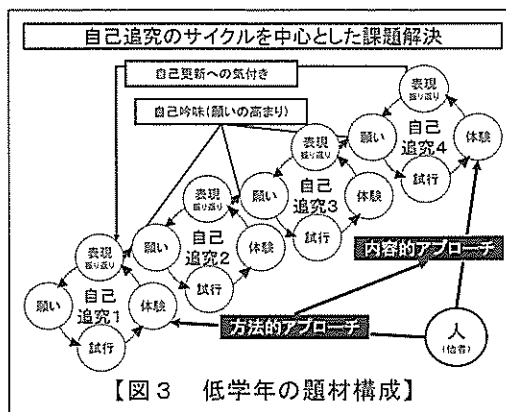
領域「生き方」における一単位時間の学びは、子供の課題意識や取組などに応じて、弾力的に行っていく必要がある。すなわち、上記に述べた一連の課題解決のサイクルは複数時間を要することもある。つまり、一単位時間は45分で行われなくてもあると考えられる。しかし、このサイクル図6のようにまとめられる。低学年は「試行、体験、表現、願い」へと発展する学びである。中学年は「自己追究、交流、振り返り、問い」へと発展する、仲間や他者とともに学び合う学びである。高学年は「自己追究、自己吟味、振り返り、自己更新」へと発展する学びである。ただし、以上の過程は常にこの手順を踏むものではない。行きつ戻りつしながら、その時点、その状況、その文脈における最も有用な応えや見方・考え方を求めて進められることも大いに有り得る。

【引用・参考文献】

石井英真.『今求められる学力と学びとは』.日本標準社.2015

東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会.

『カリキュラム・イノベーションー新しい学びの創造に向けてー』.東京大学出版会.2015



領域「生き方」年間指導計画

学年		学期	1 学期				
		内容区分					
第1 学年	A いのち		おおきく なあれ！わたしの おはな①			おおきく なあれ！ わたしの おはな③	
	B みらい		あくしゅ だいさくせん③				
	C くらし	しょうがっこうって どんな ところ？④	こうえんに いってみたら⑦			めざせ おてつだいめいじん⑥	のりもの
	D なかま	あくしゅ だいさくせん④					
年間時数(102時間)		34時間					
学年		学期	1 学期				
		内容区分					
第2 学年	A いのち	大きなあれ！ わたしのお花③	大きなあれ！わたしの夏野さい⑦			大きなあれ！ わたしの夏野さい②	
	B みらい						
	C くらし	大きなあれ！わたしのお花②	大きなあれ！わたしの夏やさい⑦			大きなあれ！わたしの夏野さい③	うごくおもちゃ
	D なかま	もっとなかよし⑥	みんなおいでよ 西公園クイズウォーク⑩				
年間時数(140時間)		45時間					
学年		学期	1 学期				
		内容区分					
第3 学年	A いのち						
	B みらい						
	C くらし	大切にしよう！自分とのかかわり⑤					
	D なかま				つくろう！わたしたちのダンス⑩		
年間時数(105時間)		35時間					
学年		学期	1 学期				
		内容区分					
第4 学年	A いのち						
	B みらい						
	C くらし		見つけてみよう！せんとうのみ力⑨			あたたかい生活をつくろう～サザエさんと	
	D なかま	4年生になって⑥					
年間時数(105時間)		35時間					
学年		学期	1 学期				
		内容区分					
第5 学年	A いのち	家族からのおくりもの～はなちゃんのみそ汁～⑧					
	B みらい						
	C くらし						
	D なかま						
年間時数(105時間)		35時間					
学年		学期	1 学期				
		内容区分					
第6 学年	A いのち						
	B みらい	最高学年として⑦	広げよう！世界遺産の魅力⑩				
	C くらし						
	D なかま	梅組となかよくすごそう⑦					
年間時数(105時間)		35時間					

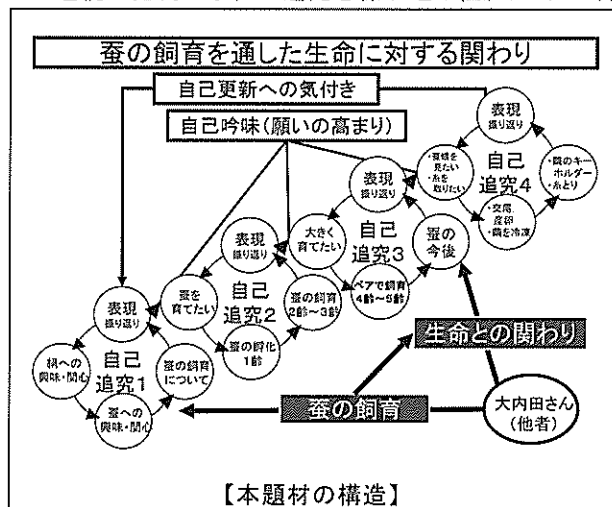
2 学期			3 学期		
げんきに そだて てんの むし かいい⑬					
			小学校は たのしいよ⑭		2年生に なる わたしたち④
だいすき⑦		あらつパークで たのしく あそぼう⑩			
39時間			29時間		
2 学期			3 学期		
			ふくらまそう みんなの中のゆめ風船⑮		
であそぼう⑩	いっしょにあそぼう 自ぜんとみんなと西公園⑬	ぼく・わたしのとう人町しょう店がい いきいきプロジェクト⑭	ありがとう 2年〇組⑮		
55時間			40時間		
2 学期			3 学期		
			めざせ 地いきねこサポーター⑯		
	つくろう！「ふぞく小ぶらっとホーム」⑮		ありがとう 3年〇組⑮		
	つくろう！「ふぞく小ぶらっとホーム」⑰				
35時間			35時間		
2 学期			3 学期		
その時代～⑱	外から見た日本⑲		外から見た日本⑲	みんな大切！いのち再発見⑱	
40時間			30時間		
2 学期			3 学期		
伝えたい！ぼくのわたしの附属小⑲					最後の1年を最高の1年に するために⑲
			チーム福岡！ぼくとわたしができること⑲		
40時間			30時間		
2 学期			3 学期		
これがわたしの生きる道⑳			12才のわたしにできること㉑		
梅組となかよくすごそう㉒			梅組となかよくすごそう㉒		
40時間			30時間		

1 資質・能力

- 蚕を飼育することに関心をもち、蚕の飼育を通して、世話をしている自分との関わりで蚕が成長していることに気付くとともに、生命とどのように関わるか考えることができる。（創造性）
- 蚕の観察やお世話を通して、感じたことや気付いたことを表現したり困ったことやわからないことを尋ねたりして、自分の蚕や友達の蚕の成長と変化について伝え合うことができる。（協働性）
- 蚕の飼育を通して、世話をした蚕の変化や行動を喜び、人が生き物の生命をもらっていることについて考えたり、生命に対する見方・考え方の変容に気付いたりすることができる。（向上性）

2 題材の考え方

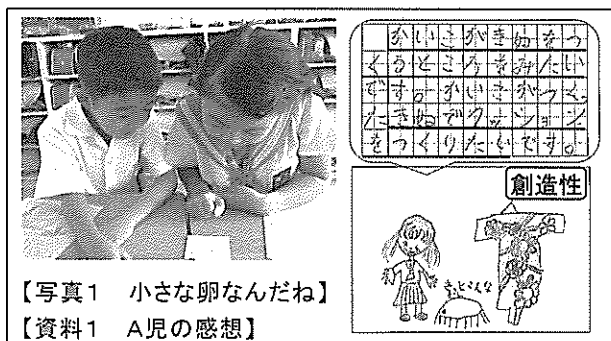
本題材では、生き物の飼育に関心をもち、飼育活動を通して、成長や変化に気付き、生命の有限性を感じたり多くの生き物に支えられて生きている自分に気付いたりすることで、生き物との関わりについて考えをもつことをねらいとしている。そのために、人間が飼育し、命をいただいてきた蚕を取り上げる。また、福岡の絹糸で作った博多織を完成させたいと、糸島で養蚕をされている大内田さんの生き方を取り上げる。初めは、病気の蚕を処分したり繭を冷凍室に入れたりすることができなかったが、今では「受け継がれる絹織物を残すために糸を取ることを目的なのだ」という思いをもつ大内田さんの生き方に触れることで、自分は蚕の生命とどう向き合うか、生き物とどう関わるか自分なりの考えをもって生きようとする子供が育つと考える。題材では、絹織物への興味・関心から絹糸を出す蚕に関心をもたせ、育ててみたいという思いや願いの連続・発展から自己追究を繰り返し仕組んでいく。



3 学習の流れと考察

導入段階のねらい: 1~2/16時

七五三の着物や帯、絹製のスカーフやネクタイと制服を比較したり、卵の殻を見て蚕を想像したりして、蚕の飼育や絹糸に関心をもつことができる。



導入段階では、七五三の着物や帯を見たり絹製のスカーフやネクタイに触れたりした。子供たちは、「昔のお姫様が着る服だ」「ふわふわしてやわらかいよ」など、美しさや手触りの心地よさを感じていた。また、蚕の卵の殻を見て「小さな卵なんだね」「どのような虫だろう」「どうやって絹を出すのだろう」と興味を膨らませていた(写真1)。そして、これからしたいことを話し合うと、「自分たちも蚕を育てて絹糸を取りたい」と、飼育活動への思いをもっていた。A児は、「クッションを作りたい」と記述していた(資料1)。

考察1

蚕の飼育に関心をもたせる(創造性)ために、絹製品に触れさせたり、蚕の卵の殻を提示したりしたことは有効であった。その根拠は、子供から感激や驚きの言葉が聞かれ、「蚕を育てて絹糸を取りたい」と、蚕の飼育活動への思いや願いをもったからである。

展開段階のねらい: 3~11/16時

蚕の飼育活動を通して、成長や変化に気付き、蚕の生命に対して自分なりの考えをもつことができる。

(1) 1歳~3歳の様子から気付いたことを伝え合う。



(2) 4 歳から育てている自分の蚕について、お世話で気を付けていることや気付いたことを伝え合う。



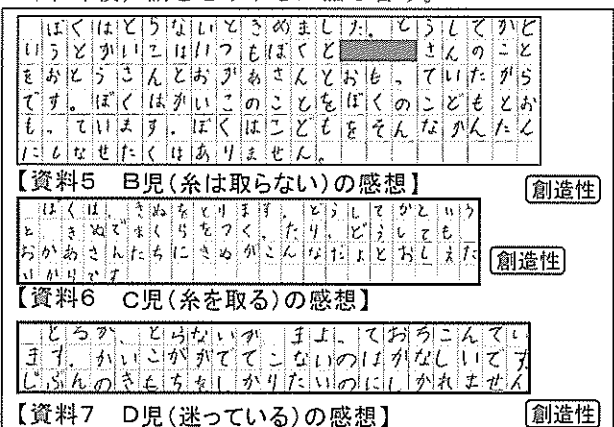
【写真3 かわいいなあ】



【写真4 今日も元気だね】



(3) 今後、繭をどうするか話し合う。



展開段階では、蚕の飼育を行った。3 歳までは学級で育て、4 歳から2 人で2 頭の蚕を育てた。最初は、蚕の小ささや動きに興味をもっていた(写真2, 資料2)が、ペアで育て始めると、自分の蚕に名前をつけ、休み時間になると手に乗せ観察する姿が見られた(写真3, 4, 資料3)。また、大内田さんに自分の蚕を見てもらい「誉められた」と喜んでいたので(写真5)。蚕が繭になると、B児は、直接触れ合うことができない寂しさを感じていた(資料4)。一方で、驚きと感動をもって、トイレトペーパーの芯から繭を取り出していた(写真6)。その後、繭から糸を取るには鍋で煮ること、糸を取らなかったら蚕蛾になって出てきて交尾をして卵を生むことを伝えた。子供は、自分の繭

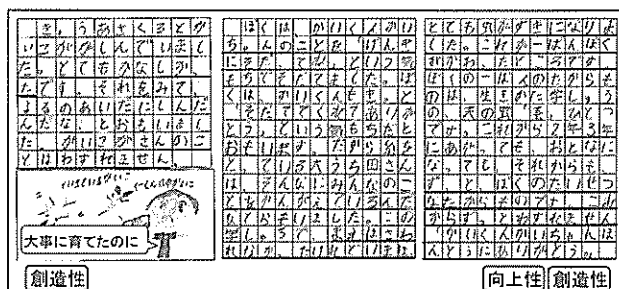
をどうするか伝え合った(資料5, 6, 7)。

考察2

蚕の成長や変化に気付き、蚕の生命に対して自分なりの考えをもたせる(創造性)ために、4 歳から2 人で2 頭の蚕を育て、糸を取るか決めさせたことは有効であった。その根拠は、資料2～7において蚕に愛着をもっていることや、蚕に対する関わりをもとに考える子供の姿が読み取れるからである。

終末段階のねらい:12～16/16時

これから生き物とどのように関わるかについて、自分なりの考えをもつことができる。



【資料8 B児の感想】

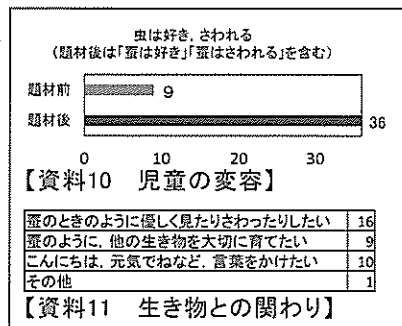
終末段階では、決定したことを実践した。糸は取らないと決めた子供は、蚕蛾となって卵を生み死んでいくまで育てた。蚕蛾が死んだ子供は、お墓を作り、お参りをして蚕の死を悲しんでいた(資料8)。その後、人間は生きている間にたくさんの生き物の命をいただいていることを話した。B児は、ご飯を食べる時も、花瓶の花を見る時にも「ありがとう」の気持ちをもちたいと発言していた。最後に、蚕蛾にした子供は自分の蚕の繭でキーホルダーを作り、糸を取ると決めた子供は自分の蚕の繭から糸を取った。B児は、本題材の学習を通して自分の変容を記述した(資料9)。

考察3

生き物との関わりについて自分の考えをもつ(創造性)ことができるようにするために、決めたことを実行させたり、生き物の命をいただいていることを話し合わせたりしたことは有効であった。その根拠は、生き物への感謝の思いが読み取れるからである。

全体考察

本題材では、特に、創造性が伸長したことがわかる(資料10, 11)。それは、子供の思いや願いの連続・発展から自己追究を繰り返す仕組んだことが有効に働いたためであると考えられる。

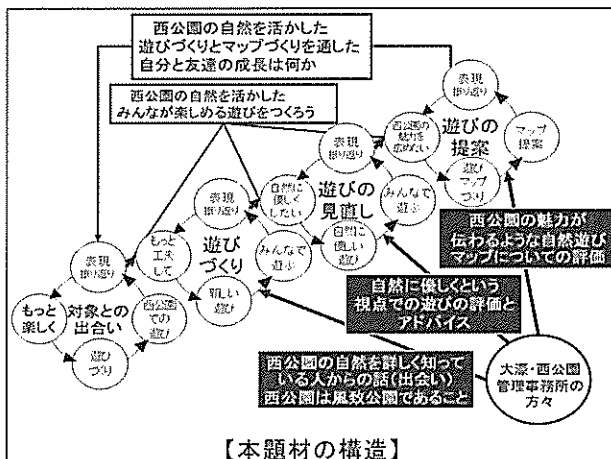


1 資質・能力

- 自然を大切にしながら、その自然物を活かした遊びをつくる活動をもとにした、西公園自然遊びマップを作成し、感じた西公園の魅力を身近な人たちに広めようとすることができる。（創造性）
- 自然を活かした遊びづくりや西公園自然遊びマップづくりの実践を行う中で、友達の気持ちや意見を聞き、その気持ちや意見を大切にしながら、自分の意見や気持ちを伝えることができる。（協働性）
- 西公園で自分たちが考えた自然を活かした遊びをつくる活動や西公園自然遊びマップづくりを通して、自分ができるようになったことに気づき、自分の成長を感じ取ることができる。（向上性）

2 題材の考え方

本題材では、西公園内の豊かな自然に触れ、その自然物を使った遊びを考え、実践し、主体的に集団で活動する楽しさを感じ取ることをねらいとしている。そこで、本題材では、西公園の魅力の1つである、豊かな自然の管理もされている、大濠・西公園管理事務所の方々の生き方を取り上げる。西公園の管理をしながら、西公園でもっと多くの子供たちに楽しく遊んでもらいたいとの思いが、西公園での遊びを繰り返す中で子供たちが感じる願いとつながると考えたからである。また、日常的に西公園の自然に触れ、その管理をしている方々の視点から、子供たちの遊びについてのアドバイスや評価をもらうことで、より自然を活かした、楽しい遊びをつくることができると考えたからである。題材では、一人では解決できない共通の願いをもち、試行錯誤しながら遊びを考え、実践する活動を繰り返し仕組む。そして、大濠・西公園管理事務所の方々と出会うことで、友達の気持ちや考えを聞き、大切にしながらも自分の意見を伝える子供が育つと考える。

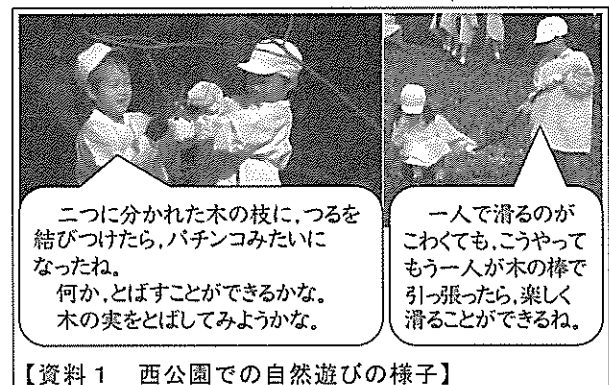


3 学習の流れと考察

導入段階のねらい：1～9/24時

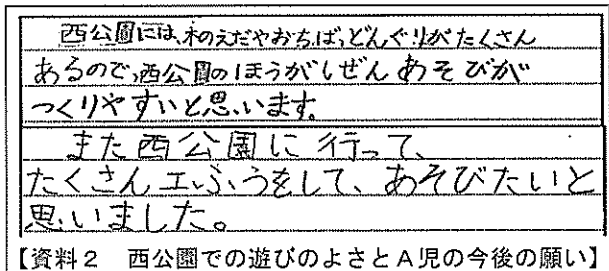
西公園でしかできない自然遊びの魅力に気づき、西公園でもっとみんなが楽しめる遊びをつくりたいという願いをもつことができる。

- (1) 西公園のもみじ谷で繰り返し遊び、自然を活かした遊びについて話し合う。



【資料1 西公園での自然遊びの様子】

- (2) 西公園と大濠公園や学校での遊びを比べ、その違いから西公園での遊びのよさについて話し合う。



【資料2 西公園での遊びのよさとA児の今後の願い】

導入段階では、まず、西公園に行き、その場にある自然物を使った遊びを考えて、繰り返し遊ぶ活動を設定した。子供たちは、木の枝を使ってスキーのように坂を滑ったり、木の枝と藁で遊び道具をつくらうことで、友達と一緒に遊んでいた（資料1）。その後、他の公園や学校との遊びの違いを比較する活動を設定した。子供たちは西公園での遊びのよさをとらえ、A児は「西公園でみんなが楽しめる遊びをもっと工夫してつくって遊びたい」という願いを記述した（資料2）。

考察1

西公園にある自然物を使った遊びを考えて、繰り返し遊ぶ活動を行ったことは、「みんなで楽しく自然を使って遊びたい」という願いをもって、遊びをつくり出す実践的態度を育み、創造性を発揮させる上で有効であった。その根拠は、A児が、資料2のような今後の活動への願いにつながる記述をしたからである。

展開段階のねらい：10～20/24時

自然を活かした遊びを考えて繰り返し実践し、よりみんなで楽しめる遊びをつくることができる。

- (1) グループに分かれて、もっとみんなで楽しめる遊びについて話し合う。

グループ つるぐる

どんな あそびが できるのか 考えよう。

つるで 糸を 作り出す。ちよと 前田
よりたぐいの つるが いるけれど
おもしろいとおもしろい。男の子
同で アセサリーは おもしろいなら
くで 遊ぶの、いいと思います。

グループ ちよ

どんな あそびが できるのか 考えよう。

バトングイでも
あそびが たいは ちよも、あいての
をいあて ちよも、あいての ちよも
ちよも あいての ちよも

【資料3 グループでつくった遊びの案】

- (2) 大濠・西公園管理事務所の方々に考えた遊びについて見てもらい、遊びを見直し、より楽しく自然に優しい遊びについて話し合い、実践する。

つるをむだにしないためにも、結び方を考えたらいいと思うよ。

大濠・西公園管理事務所の松永さん

岩登りだけではなくて、岩の上で何かできないかな。

大濠・西公園管理事務所の平田さん

岩とび遊び

アドバイス

石積み遊び

石積み遊びに夢中になるA児

わたしは石つみをしました。ぐらぐらしてバランスをとって、おもしろい。でも、今日は一人でしたので、つぎは誰かからレベルを上げてやろうと思います。

【資料4 GTによるアドバイスを受け見直した遊び】

展開段階では、まずグループに分かれて、各自が考えた遊びを説明し合い、その中からみんなが楽しめる遊びについて話し合う場を設定した(資料3)。話し合った遊びの実践後、その遊びについて大濠・西公園管理事務所の方々に評価してもらい、遊びを見直す活動を設定した。すると、アドバイスを受けて、遊びを見直し、その遊びに夢中になる姿が見られた(資料4)。

考察2

自分たちで考えた遊びについて、GTからアドバイスを受け、見直していく活動を設定したことは、自分や仲間のことを考え、よりみんなで楽しめる遊びを決

定する意志決定の力を育み、向上性を発揮させる上で有効であった。その根拠は、資料4の下線部にもあるように、全てのグループがアドバイスを活かして、自分たちが考えた遊びを見直し、自然物を活かすだけでなく、大切に遊ぶ遊びをみんなが楽しめるようにと考えながら、見直すことができたからである。

終末段階のねらい：21～24/24時

遊びを振り返ってまとめた、自然遊びマップを作成し、自分の成長を感じ取ることができる。

終末段階では、子供たちが考えてきた遊びをより多くの人たちに広げるために、自然遊びマップに整理する活動を設定した。グループごとに話し合いながら、自分たちが考えた遊びのよさを取り入れたマップを作成し、活動全体の振り返りを記述した(資料5)。

わたしはこの学習をして、せんとせんにすること、せんとせんにすること、考えることができるようになりました。だれとでもたのしく、なかよくあそぶこともできるようになりました。

【資料5 自然遊びマップの絵とA児の振り返り】

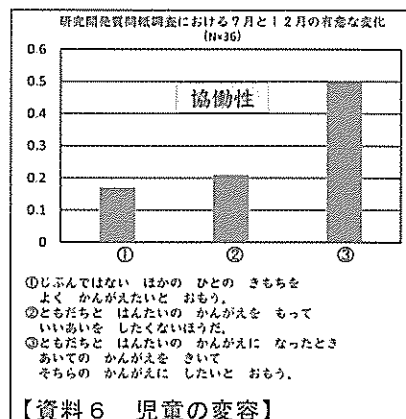
考察3

遊びの振り返りと西公園自然遊びマップづくりの活動を設定したことは、他者を尊重する態度を育て、協働性を発揮させる上で有効であった。その根拠は、資料5にあるように、A児が「だれとでも楽しく、仲よく遊ぶこともできるようになった」と、他者との関わりの成長を実感することができていたからである。

全体考察

考察1～3から本題材は、全ての資質・能力の向上が見られたが、特に協働性が伸長したことがわかる(資料6)。それは、みんなで楽しめる遊びをつくり

たいという一人では解決することのできない共通の願いを設定したこと、及び、試行錯誤を繰り返す遊びづくりの活動を仕組んだことが有効であったと判断できる。さらに、子供の求めに応じ、遊びの見直しの過程において、大濠・西公園管理事務所の方々と出会ったことも、効果的であったと考える。

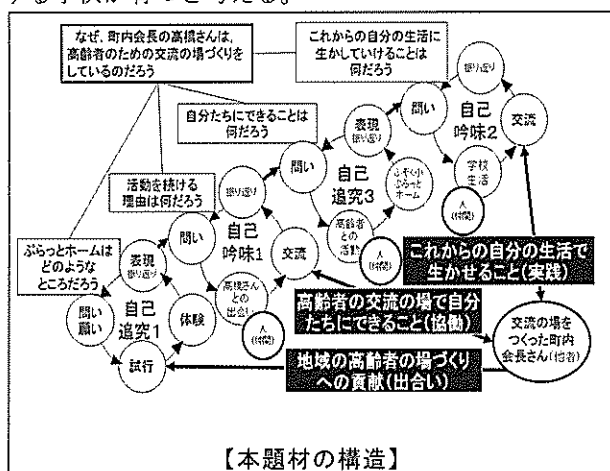


1 資質・能力

- 人と関わり合って生きる大切さをとらえ、地域の高齢者の交流の場づくりに貢献する人の生き方や、高齢者との交流を通して、自分の生き方について考えることができる。（創造性）
- 地域の高齢者に関わり、交流していくために、自分たちができることについて、仲間の考えも理解しながら自分の考えを伝えることができる。（協働性）
- 地域の高齢者に尊敬と感謝の気持ちをもって交流していくために、自分ができよりよい行動を仲間と考えを出し合いながら自己決定することができる。（向上性）

2 題材の考え方

本題材では、地域の高齢者の交流の場から、人と関わり合いながら生きていく他者を尊重する態度や相互理解を高めることをねらいとしている。そのために、「自己追究」「交流」「振り返り」「問い」といった自己吟味の学びを通し、『ぷらっとホーム』はどのようなところだろう」という問いを発展させていくような発見的なプロセスを大切にしながら、学級の仲間と協働することで、子供たちは自己の生き方に関わる課題解決を行い、自己の見方・考え方を高めていくと考える。ここでは、地域において高齢者の孤独死があったことから、孤独死をなくし、お互いに支え合い、関わりながら暮らしていこうと「大荒れい処ぷらっとホーム」を立ち上げた町内会長の高橋さんの生き方を取り上げる。このことは、高齢化社会において、高齢者に尊敬と感謝の気持ちをもち、ともに生きていくことの大切さの理解につながり、仲間とともに地域社会に目を向け、自分ができるとは何かを考え行動しようとする子供が育つと考える。

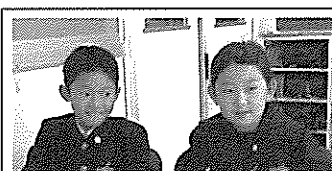


3 学習の流れと考察

導入段階のねらい: 1～2/22時

学校の周りの地域に住んでいる高齢者のための交流の場（ぷらっとホーム）があることに気づき、どのようなところなのか追究意欲をもつことができる。

- (1) 地域の高齢者が集まって交流している様子を見て、興味をもったことについて話し合う。



ぷらっとホームに来ている人は、みんな笑顔で、とても楽しそうに話しているな。

【資料1 「ぷらっとホーム」の様子を見る】

- (2) 「ぷらっとホーム」の活動の様子から思ったことや考えたことを出し合い、どのようなところなのかについての考えをもつ。

ぷらっとホームには、いつ、どのような時間にみんなで集まっているのかが知りたいです。ぷらっとホームに1回行ってみたいですね。

【資料2 A児の感想】

創造性

導入段階では、地域に住む高齢者が集まって活動している様子を動画で紹介した。そのときにA児は、高齢者がとても楽しそうにしていることについて発言をした（資料1）。またワークシートに、「ぷらっとホーム」はどのようなところかという記述をした（資料2）。

考察1

地域に住む高齢者が集まって楽しく交流していることに気付かせるために、「ぷらっとホーム」の活動の様子を動画で紹介し、気付いたことや思ったことを話し合わせる活動は創造性を高める上で有効であった。その根拠は、活動の様子動画から、高齢者がたくさん集まって、笑顔でいることに気づき、どのようなところなのかという追究意欲をもったからである。

展開前半段階のねらい: 3～6/22時

活動を始めた町内会長さんや「ぷらっとホーム」の方と交流して思いや願いを知ることができる。

- (1) 「ぷらっとホーム」の活動を始めた町内会長さんや「ぷらっとホーム」の方と交流する。



【写真1 高橋さんのお話】【写真2 ぶらっとホームの方との交流】

(2) 交流したことから、地域の高齢者にとって「ぶらっとホーム」はどのような場所なのか話し合う。

わたしは、「いつから来ているのですか」と聞いたら、
1回しつ問いただけなのに、たくさん話してくれて
とてもうれしかったです。

協働性

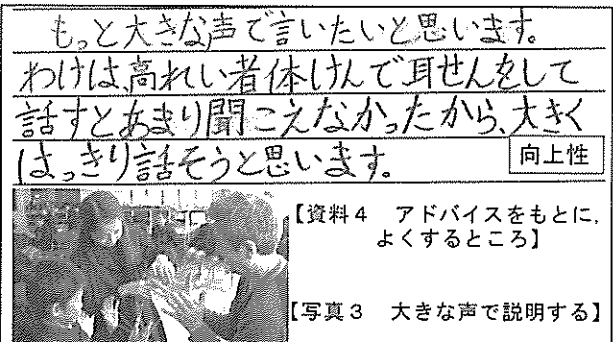
【資料3 交流後のB児の感想】

展開前半段階では、町内会長の高橋さんや「ぶらっとホーム」の方と交流する活動を設定した。高橋さんから話を聞いたB児は、高橋さんの思いを聞き、高齢者にとって「ぶらっとホーム」が楽しい場所になっていると記述した。その後、高齢者との交流では簡単な手合わせ遊びなどを一緒に楽しんだ。その後の感想では、「1回質問しただけなのに、たくさん話してくれてとても嬉しかった。」と記述した(資料3)。

展開後半段階のねらい:7~18/22時

町内会長の高橋さんや地域の高齢者のために自分たちができる活動を話し合い、「ふぞく小ぶらっとホーム」を開催することができる。

- (1) 自分たちにできることについて話し合う。
- (2) 「ぶらっとホーム」の方にアドバイスをいただき、「ふぞく小ぶらっとホーム」を開催する。



【写真3 大きな声で説明する】

展開後半段階では、「ぶらっとホーム」の活動について自分たちができる活動について考え、実践させるために、高齢者体験や「ぶらっとホーム」の方にアドバイスをもらう活動を設定した。そのときA児は、アドバイスをもとに説明を大きな声ですることを記述していた(資料4)。交流会では、それをもとに大きくはっきりとした声で説明をする姿が見られた(写真3)。

考察2

展開前半段階で、「ぶらっとホーム」を始めた経緯やその思いや願いに気付かせるために、町内会長の高

橋さんや「ぶらっとホーム」の方と交流したことは、協働性を高める上で有効であった。その根拠は、「ぶらっとホーム」の活動の内容や高橋さんの思いを知り、「ぶらっとホーム」が地域の高齢者にとって元気になる楽しい場所になっていることに気付いたからである。さらに、実際に高齢者と交流することで、高齢者との交流を楽しむ姿(写真2)や高齢者に対する思いをもつことができたからである。

また、展開後半段階で自分たちにできる活動として、「ふぞく小ぶらっとホーム」を行わせるために、高齢者体験や「ぶらっとホーム」の方に活動のアドバイスをもたらしたことは、向上性を高める上で有効であった。その根拠は、高齢者体験から、高齢者の体の変化に気付き、「ぶらっとホーム」の方のアドバイスから、交流するために必要なことに気付き、そのことを生かそうとする姿が見られたからである。

終末段階のねらい:19~22/22時

「ふぞく小ぶらっとホーム」を開催したことから、今後の自分の生活にどのようなことが生かせるのかを考え、実践しようとするすることができる。

これまでの活動を振り返り、これからしたいことやなってみたい自分について話し合う。

わたしはこれから友だちと助け合いながら
お年よりの方もおたがいに親睦にして
生きていこうと思います。

創造性

【資料5 これからの自分について】

終末段階では、これからの自分の生活や自分自身について振り返る活動を設定した。「ふぞく小ぶらっとホーム」をすることで、これから友達と助け合って生活していきたいと記述した(資料5)。

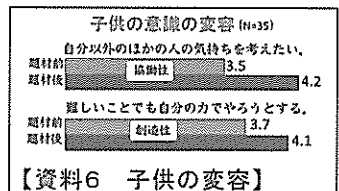
考察3

実践全体の振り返りを行ったことは創造性を高める上で有効であった。その根拠は、高齢者との交流から友達と助け合うことや、親切にすることに気付き、実践しようということを自己決定できたからである。

全体考察

本題材では、協働性と創造性が伸長したことがわかる(資料6)。それは、地域の孤独死をなくそうと交流の場をつくった町内会長の高橋さんや、そこに参加する高齢者との継続的な関わりによって、子供たちが、地域のことを思っ

て活動することの大切さをとらえたからである。向上性については、数値の高まりが見られなかったことから、必要に応じた振り返りの場を設定し、自分の内面の高まりを視覚化することが必要である。



1 資質・能力

- 性の根本にある愛や思いやりをとらえ、FREN S (Fukuoka Rainbow Educational NetworkS) の方々の力強い生き方を知ることを通して、自分の生き方を広げ深めるとともに、誰もが自分らしく生きるためには、セクシャル・マイノリティの人々に対する差別や偏見を無くし、性の多様性を認める生き方づくりが大切であることを考えることができる。

(創造性)

- 仲間やセクシャル・マイノリティの方々の思いや考えを十分に理解し、自分と異なる考えを尊重するとともに自分の考えも伝えることができる。

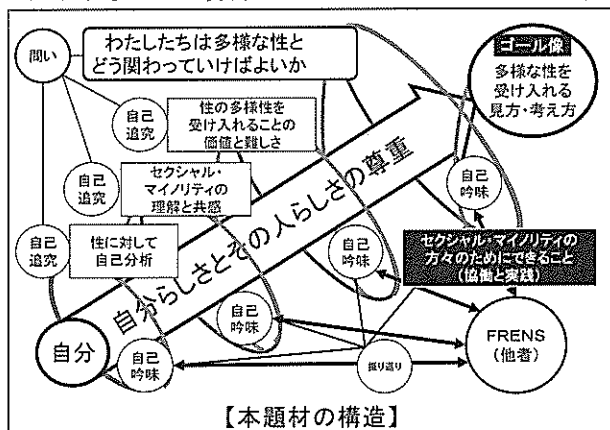
(協働性)

- 性に対する自分の考えのよい面も悪い面もすべて受け入れ、今後の自分の多様な性の在り方に対する見方・考え方を高めることができる。

(向上性)

2 題材の考え方

本題材では、偏見や差別に屈することないセクシャル・マイノリティを支援しているFREN Sの方々の生き方から、性の多様性を認める生き方づくりが大切であることを考えることをねらいとしている。そのために、まず、学びを通してどのように自己を成長させたいのかというゴール像を明らかにし、一つの問いを解決していく中で、自己追究と自己吟味を繰り返していく学習過程を仕組むことで、子供たちは仲間と協働しながら、生き方に関わる課題解決を行い、自己の見方・考え方を高めることができるようにした。次に、福岡市で活躍するFREN Sの方々が、セクシャル・マイノリティのことを少しでも多くの人々に理解してもらうために活動したり、誤った偏見や差別を取り除いたりするために努力している生き方を取り上げた。

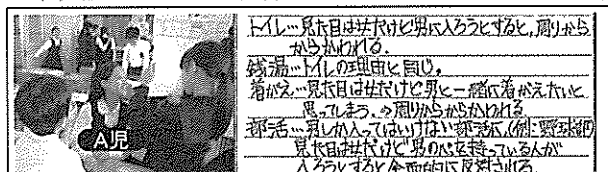


3 学習の流れと考察

導入段階のねらい: 1～4/22時

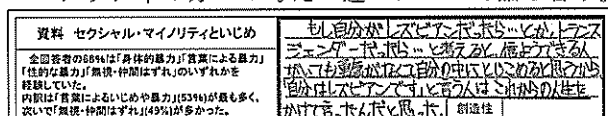
自分がこれから性の問題に対して、どのように関わっていきたいのか課題を設定することができる。

- (1) 性についての自分たちの当たり前を出し合う。



【資料1 当たり前にある性の問題】

- (2) 性に関する自分たちの考えがセクシャル・マイノリティの方々の考えの違いについて話し合う。



【資料2 問題と出合ったA児の感想】

導入段階では、性の問題にどのように関わっていきたいのか課題設定することをねらいとした。課題をもたせるために、身近にある男らしさ、女らしさへの思い込みに気付かせる資料を提示した。そこで、子供たちは、自分たちがもっていた性についての当たり前が一部の人の人にとっては、実は違うことに気付くことができた(資料1)。さらに、セクシャル・マイノリティに対するいじめの問題について資料を提示すると、セクシャル・マイノリティに共感する姿も見られた(資料2)。A児はここで「多様な性を受け入れたい」という学習のゴール像を明らかにしていた。

考察1

自分と性に関わる学習課題を設定させるために、身近にある男らしさ、女らしさへの思い込みに気付かせることは、関心・意欲を高め、「創造性」を発揮させる上で有効であった。その根拠は、子供たちは自分が性の問題に対してどのように関わっていきたいのか課題を設定することができたからである。

展開段階のねらい: 5～16/22時

セクシャル・マイノリティに対する切実な問題を追究することができる。

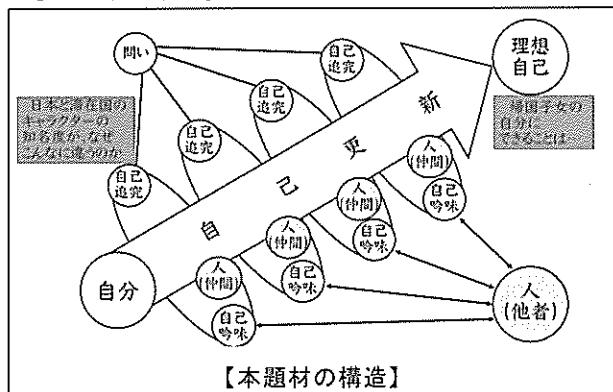
- (1) セクシャル・マイノリティについて、その歴史や

1 資質・能力

- 日本のアニメや漫画などのキャラクターが世界で広く知られていることに気づき、滞在国のキャラクターとの相違点やそれぞれのよさを調べて紹介することができる。 (創造性)
- 友達や滞在国の人と日本や滞在国で親しまれているキャラクターについて知っていることや自分の思いを伝え合うことができる。 (協働性)
- 日本と滞在国で親しまれているキャラクターの紹介を通して、帰国子女として自分にできることをとらえることができる。 (向上性)

2 題材の考え方

本題材では、日本と滞在国で親しまれているアニメやゲームなどのキャラクターについて、多くの人が集まる行事である「あらつフェスタ」の場で紹介することを通して、それぞれの文化の相違点やよさを知り、帰国子女の自分にできることをとらえることをねらいとしている。そのために、まず、日本と滞在国のキャラクターの知名度を調査する活動を行い、日本のキャラクターが世界で親しまれていることに気付かせるとともに、滞在国のキャラクターを日本の人にも知らせたいという学習課題をもたせる。次に、滞在国のキャラクターを多くの人に伝えるために、滞在国の留学生に日本や滞在国のキャラクターについて知っていることを聞いたり、滞在国で経験したことを伝え合ったりして、伝える内容と方法を話し合う。そして、滞在国が同じ友達や近い友達と協力して、プレゼンを作成し、発表の準備を行う。最後に、保護者や地域の方々など多くの人が集まる行事である「あらつフェスタ」で発表を行い、これまでの学習の達成感をもたせる。そして、本題材で学んだことやこれから自分ができることを話し合わせることで、帰国子女である自分を見つめ、海外経験のよさや自分の見方や考え方の高まりを実感できるようにする。



3 学習の流れと考察

導入段階のねらい:1～2/11時

日本のキャラクターが世界で知られていることに気づき、滞在国のキャラクターも多くの人に伝えたいという学習課題をもつことができる。

先生たちへの調査

子供たちへの調査

【資料1 滞在国のキャラクターの知名度調査】

日本のキャラクターの「ドラえもん」は、中国ではよく知られているけれど、中国のキャラクターの「開心超人」は、日本では、だれも知らなかったのとおどろきました。中国のキャラクターを日本の人に知ってほしいです。

【資料2 知名度調査後のA児の感想】

創造性

導入段階では、滞在国で人気のキャラクターについて伝え合い、どの国でも日本のキャラクターがよく知られていることをとらえた。しかし、友達の滞在国のキャラクターについては知らないものも多かった。そこで、子供たちは、それぞれの滞在国のキャラクターが日本で知られているのか調べたいという意欲をもち、子供たちや先生に調査を行った(資料1)。その結果、滞在国のキャラクターは、ほとんど知られていないことがわかった。そこで、A児は、滞在国の中国のキャラクターを知ってほしいという学習課題をもった。

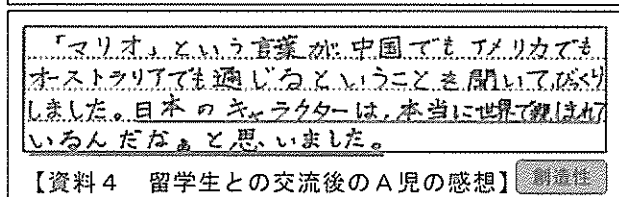
考察1

日本のキャラクターが世界で親しまれていることをとらえ、滞在国のキャラクターを多くの人に知らせたいという意欲をもたせるために、日本と滞在国2つのキャラクターの知名度を比べて調査させたことは、創造性を育成する上で有効であった。その根拠は、世界で多くの人に親しまれている日本のキャラクターに比べ、滞在国のキャラクターの知名度が低いことを結果として実感し、滞在国のキャラクターについて知らせたいという意欲を高めたからである(資料2)。

展開段階のねらい: 3~9/11時

留学生に話を聞いたり、調べたりして、滞在国のキャラクターを多くの人に伝えるための内容や方法をとらえることができる。

- (1) 滞在国の留学生に日本と滞在国のキャラクターについて知っていることを聞く。



- (2) 聞いたことや調べたことをどのように発表するか話し合い、発表の準備をする。



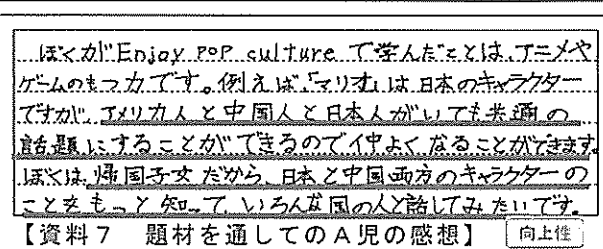
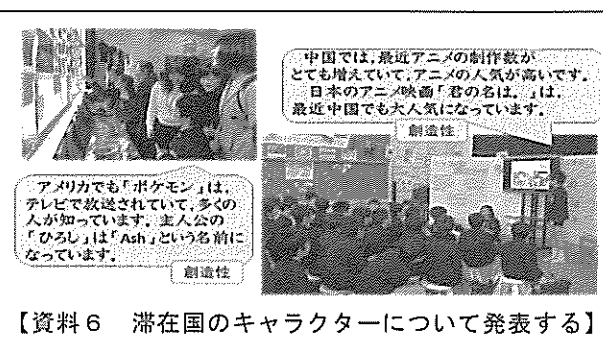
展開段階では、保護者や地域の方など多くの人が集まる行事である「あらつフェスタ」で発表を行うことにし、伝える内容や方法を話し合った。そこで、留学生に日本と滞在国のキャラクターについて知っていることを聞く活動を行った(資料3)。そこで、A児は、「マリオ」が世界で通じる言葉であることを知り、日本のキャラクターが世界で親しまれていることを改めて実感した(資料4)。その後、自分たちが聞いたことや調べたことをどのようにまとめるか話し合い、発表の準備を行った(資料5)。

考察2

伝える内容を決めるために、留学生との交流の場を設定したことは創造性を育む上で有効であった。それは、留学生と話すことで、改めて日本のキャラクターが世界で親しまれていることや自分の滞在国のキャラクターの特徴などを知ることができ、伝える内容を明確にすることができたからである。

終末段階のねらい: 10~11/11時

滞在国のキャラクターについて聞いたり調べたりしたことを発表し、帰国子女として、これからの自分にできることをとらえることができる。



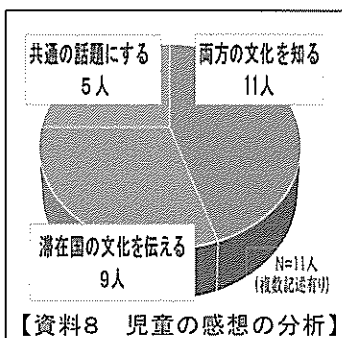
終末段階では、これまで聞いたり調べたりしたことを発表する場を設定した。子供たちは、作成したプレゼンを使ってたくさんの人に伝えることで達成感をもつことができた(資料6)。その後、題材を通して学んだこととこれからの自分にできることを伝え合い、感想にまとめた(資料7)。

考察3

題材を通して学んだことやこれからできることにについて伝え合ったことは向上性を育む上で有効であった。その根拠は、A児の感想から、キャラクターを通して、世界のひととの関わりが広がることを学び、帰国子女として、関わりをもっと広げていきたいという自己の見方や考え方を高めている姿が読み取れるからである。

全体考察

子供たちの感想を分析すると、帰国子女として両方の文化を知る創造性、滞在国の文化を伝えたり、共通の話題にして関わったりしようとする向上性の表出が見られた。それは、キャラクターという身近な学習材を取り上げ、滞在国のひとと関わり、多くの人に発表する活動が有効に働いたからだと考える。今後の課題は、身近な文化から伝統的な文化にまで広げた題材の開発が必要であると考える。



マイタイム部

「ありのままの自分」で、深い自己肯定感を養う「マイタイム」

1 「マイタイム」の必要性

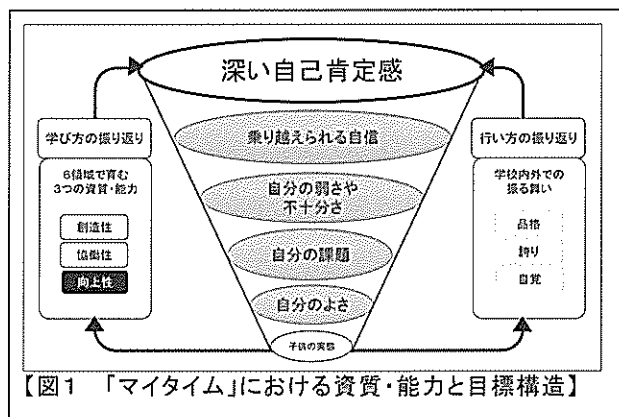
「マイタイム」は、自分の変化を自ら見取り、「ありのままの自分」を見つめ、深い自己肯定感を育む時間である。6領域の学びは子供たちが主体となって行われるものであり、子供たち自身が内容を決め、方向付けていく。「マイタイム」はその足跡を辿ることを重視する。その中で、自分のよさや課題をもとに、自らを方向付ける「向上性」を育むことを重視する。このことは、「能力形成」と「人格形成」の調和を図る本校の教育課程において、特に「人格形成」に寄与すると考えられる。このことから各領域の学習や日々の生活から自分を把握する上において「マイタイム」は重要な役割を担っていると言える。

また、「マイタイム」では、向上性の中で、特に子供たちの「自己肯定感」を深めることを重視する。「自己肯定感」とは、善悪を超えた次元で自分を受け入れ、自己の存在のそのものの価値をとらえることである。すなわち、「ありのままの自分」のよい面とともに、伸び悩んでいる面にも目を向けることが、この深まりのためには重要である。このことが「自分を成長させたい」「自分を向上させたい」という欲求を生み出す。このような深い自己肯定感を養うことが各領域の学びの原動力となると考えている。

2 目標と内容

(1) 目標について

これまでの自分の学び方や行い方を振り返る活動を通して、「ありのままの自分」を受け入れ、どのような状況の中でも自分を信じていることができる深い自己肯定感を養う。



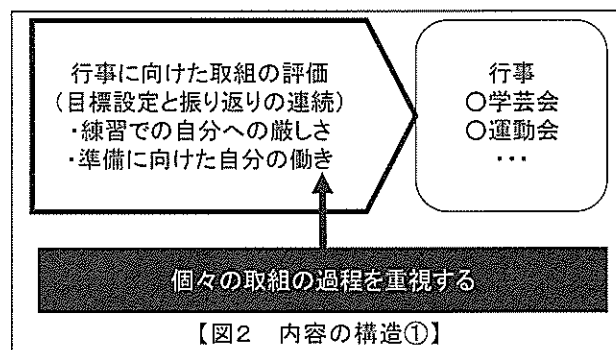
【図1 「マイタイム」における資質・能力と目標構造】

(2) 内容について

「マイタイム」の内容は子供自身の中にある。それぞれの子供たちが自分の目標や高めたい資質・能力によって自ら内容を選択し、自己更新を進めていく。このように子供たちが独自の学びを積み重ねていくことに「マイタイム」の価値があると考えられる。そこでは、子供たちがメタ認知を働かせ、自らを成長の轍へと招き入れる営みが繰り返される。しかし、そのような独自の学びが展開される中でも、子供たちが振り返ったり、目標設定をしたりする中で、視野が狭くなりすぎないように多角的に自己を見つめていけるものとして内容を以下のように示す。

○ 行事の振り返りと目標設定

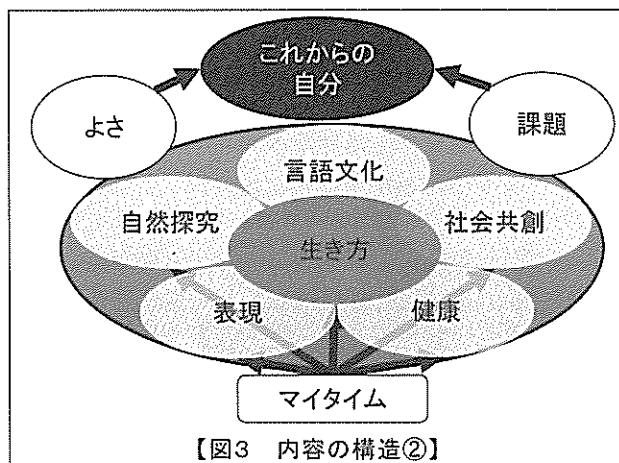
子供たちにとって、行事とはみんなで力を合わせた、自分の目標や課題とすることを設定したりすることができやすいものである。そして、その傾向は特に低学年において大きなものとなっている。そのような行事に向けて、自分の頑張りと成長を見つめたり、みんなで感動を共有したりしたことを振り返らせることが子供たちの内面の成長へとつながっていく。ここで留意すべきこととして、その振り返りは過程(プロセス)を重視すべきであり、結果をもって子供の成長を認めるのは好ましくないことである(図2)。



【図2 内容の構造①】

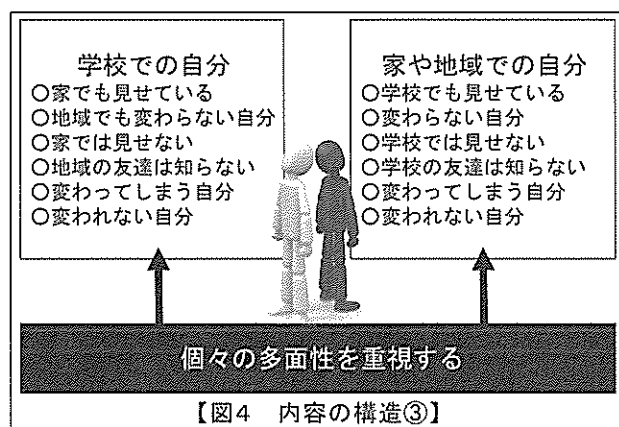
○ 学校生活の振り返りと目標設定

学校生活においては、6領域の学びがどのように自分の中に位置付けているのかを自分自身で意識させる。自分の得手不得手を越えたところで、その学習があることで、どのように自分はよさが伸びたのか。また、その学習で浮き彫りになった自分の課題は何かなど、学びを振り返らせることで自己への気づきが生まれる。その中で、「ありのままの自分」を見つめさせ、どのように学んでいくとよいのか考えさせることが大切である。ここでは単に目に見える数値化された自分の能力だけでなく、どのように自分が学びに向かったのかということを重視する必要がある(図3)。



○ 家庭生活や地域生活の振り返りと目標設定

子供たちは家庭や地域で、学校とは違う別の表情をもっている。習いごとに努力したり、近所の子供たちと遊んだり、ゆっくりと過ごしたりして自分の多面性を培っているとも言える。このような子供たちの姿を善悪の基準で判断するのではなく、そこにある子供たちの様々な姿を理解し、よき方向へと誘っていくことができるようにしていくことが大切である。学校では見せない姿も認めることが自分の存在価値を十分に自覚する人間の成長へとつながっていく（図4）。



以上のような3つの内容をもとにして、週1時間、年間35単位時間を運用していく。しかし、ここにある内容はあくまでも子供たちが自分自身を見つめていく際のベクトルでしかない。子供たちはこの3つの内容から自分自身で1つを選んだり、3つ同時に振り返ったりすることも許容していくことが大切である。

3 年間の主題一覧例(案)

上述した内容を具体化していく際に、マイタイムの時間においては45分間の中で、1つの主題について、個で考えるだけでなく、ペアやグループ等の小集団で考えを練り合っていくことも考えられる。この主題はそのときの学級の子供たちが最も考えたいことをしていくべきであり、あくまでも以下に載せる一覧は例であって、それも案である。子供たち一人一人が主体となって学習することが大切である。

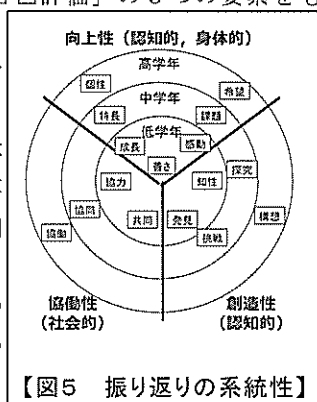
【表1 第6学年 主題一覧】

月週	主題名
4 1	「マイタイム」の時間とは
2	「最高学年」として目指す自分は何か
3	「藤見学芸会」に向かって
4	4月を振り返って
5 1	楽しい家族との一時とは
2	家族や地域とどんなつながりがあるだろう
3	修学旅行に向けて
4	5月を振り返って
6 1	授業づくりセミナーに向けて
2	学校のためにみんなのために
3	家庭学習をどのように取り組もうか
4	6月を振り返って
7 1	相撲・綱引き大会に向けて
2	6領域の学習で力を付けたことは
3	1学期を振り返って、夏休みに向けて
9 1	2学期の目標をはっきりしよう
2	教生先生と一緒に頑張りたいことは何か
3	月見学芸会に向けて～表現～
4	月見学芸会や教生先生の授業で頑張る自分
5	9月を振り返って
10 1	あらかつ大運動会に向けて～全力～
2	あらかつ大運動会で輝いた自分
3	最後の教生先生に伝えたいことは何だろう
4	10月を振り返って
11 1	5年生の頃と変わった自分
2	あらかつフェスタに向けて～創造～
3	あらかつフェスタで輝いた自分
4	明日はもっとよい一日にしよう
12 1	持久走記録会に向けて～克己～
2	遠行会に向けて～自律～
3	2学期を振り返って、冬休みに向けて
1 2	今年の抱負
3	努力することのよさ
4	1月を振り返って、折れない自分
2 1	もっと本音で語ろう会
2	研究発表会に向けて～自己～
3	10年後の自分と語ろう～夢～
4	6年間の自分
3 1	これがわたしの生きる道

表1のように、内容の3つを配置しているが、行事や学校に関わる内容が多くなってしまうことが考えられる。実態によっては家庭生活や地域生活の内容を多くしたり、他領域の学びとうまく関連させたりすることで、子供たちの自己肯定感が深められることが予想される。その場合には、子供たちの実態に応じて主題を変更したり、新たに創ったりするなどの弾力的な運用が望まれると考える。

4 活動を設定する上での考え方

マイタイムの時間においては、「認知的」「身体的」「社会的」「生活」「総合自己評価」の5つの要素をもとに自分を見つめさせる。そこで、系統的に学び方では3つの資質・能力と関係させ「認知的」「身体的」「社会的」の3つの要素から自己内省を図る（図5）。行い方では「生活」「総合自己評価」の2つの要素から自分を見つめさせるようにする。



(1) 学び方について

○ 向上性

「認知的（内的）」→主にメタ認知

「身体的」→主に運動能力や健康など

- ・（善さ）自分のよさへの気付き
- ・（課題）自分の課題の振り返り
- ・（成長）自分の変化への気付き
- ・（個性）自分らしさの受容
- ・（希望）自分をよりよくする見通し
- ・（特長）自分自身の価値をとらえること
- ・（感動）自ら実践したことで得た心の動き

○ 協働性

「社会的」→自己開示性、友好性、協調性など

- ・（協力）友達と力を合わせる
- ・（共同）身近な人ともに活動すること
- ・（協同）仲間たちと同じ活動をする
- ・（協働）課題をともにする人々と働く

○ 創造性

認知的（外的）→感覚・知覚、言語、思考など

- ・（知性）学習で身に付けた知識や技能
- ・（発見）知らない新たなことを見つける
- ・（探究）課題意識に根ざした粘り強い学習
- ・（挑戦）実践に向けた前向きな挑戦
- ・（構想）新たな社会の構想

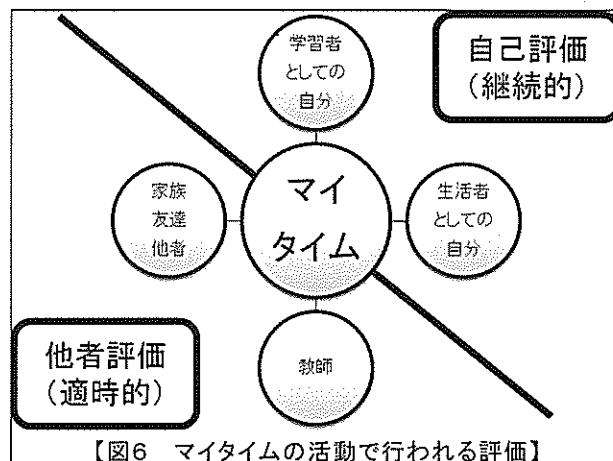
(2) 行い方について

生活→意志・意欲、勤勉さ、自己制御、仕事など
総合的自己評価→情緒安定の要求充足、自信など

- ・（真剣）課題に対する取組の真剣さ
- ・（努力）自主的な学習への過程
- ・（熱意）興味・関心や追究意欲
- ・（行動）学校生活（挨拶、姿勢、移動、準備）
- ・（品位）地域での信頼（マナーやモラル等）
- ・（習慣）基本的な生活（睡眠、食事、黙読清掃）
- ・（礼儀）人との関わり（思いやり・親切、感謝）
- ・（自然）命との関わり（飼育、栽培、環境）
- ・（奉仕）社会との関わり（奉仕、福祉、教育）

5 活動構成の考え方

2で述べたように、週1時間行われる「マイタイム」では、各領域での学習や日々の生活における成長を蓄積する。そのため、その蓄積をもとに学びを生かした活動を構成することが大切になる。そこで、領域での学びや生活の中での継続的な自己評価が重要になる。つまり、「マイタイム」の時間では、効果的に他者評価を位置付け、自己を客観的に見つめられるようにする必要がある（図6）。

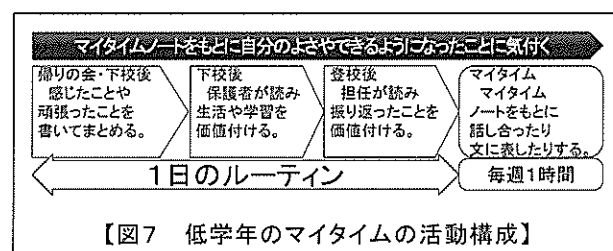


このように、継続的に続ける自己評価と適時的に行う他者評価によって、自己を客観的に見つめることができる。まず、そのためには、継続的な自己評価をしていくための仕組みと他者からも評価を受けるためにも自分の現状を視覚化していく必要がある。そこで、授業間の準備時間や朝や帰りの会などを積極的に運用し、子供たちが「マイタイム」の時間に自分の心に向かいやすくする必要がある。そのために「マイタイムノート」を活用し、効果的に一単位時間の学びとつなげることができるようにする。

(3) 各学年の活動について

① 低学年

低学年の段階の子供たちは「自分はこんなところがある」「自分にはよさがある」ということがはっきりしていない。そこで、子供たちが日々感じている自分自身の成長を書きため、それを絵日記や短作文などに表現していくようにしていきたい。その中で、教師や保護者が口頭や記述の中で、よさを認めることによって「自分の存在」への気付きが育まれる。具体的には下記のように進められると考える（図7）。



◇ 一単位時間の活動構成の具体

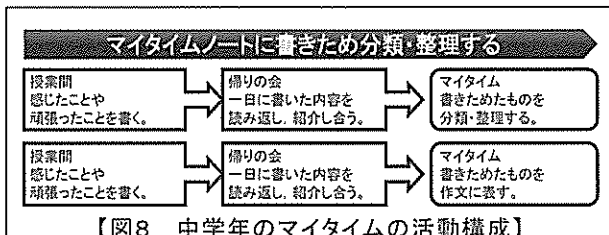
- ① 1週間のマイタイムノートを読んで振り返る。
- ② 自分のノートをペアの友達に見せながら、1週間の心に残ったことを伝える。
- ③ 全体で心に残ったことを伝え合う。
- ④ 自分や友達のお互いのよさを称賛し合い、次の週にがんばりたいことを伝え合う。

◇ マイタイムノートの使い方

- ① 子供がノートの左側に学習や生活の予定を書く。
- ② 子供がノートの右側に絵や言葉で、その日に心に残ったことをかく。(自己評価)
- ③ 保護者がノートを読み、子供のよさやがんばりを見つけてコメントを書く。(他者評価)
- ④ 教師がノートの子供の記述や保護者のコメントを読み、コメントを書く。(他者評価)

② 中学年期

中学年の段階の子供たちは、自分と他者を比べたり、関係付けたりすることができるようになることから、「自分らしさ」とは何か考えるようになって言われている。「自分にはこんなよさがあるが、こういうところは苦手だ」のように、場面限定的に自分のよさと課題を見つめることができる。そこで、できたことやできないことも含めて分類・整理したり、表現したりして、自分のよさや課題に目を向けさせ、自分らしさをとらえさせることを大切にする。そのために、友達のよさを紹介するとともに、悩みを一緒に解決する時間をもつことも大切になる(図8)。



◇ 一単位時間の活動構成の具体

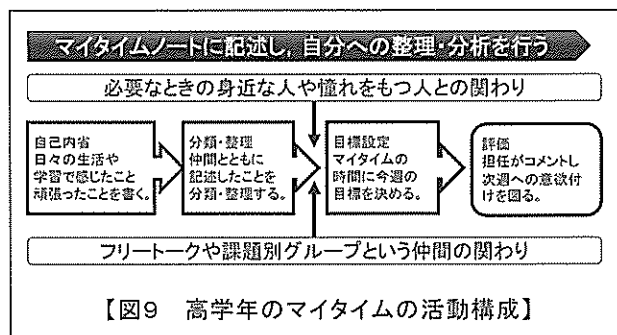
- ① 1週間の自分の取組や学級のめあてを確かめる。
- ② 自分の取組を振り返り、その中で見つけた自分の頑張り(努力点)や伸び(成長)を見つける。
- ③ グループで自分が感じている頑張り(努力点)や伸び(成長)を付箋紙などを使って伝え合う。
- ④ グループでの話し合いから、新たな目標をつくる。

◇ マイタイムノートの使い方

- ① 子供が一週間の目標と照らし合わせて、自己評価を繰り返す。(自己評価)
- ② 保護者が子供の努力点や成長と課題に対して助言や称賛をコメントに書く。(他者評価)
- ③ 教師が子供の記述や保護者のコメントを読み、子供の努力点や成長と課題に対して教師の視点から助言や称賛をコメントに書く。(他者評価)

③ 高学年期

この段階の子供たちは、自分の心の中にあるよさを見つけることに不安を抱いたり、自分の目を向けたくない不十分さや自分自身の弱さも感じたりするようになる。そこで、このような子供たちに、そのような感情に蓋をするのではなく、感情を表現させ、「それでも自分にはよさに変えられる力がある」「自分は存在してよい」という深い自己肯定感を身に付けさせたい。その際には、担任との信頼関係と担任と保護者とのつながりも大切になる。また、悩みを共有できる学級風土も必要である。そこから、担任は、慎重に子供たちの思いを汲み取り、一緒に悩んだり、不安を払拭したりする学習を積み上げていくことで、深い自己肯定感につなげる取組をすることが重要である(図9)。



◇ 一単位時間の活動構成の具体

- ① 先週の取組のまとめを書く。
- ② まとめ交流後、今週学級全体で重点的に取り組む内容を話し合う。
- ③ 今週の目標を決めるとともに、評価基準を決め、自分に合った毎日の記録欄をつくる。
- ④ 今週の目標を話し合う。
・全体や班で交流し、励まし合う。

◇ マイタイムノートの使い方

- ① 子供が一週間の目標と照らし合わせて、自己評価を繰り返す。(自己評価)
- ② 仲間や他者とお互いの目標と振り返りについて語り合う。(他者評価)
- ③ 教師が子供の努力点や成長とともに課題に対して助言や称賛と今後の目標設定についての期待をコメントに書く。(他者評価)

参考文献

- ハワード・ガードナー. 松村暢隆訳「M1:個性を生かす多重知能の理論」. 新潮社. 2010
- 永江誠司. 「教育と脳～多重知能を活かす教育心理学～」. 北大路書房. 2008
- 諸富祥彦. 「ほんものの『自己肯定感』を育てる道徳授業」. 明治図書. 2012
- 勝俣暎史. 「コンピタンス心理学—教育・福祉・ビジネスに活かす—」. 培風館. 2005

1 「マイタイム」の時間の考え方

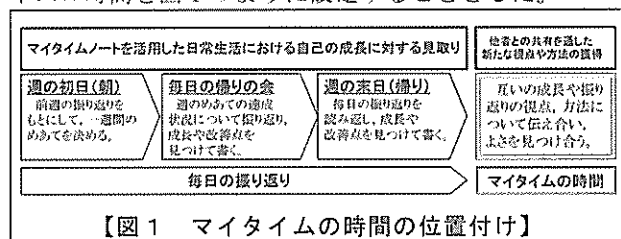
(1) 「マイタイム」の時間で培う向上性

本学級は、「え顔の花さく3年2組」の合い言葉をもとに、よりよい考えをつくりながら、互いに認め合う心を持ち、自分や友達の成長を確かめ合うことを目指している。そこで育成したいのは、自分の学び方や行い方を振り返る活動を通して、次のような向上性を発揮した子供たちである。

- 自分の成長に気付き、喜ぶことができる。
- 自他のよさを共有し、自分をさらに成長させるための考えをつくることができる。

(2) 「マイタイム」の時間の工夫

上記に述べたねらいを達成するために、学校生活や諸行事、他領域の学習との関連を図りながら、マイタイムの時間を図1のように設定することとした。



以上のように、日常生活における見取りを通して得た自己の成長に対する認識や、さらに成長させるための改善点について交流する場としてマイタイムの時間を位置付けた。振り返りを記述する際、3つの資質・能力にもとづいて振り返られるようにした。また、自己の成長を振り返る方法として、自分の記述を読み返したり、互いのよさや頑張りについて感じたことを伝え合う活動を設定し、子供たちが自己肯定感を高めることができるようにした。

2 子供たちの姿

(1) 「マイタイム」の時間での子供たちの様子

子供たちは、自分のマイタイムノートを読み返し、頑張ったことや自分が成長したと思うこと、課題を確かめた。そして、友達との交流を通して、互いの成長や努力を認め合ったりした。

(2) 1年間の実践を振り返って

A児は、自分の学び方について振り返る際に、右のように数値化をして、自分の頑張りの強さや課題が成長が一目見てわかるような記述をした(資料1)。そして、自分の成長について、以下

5月31日の振り返り
足をはかして、3%増えた。
こしはかして、2%増えた。
や指に力をいれる。
あしたは4%増えたい。

【資料1 数値化した振り返り】

のような記述をした(資料2)。A児は、「前よりはよくなっていた」「自然にできるようになった」と、自分の変化に気付き、「どこでもできるようになりたい」と、自分をよりよくする見通しをもっていた。これらは、向上性の中の視点である「成長」と「希望」をもとにして自己内省を行った姿の表れであるといえる。

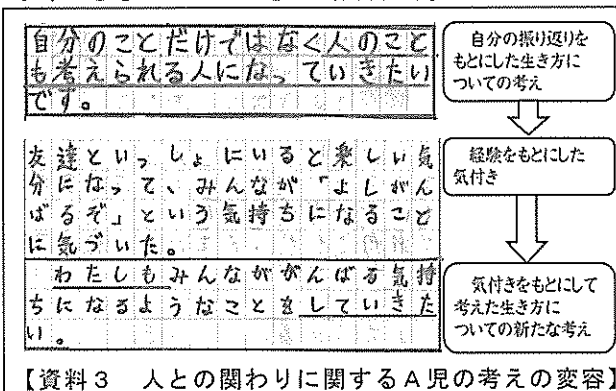
※ 「6/6」は、「6時間中6時間できた」の意

※ 「4/4」は、「4時間中4時間できた」の意

6/6のところもあれば4/4のところもあったけど、前よりはよくなっていたからうれしかった。自然にできるようになったから、マイタイムノートがなくなっても、自然にどこでもできるようになりたい。

【資料2 自分の成長と課題についてのA児の記述】

また、振り返りをもとにして、他者との関わりについて、経験をもとにして考えを更新している姿も見られた。A児は、自分の課題の振り返りから、実践を通して身近な人とともに活動することのよさに気付き、心を動かした。そして、人との関わりについての新たな考えをもつことができた(資料3)。



3 実践の効果(○)と課題(●)

- 3つの資質・能力にもとづいて振り返りができるように、視点を提示したことで、子供たちは自分の成長や課題について具体的に認識することができた。
- A児のようにこれからの自分について、行動や気持ちの面から明確な目標をもつことができる子供の姿が見られた。これは、深く自己内省を行い、自分のよさや課題に気付き、さらに自分を高めていこうという自己肯定感を養っている子供の姿である。
- マイタイムの時間を交流の時間中心に行ったが、互いの成長した点とそのために取り組んだことや意識したことなどを詳しく伝え合う活動の工夫も行い、内容面を充実させる必要がある。

1 「マイタイム」の時間の考え方

(1) 「マイタイム」の時間で培う向上性

本学級は、「未来へステップ6年2組」の学級目標をもとに、自分らしさを大切に、互いに尊重し合う学級づくりを目指している。そこで育成したいのは、自分の学び方や行い方を振り返る活動を通して、次のような向上性を発揮した子供たちである。

- 自分自身で気付くことができた自分のよさも課題も善悪という点から見つめるとともに、冷静にあるがままに認めることができる。 (自己肯定感)
- 自分は何かを成し遂げたり解決したりすることができると思える。 (自己効力感)
- 人や社会とのつながりの中で自分が必要とされていると思える。 (自己有用感)

(2) 「マイタイム」の時間の工夫

上記に述べたねらいを達成するために、学校や家庭地域社会での日常生活や他領域の学習との関連を図りながら、マイタイムの時間を設定することとした。そのために、①先週の取組のまとめと交流、②交流をもとにした目標設定、③自分の目標に照らした評価基準の決定、④目標への決意と交流を行い、自己更新につなげることができるようにした。

2 子供たちの姿

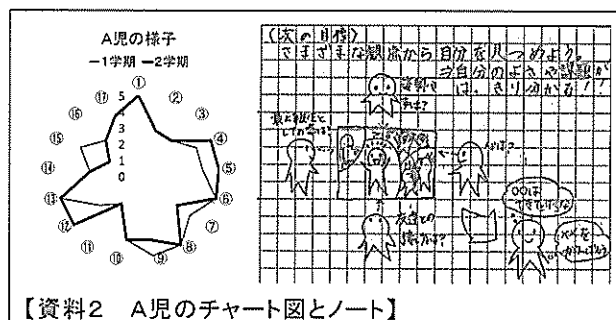
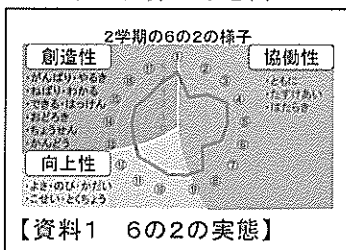
(1) 「マイタイム」の時間での子供たちの様子

マイタイムの時間においては、主に自分の一週間を振り返り、目標設定をすることができるようにした。

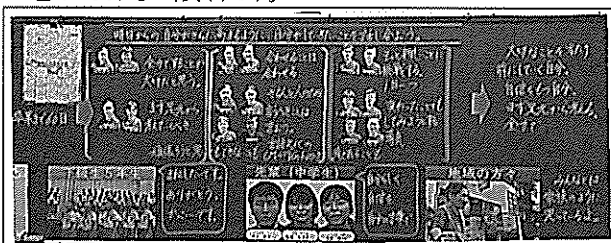
1学期には不十分であった仲間との交流についても、2学期以降は取り入れることでより深く自己を見つめようとする子供の姿も見られた。

(2) 1年間の実践を振り返って

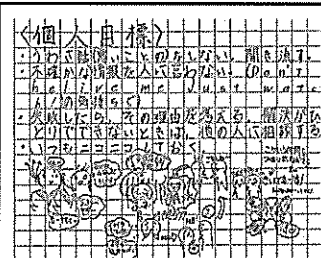
1年間の取組で、より一層、子供たちは自分の課題や学級全体に関わる問題について考えることができていた。その中で、自分なりの解決策を示し、どのように自分自身の行い方を変えていきたいのか具体的に行動目標を決め、実践することができるようになってきた。そこで、具体的にどのように自分たちを高めていきたいのか考えさせるために、「研究開発アンケート」を実施し、その結果をもとに新たな自分の課題について互いに交流し、考えさせるようにした(資料1)。



アンケート結果の変容については個別に示し、与えるようにした。A児はここでの課題から、仲間とともに自己評価をしていくことで今まで見えなかった自分のよさや課題に気付くことができるというよさを見出した。このことから、課題のつくり方を次のように図化している(資料2)。全体での話合いの様子は以下の通りである(資料3)。



その後、学期末でのマイタイムの時間の振り返りにおいては、A児は「協働性」に関わる課題として、特に自分が課題とした人間関係についての具体的な行動目標を立てた。こ



これは、マイタイムの時間を通して、各領域の学習に関わる課題だけでなく、子供たちが日々の生活の中での課題をより重視していることを示している証であり、この充実こそが各領域の学習が充実する原動力になることを実感しているととらえられる(資料4)。

3 実践の効果(○)と課題(●)

- 一人一人の子供がよさや課題を見い出し、自己更新につなげる学習過程を継続することができた。
- 個の学びを集団に生かしたり、集団の課題をマイタイムの時間につなげたりする工夫が必要。
- 教育研究発表会でのマイタイムノート(個の課題)の紹介の仕方についての検討が必要。

1 「マイタイム」の時間の考え方

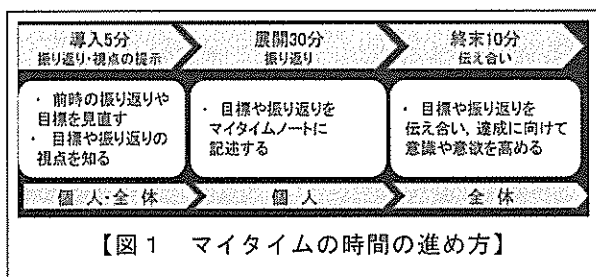
(1)「マイタイム」の時間で培う向上性

本学級は、「認め合い、共に伸びゆく」の学級目標をもとに、帰国子女学級という特性から、一人一人の個性を尊重し、よさや成長を認め合う学級づくりを目指している。そこで育成したいのは、自分の学び方や行い方を振り返る活動を通して、次のような向上性を発揮した子供たちである。

- 自分のよさや課題を振り返ることを通して、自分の変容に気づき、高めようとすることができる。
- 目標の達成に向けて、友達と協働したり、友達の個性やよさを認めたりすることができる。
- 自分の課題克服や目標達成に向けた実践を通して、自身の高まりを実感することができる。

(2) 「マイタイム」の時間の工夫

上記に述べたねらいを達成するために、学校や家庭での日常生活や他領域の学習との関連を図りながら、マイタイムの時間を次のように設定することとした。



以上のように、自分を振り返り、自己の変容を伝え合う活動の中で、子供たちが自尊感情を高めることができるようにした。この中で、理想とする自分像へと高めようとするのが重要であると考えた。

2 子供たちの姿

(1) 「マイタイム」の時間での子供たちの様子

マイタイムの時間においては、目標や理想とする自分像について、目標を設定し、振り返り、自己更新することができるようにした。A児は、中学進学を見据え、基礎学力を向上させることを目標とした(資料1)。

め	た	る	す	服	免	を	数	算	予	苦	は	私	に
と	ス	き	テ	の	数	算	ジ	一	一	朝	毎	し	色
え	が	ち	ま	で	ま	る	す	解	取	に	た	問	た
								組					

【資料1 A児のマイタイムノートにおける目標】

(2) 1年間の実践を振り返って

1 学期は学力向上、2 学期はどのような進路を選択するのか、希望する進路の実現に向けて、子供たちが自分自身と向き合いながら取り組むことができるようにした。その中で、A 児は基礎学力を向上させ、自分が決めた目標を達成するために、学校や家庭での学習に熱心に取り組み、地道に努力を積み重ねていった。また、基礎学力の向上だけでなく、学校生活を通して、人としてどうあるべきか、どのような人になりたいのかを考え、自己実現に向けて、目標とする自分像を更新していく姿が見られた（資料 2）。

上してい分
 をを会な自
 数強算はのたう目
 点勉年ででしよ
 の、茶とままじて
 トマ、こ今い同し
 スしどな、思とに
 テにれ事てと強事
 標け大いいう勉大
 て目、が聞そのも
 ましたけを適分と
 今とした話め目こ
 はこま数うつけの
 私、い点い見私遠
 げて「とを、友向

集會の談友よく聞いて、自分一人に考え、自分でやってみて
 といふ考えをもてゐるやうになつた。

【資料 2 A 児と保護者の記述】

A児は2学期当初、基礎学力の向上と希望する進路の実現を目標に掲げていた。学校生活において、周囲の友達や学校行事と関わることを通して、徐々に目標や理想とする自分像を明確にもつようになっていった。このことは、A児が自分の在り方や考え方をよりよく変容させている姿ととらえる。(資料3)。

人い め
みと ら
もく き
ごいた あ
れてし も
け、ま た
いかり 後心
な何主最 い
さに高 強
わ向がは る
か方識ら げ
はじ意か と
葉同聞れ り
言で仲こ や
なう すに

第 五 卷

【資料 3 附中遠行会の練習参加後の振り返り】

3 実践の効果(○)と課題(●)

- 自分自身を客観視することを苦手とする本学級の子供たちが、自分を振り返る活動を通して、課題や目標とする姿をとらえ、課題解決や目標達成のために努力したり、友達と協働したりすることができた。
- 子供たちに自分の課題や目標とする自分像を明確につかませるために、振り返りの視点を明示したり、保護者からの評価を活用したりする必要がある。

生活をつくり出す子供をはぐくむ教育課程の創造

～「わかること」と「できる」をつなぐ題材の開発と配列～

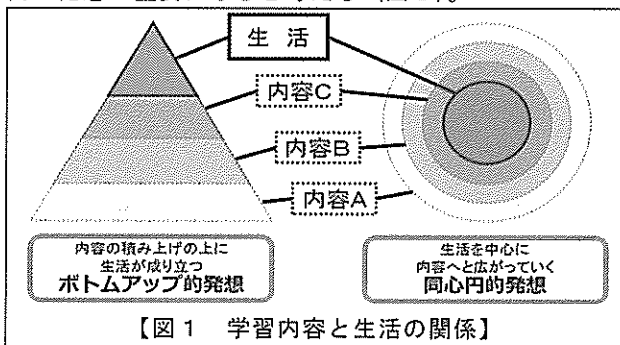
1 主題設定の理由

(1) これまでの研究から見える成果と課題

本校は、昨年度まで「共生社会に生きる力」を身に付けた子供の姿を目指して、3年間の研究に取り組んできた。そこでは、子供の学習に必要な環境を整備しつつ、合理的配慮の提供につなげる方法の在り方について、その一端を見い出すことができた。しかし、学習内容や方法に関する支援を追究するあまり、ときには生活と乖離してしまうような課題も浮き彫りとなってきた。学校での学びは、子供の生活に結び付けてこそ意味を成すものである。そこで、今一度子供の生活を見直し、学習内容と子供の生活の整合性を図ったり教材の価値を問うたりするような研究にしていかなければならないと考えた。このような研究は、自己完結的で生活への結び付きに疑問をもたれがちであった学校教育の役割を再度明確に示すものになると考える。

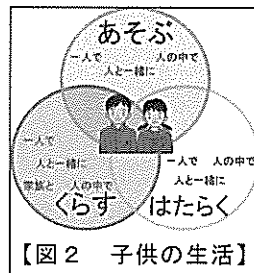
(2) 子供の願いを大切にした研究へ

知的障害のある子供の場合、授業で獲得させた内容が、実際の生活場面で応用が見られにくいといった指摘は繰り返し成されてきた。そのため、系統性を重視する教科等の学習では特に、授業が基礎的な内容に終始し、実際の生活場面で応用が効く段階にまで高めていくことができていない現状が少なからずあった。これは、学習内容から子供の実態を分析し、子供を学習内容に近づけようとするばかりでは、実際の子供の現状には十分に応えることが難しいということを物語っているのではないだろうか。そのこととは反対に、子供一人一人ができることや、もっているよさを生活に活かすところを出発点とし、そこに学習内容を設定することができれば、子供は生活することに喜びを感じ、そのために学習することの意義を実感することができるのではないかと考える。つまり、これまで繰り返してきたボトムアップの発想で内容を積み上げていくだけではなく、生活から学習を展開していくような同心円の発想が重要になると考える(図1)。



2 主題について

生活とは、子供が現在及び将来、身近な人や出来事に関わりをもったり必要な情報やものに働きかけたりすることであり、「あそぶ・くらす・はたらく」3つの場で営まれるものである。生活をつくり出すとは、これら3つの場で自分の力を発揮して身の回りに働きかけ自分なりの生活を見い出すことである。

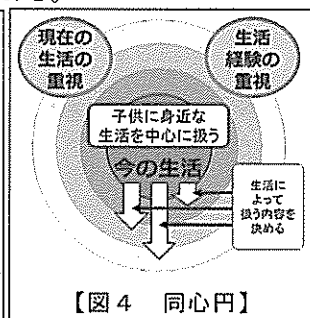
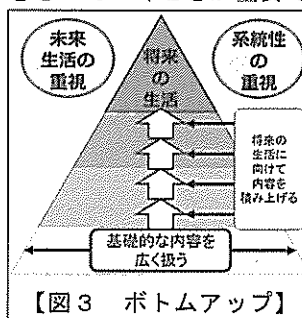


生活をつくり出すとは、これら3つの場で自分の力を発揮して身の回りに働きかけ自分なりの生活を見い出すことである。

○生活をつくり出す子供の将来像

- 楽しみを感じて趣味や余暇に没頭していること
- 安心できる毎日のスタイルを確立していること
- 自己の役割を自覚し責任を果たしていること

したがって、学校教育においては、獲得してきた学習内容をもとに成り立つ生活を実感させるような工夫が必要になる。そのためには、ボトムアップ的な授業づくり(図3)によって、将来の生活に向けて内容を高めさせていくことと、今の生活を重視するために同心円的な発想で授業づくり(図4)することとバランスをとっていくことが重要である。



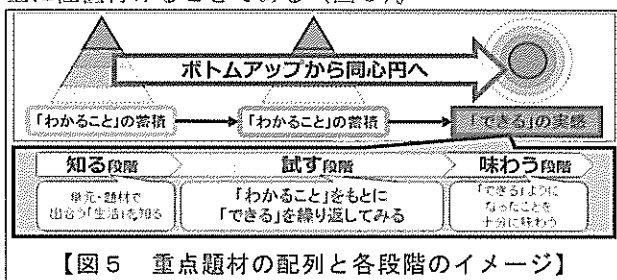
以上のようなことから、生活をつくり出す子供をはぐくむ教育課程とは、自分にできる生活の形を見出す子供を育てていくために、将来の生活を見据えて基礎的な内容を積み上げる学習と、今の生活のために子供に身近な生活を扱う学習とを意図的に関連付けながらバランスよく配置するものである。このことは、生活経験の不足や自尊感情の低さが指摘される知的障害のある子供たちが、生活の中で様々な体験を積み、自信を繰り返し味わうことができる点からも意義深いものである。なお、本研究では、次のような3つの視点から子供の力を高めていく。

- 課題となる活動を理解し、解決のために進んで粘り強く取り組む子供(主体性)
- 自分にできることをとらえ、それを活かして課題を解決していく子供(自己発揮性)
- 自分の力を十分に発揮して達成できたことから自信を深める子供(成就性)

3 副主題について

(1) 副主題の意味

「わかること」は物事を知覚している状態であって、言わば「できる」に転移する前の状態ととらえる。したがって「わかること」と「できる」をつなぐとは、既有の知識や技能、態度等を活用したり発揮したりして、生活上の行いに結び付けることである。これまで教科等の学習では、子供に新しい知識や技能をスモールステップで獲得させていくことに重点を置き、内容は教師の実態把握や保護者の願いを背景に設定することが多かった。このような取組は、学習内容の高まりを促し、学習活動の達成感を味わわせることで成果を上げてきた。しかし、教科等ごとに獲得した学習内容がどう生活に反映され、どの生活行為に結びついたのかについて自覚させるまでには至らなかった。したがって「わかること」と「できる」をつなぐ題材の開発と配列とは、子供が今の力を活かして具体的に生活上の行いに結び付けることができる題材を作成し、それを学年間や各教科等間のつながりをもとに年間指導計画上に位置付けることである（図5）。

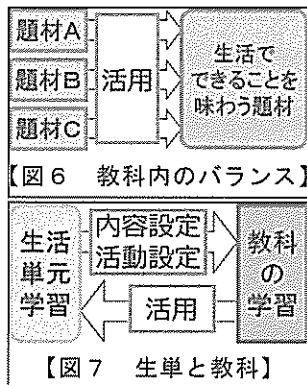


【図5 重点題材の配列と各段階のイメージ】

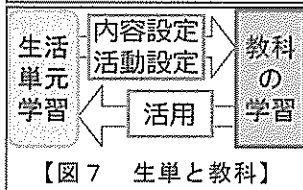
本研究では、単元・題材を「知る段階」「試す段階」「味わう段階」の3つに区切り、特に「試す段階」において「できる」を繰り返して味わわせる活動の在り方について明らかにしていきたい（図5）。このことは、子供が学習内容の獲得を生活に活かせることの楽しさを味わうとともに自信をもった子供を育てていく上で意義深いものであると考える。

(2) 「つなぐ」ための具体的なイメージ

「わかること」と「できる」をつなぐために大切にしたい側面は2つある。1つは、同一教科内の題材間に関連をもたせることである。図6で示すように、いくつかの題材で学んだことを発揮させる場を設けることが必要である。2つは、教科と生活単元学習、教科と教科のそれぞれに関係をもたせることである。生活単元学習の内容から教科学習の内容や活動の設定につなげたり、各教科での学びや経験した活動を生活単元学習に関連付けたりするようにする（図7）。



【図6 教科内のバランス】



【図7 生単と教科】

4 具体的構想

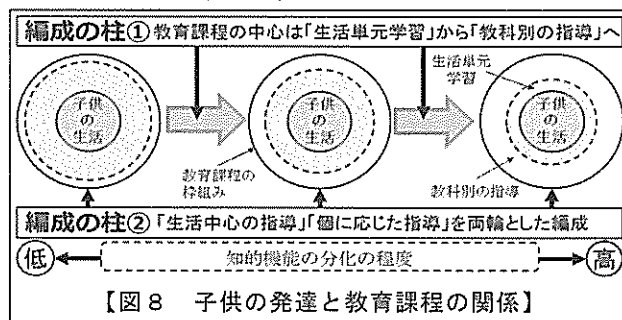
(1) 研究の方向性

本研究は、次のような3年次計画で進めていく。

- 1年次 教育課程に位置付ける重点題材の開発
- 2年次 重点題材を位置付けた年間指導計画の完成
- 3年次 既存の教育課程を見直し再編成

(2) 教育課程編成の考え方

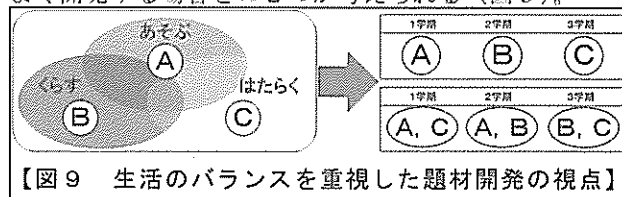
「生活中心」「個に応じる」の2つの側面が前提となるが、これは生活単元学習や教科別の指導によって使い分ける側面ではなく、どちらの学習も、生活中心で個に応じていなければならない。一方で、教科等を合わせて指導を行うことと、教科別に指導することとは、子供の発達の段階に応じて使い分けていく必要があるものでもある。そこで、教育課程編成の柱を以下のように考える（図8）。



【図8 子供の発達と教育課程の関係】

(3) 題材開発の留意点

現行の年間指導計画との整合性を計りながら開発していく。その際、子供の生活を網羅するために、「あそぶ」「くらす」「はたらく」の3つをもとにした題材をバランスよく配列することを見通して行う。就学前から一貫したキャリア教育の必要性が求められる今、子供の生活年齢によってバランスが異なるものではなく、低学年から高学年までこのバランスは一貫させるべきであると考えためである。これは、それぞれの生活場面に特化した題材をバランスよく開発・配列する場合と、それらの重なりに位置する題材をバランスよく開発する場合との2つが考えられる（図9）。



【図9 生活のバランスを重視した題材開発の視点】

(4) 重点題材開発における内容設定の留意点

各教科等の立場から、子供の生活を分析していくことが不可欠である。特に、取り扱う材や内容について次の2つの不変性は重要になると考える。

- 時代の変化に対する不変性
- 多様な生活場面に対する不変性

例えば、買い物の学習では金銭を実際にやりとりする学習から電子マネーを使用するような学習へと発展させていくことも考えなければならない。

特別支援教育部国語科

個の体験を活かして言葉を豊かにする題材構成

1 特別支援教育国語科における「生活をつくり出す子供」

特別支援教育国語科において生活をつくり出す子供とは、次の3つの子供の姿である。

- 生活の中にある言葉を進んでつかおうとすることができる。(主体性)
- 既存の知識を活かし、具体的な事柄や経験と結び付けて言葉をつかうことができる。(自己発揮性)
- 自分で言葉が使えたり、相手に伝えることができることで、自信や達成感を味わうことができる。(成就性)

生活とは、「あそぶ」「くらす」「はたらく」の3つの場において、身近な「ひと」「もの」「こと」に関わり、生活の中にある言葉を聞いたり、相手に話をしたりするやりとりのことである。子供たちが生活をしていく上で言葉を扱うことは必要不可欠なことである。しかし、言葉とは抽象的なものであるため、知的障害のある子供たちが思いなどを言葉で表現することや相手の話の意味を理解することは難しい状況である。よって、生活の中の様々な経験から抽象的な言語と具体的な体験を結び付けて言葉の獲得と活用、定着を図る必要がある。生活をつくり出す子供とは、現在の言葉の知識を活かして、生活の中で言葉の意味がわかったり、他者に伝えたいことを話したりして相手とコミュニケーションを図ることができる子供のことである。このような子供が育っていく過程には、いくつかの段階がある。具体的には、①言葉を増やしたり広げたりすること、②必要な事柄を聞いたり、自分が話したいことを伝えたりすること、③伝え合うことができることなどである。国語科において子供が聞いたり話したりする言葉は生活に根ざしている必要がある。そのことによって、日常生活でつかったり活かしたりすることができる子供が育っていくものであると考える。表1は、これまでの特別支援教育部国語科の研究を参考に、子供の力が高まる過程を作成した。

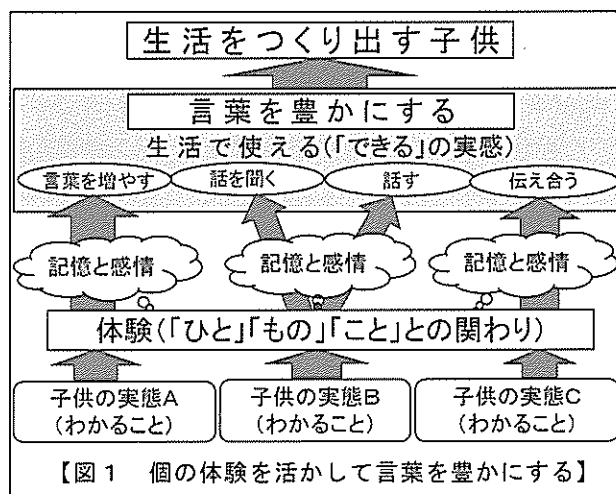
表1【子供の力の高まり】

子供の力の高まり			
学 ぶ 力	身近な言葉の意味を理解することができる。	身近な言葉を理解し、使うことができる。	状況に応じて、言葉を選択することができる。
	言葉の意味をとらえる力	日常生活や身近な物事の名称、動きを表す言葉がわかる。	学校生活に関する言葉や様子を表す言葉がわかる。
	聞く力	相手の話に興味・関心をもち、自分が知っていることに反応する。	相手の話の大体がわかり、相手の話の内容をとらえて最後まで聞く。
	話す力	自分の思いや考えを、身ぶり手ぶりの非言語で相手に伝えようとする。	自分の思いを既知の簡単な言葉で相手に伝える。
達成感	自信や達成感	相手の話を聞いて、わかったことの達成感を味わう。	自分の話したいことを言葉で伝えることができた達成感を味わう。
			伝え合うことの楽しさや喜びを味わい、自ら周りの人に働きかける。

2 主題の説明

個の体験とは、子供一人一人が生活する上で、実際に自分自身で行動したり、他者とやりとりしたりしたことである。個の体験は、子供が諸感覚を通して「ひと」「もの」「こと」と関わっていることが大切である。そのことを通して、一人一人が確かに楽しさを感じたり、思いをもったりすることができるものであると考える。子供によって、体験したときにもつ記憶や抱く感情は一人一人異なるものである。また、一人一人が現在まで獲得してきている言葉の知識も様々である。よって、子供の実態に合わせて体験を仕組むことが重要である。その体験は、子供の生活場面や興味・関心から設定する必要がある。個の体験を活かしてとは、子供が言葉について現在までに獲得してきている「わかること」を生活場面でもつかうことができるように体験と結び付けて発揮させることである。発揮させるには、言葉をつかって、活動を楽しみたいという目的意識や「〇〇に伝えたい」という相手意識が重要である。言葉を豊かにするとは、子供の発達段階に応じて言葉を増やしたり広げたりすること、相手の言葉を聞いてわかったり自分の気持ちや物事を話したりすること、相手と伝え合うことなどができ、言葉を使って「できる」ことが増えた実感をもつことなどである。言葉を豊かにすることで、子供は「ひと」「もの」「こと」に、より積極的に関わるようになる（図1）。このことは、将来においても、充実したよりよい生活をつくり出すことにつながるものである。

個の体験を活かして言葉を豊かにする題材構成とは、目的をもって「ひと」「もの」「こと」と関わり、生活でも使うことが「できる」ようになった達成感を味わうために、子供にとっての体験について、人と繰り返しやりとりさせていくための仕組みのことである。

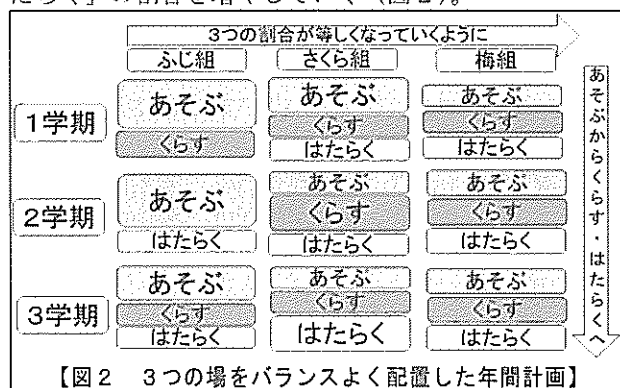


3 具体的方途

(1) 生活の場をバランスよく配列した年間計画
国語科における3つの場面は以下のように考える。

- 「あそぶ」とは、言葉が増えることや他者とやりとりをすることを楽しみを感じて、言葉に自ら関わる場面
- 「くらす」とは、生活に必要な言葉がわかったり、他者とのやりとりの中でつかえたりする場面
- 「はたらく」とは、目的をもって、そのための他者とのやりとりを想定し、言葉の使い方を工夫したり、繰り返し言葉を使ったりする場面

3つの場面をもとに「聞くこと・話すこと」を中心とした題材を6年間を通して行う。生活年齢に応じて3つの割合が等しくなっていくように「くらす」「はたらく」の割合を増やしていく(図2)。



(2) 個の体験を活かすための教材化

① 教材化の条件

「聞くこと・話すこと」を取り入れた題材を行う上で、次のような条件があるものを教材化する。

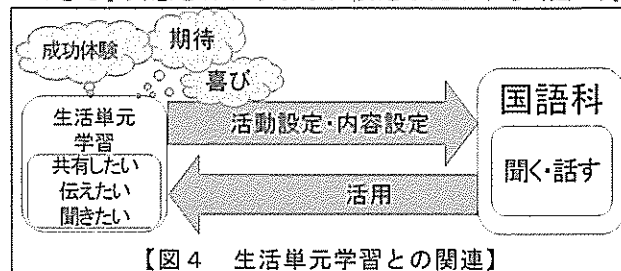
- 子供一人一人が体験を通して記憶や感情をもつことができること (個別性)
- 伝えたい、遊びたい、知りたいなどの内発的動機が子供に生まれること (内発性)
- 身に付けた言葉や聞いたり話したりできたことが生活と結び付いていること (有用性)

個の体験を活かすためには、体験を通して、「Aのことが楽しかった。」などという気持ちを子供一人一人がもつことが大切である。体験を通じた記憶や感情をもつことで、子供は自然と学習への動機を高めることができる。そして、言葉が増えたことや、話を聞いたり話したりしたことが生活場面と結び付くことで自信や達成感を味わうことができる(図3)。



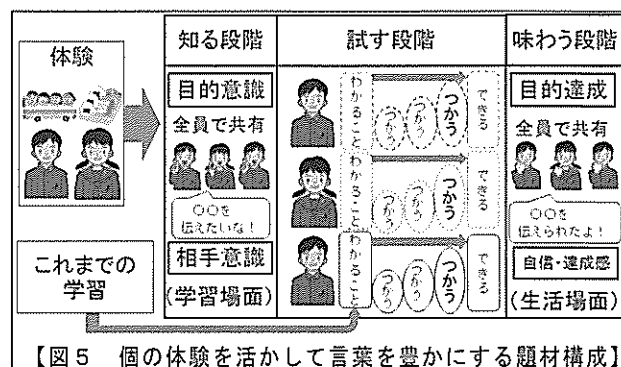
① 生活単元学習との関連

子供たちの生活の中にある「あそぶ」「くらす」「はたらく」の場面を生活単元学習と関連させて題材を設定する。生活単元学習の体験で感じた期待や喜びなどを活かして国語科で活動設定・内容設定をしたり、国語科で学んだ「わかること」を生活単元学習で活用し、「できる」実感を味わうように設定したりする(図4)。



(3) 言葉を豊かにするための題材構成

題材前に、子供に話す内容についての体験をさせる必要がある。そして、題材の中で子供の言葉を豊かにするために「知る」「試す」「味わう」の段階を設定する。「知る」段階では、言葉を増やすことや話を聞いたり話したりするための目的意識や相手意識をもたせる。そのために、写真等で振り返り、子供の記憶や感情を言葉で想起させ、共通の目的をもたせる。次に、「試す」段階では、体験をもとにこれまで学習してきたこと(わかること)とこれから学習することが結び付くようにする。子供が体験によって、とらえた記憶や感情は一人一人異なるものであることから、活動や内容を個別の実態に応じたものとなるように設定する。そのために、言葉にイラストを加えたカードや、話を詳しくするための言葉カードを用意する。言葉を豊かにしていくためには、子供が自分にできそうなことに繰り返し取り組み、スモールステップで内容を高めていくように構成することが重要である。「味わう」段階では、題材を通してできるようになったことの達成感を味わわせたり、生活に活かすことができた自信をもたせたりする。そのために、学習の成果がそのまま生活場面に活かされるような場を設定する。そのような題材を構成していくことで、子供は言葉を増やしたり言葉のやりとりをしたりすることが日常生活でもできるようになったことを実感することができる(図5)。

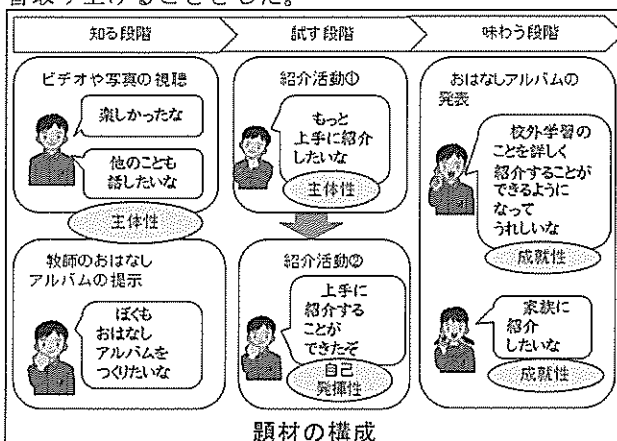


1 題材の目標

- 自分の体験したことを相手に話そうと意欲的に学習に取り組むことができる。(主体性)
- 校外学習で体験したことや自分の気持ちなどの言葉をつかって「おはなしアルバム」をつくり、友達に紹介することができる。(自己発揮性)
- 「おはなしアルバム」の紹介を通して、自分の体験を紹介することができたことに達成感を味わうことができる。(成就性)

2 題材の考え方

本題材では、校外学習で体験したことを「おはなしアルバム」にまとめる活動を通して、自分が体験したことや気持ちを相手に話すことができるようになることをねらいとしている。具体的には、①「おはなしアルバム」をつくって、体験や気持ちを友達に紹介する活動に進んで取り組むこと、②校外学習の様子を想起する動画、写真などから思い出したり再度感じたりしたことをもとに「おはなしアルバム」をつくって友達に紹介する活動を繰り返すことで、体験したことや自分の気持ちなどを話す方法を理解すること、③体験したことや気持ちを伝えることができたことに満足感を味わい、実生活の中でも人にたくさんのことを話したいという意欲をもつことなどである。特に、②については、個々の思いを大切にしつつ、聞くこと話すことに関する個の実態に応じた内容設定や支援具などの提供をすることで、一人一人の力の高まりと満足感につなげていきたい。聞くこと・話すことに関する実態差は大きい学級ではあるものの、楽しかったことや自分しか知らないことなどがあると、5名とも意欲的に話そうとする子供たちである。そこで、本題材では、子供が自ら話したいという思いから出発できるように、5名にとって楽しい思い出として共通している校外学習を取り上げることとした。

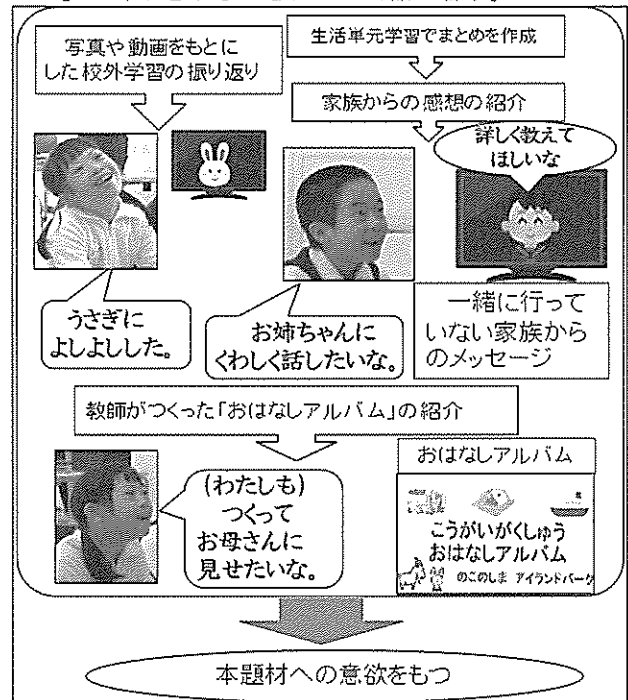


3 学習の流れと考察

「知る」段階のねらい: 1/6時

校外学習で楽しかったことや印象に残っていることをもとに「おはなしアルバム」をつくり、紹介したいという意欲をもつことができる。

校外学習で体験したことを想起し、「おはなしアルバム」づくりをすることについて話し合う。



【資料1】学習への意欲に繋がる過程

「知る」段階では、「おはなしアルバム」をつくることへの意欲をもたせるために、教師が作成したおはなしアルバムのモデルを提示した。まず、校外学習のまとめをもとに、家族へ出来事を伝える場を設定した。すると「うさぎによしよした。」と発言したa児のように、様子や気持ちについて十分に説明ができていない様子が見られた。そこで、「校外学習のことについてもっと詳しく教えてほしい」と語りかける家族からの動画を視聴した。子供たちは「お姉ちゃんに詳しく話したい。(b児)」「(おはなしアルバムを) つくってお母さんに見せたい。(a児)」と発言した(資料1)。

考察1

校外学習について振り返らせたり、「おはなしアルバム」づくりを提案したりすることは有効であった。その根拠は、「他のことも話したい。」「もっと詳しく話したい。」と意欲的な発言をしたからである。

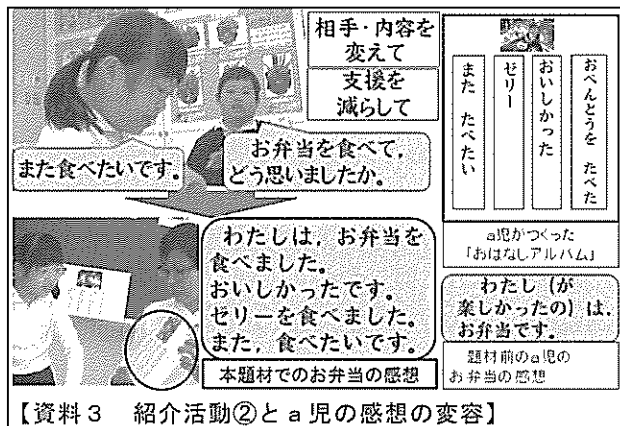
「試す」段階のねらい：2～5/6時

校外学習の楽しかった体験や気持ちを入れて「おはなしアルバム」をつくり、紹介することができる。

(1) ペアの友達と紹介活動①をする。



(2) 相手や紹介する内容を変えて紹介活動②をする。



「試す」段階では、校外学習で体験したことについての紹介活動①を行った。まず、校外学習で体験した行事から自分が紹介したい写真（絵付け体験）を選んだ。その後、友達からの「お皿は誰にあげますか。」という質問に対して、色分けをした枠の中から「おかあさん」の言葉を選んで話した。そのようなやりとりを繰り返して、絵付けの「おはなしアルバム」をつくった（資料2）。紹介活動②では、相手と紹介する内容を変えて行った。そこでは、色の支援が減った中から言葉を選んでアルバムづくりを行った。「お弁当を食べて、どう思いましたか。」の質問にa児は「また食べたい」の言葉を選んで話すことができた（資料3）。

考察2

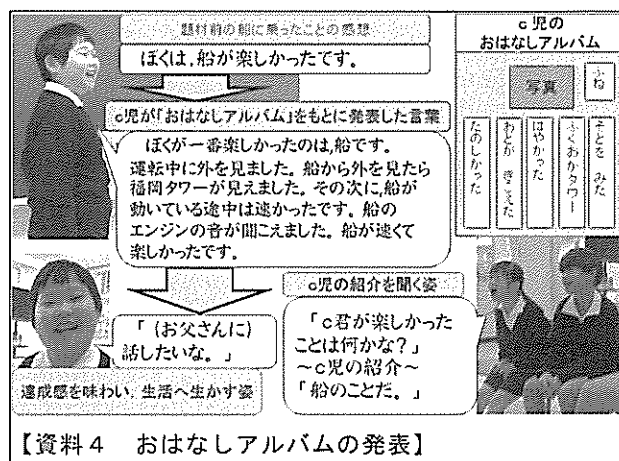
紹介する際、言葉で選択肢を与えたことは、有効であった。その根拠は、質問にどう答えてよいかわからないときに、カードで選択することで会話が繰り返されていく様子が見られたからである。さらに、色分けの支援が減ることで、自分で言葉を考えて選ぶ姿が見られるようになった。その結果、題材前よりも詳しい文にして話すことができるようになった。

「味わう」段階のねらい：6/6時

「おはなしアルバム」を自分の心に残った順に並び替えて、友達に発表することで、達成感や成就感を味わうことができる。

「味わう」段階では、校外学習で体験したことを自分が伝えたい順番に並び替えて学級の友達に発表する。

「味わう」段階の発表時にc児は、資料4のように紹介した。題材前の感想よりも、説明の言葉が増え、話す文の数も増えた。また、言葉を付け足す方法をつかんだc児は、アルバムにつくった文だけを話すのではなく、その場で新たに言葉を付け加えながら紹介した。友達から称賛されたc児は「（一緒に行っていない）家族に早く話したい。」と発言した（資料4）。



考察3

伝えたい順に並び替えて発表を行ったことは、有効であった。その根拠は、友達のつくった「おはなしアルバム」に興味深そうに聞いたり、意欲的に発表したりする姿が見られたからである。また、「（一緒に行っていない）家族に紹介したいな。」という発言があり、これは話すことへの満足感を味わうことができたからであると考えられる。これらのことから、確かな目的意識をもって友達と共通の体験を発表し合うことの有効性がうかがえる。

全体考察

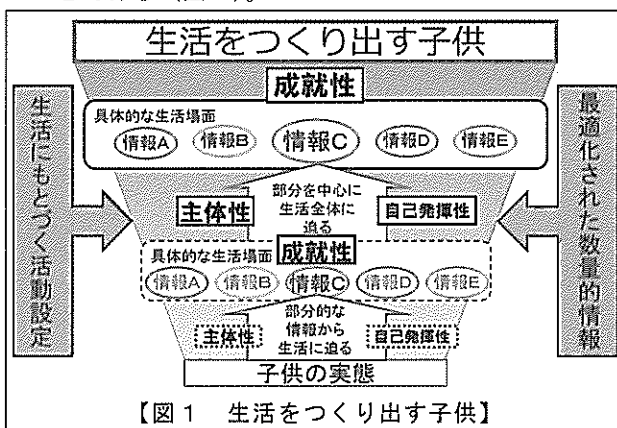
生活単元学習との関連を図り、楽しかった校外学習のことを友達に紹介するときに、「おはなしアルバム」をつくることは有効であったと判断できる。これは考察2、3から、同じ校外学習へ行った友達に、「おはなしアルバム」を意欲的に紹介する姿が見られたからである。また、考察3からは、友達の発表を聞くときにも、友達の楽しかったことを意欲的に聞く姿が見られた。しかし、子供の様子を見ると、質問に応じて紹介することはできていたが、相手意識が不十分であった。このことから、今後、子供に紹介したい体験を選択させて、紹介をさせる必要がある。

特別支援教育部算数科

最適化された数量的情報の配列による題材構成

1 特別支援教育部算数科における「生活をつくり出す子供」

特別支援教育部算数科における生活とは、子供が家庭や地域において、数量等に関わる様々な情報に囲まれながら、それらをもとにする日常的で具体的な行いのことである。身の回りの数量に関わる情報の多くは、抽象的で具体と混在している。知的障害のある子供は、抽象的な情報、すなわち身の回りにある数量等に関わる情報の多くを理解することが難しいため、自分にとって意味ある情報として受け入れ、具体的な行いに活かしにくい現状がある。一方で、抽象的な表現を用いなくても（例えば「3」という数字）、「みつつ」という言語的な表現を用いることで、他者と具体物3個を介したやりとりを成立させている様子も見受けられる。人が起こす行動は、それに先行して具体的な脳内イメージが働く。抽象的な情報からイメージがもてなくても、身近な人の具体的な行動から模倣して生活力を身に付けてきているのである。このような姿からは、多くの難しさの中にも、自分にできる行いを確実にもっている子供たちであるとも言える。生活をつくり出す子供をばぐくむ算数科学習では、このような子供のできることを引き出す授業づくりが重要であると考え。したがって、算数科における生活をつくり出す子供とは、自分が認識したり操作したりすることができる数量的情報を処理することで、自分にも「できる」生活があることを実感し、さらに充実させていこうと願う子供のことである（図1）。



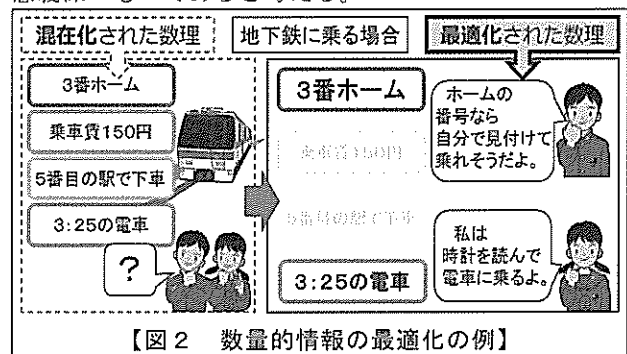
【図1 生活をつくり出す子供】

【生活をつくり出す子供の姿】

- 自分の生活の中にある数量に関わる情報を進んで粘り強く処理しようとする子供（主体性）
- 自分が獲得している知識や技能を十分に活かして生活上の課題を解決する子供（自己発揮性）
- 課題を解決できたことに満足感を味わい、自分のよさをさらに発揮したいと願う子供（成就性）

2 主題の説明

数量的情報とは、子供たちの日常生活や地域など、身の回りにある数や量、図形などに関わる視覚的・聴覚的な事柄のことである。子供たちは毎日、多くの数量的情報に触れて生活しているが、それらを自分の興味・関心や必要感にもとづいて、自分の行いに結びつけることは難しい現状にある。その原因として考え得るひとつに、情報の複雑化が挙げられる。例えば、数字を3まで理解していても、3のみが単体として情報化されている場面は少ない。例えば、りんごを3つ買おうとする場合、スーパーでは1個が「120円」というように新たな数的情報の理解が求められる。また、その横には150円のりんごや3個で一袋のりんごも並んでいる。このように、もっている力を活かそうにも、身の回りの情報が複雑であるが故に、それを発揮できないことも少なくない。子供のよさを活かすためには、その子に合った情報を提供することが必要であると考え。したがって、最適化された数量的情報とは、実際の生活や地域社会の中では複雑に絡み合っているものを個々の実態に合わせるために、構造化したり分化したりして提示する事柄のことである。最適化された数量的情報の配列による題材構成とは、身の回りにある数量等に関わる視覚的・聴覚的な事柄を子供一人一人の実態に合わせた学習内容として設定したり、それらを伏線的に位置付けて活動設定したりすることである。例えば、地下鉄に乗ろうとする場合「ホーム番号の認識」や「乗車券の購入」など複数の数量的情報を処理することが必要になる。その中で、どれか1つに内容を絞るのではなく、一人一人の子供の実態に応じる内容設定の視点から最適化を図り、個別に内容設定して題材に位置付けていくようにする（図2）。このことは、生活の中にある数量的な情報に子供自らが関心をもつとともに、自分ができることを活かして生活しようとする前向きな姿勢を育てていく上で大変意義深いものであると考える。



【図2 数量的情報の最適化の例】

3 具体的方途

(1) 教材化の方法と条件

生活をつくり出す子供をはぐくむために適した教材は、2つの視点をふまえることが重要である。

- ①学級集団に適した生活上の場面から
- ②生活単元学習や他教科等で扱う材と関連させて

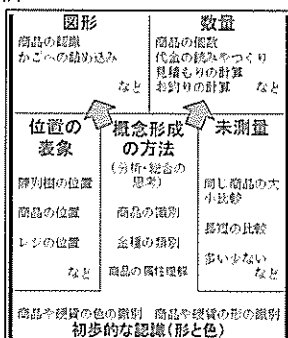
①については、実態や生活スタイルの異なる全ての子供にとって、「生活」である材を扱うためであり、子供の生活を調査したり保護者との情報交換などが前提となる。②については、生活単元学習等で扱う材から算数科の内容を摘出して扱うものである。そして、以上のような視点をふまえつつ、以下の2つの条件を具備させて教材化していくこととする。

- 子供の興味・関心につながる活動設定が可能
- 子供が獲得している知識・技能を活かしたり高めたりしながら解決できる活動設定が可能

(2) 内容設定の手続き

ア 数量的情報の分析

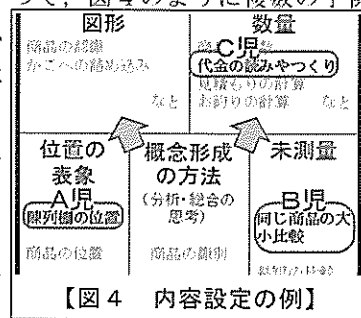
教材として扱う生活場面には、多様な数量的情報が含まれている。まずはそれらの情報を分析する。遠山氏は、系統立った算数科の内容を受ける小学校入学前に、幼児期にその基礎となる内容として3つの分野（未測量・位置の表象・概念形成の方法）があると述べている（図3）。図の上部に位置する「数量」「図形」は本来算数科教育で設定している算数科の内容である。本研究ではこの考えに則り内容を分析することとする。



【図3 3つの分野から見た買い物】

イ 学習内容の設定

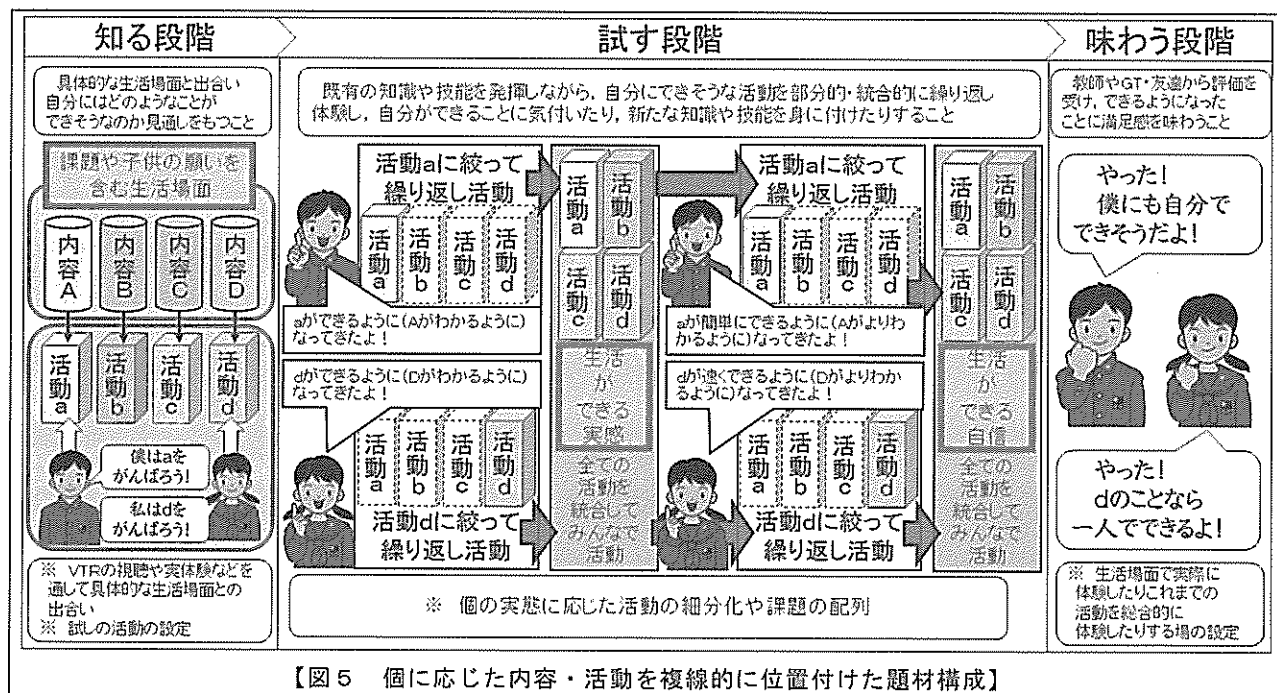
分析した情報から子供の実態を見て適切な内容設定へとつなげる。したがって、図4のように複数の子供に適した内容が、必ずしも一致するとは限らない。これは、それぞれが就学前に積んできた体験や日常生活のスタイル、またそこで無意識に学んで積み上げてきたものが個人によって異なるためである。



【図4 内容設定の例】

(3) 題材構成

前項の手続きに沿って個別に設定した学習内容を組織して題材を構成する。このような手続きを踏むと、1つの題材の中には個別に異なる、もしくは、いくつかに絞られた内容が同時に取られることになる。そのため、題材の中には種類の異なる活動がいくつか存在することになり、それらが同時進行で進められていくよう組織する。具体的には、内容・活動共に異なるものを複線的に題材の中に配列するため、図5の試段階のように、それらが部分と全体の関係で題材が構成されなければならない。例えば、部分としてaやdの活動に取り組んだ子供たちはそれぞれ内容Aや内容Dについて高まっていくことが予想される。しかし、そのままでは獲得した内容が断片的なままで生活場面におけるものとして具体的にイメージがもてず活かしきることができない。そこで、それぞれの子供に取り組ませた活動を図5のように統合して全体的に体験させることで、自分が学習したことのできるようになった生活を味わわせるようにする。



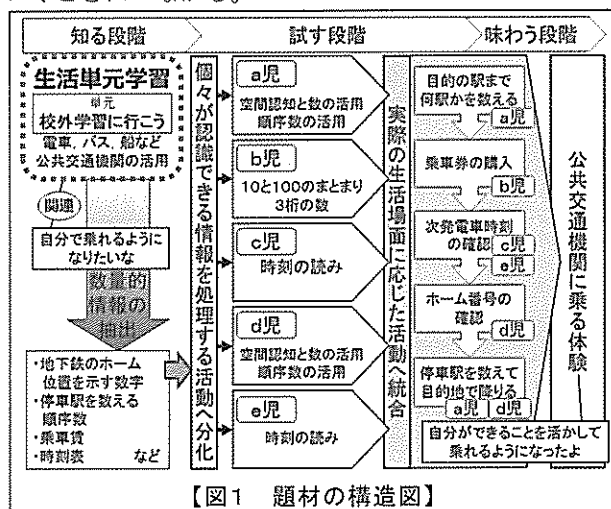
【図5 個に応じた内容・活動を複線的に位置付けた題材構成】

1 題材の目標

- 数や時刻を読んだり代金を支払ったりする活動に最後まで取り組むことができる。 (主体性)
- 数量や図形等に関わる知識や技能を活かして地下鉄に乗ることができる。 (自己発揮性)
- (Aグループ) 数を頼りに正しいホームや電車、降車駅を選んで電車を利用することができる。
- (Bグループ) 行きたい駅に応じて必要な乗車賃を支払って電車に乗ることができる。
- (Cグループ) 時刻を読んだり、時間を考えて行動したりして電車に乗ることができる。
- 自分が読んだり数えたりすることができる情報を処理することで、地下鉄に乗ることができたことに満足感を味わうことができる。 (成就性)

2 題材の考え方

本題材においては、地下鉄に乗る際に必要となる数理的な情報の処理ができるようになることをねらいとしている。具体的には、①地下鉄に乗るために、解決しなければならない数量に関わる情報の処理に進んで取り組むこと、②数量等に関わる自分の知識や技能を発揮して地下鉄に乗る方法を理解したり、さらに数理を高めたりすること、③地下鉄に乗れるようになったことに満足感を味わい、自分ができていることに自信をもつことなどである。特に、②については、ホーム番号の読み、時刻・時間の読み、乗車代金の読みや支払いなど、地下鉄の乗車に必要な複数の数理的な情報の中から、個の実態に応じて適切な課題設定を行うことが重要である。このように課題を個別化することで、数理的な課題を解決した喜びが地下鉄乗車の喜びと直結しやすくなり、子供が自分なりの生活を見い出していくことにつながる。



【図1 題材の構造図】

3 学習の流れと考察

「知る」段階のねらい: 1/12時

自分たちで地下鉄に乗れるようになりたいという意欲を高め活動への見通しをもつことができる。

地下鉄に乗車するビデオの視聴から地下鉄の乗り方について学習することを知り、試しの活動を通してどのような学習が必要であるかを話し合う。



「知る」段階では、校外学習で公共交通機関を利用することを確認し、地下鉄に乗車している様子の動画を視聴した。そこから、地下鉄に乗るために必要な算数の内容を抽出して子供に提示し、学習内容を決定した。その際c児は「お金で買うことはできるから、時間の勉強がしたいです。」と発言した(資料1)。

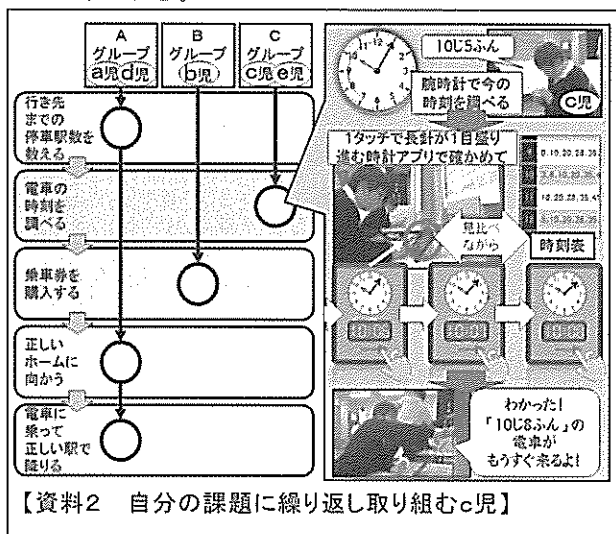
考察1

動画の視聴から必要な学習内容に迫り、内容を選定していったことは有効であった。その根拠は、地下鉄の乗車に対して興味を強めたa児自ら学習したい内容を選定する姿が見られたからである。

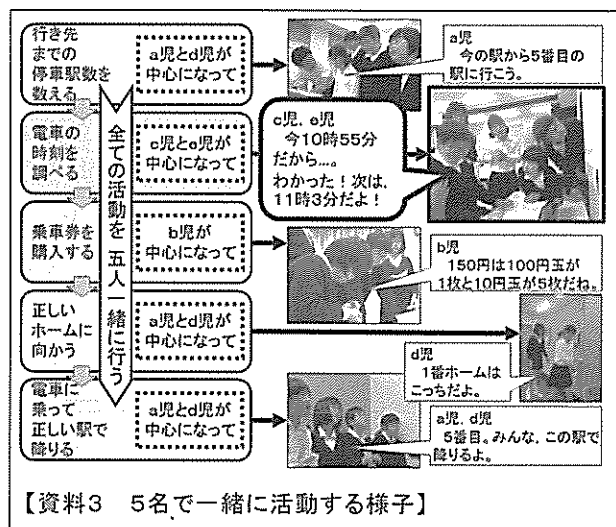
「試す」段階のねらい: 2～10/12時

地下鉄に乗るために必要な数量的情報を処理することができる。

(1) 時刻を読んだり必要な電車賃を考えて支払ったりしながら正しい電車や降車駅を選ぶ活動に個別に取り組む。



(2) 時刻を読んだり必要な電車賃を考えて支払ったりしながら、正しい電車や降車駅を選ぶ活動に5名で一緒に取り組む。



「試す」段階では、個別の学習内容をAグループが【正しいホームに向かうために数字を正しく読むこと、正しい駅で降りるために駅の数正しく数えること】、Bグループが【100円玉と10円玉を使い、位に気を付けて150円、170円をつくること】、Cグループが【次発の電車時刻を調べるために、アナログ時計から〇時〇分を読み取ること】をそれぞれ設定した。これらの内容について、前段では個別の活動として部分的に繰り返して取り組み、後段では全ての活動を統合し、全員で一緒に行うようにした。前段のc児は、今の時刻が3時台で次発の電車が4時台のように〇時が同じでない場合に時刻の読みを間違う様子が見られた。しかし前段最後の試行と、後段の試行においては、タブレットを繰り返し操作することで、正しい電車の時刻を見つけてことができるようになり、「これで電車に乗れそう」と喜ぶ姿も見られた。(資料2, 3)

考察2

学習内容を個の実態に応じて最適化し、その内容に対して個別→全体の流れで取り組ませたことは内容を獲得させ、自分でできることを自覚させる上で有効であった。その根拠は「電車に乗るため」という生活上の目標を常に意識しながら個々の課題に取り組み、内容の定着も見られたからである。

「味わう」段階のねらい:11～12/12時

地下鉄に乗る活動を通して、できるようになったことに満足感を味わって自信をもつことができる。

学校から最寄りの駅で地下鉄に乗って、5名で話し合っ
て決めた貝塚公園に行く。



「味わう」段階では、5名が行きたいと話していた「貝塚公園」まで、地下鉄で校外学習に出かけた。そのときに a 児は掲示版をながめるだけで、次発の電車時刻を正しく読み取ることができた（資料4）。

考察3

実際に地下鉄に乗って学習の成果を発揮する場を設けたことは、学習と生活のつながりを子供に自覚させる上で有効であった。その根拠は、子供が個別に学習してきた活動の場面になると、全ての子供が資料4のように自主的に取り組む姿を見せたからである。

全体考察

「地下鉄の利用」場面から数字、順序数、時刻・時間、金銭などの数量的情報を抽出し、個に応じて課題設定したことは、子供が自分にもできる数量の処理を生活の中に見出し、自分にできることを増やそうとする子供を育てる上で、有効であったと判断できる。考察1、3からわかるように、子供は自分の課題に対して主体的に取り組んでいる。また、考察2からは、個別に学習したことを統合して取り組ませることで、数理を生活の中で活用するのだということへの自覚を高めることにつながると判断することができる。

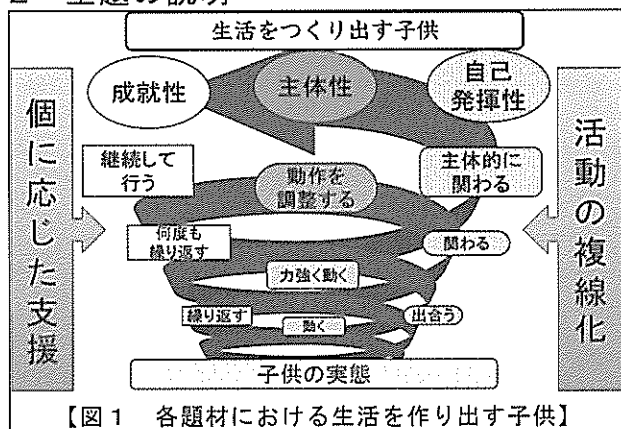
特別支援教育部体育科

個に応じて運動遊びを複線化した題材構成

1 特別支援教育体育科における「生活をつくり出す子供」

特別支援教育体育科における生活とは、子供が家庭や地域、学校における日常的な衣食住に関する動作や余暇活動における具体的な行いのことである。日常的な衣食住とは、「あそぶ」「くらす」「はたらく」の場面において構成されているものである。「あそぶ」とは、子供にとって身近な「ひと」「もの」「こと」に関わっていくことであり、いずれかを対象にして没頭することができることである。「くらす」場面とは、身体を場や状況に応じた動作へと操作していくことである。「はたらく」とは、具体的に決められた動きを継続させていくことである。生活をつくり出す子供とは、「ひと」「もの」「こと」に積極的にに関わり、自らの身体を操作し、動作を継続させることができる子供のことであり、生活をつくり出す中で、子供の主体性を高め、自己発揮していくことで、自己の高まりに対する成就感を味わうことができる。

2 主題の説明



体育科では、子供の実態に応じて活動の複線化を行ったり個に応じた支援を行ったりすることで、生活をつくり出す子供をはぐくんでいく。子供は学習の中で、様々な出会いから、動作化を図り、繰り返していくことで本研究の目指す主体性、自己発揮性、成就性を高めていくことができる。また本研究では、個の運動技能に関する特性と自立活動の視点から子供達の学び方を支援していくことによって生活につながる動きの獲得を目指す必要がある(図1)。

- 新しく出会う運動に主体的にねばり強く取り組みうとすることができる子供 (主体性)
- 今できる動き方で運動遊びを楽しみ、場に応じた動きをしようとする子供 (自己発揮性)
- できるようになったことを友達と喜び合い、自信をもつことができる子供 (成就性)

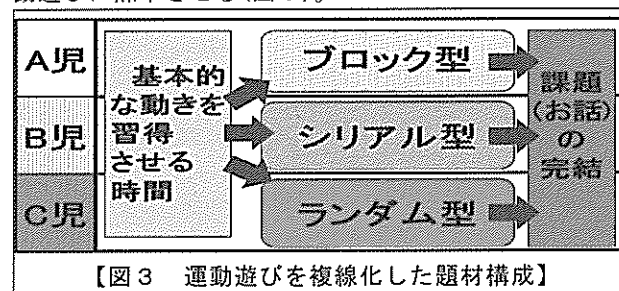
これまでの体育科では、学び方の支援は教材化の段階で行われてきた。しかし、一層技能の獲得へとつなげていくには、学習中の学び方の支援が必要であるため、活動の複線化による一時間単位の学び方や動きに関する支援をバランスよく行っていくことが大切である。そこで運動遊びの活動を複線化することが必要であると考えた。

運動遊びとは、主に全身を使って遊ぶこと自体が目的となり、必要な体力を身に付けることができるものである。遊びに必要な条件は、結果が決まっていないことと、自分自身で新しいものをつくり出すことができることである。これらは、子供が「わくわく」「ドキドキ」した感情をもち、活動に主体的に取り組むことができるものである。個に応じて運動遊びを複線化したとは、子供の学び方の実態とその実態に合う活動を3パターン設定することである。子供が動きを獲得するためには、子供の学び方と密接な関係があり、子供の特性を理解した上で学習させる必要がある。反復を中心とすることで場に対する安心感をもつことができるブロック型、規則的な活動手順で動きに変化を与えて楽しむシリアル型、好奇心を刺激するために無作為に活動を決めるランダム型に分類して行う(図2)。

学び方の実態	場慣れすると意欲的に取り組める	活動の見通しをもつと落ち着いて取り組む	興味をもつと意欲的に取り組む
個に対する手だて	同じ動作の繰り返しのある活動	規則性のある活動手順	規則性のない活動手順
予想される子供の姿	少しずつ動作が大きくなる姿	場に対応した動作を引き出す姿	場に対応した動きを引き出すことに意欲的な姿
体験の仕方	ブロック型	シリアル型	ランダム型

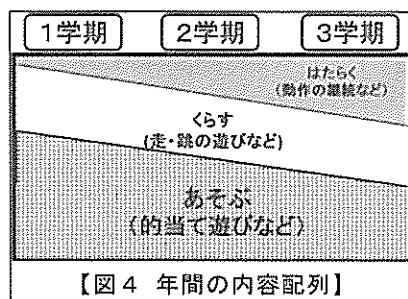
【図2 子供の学び方における複線化の考え方】

個に応じて運動遊びを複線化した題材構成とは、子供それぞれが自分に合った動きを獲得することができるように、学び方の実態とその実態に合う活動を3パターン設定し、個に合った運動遊びを行う題材の仕組みである。「試す」段階の前半では、遊び方の習熟を図るために、「試す」段階の後半では個の学び方に合った活動(ブロック型、シリアル型、ランダム型)で運動遊びに熱中させる(図3)。



3 具体的方途

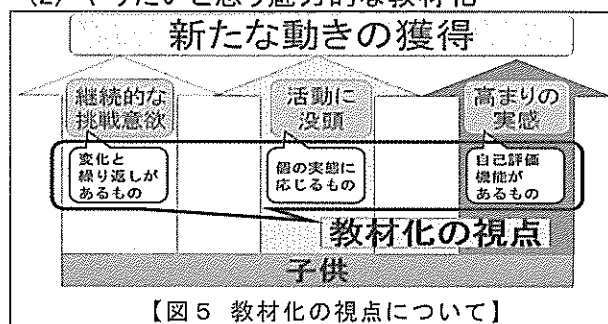
(1) 生活場面に転移する年間配列



本研究では、それぞれの生活場面において必要な動作を体験・習得することができる運動を、年間通してバランスよく配

列していくことが必要である。まずは生活をつくり出す上で土台となる「あそぶ」場面に着目し、運動に対する主体的な態度をはぐむように題材を配列する。並行して生活上の中心となる「くらす」場面に必要な調整力に関する題材を年間通して取り扱う。特に走や跳を中心とする移動やバランス感覚を主とした身体操作や調整する動きに関する題材を年間通して設定する。最後は「はたらく」場面に必要な粘り強く動作を継続していくことに関する題材に転移していく。図4のような内容配列を6年間にわたり、発達段階に応じて継続的に活動できるようにする。

(2) やりたいと思う魅力的な教材化



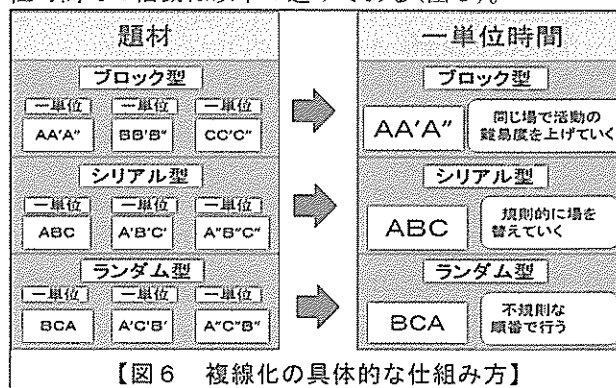
子供は、個人の発達段階にもとづいて多様な動きを体験していくことで動きを獲得する。そこには、意欲的に取り組み、活動に没頭し、成功体験を重ねて、自身の高まりを実感することが重要である(図5)。よって題材では、何度も繰り返し取り組むことができ、難易度を少しずつ変化できるものが必要である。難易度の設定には指導内容表にもとづいて詳細に行う。次に、教具では、自身の運動が「できた」ことを実感できる仕組みが必要である。例えば、指定の高さにベルを設置し、これを鳴らすことによって、その高さまでジャンプできたことがわかるというものである。また、実態に極端な差がある学習では、共通の課題意識がもてるように、学習材をお話の世界と融合させることも必要である。以下に教材化としての条件を示す。

- 子供が活動に没頭できるように、障害特性や個の発達段階に応じている遊び
- 子供の意欲が継続的に高められるように、変化と繰り返しができる遊び
- 子供自ら「できた」を実感できる遊び

(3) 複線化と一単位時間の支援について

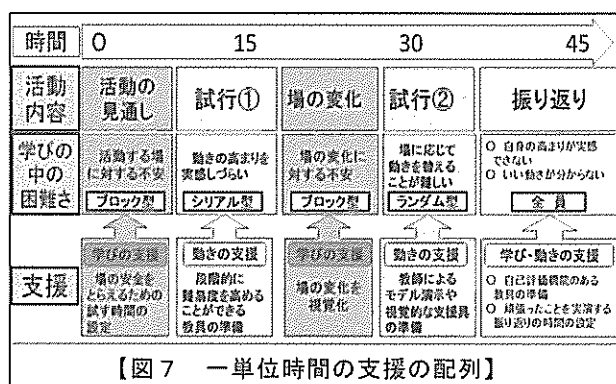
① 個に応じた学び方

題材を通して3つの活動のさせ方やそれに伴う一単位時間での活動は以下の通りである(図6)。



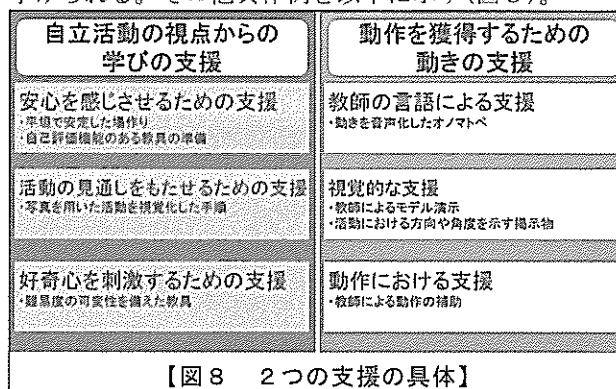
② 活動の複線化による支援の活動構成

一単位時間の学習では、支援を必要とする場面は個によって異なる。そのため活動の複線化に応じて、学び方への支援や動きの支援を活動場面ごとに整理し、段階的に配列していく(図7)。



③ 学び方・動き方における個に応じた支援

子供たちが活動を複線化したことで、主体的に学習に参加できる環境を整えることができる。一方で教師による学習中の支援は大きく2つに分類することができる。1つは自立活動の視点から学習に参加させるための支援である。例えば、場への支援で安心できる環境づくりが挙げられる。もう1つは、新たな動きを獲得させるための支援で、教師によるモデル演習などが挙げられる。その他具体例を以下に示す(図8)。

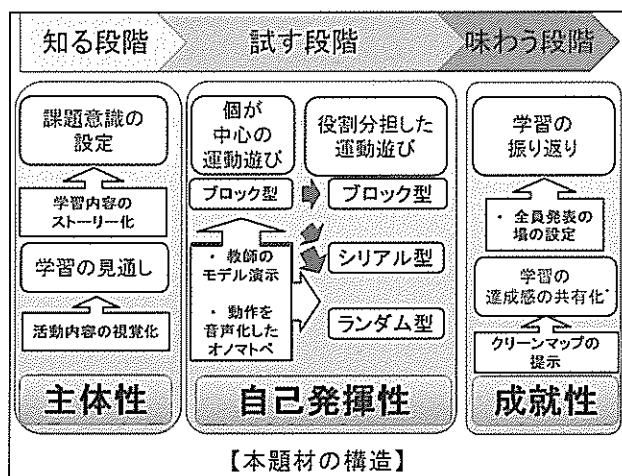


1 題材の目標

- 目標に向けて粘り強く取り組み、友達と仲良く関わろうとすることができる。(主体性)
- 多様なボール操作を通して、力強くボールを投げ、力加減を調節し、手と足の協応性を身に付けることができる。(自己発揮性)
- 課題を解決し、仲間と共に目標を達成する満足感や成就感を味わうことができる。(成就性)

2 題材の考え方

本題材では、投動作に関わる様々な動きを身に付けさせることで、力加減やボールをねらう場所へと投げるといった調整力を高めることをねらいとしている。そのために、ボールを勢いよく転がし、放物線を描くように投げ、地面に向かって投げ、的をめがけて強く投げるといった4つの投動作を必要とする運動遊びを行った。そこで、個に応じて体験の仕方を複線化していくことによって、投動作に関する動きを全身を使った運動へと深めさせていくようにした。具体的には、「知る」段階と「試す」段階①において、全員に繰り返しを中心としたブロック型での遊び体験を行わせ、ルールの習熟や動きの定着を図るようにした。「試す」段階②では、活動を複線化して取り組ませた。今できる遊びを中心にブロック型で課題を高めて楽しませた。また、複数の遊びを規則的に体験するシリアル型で投げ方の変化を楽しませたり、ランダム型で無作為に決まる遊び体験を楽しませたりした。ブロック型ではモデル演示や補助動作といった直接的な支援を中心に行い、シリアル型やランダム型では、視覚的な支援や動作のこつを示す補助支援器具など間接的な支援を中心に行うようにすることで個に応じた支援を行い、技能の獲得を効果的なものに行うことができる。



3 学習の流れと考察

「知る」段階のねらい:1/7時

寒い季節になり、北校舎にやってくるばいきんたちの種類や退治する方法についてとらえ、課題意識をもったり活動の見通しをもったりする。

- (1) 北校舎にやってくるばいきんたちの動画を見て、これからの活動の見通しについて話し合う。



【資料1 4つの運動遊びを行う場づくり】

- (2) ばいきんたちを退治するための活動の場をみんなと一緒に回り、活動方法について実際に試す。



「知る」段階では、子供に課題意識をもたせるために、ばいきんが北校舎にやってくるというお話をVTRで示した。そして4つの活動の場を提示し(資料1)、北校舎をきれいにするには、ばいきんを退治しなければならないという確認を行った。そして、実際に様々なばいきんの退治方法をそれぞれの場において確認した。a児は「はやく退治したい」と発言したり、かけ足で向かったりする姿が見られた。北校舎をきれにするためには、たくさんのばいきんを退治しなければならないということを確認した(資料2)。

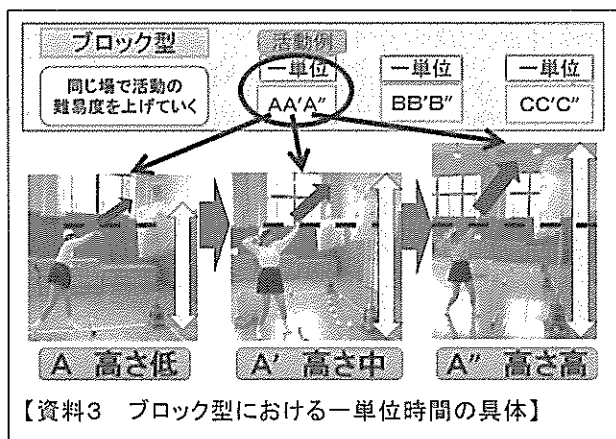
考察1

子供に運動に向かわせるためにストーリー性のある学習内容にしたことは有効であった。その根拠は、子供たちは学習の中で、友達と声を掛け合って取り組む姿や「ばいきんを退治する」という活動に対して何度も繰り返す姿が見られたからである。

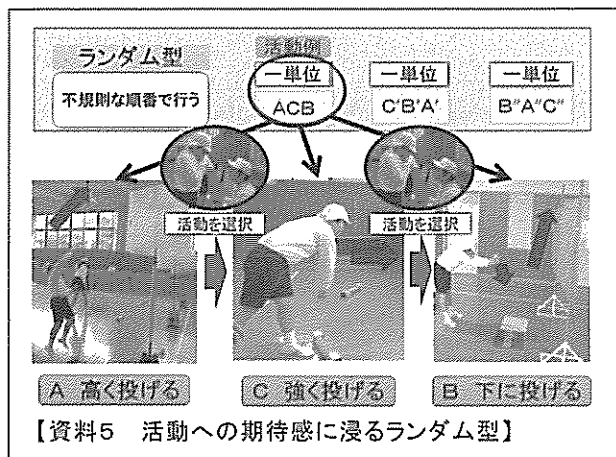
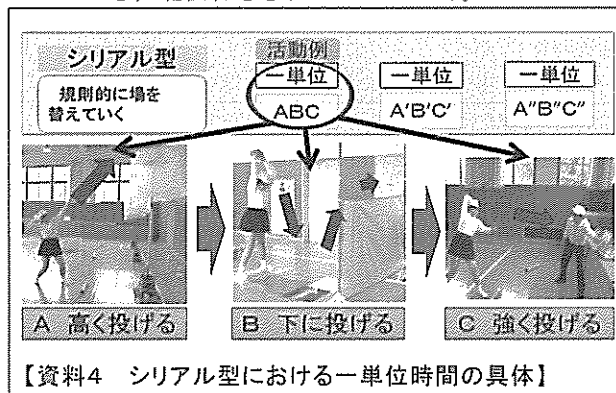
「試す」段階のねらい: 2~6/7時

個に応じた体験の仕方での運動遊びを行い、全身を使った力強い投動作や力加減を調整してねらったところにボールを投げる投動作をつかむことができる。

- (1) 消毒球を使ってばいきんを退治し、北校舎をきれいにする。



- (2) 怒ったばいきんたちを役割分担しながら退治していき、北校舎をきれいにしていく。



試す段階(1)では、反復を中心とする活動のため場に対する安心感をもって取り組めるブロック型(資料3)で遊びを体験させた。難易度を高めていき、動作を大きくすることをねらった。試す段階(2)では、3つの運動遊びを体験させ、場に応じた動きを引き出させる活動を行った。規則性をもたせて取り組ませるシリアル型(資料4)は、活動に見通しをもつことで、45分間活動に取り組むことができた。また、ランダム型(資料5)は活動が無作為に決めるため、笑顔で次の活動に移動する姿が見られた。

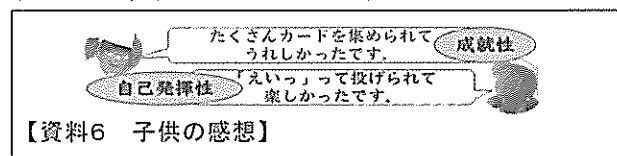
考察2

試す段階(2)で子供の体験方法を複線化させたことは有効であった。その根拠は、活動の場を変えても、その場に応じた動き方を引き出させている姿が見られ、動きの多様化が見られるようになったからである。

「味わう」段階のねらい: 7/7時

クリーン作戦を通して、ばいきんを退治するために見つけたポイントや友達が頑張っていたところを交流し、達成感を得ることができる。

自分の動きの高まりや頑張ったこと、そして友達の頑張りを賞賛する発表会を行う。



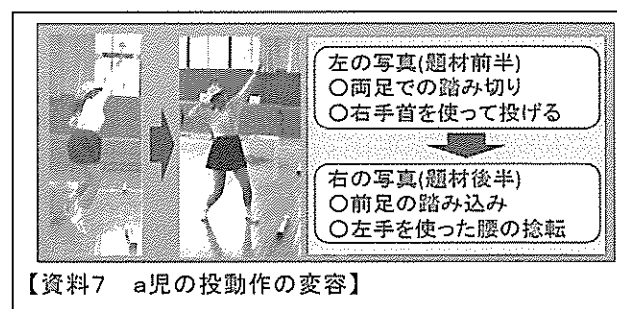
「味わう」段階で、題材を通して頑張ったことをみんなの前で発表した(資料6)。

考察3

全体での発表会は無効であった。その根拠は動きを見合って賞賛し合うことで、「うれしい」という発言から成就感を味わう姿が、「〇〇のように投げた」という発言から、自己発揮性が見られたからである。

全体考察

本題材では、活動の体験の仕方を個に応じて複線化したことで、子供は投動作を身に付けることができた。また、活動では、言語、動作、視覚の3つの視点から個に応じて支援を行うことで、動作の変容が見られた。

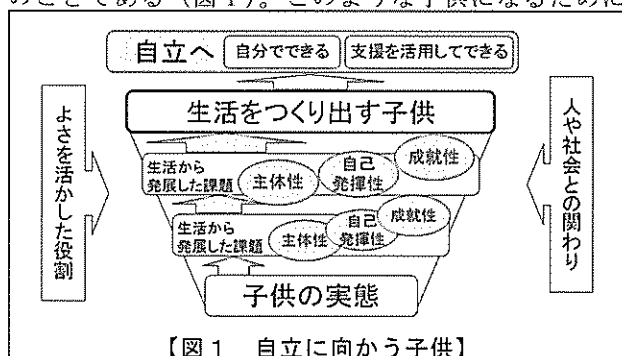


特別支援教育部生活単元学習

子供のよさを役割として活かす課題単元づくり

1 特別支援教育生活単元学習における「生活をつくり出す子供」

生活単元学習における生活とは、子供を取り巻く環境そのもののことである。それは、個々の子供の様々な生活に対応して多様である。生活単元学習における「あそぶ」とは、身体活動を活発にし、意欲的に活動することである。「くらす」とは、経験を通して生活の中で活動できる範囲を広げることである。「はたらく」とは、自分の役割を果たしながら人や社会と関わることである。人や社会のために共同して成し遂げる力を、発達段階に考慮しながら積極的に身に付けさせることは重要であると考えます。生活をつくり出す子供とは、実際の生活から発展した課題に、人や社会と関わりながら、目的や見通しをもって取り組む中で、生活に生きる知識・技能を身に付け、自立へ向かう子供のことである(図1)。このような子供になるために



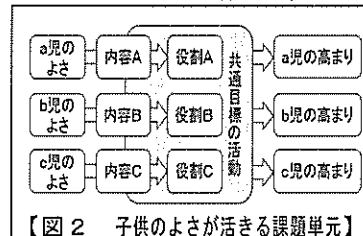
【図1 自立に向かう子供】

は、自ら粘り強く取り組むこと、できたことに自信をもつこと、達成感を味わうこと、実際の生活に活かそうとすることなどができる力が必要である。このような力の育成を目指して、子供の生活上の目標や課題に沿って組織された学習に取り組ませることは、身に付けた知識・技能が明日につながり、その連続が将来の自立へと結び付いていくことから、大変意義深いと考える。ここでいう「自立」とは、人の手を借りずに自分一人の力で生きていくことをさすわけではない。自分が身に付けている力を理解し、自分でできることは行い、できそうなことには挑戦する。それでもなお、支援を必要とする場面には助けを求めて、人や社会と関わりながら生きていくことである。そこで、生活単元学習においては次のような子供を目指す。

- 自立してできるようになりたいという思いや願いをもとに粘り強く活動に取り組む子供(主体性)
- 自分ができていることに自信をもち、それを活かして課題を解決していく子供(自己発揮性)
- 自分の力でできたことに達成感を味わい、実際の生活に活かそうとする子供(成就性)

2 主題の説明

子供のよさとは、子供が自信をもっている知識・技能、「やってみたいな」と感じている興味・関心・意欲のことである。これらは多様であり、そのときどきの発達段階により変化していくものである。生活単元学習は、子供たちの生活を観察し、今現在、子供のできること、興味・関心の高いものを集めて把握し、子供の生活に必要な単元を計画しなければならない。役割とは、人や社会と関わる時に自分の力を発揮して取り組めるもののことである。障害の有無に関わらず、自分のことから積極的に役割を果たして生きていくことは重要である。子供のよさを役割として活かすとは、共同的な学習の中で子供が各々のわかることで活動することである。共同的に学習を進めていく上で、役割をもつことは必要不可欠である。その役割に子供のよさを活かすことで、より「わかること」が「できる」に結び付くと考えます。これにより、子供は目的意識をもって取りかかることができ、自身の生活の目標や願いに向かって、今もっている力を発揮することができる。課題単元づくりとは、個々の子供がよさを発揮できる内容を網羅する活動に、役割をもって自立的・主体的に取り組む、力を発揮しながらも、力を養っていくことのできる単元をつくることである。子供一人一人がわかることを活かした多様な活動を展開できるようにすることが大切である。より子供の生活につながる内容によって単元化するためには、それぞれの子供の今現在の生活から発展した課題を設定していくことが大切である。したがって、共通の目標に向かって活動しながらも、個々に設定する課題は異なるものとなる。そこに、役割をもたせることで子供はより主体的に課題を解決し、共同的に学習を進めることができる。子供は「わかること」を活かして、新しい知識・技能を身に付け、自分でできることを増やし、生活は充実していく。つまり、子供のよさを役割として活かす課題単元づくりとは、多様にある子供のできること



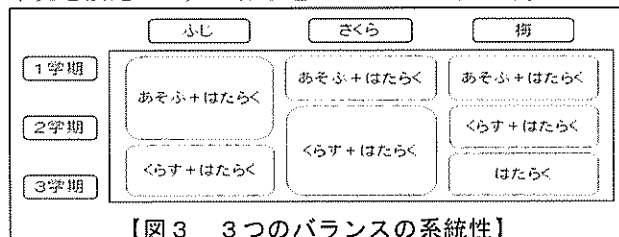
【図2 子供のよさが活かせる課題単元】

や、やってみたいと思っていることの中で個々に役割を設定し、学級集団に共通する目的意識をもたせることで、共同的に学習に取り組みながらも、個々に自立に向かう力を身に付けることのできる学習をつくることである(図2)。

3 具体的方途

(1) 「あそぶ」「くらす」「はたらく」を調和的に配列した年間計画

生活年齢に関係なく3つの場面をバランスよく配列する。生活単元学習は、人や社会と関わりながら共同的に学習を進めるという点で「はたらく」ことは全ての単元と重なる。できることを増やして活動の範囲を広げる「くらす」ことは、ふじ組からさくら組に向けて増えていき、梅組では「はたらく」ことに特化した単元を設定して、内容を選定していく(図3)。

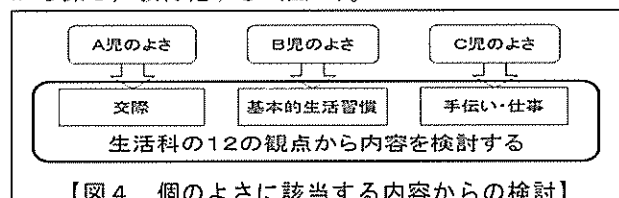


【図3 3つのバランスの系統性】

(2) 子供のよさから内容を検討する単元づくり

① よさから選定する内容

個の子供のよさが、生活単元学習の内容の基盤としている特別支援教育「生活」の12の観点のどの内容に該当するかをみる。このとき、「生活」は基盤であるため、国語科や算数科、図画工作科など、他の教科等の内容に該当するものかについても検討する。それからあがった、複数の内容を網羅できる学習を生活の中から探し、教材化する(図4)。



【図4 個のよさに該当する内容からの検討】

② 子供のよさを発揮できる内容を集めた教材化

個のよさを活かすことのできる内容から、共同して取り組むことのできるものを、以下のようなことを具備するものを条件として教材化する。

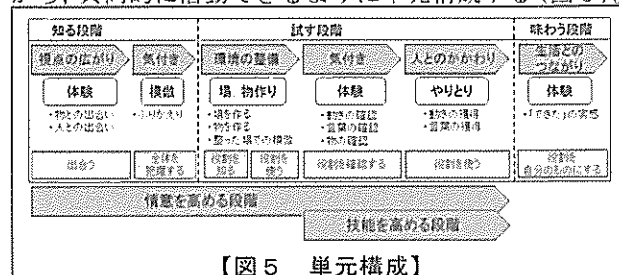
- 子供の実際の生活から発展するものであり、自立をめざしたいと思うものであること
- 子供が生活の中で少し努力すれば自分の力でできることを課題として含んでいるものであること
- 子供各々が役割を果たしたことを合わせて完成する活動やものがあること

子供が興味・関心をもっているものなどは多様であるが、それらを役割としてつなげると一連の活動になるものを、必然的にそれを行う場所や場面において教材化する。その中で、子供が役割に自信をもって取り組みながら、そのよさを活かして、主体的に解決できる課題を設定する。そのためには、子供が生活の中でどの程度自分の力で取り組むことができているのかを把握し、子供一人一人の個に応じた課題を設定する必要がある。このとき、少し努力すればできることを課題に設定するようにする。具体的には、教師の促しなど

によりできる場合があるもの、友達をモデルに自分で活動を進めることができるもの、活動の一部分は自分の力で行うことができるものなどのことである。これらの観点で何が「わかること」で、何が「できる」に近いのかを把握して、個に応じた課題を設定する。

③ 役割の質が高まる単元構成

個の課題に役割をもって取り組み、その質を高めながら、共同的に活動できるように単元構成する(図5)。

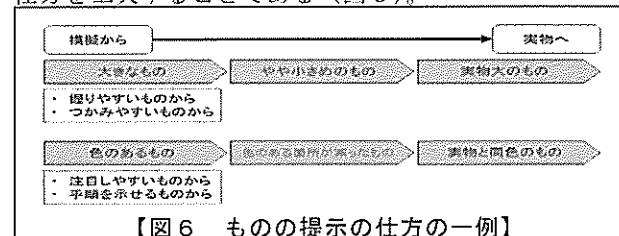


【図5 単元構成】

まず、「知る」段階では、実際に見たり触ったりするなど、ゴール像を体験してつかませる。それから、普段の生活の場で体験を模倣し、実際と比較することで、環境や関わりの不十分さに気付かせ、活動の目標をもたせる。次に、「試す」段階では、場や物を整える活動を行い、環境が整った状態での模倣により、人とのやりとりについて気付かせ、必要な言動が獲得できるようにする。このとき、全体場の把握や一連の活動の把握をすることで、自分の役割について知るだけでなく、自分が全体の内の一部分を担っていることについて実感できるようにする。最後に、「味わう」段階では、達成感、満足感を味わいながら、役割ややりとりを通して体験が実生活へと結びつくようにする。

(3) 「わかること」と「できる」をつなぐ「試す」段階における状況づくり

今もっている力を発揮できる活動を繰り返し行うことで、それを活かして新しい活動にも取り組めるようにしていく。そのため、全ての子供が同じ活動になるわけではなく、それぞれの実態に応じて異なる活動に取り組む。しかし、個々の課題は役割として設定するため、子供の活動が関連し合い、共同的に進んでいくことで目標達成を目指す。個々の課題解決については、具体的に、大きさや素材が異なればできるような「もの」の提示の仕方、必要な知識・技能の仕組みがわかれば取り組むことができるような「こと」の提示の仕方を工夫することである(図6)。



【図6 ものの提示の仕方の一例】

【引用・参考文献】

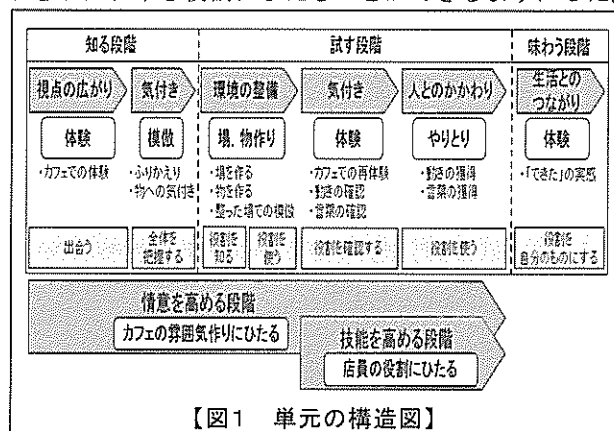
- 名古屋恒彦(2010).『「領域・教科を合わせた指導」のABC』。東洋館出版社

1 単元の目標

- ふじ組カフェを開くことに向かって、意欲的に物の準備や人と関わることができる。 (主体性)
- これまでの学習を活かしたり、手順を守って活動したりしながら、飲み物の準備をしたり、人とのやりとりをしたりすることを通して、自分にできることを増やすことができる。 (自己発揮性)
- 達成感、満足感を味わったり、自分でできるようになったことや役割を果たすことを理解したりして、日常生活に活かそうとしている。 (成就性)

2 単元の考え方

本単元では、自分のことを自分でできる力を身に付けること、またそれに達成感を感じ、自信をもって生活できるようにすることを目標に、カフェを開いて客に対応することを課題として設定している。その中で、日常生活に必要な身の回りの力を身に付けたり、相手の状況を把握して行動したりすることをねらいとしている。具体的には、①コップに飲み物を注いだり、それを運搬すること(生活「基本的生活習慣」【食事】)、②使った食器を片付けること(生活「手伝い・仕事」【後片付け】)、③相手の注文を聞いて対応すること(生活「交際」【身近な人との交際】)である。この達成のために、①カフェの見学、②カフェの装飾品作り、③再度カフェの見学、④客とのやりとり、⑤カフェへの招待に課題を設定して単元を構成している。主張点は、それぞれの課題を解決する上で、子供のよさが活きる役割を設定し、子供が身近な人と関わる楽しさを味わいながら、食事や後片付けなどの身の回りの力を身に付けることができるようにしたことである。また、繰り返し体験することで気付きの視点を「もの・場」「人とのやりとり」に限定してもたせ、物作りや人とのやりとりにおける役割にひたることができるようにした。



【図1 単元の構造図】

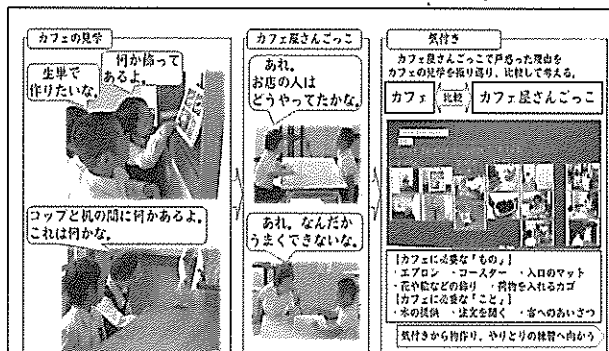
3 学習の流れと考察

「知る」段階のねらい: 1～3/24時

実際にカフェに行くことで店や店員に関心をもち、ふじ組カフェを開く意欲を高めるとともに必要な「もの」「こと」に気付くことができる。

(1) 実際のカフェに見学に行く。

a児の「生単で作ってみたいな。」「さくら組と梅組のみんなとも一緒に来たいな。」という発言から、自分たちでカフェを開いて招待することを提案した。すると、カフェに対する関心が高まり、ふじ組カフェを開くことに向けて意欲をもつことができた。



【資料1 カフェに必要な「もの」「こと」への気付き】

(2) 日常の場でカフェ屋さんごっこをする。

a児は、カフェを振り返って店員の役をした。思うようにできない理由を「エプロンをしていないから。」と答え、他の道具や装飾品についても挙げた(資料1)。

考察1

実際のカフェを見学した後、日常の場でのごっこ遊びを通して、カフェの振り返りをしたことは、単元のゴール像を自らつかませる上で有効であった。その根拠は、a児が日常の場でのごっこ遊びで「もの」や「こと」の不十分さを感じたことから、店内の様子を観察したことを振り返り、カフェに必要な「もの」「こと」として気付いた姿である。

「試す」段階のねらい: 4～20/24時

ふじ組カフェを開くために気付いた必要な物やコミュニケーションから、物を作ったり、一連の流れをつかんでやりとりを行うことができる。

(1) カフェに必要な物や装飾品を作る。

カフェを振り返りながら装飾品等を作り、ごっこ遊

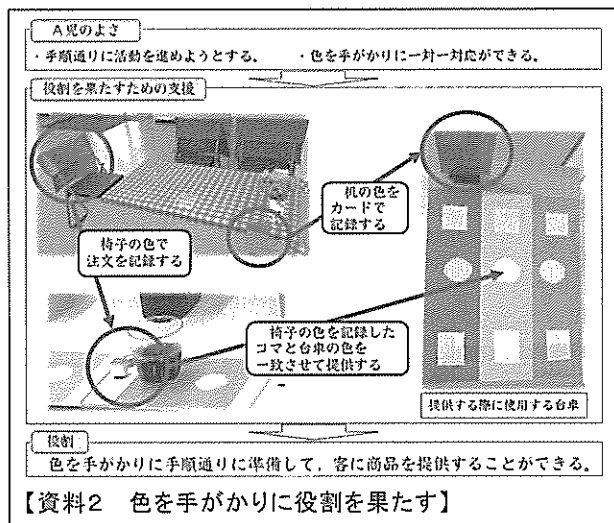
びをした。a児は、コースターがあったことに気付いていたが、日頃使い慣れない物であるためか、準備を忘れる姿が見られた。そこで、コースターを染めて作る活動をしたところ、物作りが楽しかった経験からコースターが特別な物となり、必ず準備して使用することができるようになった。

(2) 再度カフェを見学し、店員の言動を観察する。

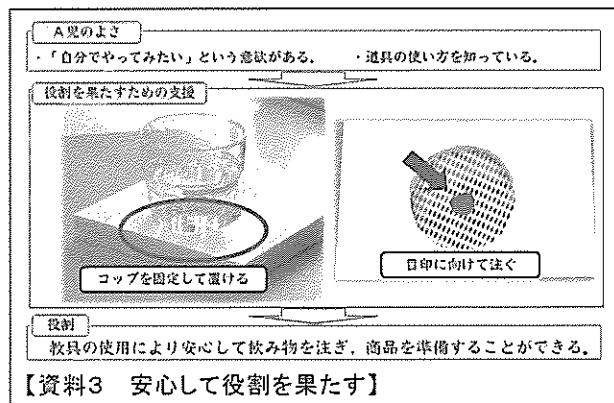
a児は、店員と客のやりとりに耳を傾けていた。物作りでカフェの場を整えてごっこ遊びをしたことで、店員の言動に意識が向くようになったと考える。

(3) 客とのやりとりの練習をする。

店員の行動を分割し、それぞれの子供のよさから役割を設定した。a児は、準備された商品を提供する役割を担った。a児は、手順通りに活動を進めようとするよさがある。注文を受けて準備された商品を提供しようとする姿は見られたが、店員の言動と実際の言動が一致せず、戸惑う様子が見られた。そこで、視覚的な手がかりをもとに見通しがもて、安心して活動に取り組めるように次のような教具を提示した。



資料2の教具を活用することで、a児は色を手がかりに友達との役割と自分の役割をつなげ、自信をもって客に商品を提供することができた。さらに、自分の役割に自信がもてるようになると、友達との役割に興味を示した。そこで、役割を交代し、次のような教具を活用しながら、注文品の準備をする役割を担った。



a児は、資料3の教具を活用することで、友達に持ってもらわなくても、一人で飲み物を注ぐことができた。

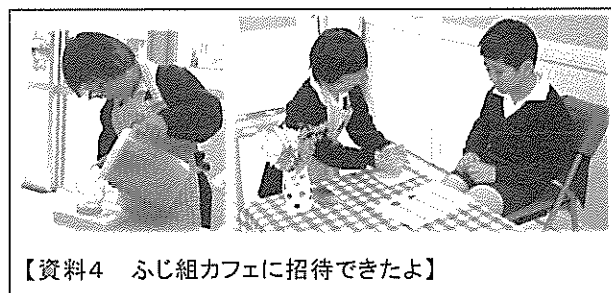
考察2

物作りを行ってから再度見学に行き、店員の言動について観察させたことは有効であった。その根拠は、「知る」段階の見学で観察して気付いた物を作り、自分たちのカフェの場を整えたことで、カフェを開くことに向かって店員の言動について再度観察する必要性に気付く、店員の言動を模倣しようとした姿である。また、資料2、3のような教具を提示したことも有効であった。a児が色を手がかりに客とやりとりする姿や、自立して役割を果たすことができた姿から、自分の役割に自信をもって活動できたと考える。

「味わう」段階のねらい: 21~24/24時

ふじ組カフェの場を整えて招待し、友達の注文を聞いて応対することで、達成感を味わいながら、楽しむことができる。

「味わう」段階では、さくら・梅組の友達をふじ組カフェに招待して応対した。



a児は、これまでの学習を活かして、さくら・梅組の友達に自信をもって接客することができた(資料4)。

考察3

さくら・梅組の友達を招待してふじ組カフェを開いたことは、達成感、満足感を味わわせる上で有効であった。その根拠は、自ら支援を活用して手順通りに笑顔で接客し、「できました。」とつぶやくa児の姿である。

全体考察

場を整えるための視点と、人とやりとりするための視点をもたせる上で、繰り返し見学に行き、模倣から不十分な点に気付かせ、物作りや人とのやりとりに取り組む単元構成にしたことは有効であったと判断できる。その中で、個のよさから内容を検討し、役割を設定したことで、生活をつくり出す子供をはぐくむことができた。また、自信をもって役割を果たす上で、色や素材を工夫した教具により見通しや安心感をもたせたことは有効であったと判断できる。しかし、役割によっては人とかわる頻度に差が出たため、内容「役割」と「交際」の関連について見直す必要がある。

お わ り に

140年の礎を受け継ぎ、 未来を創造する。

未来社会に求められる資質・能力を自分の力で
人間としての力に結び付けていく。

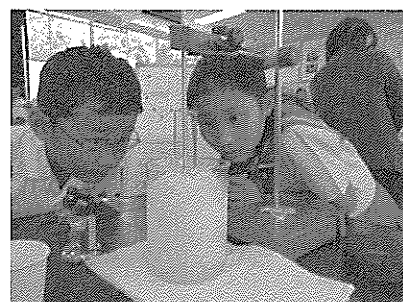
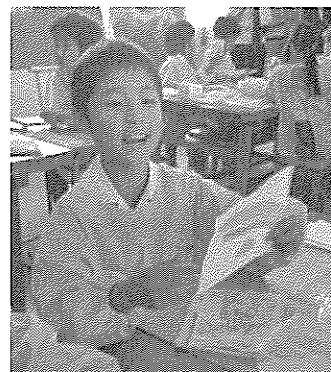
文部科学省研究開発学校指定の第2年次として、
未来創造型の資質・能力を育成する新領域の
開発をもとに、学習対象を生涯追究対象と位置付
け、各学年の資質・能力の重点化・系統化と内容
配列、さらに新領域の学びについて提案させてい
ただきました。

これまで本校研究開発をご指導いただきました
文部科学省初等中等教育局視学官 田村学先生、
国立教育政策研究所総括研究官 福本徹先生、
京都大学大学院教育学研究科准教授 石井英真先
生、運営指導委員の皆様、福岡教育大学の共同研
究者並びに本校の研究協力者の皆様に心よりお礼
を申し上げます。

創立140周年を迎えた本校の歴史と伝統を受
け継ぎ、子供たちが未来社会を創造する主体とし
ての姿を求めて、研究開発をさらに深化させてい
きます。今後とも皆様方のご指導、ご支援をよろ
しくお願いいたします。

平成29年2月17日・18日

副校長 樺 島 穰



福	岡	泉	教	育	振	興	部	義	務	課	主	幹	指	導	主	事	金	子	尚	文	様
福	岡	岡	教	育	岡	教	育	務	所	教	主	幹	指	導	主	事	伊	藤	啓	二	様
福	岡	岡	教	育	岡	教	育	所	講	教	主	幹	指	導	主	事	字	生	修	一	様
福	岡	岡	教	育	岡	教	育	座	座	教	主	幹	指	導	主	事	大	治	正	幸	様
福	岡	岡	教	育	岡	教	育	座	座	教	主	幹	指	導	主	事	極	坪	靖	直	様
福	岡	岡	教	育	岡	教	育	座	座	教	主	幹	指	導	主	事		口	裕	介	様

樣樣樣樣樣	雄學子徹真	哲 恭 英	田村部本井	合田安福石	課長官 視學官 教科檢 査官 准教授	課程課 課程課 課程課 課程課 課程課	教育局 教育局 教育局 教育局 教育局	中等教育 中等教育 中等教育 中等教育 中等教育	初等教育 初等教育 初等教育 初等教育 初等教育	省立大學 省立大學 省立大學 省立大學 省立大學	文部省 文部省 文部省 文部省 文部省	文部省 文部省 文部省 文部省 文部省
-------	-------	-------	-------	-------	--------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	---------------------------------	---------------------------------

領域等	共同研究者	研究協力者
全体	教育心理学講座 教授 大坪靖直先生 学校教育講座 准教授 樋口裕介先生	福岡教育事務所 主幹指導主事 伊藤啓二先生
言語文化	国語教育講座 教授 河野智文先生 英語教育講座 教授 中島亨先生	福津市立上西郷小学校 校長 光延正次郎先生 福岡県教育庁 福岡教育事務所 指導主事 元村美保先生
自然探究	数学教育講座 准教授 今井一仁先生 理科教育講座 教授 坂本憲明先生	春日市立白水小学校 校長 小森晃先生 福岡市立和白東小学校 校長 野口信介先生
社会共創	社会科教育講座 教授 小田泰司先生	糸島市立南風小学校 校長 高野誠一先生
表現	美術教育講座 准教授 笹原浩仁先生 音楽教育講座 准教授 山中和佳子先生	新宮町立新宮東小学校 主幹教諭 刀坂順子先生 久山町教育委員会 指導主事 高武龍彦先生
健康	家政教育講座 教授 貴志倫子先生 保健体育講座 准教授 樋口善之先生	福岡市立若宮小学校 校長 脇本孝枝先生 須恵町立須恵第一小学校 校長 稲津一徳先生
生き方	学校教育講座 准教授 樋口裕介先生	久留米市立北野小学校 校長 中原浩先生 朝倉市立立石小学校 校長 山下浩徳先生
マイタイム	教育心理学講座 准教授 生田淳一先生	糸島市立前原小学校 教頭 高瀬雄大先生
特別支援教育	特別支援教育センター 教授 中山健先生 教職大学院 教授 納富恵子先生	福岡県教育庁教育振興部 義務教育課 指導主事 園田洋一先生 福岡県教育庁 福岡教育事務所 指導主事 弘松英樹先生

校長	司樹子	啓源貴	寫井江馬	豐平鐘	校務主任
副研究部長	○ み誠二	あ裕 玲康	賀田良櫃	鞭古永高	教務長
島串崎澤中田竹本中村村	權二曾伊田山菊辻山吉山		比久	大藤瀧井阿	
英達直菜深一	裕武雄				
積一雄美子雪平拓希哲祐	○ 徳				
三藤野岡中齋杉中藤内清	(○印)				
浦岡口崎村藤本島本村水					
研太順教	克卓香夏知				
一郎也昭剛淳如哉織美子	○ 員				

カメラ及びビデオ等による撮影に関するお願い

個人情報の保護法の趣旨に基づき、本校の教育研究発表会における授業等において撮影した本校児童・職員の映像、写真、音声及び個人情報等については、研究・研修を目的とした個人的使用以外に利用することをご遠慮いただいています。また、本校職員・児童・保護者の承諾を得ずに、公表・発表等を行わないようお願いいたします。ご理解とご協力のほど、よろしくお願いします。

平成29年 2 月 印刷・発行
福岡教育大学附属福岡小学校
研 究 紀 要 No.47

発行者 福岡教育大学附属福岡小学校
〒810-0061
福岡市中央区西公園12-1
TEL092-741-4731 (代)

表紙デザイン タイム社印刷株式会社
印刷 〒812-0068
福岡市東区社領2-7-4
TEL092-621-6800

Future Creation